明治卅七年十二月廿九日第三種郵便物認可

女子文壇

第七巻

十一月號

第十四號



日本一好評

少女

毎月一日發刊……口繪挿畫沢山

定價金拾錢 郵税壹錢

半年六十三錢 〇一年壹圓廿錢

▼第三卷十一號 十一月一日號 要目▲

少女小說

◉海賊の寶（第二）……磯 萍水
捕縛するぞ――三本指の客――黑犬の血

◉臆病者……佐々木 邦

◉夜の灯……齋藤 葉村

◉少女小品 花模様の蒲團……兒玉 花外

◉おとぎばなし 菊の着物……與謝野晶子

◉少女戲曲 悲しき鸚鵡……佐々木好母

◉繪とたそがれ時……竹久 夢二

◉小曲 繪具皿……萬代つねじ

◉科學 地球の中はどうなつてゐるか……芳村理學士

其他 珍案懸賞考物、少女文壇等……例に依り賑ふ

▶東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版（振替東京壹七貳九）到處書店賣捌◀

女子文壇拾壹月號（第七年第拾四號）目次

口繪

本欄

創作

誌友くらぶ

雜報

△新年號特別原稿募集、其他

樹立



(大江製印)

來る

十一月一日より

半襟新柄陳列會

懸賞募集半襟圖案の陳列

新形ショール陳列會

十二月一日より

膳椀 茶碗 食器新製品陳列會

歳暮年始贈答品賣出し

羽子板の賣出しは十日より

右の通特別盛大に開會仕候間、御慰みかた〳〵御來觀下され度奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

日向代議士夫人の新粧





會計檢査院檢査官中村修永氏令孃喜代子（お茶水高女卒業）

増原熊太郎氏令孃貴志子（山脇高女卒業）

小野猛氏令妹とみ子（山脇高女卒業）

◀文字に現れたる娘時代の表情▶

女子文壇臨時增刊

娘時代

十月十日發行
二百頁美装
執筆者寫眞入
定價廿錢
郵税壹錢五厘

—(小說六篇)—

◎本郷の兄……前島優梨子
◎お奈津……さかえ子
◎伯母……加藤筆子
◎海水浴場の女……千鶴子
◎最後の日……月草
◎初舞臺……若葉

◎ほしの夜……神近市子
◎夢二式の眼……初雁
◎火影……若杉濱子
◎義太夫を聽く夜……珠野すゞ子
◎破れたる友情……初鹿野道子
◎月の出るまで……かうほね
◎現實から離れたい……ふさ子
◎薄明……港の女

◎白き手の謀叛者……望月薔薇

◎たゝかひの跡……小宅てふ子

◎若きやすらひ……ひざくら
◎男の手紙……梨花
◎面白い月日……胡蝶

◎生きた人形……波の花
◎十六の娘心……藤田きく
◎誘惑に勝つ……しうん子

◎娘時代の純潔無邪氣なる日記……拾三篇

◎生氣潑溂たる女の和歌……數百首

◎課題　わが故郷……わが親友……わが手文庫（散文）……

發行所　東京市京橋大鋸町　女子文壇社

賣捌全國各書店　【振替東京壹七貳九番】

十一月十五日發行

よい月日の下に生れた人、荒い波風にあたつた人、乳母日傘で育つた人、針のむしろに息つく人、笑ふてくらす人、涙のひまなき人、運命を支配する人、支配される人、親の光に身の光る人、良人の陰に意を縦まゝにする人、人さま／＼の境遇をぬくき血ゝ流れ、あつき呼吸の通ひ、高き脈のうつ筆もて描き出された一幅の活畫圖はこれ。

目次概要

女學世界 第十一卷第十五號 増刊

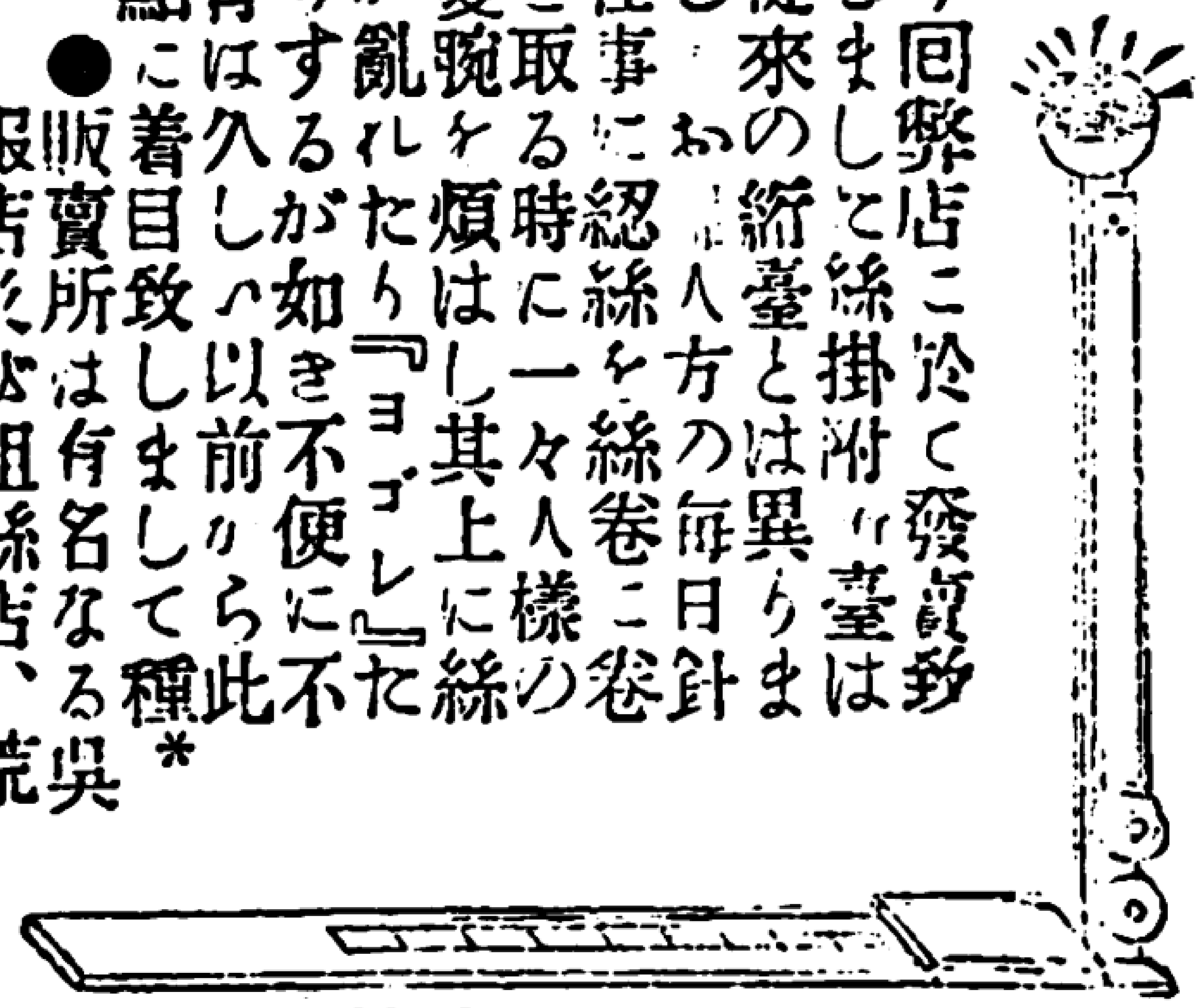
順境と逆境

菊判紙數二百八頁
口繪石版寫眞版澤山
正價二十錢
郵税二錢

東京 本町 博文館

特許 竹中式 絲掛附る絎臺

御婦人方の新福音



今回弊店に於て發賣致しまして絲掛附ヶ臺は従來の絎臺とは異りましお婦人方の毎日針仕事に絽絲を絲巻に巻き取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に絲が亂れたり『ヨゴレ』たりするが如き不便に不肖は久しい以前から此點に着目致しまして種*

＊種苦心しました結果上圖の如き人手を煩はさず單獨にて絲巻へ自由に巻き取ることを得る絲掛附絎臺を發明致し特許局の特許を得て廣く賣出すことに致しました右絲掛附絎臺を御使用の節は從來の絎臺の様に決して不便もなく御使用後は『ヲリタヽミ』が輕便で且つ針差しや尺度を自由に『シマイ』得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用として輕便此上もありません

●販賣所は有名なる呉服店及び組絲店、荒物店にあります

使用法

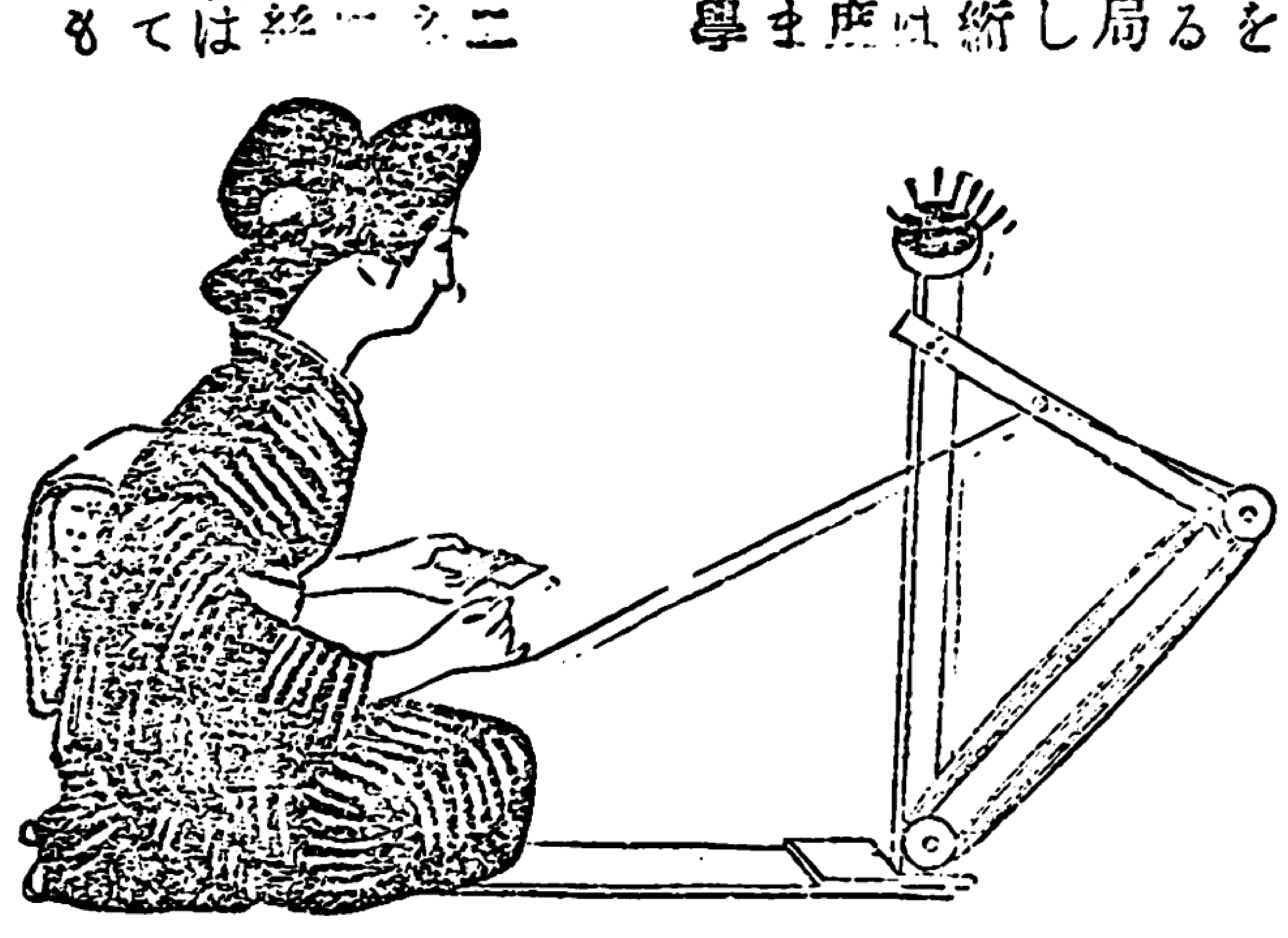
右絲掛附絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に因りて『ネジ』鋲を以て自由に『シメ』絲口を中央にある輪に通して絲巻に巻く時は二個の絲掛車は自由に廻轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲巻に巻くことを得て輕便此上もありません是非御使用を願ひます

【定價】

御誂朱塗製	美麗箱入	金七拾錢
御誂黒塗製	（同）	金六拾錢
特製	（同）	金參拾錢
上製	（同）	金廿五錢
並製		金貳拾錢

他方に送料拾貳錢市内は無料

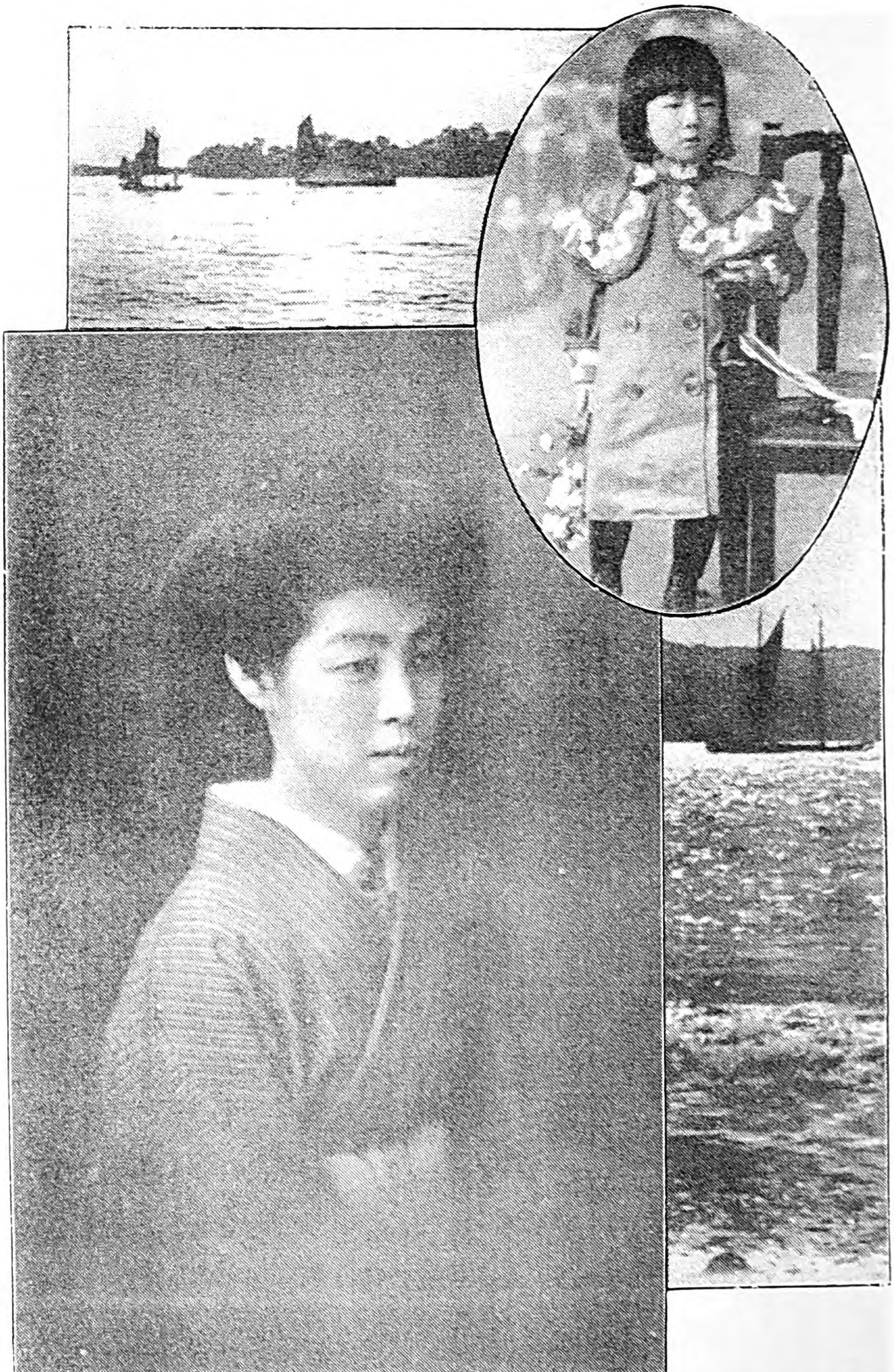
◉特約販賣お望の方は至急御來談あれ



製造發賣元 東京市赤坂區青山南町二丁目十六番地

竹中商店

一電話芝二千八百八十四番
一振替貯金口座東京二三二二三番



松平子爵令嬢榮子

子爵松平親信氏夫人岳子

株式會社博進社專務取締役山本留次氏の家庭



（長女松子お茶水高女在學）（四女文子）（五女清子）（山本氏）（夫人壽々子）（三女綾子）（二女猷子）（長男博）

若き婦人の誇

女子文壇 七月十日增刊 好評

新文章

紙數二百頁美装 定價廿錢 送料壹錢五厘

◎一呼吸

△生の斷片
△覺めし際の淋しみ
△自ら警める記
△學生の都會
△初夏の人々
△寝息

◎七色の虹

○男子の手紙に迷ふ
○不縹緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◎轉宅 小説

◎淋しい道 小説

◎溫泉宿 小説

△梅雨日記
△姉の家
△心の離散
△黑き洋傘
△別れてゐる間

◎呪ふべき時代
◎年のあぢはひ
◎生立のつらさ
◎解けし謎
◎五月の水邊
◎繪筆

◎課題

△顔△髪△浴場
△山△海△劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子　早川花子　長曾我部菊子　小川夢の女　小笠原ゆり子　太田喜志子　若杉はま子　河野槇子　加藤籌子　高橋りう子　田中港の女　内藤千代子　野村きやう子　山田邦枝子　八代やゑ子　松田梅子　松田妙子　前島優梨子　松竹らく子　月螢子　江森美子　佐藤滿壽子　佐分菲影　木村あやの　夕ほし　三宅やす子　三島よし子　平塚白百合　ひなげし　鈴木春子

◎發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社（振替口座第壹七貳九番） 賣捌 全國書店



千代田香油

紳士もお嬢さんも奥さんも薫りよき千代田香油に限るとの高評盛んなり

定價
- 特製 七十錢
- 大瓶 卅五錢
- 中瓶 廿五錢
- 小瓶 十七錢

東京市馬喰町
發賣元 山岸三之助
電話浪花三七九三番
振替口座二〇五〇〇番

毛ぬき 新劑

従來脱毛劑の類頗る多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして悪臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
- 定價 壹圓
- 特製 參圓
- 内地送料 十五錢
- 海外 三十五錢

飲で色白くなる藥

藥名ピオール錠
- 壹劑 壹圓
- 參劑半 參圓
- 内地送費十五錢

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の悪液排泄劑ピオール錠は極て强度の清血劑にして一般悪血悪液排泄の人本劑を服用するときは血液を清淨となし悪液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人達に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

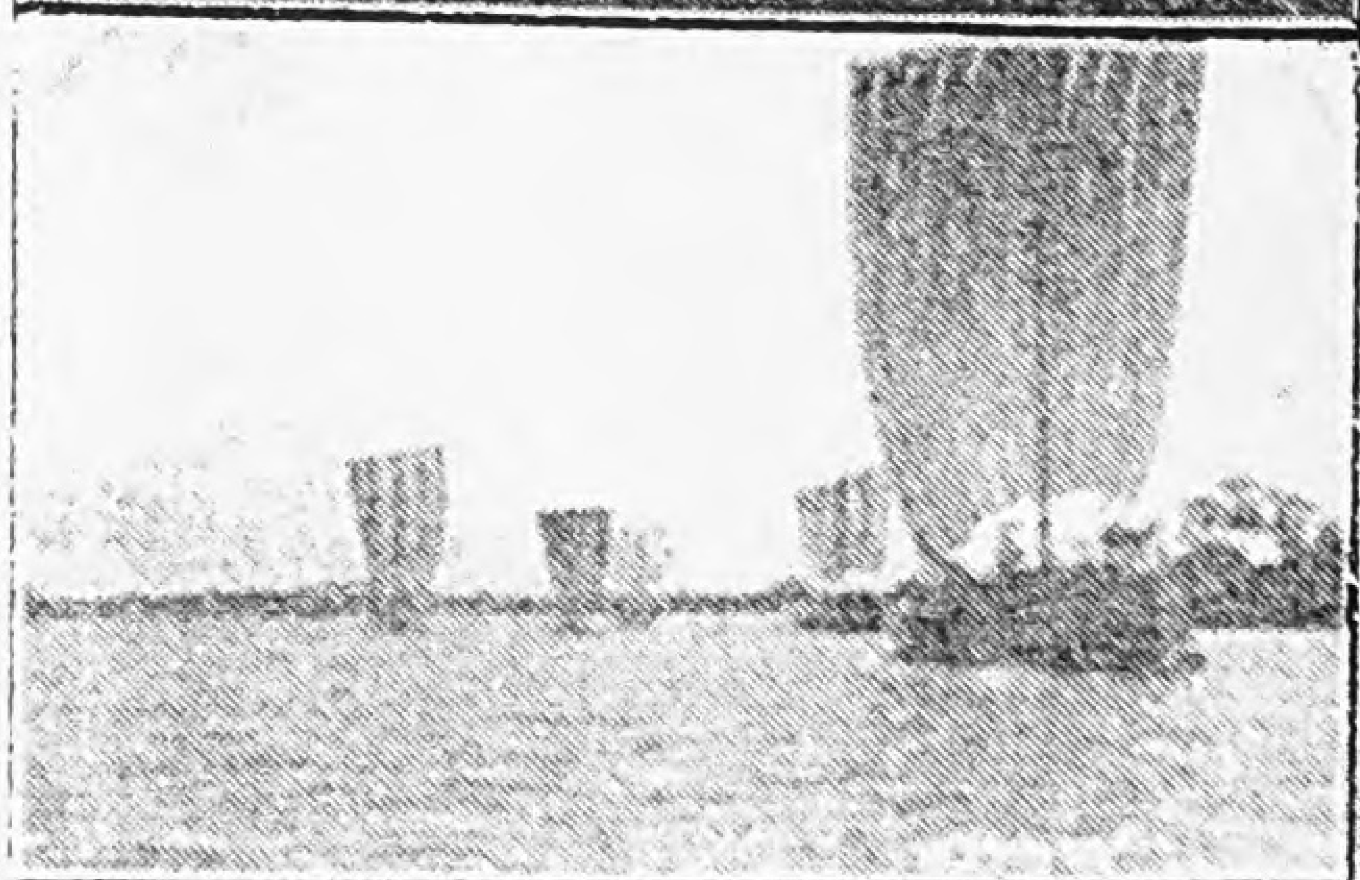




伯爵藤堂高紹氏令妹鉭子

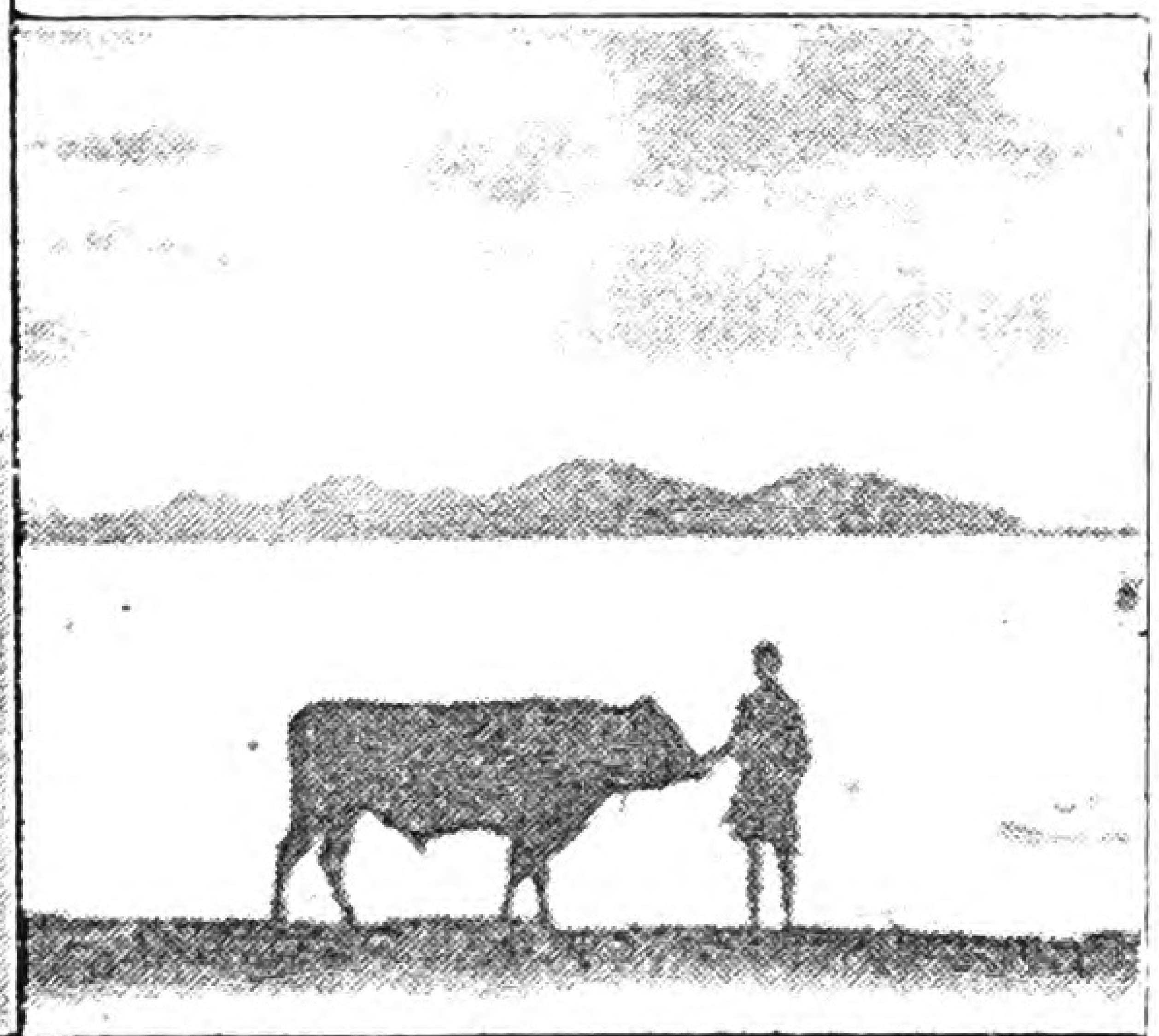


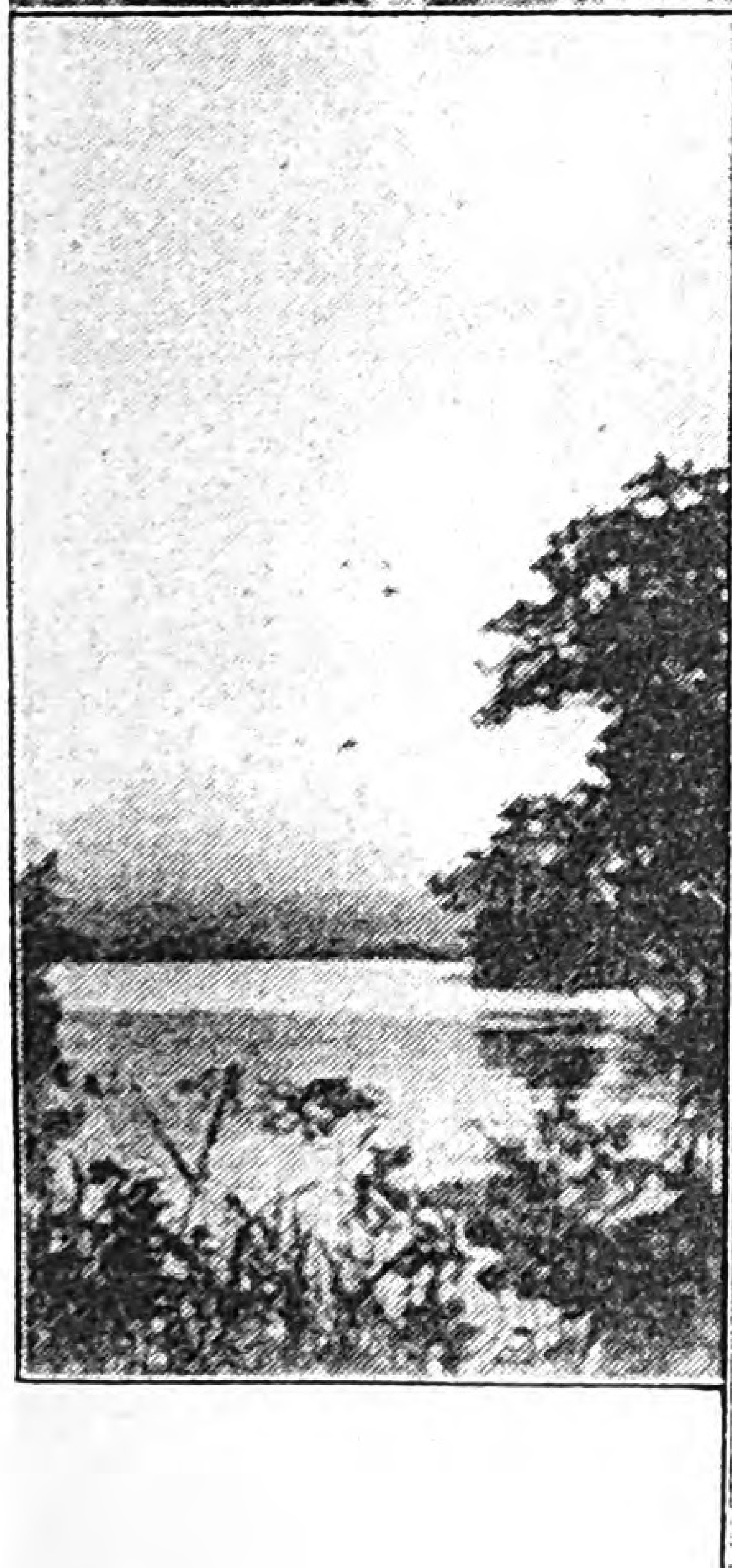
男爵鈴木修治氏令妹登美子



黄菊白菊

快晴







郷田陸軍參謀官夫人德子と愛兒



荒木三雄氏夫人愛子（學習院出身）

本會員帽章

實物三分の一大

新學期開始

實物二分の一大

本會員徽章

文學研究の唯一機關出でたり 此際入會者に限り種々の大特典を與ふ

本會員及本會卒業生の特典

本會員には大家の所論を載せ會員の作品を滿載せる文學雜誌を無代進呈す◎本會員には文章其他の無料添削の特典を與ふ◎本會員には事情に依り無料講習の便あり◎本會卒業生には學資貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職紹介の便宜を與ふ

初等文學講義錄

教授科目

文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。文學概論。日本文學。西洋文學。雜科。

各科專門の講師は學士文士

講義錄見本附き 規則書 無代進呈

五ヶ月卒業 會費一ヶ月金廿五錢 全學期一圓廿錢

東京市神田區西小川町二ノ九

大日本文學會

應用自在 催眠術

緒論●催眠ノ自在●催眠の方法●施術室の選擇●術者の態度●凝視催眠法●獨覺催眠法●二者併台催眠法●施術中の用言●催眠の巧拙●暗示の自在●暗示の種類用途現象●暗示の用言●暗示施術前及施術中の注意●應用の自在●催眠術と法●催眠術一般の應用●催眠覺醒法●覺醒し難き時用ふる法●覺醒前の注意●危險なる哉催眠術●催眠と罪惡●催眠狀態となる原因●結論

定價壹冊送料共 金貳拾七錢 切手代用三十錢 振替送金廿八錢

海外立身案內

緒論●滿員せる我國●立身の疑出なる內地●行け海外●成功最も容易なる國…四個國●內地に近き樂園●我國人を歡迎する國●自由渡航國●海外旅券下附出願手續●外國旅券規則●渡航者の必要書類●渡航必要金●汽船問屋旅館狀況●乘船心得●上陸心得●徵兵猶豫に關する事項●海外苦學の良法●海外の有望學校●日本人に適し且成功確實なる職業●海外の日本村●結論●外十數頁

定價壹冊送料共 金貳拾七錢 切手代用三十錢 振替送金廿八錢

簡易 自宅治療法

淋病●梅毒●よこね●陰萎●遺精●夢精●早漏●不感症●欠缺症●陰莖強直●包莖●横痃●過淫の害●手淫の害●女子の淫●そこひ●にきび●淫慾制止法●月經不順●子宮病●不妊症●支那美法●美髮法●毛生藥●縮毛●若白髮●白髮染●白色法●防臭法●痩せる法●肥滿法●失音●腦氣●白帶●赤痢●癩病●乳病●外八十九病源療法詳述す

定價壹冊送料共 金貳拾七錢 切手代用三十錢 振替送金廿八錢

健腦記憶法

緒論●神經衰弱の各劑的計表●腦病と職業の關係●腦病は如何なる人に多きか●腦細胞と精神●神經衰弱の原因と症狀●遺傳の原因に基く神經衰弱●血族結婚●恐怖●染病●外傷・手指●飲酒喫煙淫事に基く腦病の原因●遺傳腦病の防法●腦病の休養娛樂●腦病の肉體●腦病と轉地療養●腦病豫防法●腦病と休養・職業●理想的腦法●記憶力增進法●其他附腦記憶に關する注意方法數項●結論

定價壹冊送料共 金貳拾七錢 切手代用三十錢 振替送金廿八錢

東京市神田區西小川町二ノ九

盛文社

振替東京二〇四五五番

社告

女子文壇

○十月一日號

○娘時代 十月十日増刊

右は發賣同時に本社は賣切と相成候爲め折角の御注文なれども直様發送する事を得ず遺憾千萬の至りに候近日都合つき次第送本可仕候間暫時御許し被下度候

女子文壇社 發送係

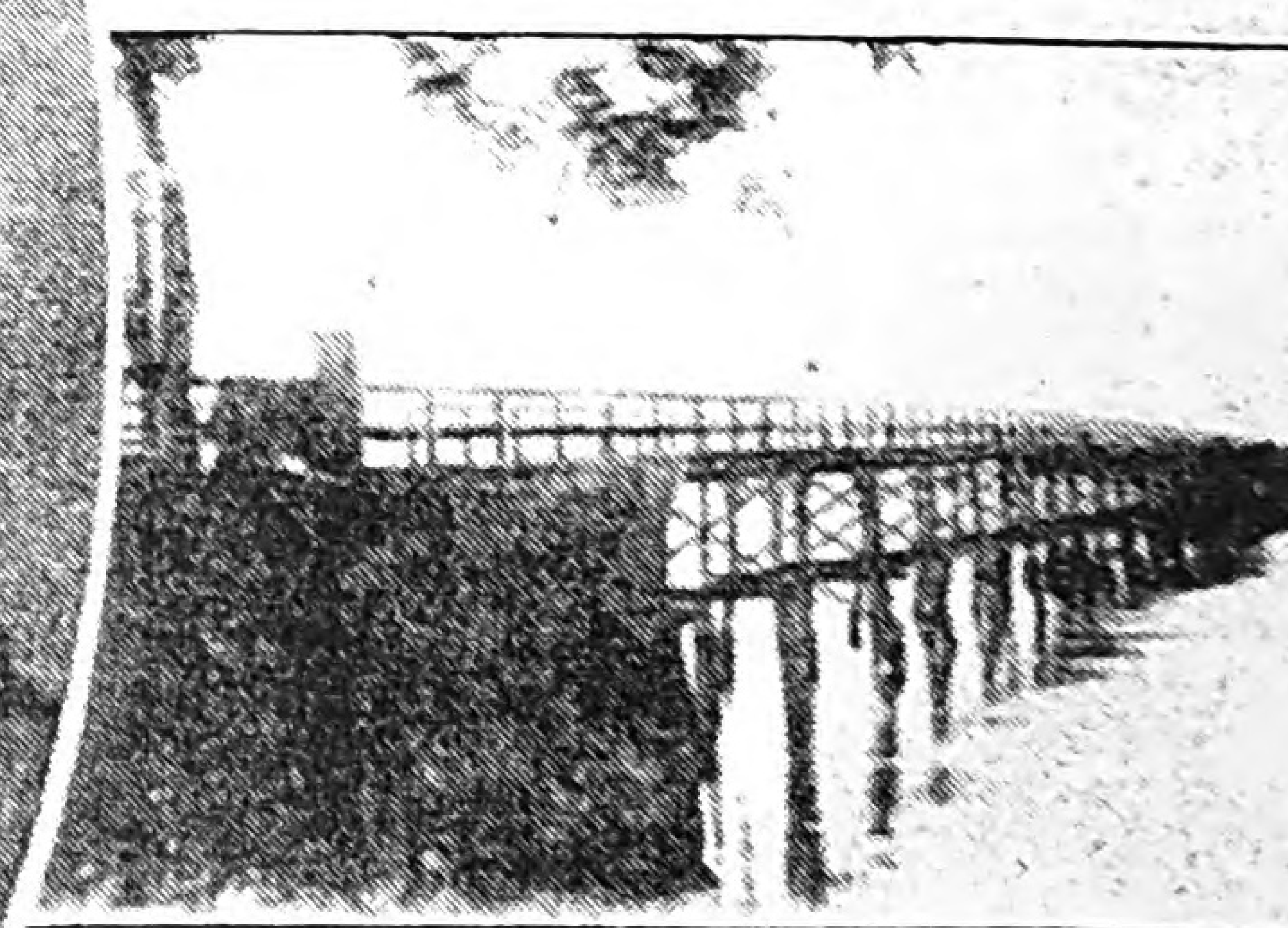
小春日





子爵京極高備氏令嬢（學習院在學）



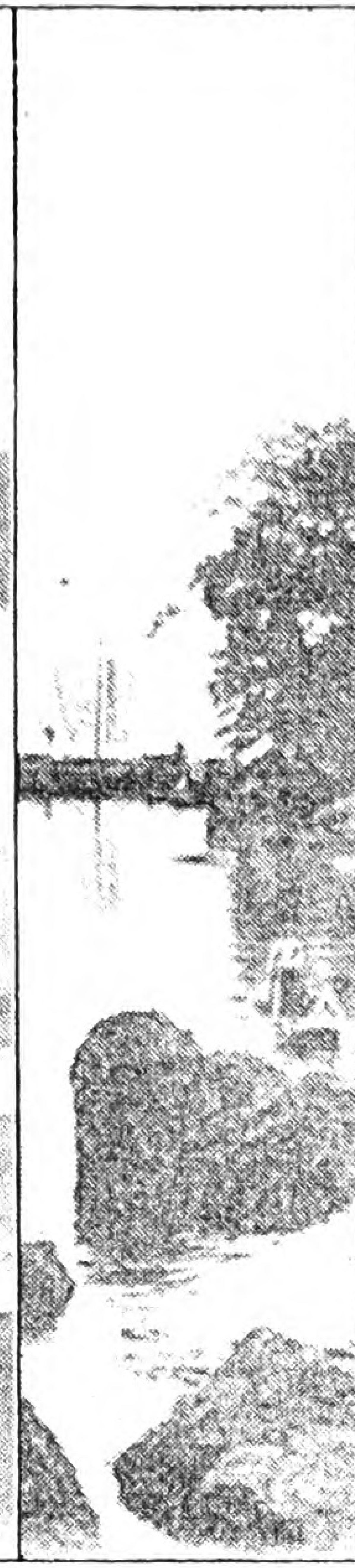


子爵山内豊尹氏令嬢貞子
（學習院卒業）

慰籍



故佐久間鋼三郎氏夫人幸子と愛孃





有隣生命保險會社支配人田中安七氏夫人歌子

天下の婦人必ず讀め

月やくの滯り又は不順は如何にすればよいか

月やくの滯るのには種々の原因がありますが、兎に角婦人に取つては、甚だ心配な事であります何うしよう、何うしよう、と迷ふて居る中に益々重くなつて、愈々困難になり、危險が加はり遂に之れが基となつて生命に關する樣な重態に陷る例が尠くありません、月經の滯り又は不順の人は此際一刻の猶豫もなく〇〇丸を御服用なさい、期道大醫直接の方劑を仰ぐに等しき効能があつて峻烈に流下しますが衛生上には何の害もなく却て生殖機關を强壯にする秘藥であります、郵券三錢添へ申込めば詳細知らす

藥價 ◎一劑八十錢 ◎二劑一圓五十錢 ◎三劑二圓 ◎別製三圓

但し送料八錢送れば密封送附す

發行所 東京京橋電話局横金六町 笹山積愛堂

▲空前絶無 艶麗最新 白色劑▼

◎本品は佛國巴里藥學界に於て幾多研究に研究を重ね我婦人の皮膚に極めて適切なる完全無缺の本劑を今回弊店に於て直輸入の特約を結び茲に一般の御注文に應ずべく願くば一度本品を御試用ありて其効績を確めあらん事を切望す

◎本品は色を自然に白く理想的の美容に浴せしむる從來嘗て見ざる不思議の効力を奏し今や歐米の貴婦人界に於ける好評は實に空前絶無にして美顏劑の覇王とあがめらるゝも故なきにあらざるなり

◎本品の特長は色黑き人赤ら顏に或は青白き人に適して嘗に使用せらるれば意の如く忽ち理想の美貌に化し不思議にも氣目細かにし冬は決してあれる事なき保證品なり

◎尙詳細に說明を御求めにならんとする御方は郵券二錢相添へ御申越しあれば價格及び其他の事項を卽時詳報仕候

發賣元 横濱市蓬萊町二丁目 宮川輸入部

専賣特許（せんばいとくきよ）

毛生藥

ノーブル液は多年の實驗より發明致しました品でいか程年久しき叉は大なる禿にても或はぬけ毛、赤毛、生へ際の悪しき、眉毛口ひげの薄き類に塗て目立たず劇藥など少しも配合しませんから危險の恐れ更になく實に有効確實なる模範的一大靈藥であります

定價大瓶壹圓◎小瓶五十錢（送料各弐錢郵封八錢）

東京市東兩國横網町壹丁目十九番地　西森五友館

▽皮膚病患者の一大福音△



●あざ●にきび●ほくろ●そばかす●たむし等

害なく短時日に除去し根治再發せざる事は責任を帶びて保證し實に驚くべき世界に類なき奇効あり尚郵券三錢封入御申込あれば數百人が全治せられし證據と自宅治療法の道を報知仕候

東京府大森停車場上　棚橋博濟院

三錢

切手拾五枚御送付の方には優美なる最新流行の金張寶石附羽織鎖紐壹本送呈仕候

東京本所林町壹丁目八番地　良明堂

本法は女髪結師安部女史歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

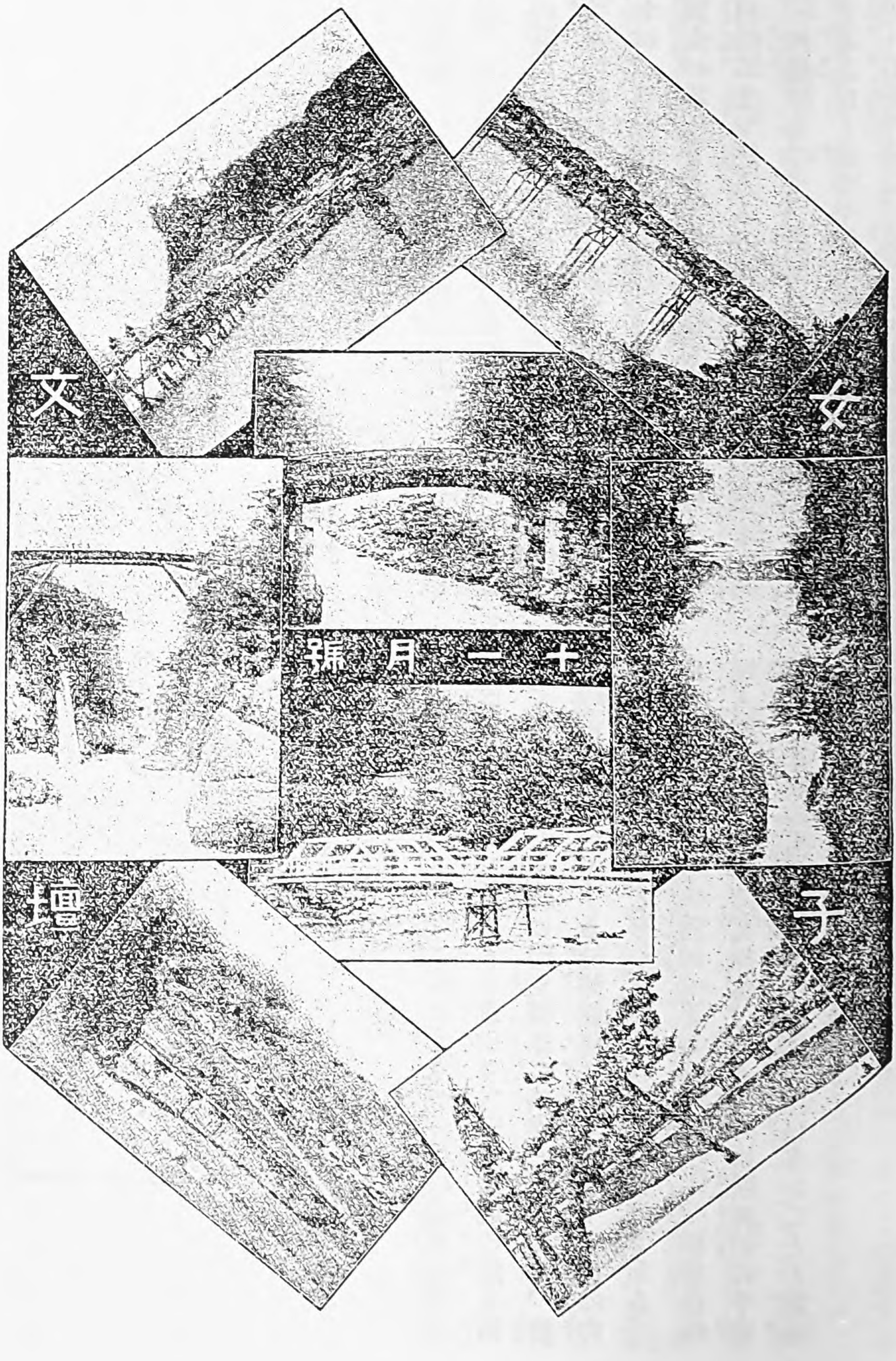
東京麹町區三番町六十七　小林濟世園

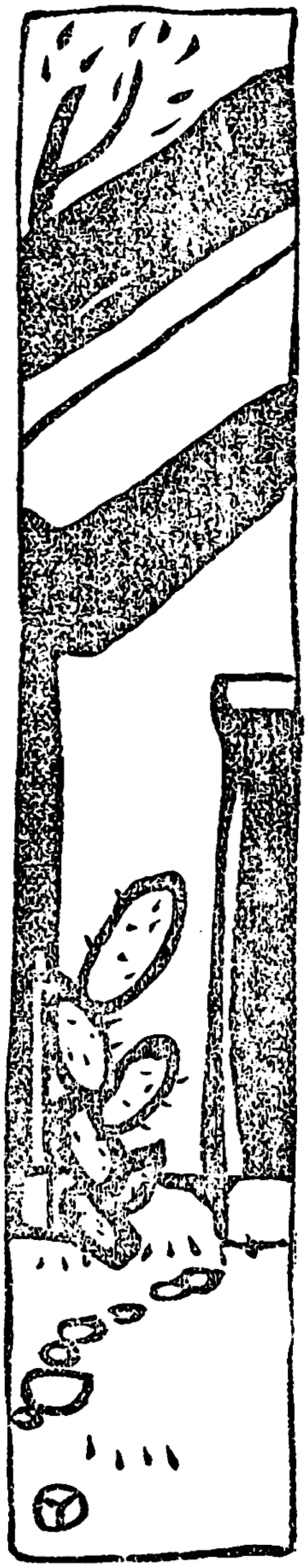
ぢ

●イボ痔●痔核●脱肛痔●痔出血●裂痔●痔瘻●痒き痔●痔一切にて御困難の方は二錢郵券を添へ御照會あらば病原理由全癒說明書を送附す

●東京市京橋區疊町　小松盛林堂

祝天長佳節





私の貞操觀（下）

與謝野晶子

先づ「貞操」と云ふ言葉の意味に就いて自分の考を述べると、之には處女としての貞操と妻としての貞操と二つの區別がある樣に思はれる。昔は他の男を見て心を動すものは既に姦淫したのと同じだと云ふ考へ方もあつたが、自分は一槪に然うは思はない。或時期に達した處女が異性を見て好惡の情を動かし、進んでは戀愛の感情にまで込入るのは、食事や睡眠の欲望と共に自然の推移であつて、欲望がそれにのみ偏しない限り其れを不正だと云つて押へ附ける理由は一つも無い戀愛は全く自由である、然う云ふ好惡の情や戀愛が自生するので、それに催されて處女が一生の協同生活の伴侶である良人を選擇する鋭敏な又愼重な心の眼も開いて行く、但し如何に戀愛關係が成熟して居ても、終生の協同を目的とする結婚關係に由らずして自己の肉體を男子に許すことをしないのが處女の貞操である。處女の貞操が專ら肉體的であるのと異つて、結婚後の婦人卽ち妻としての貞操は、良人以外に精神的にも肉體的にも他の男子と相愛の關係を生じないことを意味するのである。

☆

自分がこの稿に筆を附けようとした初に今更の如く氣が附いたのは、從來自分が自身の貞操と云ふ事に就いて全く無關心で居たことである。自分は生れて唯一度一人の男と戀をして、其男と結婚して現に共棲して居る事を當然の事だとして、幸福をこそ感ずれ、少しも其れに就いて不安をも懷疑をも挾んだ事がない、一般の女子及び男子の貞操に關して考へた事はあつても自分の貞操は家常茶飯の事の樣に思つて居た。自分の貞操を輕く見て居たのかと云ふと、輕いも重いもない、てんで然う云ふことは意識せずに過ぎて來た。然う云ふことを問題として輕重を考へて見る必要の無い感情生活を續けて來たのであつた。

處女時代にも結婚後にも不貞の欲望を起さず不貞の行爲を敢てしなかつたと云ふ事が最も貞操を尊重したのだとするなら、自分は自然に人並すぐれて貞操を尊重して居る女だと言つてよい。

健康な人が其方の專門家で無い限り特に病理を研究しない樣に、貞操を破らうとする樣な內心の要求の無かつた自分は、久しい間自分の貞操に就いて顧慮する必要が全く無かつた、必定今後も其必要があるまい。

併し自分の貞操觀とでも云ふものを述べようとすれば、自分の經驗を基礎として筆を進めるより外はない。そこで今日まで何故に自分の貞操が自然に守られて來たかと考へて見ると、初めていろいろの理由のある事に氣が附く。

☆

自分には「純潔」を貴ぶ性情がある、鄙近に云へば潔癖、向上して言へば之が正しい事を好む心と聯關して居る。この性情が自分の貞操を正しく持することの最も大きな理由に成つて居る樣に考へられる。唯だ貞操の上ばかりでなく、自分の今日までの一切は此性情が中心に成つて常に支配して居る樣に考へられる。自分の鄕里は歷史と自然とこそ美くしい所に富んで居ても、人情風俗は隨分墮落した舊い市街であり、自分の生れたのは無敎育な雇人の多い町家である、從つて幼

い時から自分の耳や目に入る事柄には如何はしい事が尠くなかつた。自分が七八歳の頃から自分だけは異つた世界の人の樣な氣がして、周圍の不潔な事柄を嫌ひ表面では兎も角、內心では常に外の正しい清淨な道を行かうとして居たのは、嚴正な祖母や讀書の好きな父の感化にも因るとは云へ、此「純潔」を貴ぶ性情からであつた。

　自分は十一二歳から歷史と文學書とが好きで、家の人に隱して讀み耽つたが、天照大御神の如き處女天皇の淸らかな氣高い御一生が羨しかつた。伊勢の齋宮加茂の齋院の御上などもなつかしかつた。自分の當時の心持を今から思ふと、穢い現實に面して居ながら飛び離れて美的に理想的に自分の前途を考へ、一生を天使の樣な無垢な處女で送りたいと思つて居たのであつた。

☆

また自分の心持には早くから大人びて居る所があつた、投げやりな父に代り病身な母を助けて店の事を殆ど一人で切盛した爲もあるが、歷史や文學書に親んだので早く人情を解し、忙しく暮す中にも幾分其れを見下して掛かる餘裕が心に生じて居たからであつたらしい。

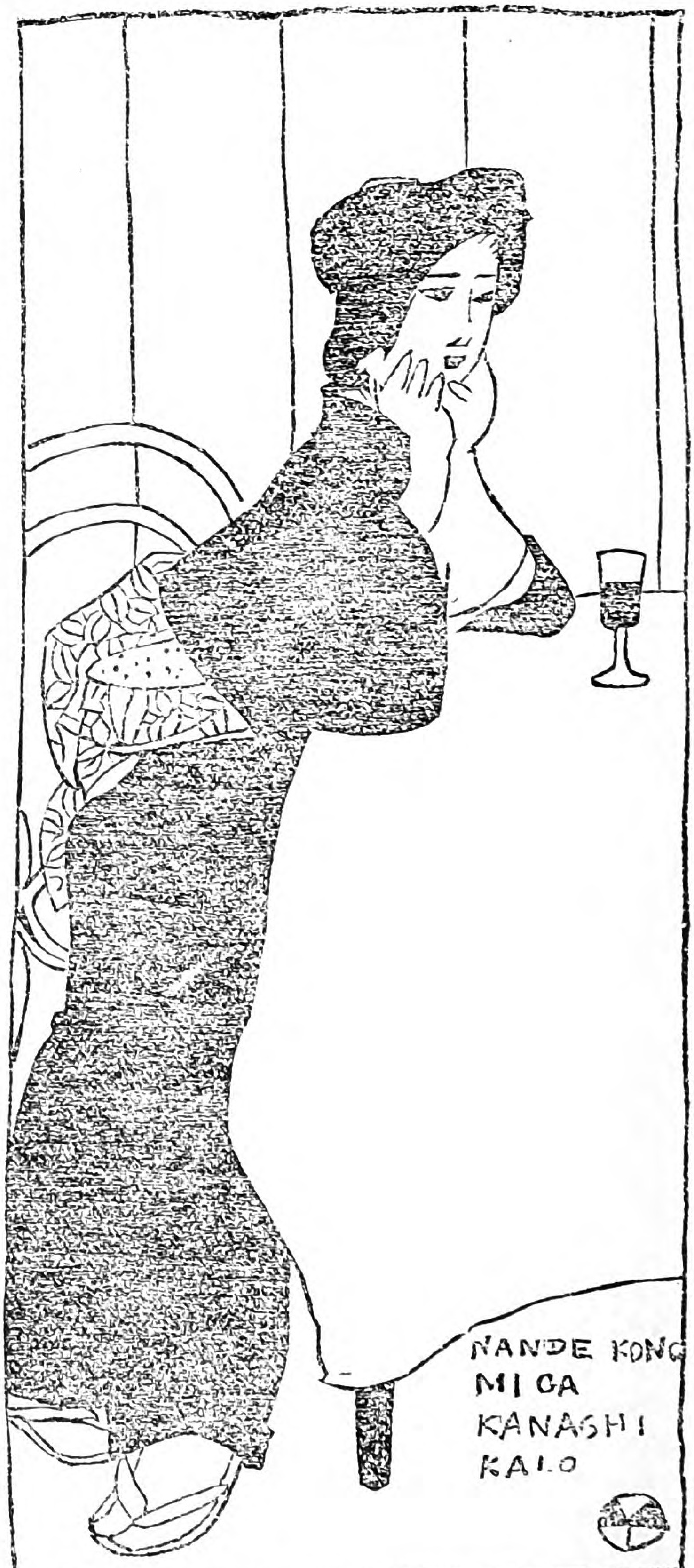
　それで大人びて居た自分は、戀愛などの心持も文學書に由つて十一二歳の頃から想像することが出來た。源氏物語の女の幾人に自分を比較して微笑んで居た事もあつた、併し異性に對する好惡の情はあつたにせよ實際に自分自身の戀愛と名づくべき感情は二十三の歲まで知る機緣が自分の上に無かつた、常に自分の周圍の男女は都て不潔な人間だと云ふ氣がして、其れで書物の中の男女に許り親んで居た。

　一般に處女の戀愛は異性に對する好惡の情が好奇心に一步を進めた所から生ずると云ふ人がある。併し自分には何等の然う云ふ好奇心も感じなかつた。自分の經驗で云へば、性欲と云ふべきものの意識は處女時代に無い。性欲の記事を讀んでも、男子の樣に肉體的に

刺激せられる所は少しも無い。之は男子と生理關係の相違が大變にあるらしい、或る特別な境遇に育つた處女は知らぬこと、普通の處女は自分と同じであらうと想はれる。專門學者から見たなら、處女の戀愛や男子と對する好き嫌ひの感情にも其根柢には性欲が潜在して居るかも知らぬが、處女には全く其意識が缺けて居るのではない。若し處女にもあれば、性欲に對する好奇心があるだけであらうが、其れとても目に見えて肉體の衝動から自發するのでは無からうと想はれる。而して自分には其好奇心に類似するものすら缺けて居た。

☆

自分が「純潔」を貴ぶ所から堺の街の男女の風俗のふしだらな事を見聞きして其れを厭ひ、又讀書を好む所から文學書の中の客觀的な戀愛に憧れて、自分の感情を滿足させて居たのが、處女時代の貞操を守り得た二つの理由であつたが、嚴格な家庭が實世間の男子と交際する機會を與へなかつたのも亦一つの理由であつた。



自分は學校へ行く以外に家の閾を跨いだことは物心を覺えて以來良人の許へ來るまでの間に幾回しかないと云ふことが數へられる程稀であつた。堺の大濱へさへ三年に一度位しか行かなかつた。自分の歌に畿内の景色や人事を歌ふことが多くても、實際京都や大阪へ行つたことは十度にも滿たないのであつた。其れだけに却て深い印象が今に殘つて居るのかも知れぬ、勿論學校へ行くには女中や雇人の男衆が送り迎へをする、其外の場合は父や親戚の老人や雇人の婆やなどが伴れて行つて呉れる。全く單獨に出歩いたことは無かつた。

☆

女學校を出てからは益々家の中で計り働いて居た。嚴し過ぎる父母は屋根の上の火の見臺へ出ることも許さなかつた。父母は娘が男の目に觸れると男から墮落させに來るものだと信じ切つて居た。甚しい事には自分の寢室に毎夜兩親が嚴重な錠を下して置くのであつた。雇人の多い家では——殊に風儀の惡い堺の街では——娘を嚴しく取締る必要のあることは言ふ迄も無いが、自分ほど我身を太切に守ることを心得て居る女を其れ程までにせずともよいであらうに、自分の心持を領解して呉れない兩親の態度をあさましいと思つて、心の内で泣いたことも多かつた。

自分は生來外出を好まなかつた所へ父母が其樣であるから、少しは意地にもなつて、全く人目に觸れない女になつて仕舞はう、誰が勸めても賴んでも店の薄暗い物蔭以外には一歩も出まいと決めて居た。然うでなくても、兄は東京に學んで居る。妹は京都に學んで居る。弟はまだ土地の中學に居る。店を初め一家の締め括りの爲めに自分はどうしても兩親を助けて家に居なければならなかつた。人はお嫁に行てから家政に苦勞するのに、自分は反對に小娘の時から舅姑の樣な父母に仕へて有らゆる氣苦勞と勞働とをして居た。そんな境遇に居たので異性と戀をすると云ふ樣な考へも機會も全く無かつた。從つて貞操を汚す樣な男の誘惑と云ふものも一切知らなかつた。

☆

それから之は何時かの「早稲田文學」へ載せた雑感の中にも一寸書いた事であるが、自分は幼い時から動もすると死の不安に襲はれて、平生少しの病氣もない健かな身體でありながら却て若死をする氣がしてならなかつた。其れが爲め他人の嫁入沙汰を聞いても他人は他人、自分は自分の運命があると云ふ風に思つて、結婚などをする自分ではないと堅く信じて居た。源氏物語の樣な文學書を讀んで作中の戀には自分の事の樣に喜憂することがあつても其れは夢の世界空想の世界に遊んで居る自分に過ぎなかつた。又十七八歳から後は露西亞のトルストイの飜譯物などを讀んで、結婚は罪惡である、人種を絶やして無に歸するのが人間の理想だと云ふ樣な迷信



O-NEKO TO MUSUME

が可なり久しい間自分を囚へて居たので、自分は固より、偶ま遇ふ同じ街の友人にも非結婚主義を熱心に勸めたりなんかして、然う云ふ樣な事に由つても自分は男子の誘惑から隔つた遠い彼方に住んで居た。

親戚の者から縁談を勸める事もあつたが、自分が汚らはしいと云ふ風に眉を顰めるので、自分の前でそんな話を持出す人も後には全く無くなつた。親達も家に無くてならぬ娘であるから、自分が結婚を望む氣振も無いのを善い事にして格別勸めようともしなかつた。而うして自分は出來る丈從順に働いて忙しい家業に心を盡して居た。空想の別世界にも住んで居るが、現實の常識生活にも一點の批を打たれない樣にしようと云ふのが自分の其頃の瘦我慢であつた。父が株券などに手を出して一時は危く成つた家產を舊通りに挽回することの出來たのも、太抵自分が十代から二十歲の初へかけての氣苦勞の結果であつた、然う云ふ一家の危機を外に學んで居る兄や妹に今日が日までも一切知らせずに濟すことが出來たのであつた。

☆

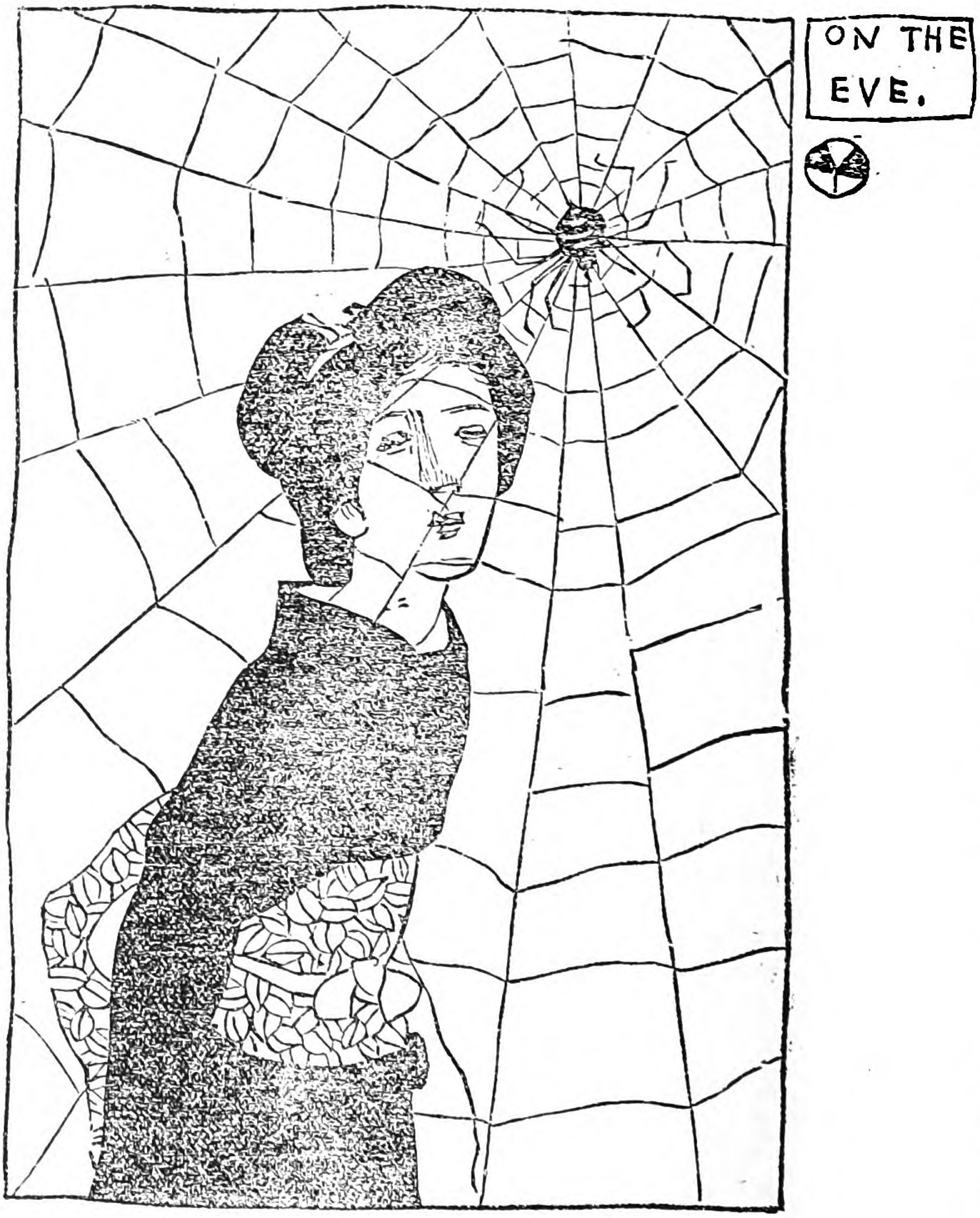
自分の處女時代は右の樣にして終つた、思ひも寄らぬ偶然な事から一人の男と相知るに到つて自分の性情は不思議な程激變した。自分は初めて現實的な戀愛の感情が我身を焦すのを覺えた。其男と終に結婚した。自分の齡は二十四であつた。

戀をし結婚をして以後の自分の觀る世界は處女の時に比べて非常に潤い快活なものと成つた。娘の頃の自分の心持には僻んだり、偏したり、暗かつたりした事の多かつたのに氣が附いた、結婚をせねば領解の出來ない事柄の多いことをも知つた。

それから今日まで妻として貞操に何の缺けた所もない生活を續けて來て居るのは自分等夫婦に取つて東から日が昇るのと齊しく當然の事として居る。一夫一婦主義を意識して實行して居るのでも、女大學に敎へてある樣な舊道德に壓抑せられて居るのでも無い。つまり初めの戀愛狀態が益々根を張り枝を伸して發達して

行くのに過ぎない。良人と自分とは天分も敎育も性情も異つて居る。それでいろいろの彩料を交せながら何處かに引緊つて調和が取れて居る繪の樣に二人の心持がしつくりと合つて居る所に、自分の感情は歡喜と幸福とを得て居るらしい。勿論不足と不安とは自分等の生活の上に絶間も無いが、其不足と不安の生活を共にして居ると云ふ事が自分等の歡喜でも幸福でもある。動搖の乏しい單調な生活であつたなら、自分等は或は早く倦いて仕舞つて居たかも知れない。

同じ藝術に從事して生活の思想にも形式にも類似の多いと云ふ事が二人の心の平衡を保つて行かれる一つの原因であらう、又子供に對する愛情を齊しくして居ることも一つの原因であらう。又良人を師として常に敎へられ、親友以上の親友として、不安動搖の生の中に信



賴し扶け合つて行く情味も一つの原因であらう。

☆

併し何が自分の貞操を自然に守らせて居る原因の重なるものかと考へて來ると、處女時代から失はずに居る「純潔」を貴ぶ性情が其れである。良人と自分との間には心の上に虚僞が無い。何事も隱さずに打明けねば自分の純潔を好む心が濟まない。從つて肉體をも純潔に自重したい。不貞なる行爲はやがて不潔である。虚僞である。純潔な肉體は自分の純潔な心の最も大切な象徵として堅く保持したいと思ふのである。

翻つて處女時代を顧みても然うである。自分は餘程特殊な境遇に育ち、特殊な性情を持つて處女時代の貞操を正しく過ごして來たが、前に擧げた多くの理由には僻んだり間違つたりした心持から出たものも交つて居る。その中で今日から考へても最も正しい理由は矢張「純潔」を貴ぶ性情であつた。

自分には今日まで貞操を破る樣な行爲を望む內心の要求は少しも無く、今後も然う云ふ危惧は夢にも思ひがけないが、萬一さう云ふ不貞な心が起るとしても其れを豫防するものは此「純潔」を貴び、正しきを欲する性情の威力であると信じて居る。啻に貞操に就いてのみならず、個人の尊嚴は此性情を土臺として保たれ且つ發揮せられるものだと信じて居る。

☆

此樣に意識して自分の貞操の地盤を反省し出した自分は「純潔」を貴ぶ性情を主とした上に猶下の樣な理由を新たに加へたい。其れは若し貞操を亂した場合を豫想した消極的の理由ではあるが、今日の自分は斯う云ふ事をも考へて見ずには居られない。即ち處女時代に於いて不貞の行爲があれば、處女の純潔は破壞せられたのである。其女は自ら耻と悔とを覺える計りでなく、淑女たる資格なき者として社會から擯斥せられても涙を呑んで忍ぶより外はない。進んで貞淑な人の妻となる資格に缺けた所のあるのは勿論である。斯樣

な將來の不幸を豫知する明敏な心がある以上、處女自身に飽く迄も自己の貞操を尊重するのが賢い仕方である。

妻にして貞操を破るとすれば、忽ち家庭の不和を生ぜずば已むまい。子女の敎育に就いても母が正義の規範を示す資格を缺くことになる。敎へられざる女は知らぬこと、理智の眼の開いた婦人は之が爲にも貞操を尊重せねばならぬ。家庭の平和と純潔とを亂せば一身の破滅ばかりでなく、延いては一家の協同生活を危くし、社會の幸福をも害ふ結果が豫想せられる。



學者は種の保存の上からも女子の貞操は大切であると云ふ。學説としては然うでもあらうが、自分には未だ良人の血族を保存する爲に貞操を守らうとする自覺はない。其れよりも自分の樣に純潔を貴ぶ性情を基礎としてさへ居れば自然に種の保存の學説にも一致する結果になると思ふ。

☆

以上は專ら自分にのみ就いて述べた。之は自分だけの經驗から出發した特殊の貞操觀であつて、一般の婦人達に及ぼし難いものである事は勿論知つて居る。世

の中の婦人の大多數は貞操の堅固な人達である。自分は其一人一人の特殊な貞操觀を聞きたい。

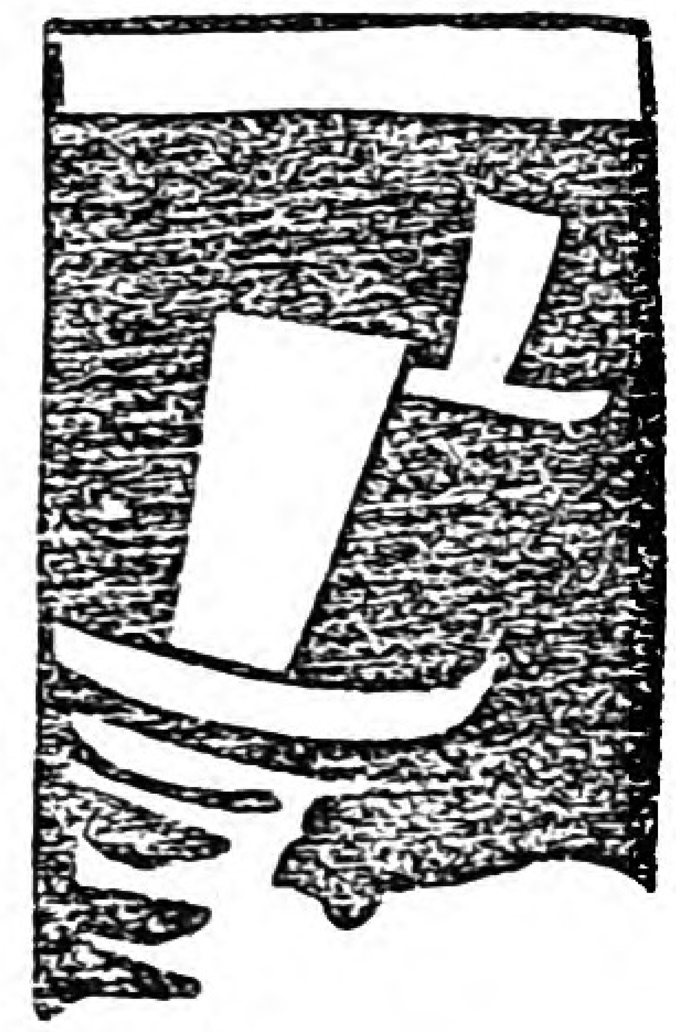
また再婚をする婦人の心持、良人を定めずして多數の異性に接する稼業の女の心持などは、何う云ふ所に心の平衡を取つて自己を安んじ羞恥を抑へて居ることが出來るのか、其等に就いても聞きたい。

未亡人と云ふものは故人某の妻である。其れが再嫁をすると云ふことは法律上に姦通ではないにしても、本人の心持は疚しく無いものであらうか。未亡人の貞操觀と云ふものも赤裸裸に語る人があつて欲しい。

また男子の貞操觀をも聞きたいものであるが、其れは男子自身の正直な告白を待つより外はない。併し自分の想像では、男子は生理的に女子と餘程異つた所があつて、處女には性欲の自發が無いに關らず、若い男子には其れが反對に熾であるらしい。(十月の雜誌三田文學の谷崎氏の小說は其一例である。)また婦人は早く老い易いに關らず、男子は七十歲の老人にも好色の噂を聞く例が多い。特殊な男子を除き、一般大多數の男子が然うであるなら、男子の貞操は餘程趣を異にせねば成らぬ筈である。男子は貞操を守るに堪へないとも云はれやう。

それとも、將來に敎養ある男子が殖えるに從つて、自己の純潔を貴ぶため、家庭の平和を欲するため、放縱な性欲を自制して一夫一婦の貞操を女子と同じく尊重し實踐する樣になるであらうか。又反對に女子も亦刺激に憬れる心や食物其他の變革から從來の體質を漸次一變して性交の欲望を自發し、併せて男子と齊しく老ゆることが遲くなるであらうか。最後に述べて置く。自分の貞操は男子――良人の貞操の如何に由つて動搖するもので無い。自分の肉體を淸らかに保つのは自分の心の象徴だとして、何よりも先づ自分の爲に尊重するのである。さうして之は誇るべき事でも何でも無い、自分に取つて當然の事だと思つて居る。





戀愛論

沒我の愛情なき者は玉の盃底なきが如し

文學博士　建部遯吾

▲博い意味の愛

戀愛を一般に云ふラブとするならば、ラブは婦人の命といふべきことは、從來識者の間にも云はれる處である、而してラブは西洋では、ごく廣い言葉で愛情若しくは愛を總稱する言葉だが、愛は親子の間には慈愛男女の間には戀愛、兄弟姉妹間には悌愛、友人間には友愛と種々の形に於て現はれて居る。

今戀愛に就いて述べる前に、先づ一般に云ふ愛のことを話すと、愛は人々の關係の道の發達の第二位に位するので極地に達せず第一の初等は同情である。同情は其向ふ處の廣さは無限であるが、其相手に對する心情は餘り深いものではない。即ち有限である、誰れしも同情の爲めに命を投げ出すものはない、愛はこれより一段進んだもので、愛によつて人は初めて愛の深さと、無限とを經驗することが出來る、故に愛によつて命を捨てることは何でもないことである、只愛は其廣さに至つては有限である、愛の極は只一人の人に向つ



て他の人を忘れ己れを忘れ、世を忘れ自からの心は丁度盲目に等しくなりかねまじきものである。Love is blind といふ諺はこの心状を云つたものである。

然るに愛の如く身を捨てる迄深くなつて、且其廣さも無限なるものは、卽ち仁である、孔子の言葉に、身を殺して仁を成すと申されたが、この言葉を實行したものは、ワシントン及びリンコルンである。ワシントンは屢死地に出入して、遂に米國の獨立を成し遂げた彼が十八歲の時に、激流に溺れんとする小兒を救はん爲、身の危難を顧みず、水に飛び込んで救つた話は世人のよく知る處である。更に新英蘭十三州數百萬の人民の爲めに、立つたのが米國獨立の開祖としてのワシントンである。ワシントンは身を殺す迄の實地に至らなかつたが、遂に仁を成す爲に身を殺したのは、リンコルンである。此人は人と云ふ中でも、當時米人が人類中の劣等と見なしたる黑奴を解放するに盡力をして其ことには成功をしたが、遂に刺客の手に斃さるるに至つた、仁者は壽しと云ふけれども我が國の佐倉宗吾の如き、又其類で、いづれも身を殺して仁を成した人である。

▲焦れ死と心中

今、仁者が身を殺すことを云つたのは、戀愛に身を殺すことと比較する爲で、戀愛に身を殺すといふのには二種ある、一人で身を殺すを焦れ死と云ひ、二人で死ぬるを心中といふ、リンコルン、佐倉宗吾の死に方と、槍の權三や時次郎、長右衛門の死に方とくらべたら、仁と愛と、道としての價値は略々明瞭であらうと思ふ。

併し余は道學者流の如く心中は詰らぬものといふのではない。兎も角も計り知られぬ心の深さから出て來た情を以て、我身を捨て、悔いない、命を投げ出して平氣でやる、それが非常の享樂であるといふことは、人間主我的思想と正反對で、道に於ける進歩の第一着である。世の中の女が、良夫は我儘を通す爲の道具、小遣錢を絞り出す機械、又は靴の紐を結び外套をかけ

くれる下男位に考へ、又男子が妻は飯を炊く下女、家具を仕末するもの位に考へてゐるものに競べたらすでに焦れ死に、又は心中に迄進んだ青年男女は、倶に道の門に至つて、其扉を敲いたものであるといつてよ



い。色好まざる者は玉の盃に底なきが如しといつた人の心持は解らぬが、婦人にして貞操なく、男子にして政治上、社交上、義務上の操のかけたものは、玉の盃に底なきと同じで、色もなく愛の經驗もなきもの多く又我身を捨てるといふ極地の覺悟もな

いのである。一體色好むと云ふと語弊があるが、如何なる美人と雖も、主我が先に立つて、沒我の極地といふべき愛情を解しないものは、又これ玉の盃に底なきと同じである。

△同性の戀愛は不自然なり

戀愛の中に屢變則なものがある、例へば同性の戀愛即ち男女にあらずして二人の男、二人の女子間のものである。是等も前に述べたことにあてはまるが、これは戀愛を遂げた結果が、不自然に陥るは大なる缺點である。女性間の戀愛の結果、心中に至つた實例は、今夏越後の海岸に行はれ、又心中に至らずしてお家騷動を華族の後庭に演じた例もついこのごろ傳へられた。然しあらゆる病的現象と、健康現象との間には、どこといふ明確なる境はないと同樣に、戀愛も又然うである。右に述べた二例の如きは、明白なる變體病的戀愛であるが、そこに至らざる普通戀愛も、一歩をあやまれば病的になる。危險に陥る。注意すべきである。

フオレル氏が兩性間の愛といふ書を著して種々の方面からの研究を述べたのは、教育家は勿論、他の者も見てよい。雲井龍雄の修養筆記にも、其一ヶ條として戀愛問題を書いて居たといふ。戀愛は永らくの間、三文小說の手に弄ばれたが、今に眞面目な問題として、教育上研究されるやうになるであらう。

△戀の失脚者と自殺

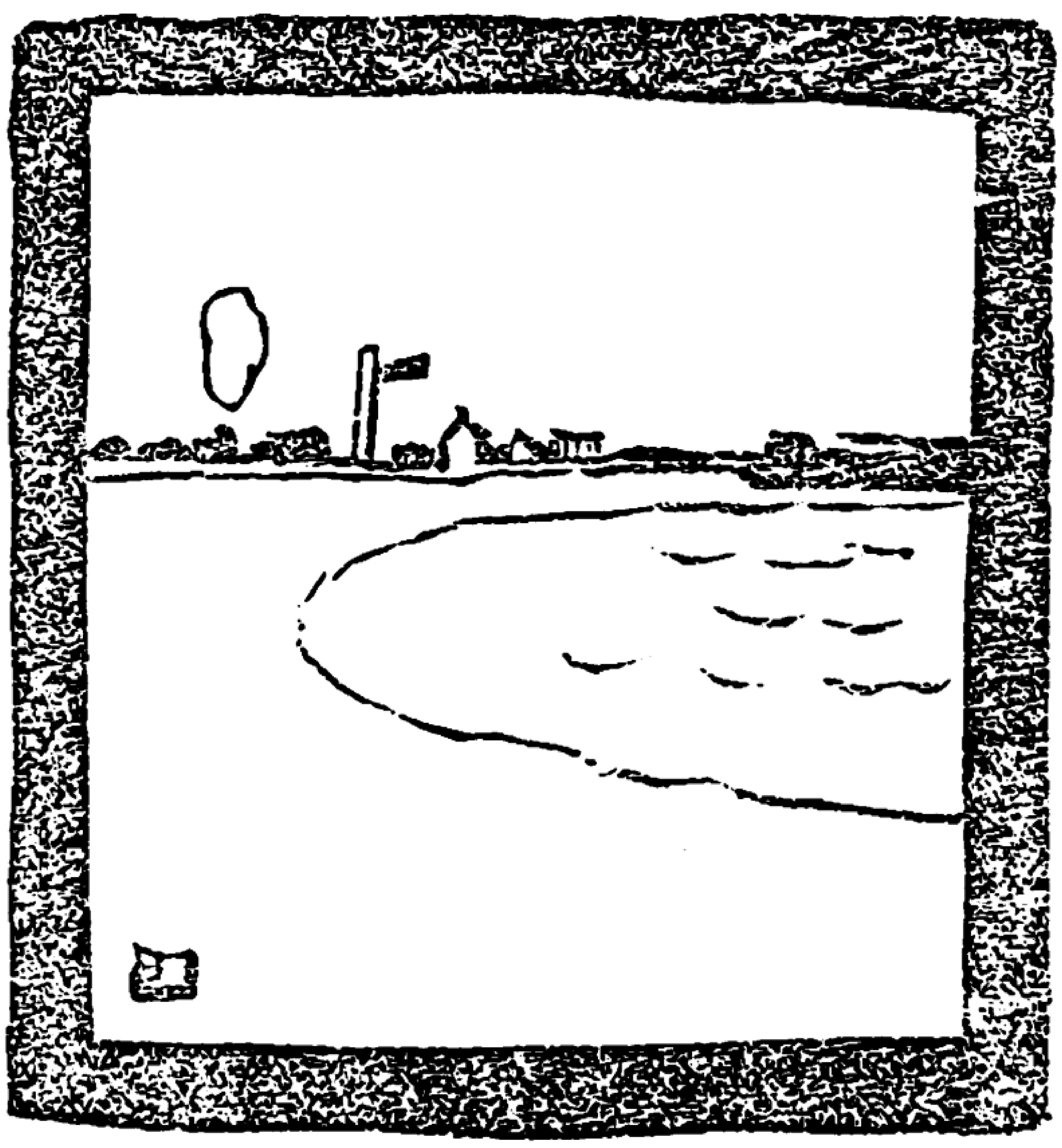
右の如く修養上、教育上、人生經驗上、深い意味のある戀愛と云ふものは、これによりて人間が實の自覺をする例に多くあつた。文覺上人が袈裟御前を過失殺傷してから發心し、熊谷眞實も敦盛を手にかけてから發心した。又畏れ多くも、花山院は女御の死を悲しみ給ひて、萬乘の御位を降り給ふた、此の如きは、歴史上著名の實例である。凡そ戀愛の經驗は、青年男女が普通に發達をしてゆくと、一度はかならず經驗することで、この關所を如何に通過するか、其人の人格上、運命の岐れ道である。世の中に青年男女の自殺がよく

あるが、死者に口無しで、其精細なる事情は知ることが出來ぬが、恐らく大多數はこの關所を通過する場合の失脚が手傳ふことが多からう。偉大なる人格ゲーテの如きは、其光彩ある文章によつて、其經驗がことごとく明白にされ、其難關を通過するには、幾多の波瀾を經た青年のなれの果である其著書（ウエルテルのわづらひ）等は、ちんまりとしてよく其經驗の表はれた散文詩である。

▲人間一生の岐れ道

義經の靜に於ける戀の大なる影響は認めぬが、靜が義經に於けるは、よく樂しんで淫せず、哀しんで傷らず、戀愛によつて益々人生の眞を發揮せるものと云つて宜い。勾當の內侍は如何なる人なりしか、義貞の死後は尼となつたと傳へられたが、義貞の內侍に於けるは、有形にとらはれた遺憾がある。又木村長門守重成の妻玉江の、良人に對する如きは、有形にとらはれず然も纏綿の情緒は永久に後世の人を感せしめた。

今日の青年男女の間には、二十年前に競べて、相見相談じ、相知るの機會は增して居る。いくら尋常一樣のことゝなつても、常に新鮮なるものは青年男女相互の感情である。然して一旦機緣こゝに熟すれば、此感情は忽ちに戀愛の閃光として激發す。此時がこれ青年男女の一生に取つて幸福の門でもあれば、又禍の門でもある。この時に於て己が心の梶を取り、心王を以て心所の役する處とならざらしむるならば、其人はこれからして一生幸福なる春秋に入ることが出來る。



人生に於ける戀愛の價値如何

早稻田大學教授　金子筑水

△進化論的に見たる戀愛

實は戀愛と云ふ問題に就いては、不幸にしてまだ纏まつた考へを持つて居ない。勿論この問題を考へない理ではないが、寧ろ其意味が餘り複雜で一本調子に考へられないので、今でも自分の意見として發表する程のものが有せませんが、只思い付いた點丈述べて見ると第一私は戀愛といふ事を生物學的、又は進化的に考へて見度い。今日の社會現象はすべての事物を進化的に見る時代であるから、戀愛等も一種の社會現象である限り、之を進化的に見て初て其意味が了解されることと思ふ。勿論進化的といつても、戀愛の進化〱といふ事を特に精しく研究して居ないから、精確なことは云へないが、先づ劣等動物に於て其間に起る戀愛／若しそういふものが有るとすれば—を見ると、種の繁殖と云ふことが其重な目的の樣に見える。勿論劣等動物がさういふ目的を意識して居るのではない、むしろ殆ど本能性、然かも強い本能性として戀愛といふものが動物間に顯はれて居る。この動物間に於ける戀愛の意味が、やはり人間の間にも續いて居ると考へられる。想像で云ふのであるが、動物的の強い本能は一朝一夕に成立したものでは無からう。多分最初は種の保存及發達が目的とされてゐたので、其作用が繰返された結果、今日見る樣な強い本能となつたのであらう。であるから世間に純粹な精神的戀愛等稱へる人が有つても戀愛を進化的に見ると、其根據は今云た樣な動物的な處にあると思ふ。

然り、戀愛も最初は動物的であつた。

▲肉體美の要求

處が進化は複雜で一本調子に行かない之が爲めに樣々複雜な意味が戀愛に加はつて來た。例へば動物が互に肉體美を慕ふといふ樣なこと、これも煎じつめれば前に述べた種の保存と密接な關係があることであらうが、今日では殆ど獨立の意味をもつて居る。女性から云へば男子に向つて要求する複雜な肉體美、男性から云へば、女子に對する種々なる肉體美、これら相互の肉體美の要求といふことが今日では戀愛に重い意味をなしてゐる。



此意味を取り去つては、戀愛は殆と殼になつてしまふ勿論肉體美の要求であるから、之を動物的肉體的と云つても差支へない。

▲精神上の要求

戀愛の進化はこれだけでは止まらず、更に複雜に發達していつた。即ち動物がだん〳〵進化して精神作用が次第に發達して來ると彼我互に精神上の補益を要求するといふことが起つて來る。男性から云へば、女子によつて自分の足らざる處を發見し、女性から云へばやはり同じ足らざる處を男性に於て發見するといふ風に、互に全きを求めるといふことが、今日では戀愛の重い意味になつて居る。所謂精神上の戀愛がその相手の一方に於て美を認めるといふことである。平常人間は斯ういふことに就いて深い注意を拂つて居ないが、戀愛に取つては此の事は餘程深い意味をもつて居る。

▲強い勢力を持つてゐる

さう云ふ風に戀愛はだん〳〵進化して來て、尙一層複雜に進化しつゝあるといつてもよい。例へば苦樂を俱にして相互に所謂一體となるといふ樣なこと、卽ち肉體的にも精神的にも一つとなるといふ樣なこと、此れが更に戀愛の重大な意味をなしてゐる。斯云ふ風に進化的に考へて見ると、戀愛は非常に複雜なもので中中一本向には考へられない。今述べた何れの點が戀愛に取つて最も重いものであるかは別として、私は戀愛は普通に吾々が考へて居るよりも更に更に強い勢力を持て居るものだと思ふ。勿論誰だつて戀愛が人事中の大事である位は知つて居るが、普通に大事と思つて居るより、更に強いインフルエンスをもつて居るのが戀愛である。

▲戀は盲目なりと云ふ意味

私は戀愛はむしろデスポチックなものだと思つて居る、人間の多數は戀愛に翫物視されて居る樣に見えるイプセン等も多少かう云ふ風な考へをもつて居たので

ないかと思はれるが、其作を見ると最初の戀愛によつて失敗したものは、生涯失敗し、最初の戀愛に正しい道を取つたものは、生涯幸福な人生を送るものだといふ樣な意味が方々に暗示されて居る。今言つた通り戀愛は、今日に於ては、ある意味に於て最も強い本能である。所謂精神的戀愛にまで本能性に附いてまわつてゐる。故に斯ういふ強い本能に打勝つといふことは、普通の人間には到底出來難い。戀するといふことは熟慮して行ふのでなく、むしろ本能の爲よぎなくされると云ふやうな趣がある。戀は盲だといふ意味も、此點から解釋が出來る。そう云ふ、デスポチックなもので、然もそれが人生に非常に深い且廣い影響をもつて居るものとすれば、今日の吾々が戀愛に就いて、其本來の意味如何と尋ねることは、決して無理でないと思ふ。

▲今日までの戀愛の疑問と新しい戀愛

今日迄の世間を見渡すと、大方はかう云ふデスポチックな運命に支配されて、必ずしも衷心から之に滿足してゐるわけではないが、まあ仕方が無い、これが運命だ成行きだと云ふ風に諦めて、まあぐづ〱と成り行きに委せると言つたやうな樣子が有る。在來の戀愛に向つて我々は樣々の疑問を提出することが出來る。例へば種の保存や發達はもはや要が無いと考へて居る人もある。又吾人は無用な本能に屈服しなければならぬと考へる人もある。或は又戀愛は精神的補益であると云つても、どうも其目的が完全に達せられない、戀愛などは今人の目から見れば、案外つまらないものだと考へてゐる人も有る。こんな理由で戀愛に對して今日は樣々な疑問が起つてゐる。人生に於ける戀愛の價値如何といふが、今日では重大な問題である。一體これ迄戀愛はかく〱であつたからと云つて、今後何時迄も永久に在來の通りで無ければならぬと云ふ理由は毛頭ない。若し人間の力でそれを改造するとか乃至は破壞するとか云ふことがなし得られゝば、左樣な事實に向つて遠慮なく人間の力を振つて差支ない。兎に角

戀愛は人事中の人事、人事中の最大事の一であるから先づ其の本義を明らかにし、然るのち新しい戀愛といふ的にむかつて進むが、明らかに時勢の要求であると思ふ。すべてが改築されなければならない今日、取わけ戀愛などいふ大事が、此の大事業の中に含まるべきは、初から明白なことだと思ふ。私が先々月の「太陽」に紹介したエレン、ケーの戀愛觀など、充分翫味さるべきものだと思ふ。

戀愛と云ふ言語の扱ひ方

文學博士　遠藤隆吉

戀愛と謂つても極く意味が廣いが、男女が互に相愛するといふやうなことは、已むを得ない場合には、之を許すとしても、只長く繼續せんことを希望するのである。然しながら戀愛は男女の情熱が熾んに燃上つてゐる時に起る狀態であるから、互に其缺點とか、境遇とかゞ覆ひ隱されてゐることが多い。それが爲に思はぬ悲境に陷る樣になるのである。戀愛といふものは夫婦の間には必要なることで、これが無かつたら夫婦關係は圓滿に立ち行くものではない、造物者は人間に戀愛の情を作つて、これによつて種屬を繁殖せしめようとするから生物の有らん限りは、この情は根本的といふことが出來る。只人類になるといふと、社會的關係が甚だ多く、且又廣いから、一人の人間といつて見た處で、只其人の身體精神丈を取り出すわけには行かないのである。人間と云へば種々なる關係を俟て初めて意味あるものとなるのであつて、只短兵急に本人丈を見て戀愛に陷るといふと、思はざる網にかゝることがある。だから戀愛の必要なると同時に、周圍の事も考へねばならぬことは明かである、愛情は分つことが出來るといふことを云つた人がある、即ち甲の人を愛

する程度で、同じく乙の人を愛することが出來るといつた人があるが、すべて人間の精力には限りがあるから、先方によつて感ずる情には自ら度が出來てくるわけである。戀愛はそれ自身に於ては欲望と同じもので今云つた意味に於て、分たれることの出來るものである。そして又非常に低い程度まで下ることの出來る場



合がある。戀愛を以て直ちに神聖だといつても、其意味はよく解らないのである元來人間の言葉は人間を導くだけの力を有するものである、自殺といふ言葉がある爲、多少自殺者が出來て來るし、謙遜といふ言葉がある爲めに、謙遜を守る人が出來て來る樣なわけで、戀愛とか、ラブとかいふ言葉の用ひられるに從つて、情熱燃ゆるが如き男女がこれを實行して

見たくなる。だから言葉といふものは餘程注意せねばならぬものである。今日の樣に戀愛とかラブとか云ふ言葉が、世間に顯はれて多く用ひられたのは、社會がこれに傾ひたのではなく、この言葉がある爲ぬに、靑年男女をこゝに導くに與かつて力あると思ふ、だからこの言葉は、家庭又は私塾學校などに於ては、絕對的用ひない樣にすることがよい、只研究の爲に雜誌又特別の場所にて議論するのは別問題である、靑年男女が只相互の間にて戀愛に移るのは、元より意志の薄弱、智識の缺點を示して居るのである。なぜならば大人同志のみを見て、人間同體の關係を見ることは出來ない又全體を見るまでに戀愛を抑へると云ふ譯にもゆくまい。戀愛は結果、卽ち終まで其關係を圓滿ならしむる時には、必ずも非難すべきものではない。相互の間に愛しないものを兩親や親類が集まつて、夫婦にするのは、此上もなく馬鹿げたことである、多少の缺點はあつても、本人同志の相愛が必要なものである。世間には男子にして婦人を欺き、又は初より欺むく心を以て結婚し、又結婚後婦人を虐待することがあるが、此等は非難すべきことである。

戀愛と結婚と

文學士　生田長江

創世記によれば、『人ひとりなるは善からず』と觀たエホバの神が、アダムを深くねむらせて、ねむつてゐるとき其肋骨の一を拔取り、其拔取つた肋骨から女を作つた。アダムは其女のイヴを見て、『これこそはわが骨の骨、わが肉の肉なれ』と言つた。總ての戀をする者をして、かくの如く言はせたいものだと思ふ。

☆

戀愛ほど肉感的な感情はなく、戀愛ほど超肉感的な感情はない。

戀愛ほど肉體に繋がれ易いものはなく、戀愛ほど肉體を離れたがつてゐるものはない。

總ての愛の中、戀愛ほどきたないものはなく、戀愛ほど美しいものはない。其美しさは、美しい戀をした人丈けが知つてゐる。

☆

今に忘れないのは、鷗外先生の譯された『埋木』の中にある、『病なり、熱ある病なり、これを煩ふ人は、美しき夢見てきたなき業するものぞ』の一句だ。

人間のする事は、どの道きたないに極つてゐる。夢想の美しい丈けでも尊いではないか。

☆

『神曲』のダンテは其初めヴアジルに導かれ、後には若うして世を去つた初戀のビアトリスに手を引かれて、地獄界、煉獄界、天堂界を巡歴し、聖三位一體の奥義を瞥見したと云ふ。學術技藝の與へない物を、純潔なる戀愛が與へたと云ふのだ。

しかしながら、天國へ行けば戀愛はもうなくなつて了ふ。天使は男でもなく女でもない。兩性の理想的關係を説いたものとしては、トルストイの『クロイツエル、ソナタ後語』を、最も眞面目な最も徹底した見方であらうと思ふ。

トルストイに依れば、戀愛に陷らないで濟むならば陷らないがよい　もし陷つたならば、最初の戀人と結婚しなければならぬ。夫妻の關係をも出來得る限り超肉體的にするやう心掛けなければならぬ。理想の究極は性的關係の廢棄、人類の滅絶に及んでゐる。人類にして理想的の生活を營み得たならば、其上子孫を作るにも及ばないと云ふのである。

☆

戀愛は固より差別の愛である、平等の愛を標準と

して見たならば、忠義や孝行と同様に、つまらないとも下らないとも言へるであらう。

戀愛の歴史は生理學の領分から出立して、心理學の領分までやつて來た。極めて少數の人丈けがそれを、倫理學の領分へ持込まうとしてゐる。

總じて新しい道德には、舊い道德を破壞する要素が含まれてゐる。戀愛をも新しい道德の一に數へて見たい。

☆

頭の舊いのを知らない人と、自分獨りで新しがつて居る人とは戀愛を卑む。

其癖に、戀愛よりも貴いものを彼等によつて示されたことはない。

☆

平凡な議論だが、結婚は戀愛の結論でなければならぬ。

戀愛をぬきにした結婚は、怯懦なる服從か、利害の打算か、二者其一を出でぬ。

戀愛なくして結婚し得る人と、娼婦との間にどれ丈けの距離があるか。二者何れも親の爲め兄弟の爲めに賣られるではないか、金錢を以て買はれるではないか。

☆

只だ一度買はれるのが、もしくは、二度三度買はれるのが日本の令夫人である。幾度となく賣るのが醜業婦である。

☆

牝牡の一對を一の檻に閉ぢ籠めて置いて、自然の情合の湧くのを待つと云ふ。デイリカシイのない人は平氣でゐるかも知れない。

好いた同志が別々になる方を、まだしも人間らしい所業だと思ふ。

☆

天下晴れて說くべき問題ではない

文學士 下田次郎

日本人は餘り戀愛といふことを翫弄び過ぎると思ふ戀愛といふものは、人間より初まるものでなく、卽ち造物者が種屬を繁殖せしむる上から、人間に與へたものであつて、云はば植物が種子を以て種族を絶やすまいとするのと同一のものである。故に戀愛は生物より云はゞ只一部分のもので生物學より出で立たねばならぬ。元來愛といふものは、目的でなくて方便である、卽ち種子を絶やすまい、又子孫を繼續せしむる爲めの方便である。處が其方便たるべき愛が、きゝめが過ると、それ自身が目的見た樣になつて仕舞ふ。殊に動物等に於ては、戀愛の時機があつて、春とか、秋とか一定して居るが、人間にはそれらのことなく、ノベツに何時となく續くから尙更痴情に陷りやすい。

西洋では、このごろ戀愛について、如何なる工合に敎へるかと云ふつてゐる樣であるが、戀愛といふ樣なことは、そう公にするべき性のものではない。人間はやはり克己があるのが本來で、動物には元よりなし、世間には本能滿足主義を唱へる人もあるが、人間には本能以上進んで意志があるし、又本能にのみ支配される人は、人間としての價値が下ると思ふ、だから青年には強き克己があつて欲しい、そして戀愛などいふことは天下晴れて說くべきことではないと思ふ。それも敎育者とか、親とかゞ女子敎育上、研究するのはよいが、直接青年男女に向つて說くべき問題ではない。

一體人間が本能通りに行くといふのは、動物に同じことで、人間には人間らしい意志といふものがある。それに又本能滿足といふ樣なことは、すべてがそう出來るものでもなく、又全く非認すべきものでもない。

とにかく人間には意志が必要である、處が婦人は意志よりも感情が勝つて居る。それ故に誘惑に陷りやすい殊に誘惑はいかにも最もらしくもちかけて來るものであるから、それに對して毅然として居るのが大切なことである、元來今日の日本は、自制心の缺けた時代ですべてに於て物の程度が判然して居ない。即ち市中を見ても其建築法等は區々である、又個人の思想に於てもそうである。だから一般の青年男女なども、戀愛などに對して極端なる考へを有し、又は如何なる行爲をしても敢て耻ぢないと云ふ樣なことは、教育上又社會風儀上、宜しく考ふべき問題だと思ふ。

* * * * * * *

文藝の影響を受けたる戀愛は崇高なり

田村俊子

戀をするなら飽くまで空想的な美くしいツリームな戀がして見度い、實際の世にあつて、實際の人に觸れ實際の戀をする位なら、—最も此んなのは戀と云ふ中に入らぬかも知れぬが—寧ろしない方がましである。けれどこの世の中には、自分計りが、いくら然う思つて居ても、相手の男が實際的で、婦人に對して夢見て居るドリーマがあるかといふに、そんな人は萬が一もない、だから私達は物語か戲曲によつて美くしい戀に接して、それにあこがれて居るのが一番の樂しみである。噓にも實際の人を戀して見樣といふ樣な氣は起らない第一美くしい戀などは、戀を自覺する樣になつてからは駄目である。年ならば十四か五、何となく人なつかしさが戀となつて、戀とさとらで戀するのが眞に美くしい戀である。もし肉などいふ感じが伴のふ樣

になつては、決して美くしいものではない。よく世にあることだが、三十近くまで獨身で居て、小説も讀まず、芝居も見ないといふ人が、どうしたはづみにか、人を戀して、それが成立つて結婚したといふのは、何となく滑稽でいやらしい感がする。そんな經驗がある友人は、精神的戀愛等いふことは馬鹿〱しい話で、肉といふことを知つて初めて戀の神秘に觸れるものだといつて居るが、私はそれを聞いて其人に對して氣の毒でもあれば、をかしくも感じられた。年若くて良人をもつた婦人が、結婚當座は何ともなく三四年立つたあとで、初めて良人が懷かしくなつたり慕はしくなつたりするのは、精神的に良人を戀したので決して肉からきたのではない。たとへ又良人に對して起らずとも、他の異性に起る精神的の戀でも、それは美くしいものである。

同じ女學校の空氣に育てられた人でも、文藝に親しみ戀物語に耽つた人達は、夢の樣な空想的な戀ばかり描いて居るから、實際的な險呑な戀は決してしない、又戀がして見度くつても、自分の胸に考へて居る樣なドリーマな戀は、この現實では得られぬから、却つて安心である。處がこんな人達は、どうしても戀にあこがれる風が見えるから、教育者側からは、品性が出來て居ないとか、趣味が下劣だとか云つて、排斥されるが、私は決して、然うは思はない、第一戀する處が崇高で、美くしい、だから若い人達には、飽くまでも小説を讀ませ、美くしい戲曲に接せしめて、趣味を廣く豐かにさせたら可いと思ふ。

同性の戀、これは世間では色々と非難があるが、私は決して非難すべきことではないと思ふ。むしろこの爲に墮落といふ樣なことは免がれて、美くしい精神的の戀が成り立つと思ふ。最も散々色にすさんだ莫連女が、同性に戀を求むる等は、元より美くしい精神より起るものでないから、これは別問題である。

戀愛論終



名流婦人の愛讀書（一）

三宅花圃女史

私は隨分少さい時から讀書した方で、それも大方は軟文學の方が多う御座いました。殊に九ッか十位の時には、馬琴の作が好きでして『八犬傳』等は、非常に面白がつて讀んだものです、殊にあの中では、雛絹が良人角太郎の行をしてゐる庵に忍んで來て、身の濡衣を訴へながら口說くあたりの文章が、何とも云へぬ程好きでして、其當時はよく暗誦して居たもので御座います。其他馬琴の物は、色々とあさりましたが、殊にお俊傳兵衛を書いた『俊傳實々記』といふ本がありますね、あれなどは一夜か丶りに寢ずに讀んだもので御座います。それに私が少さい時から、動物が好きでしたから、お猿が死ぬあたりは、涙流し〳〵讀んだもので御座います。又文章もよく御座いました、十二三才の時には、幡隨院長兵衛の芝居でも見たのが動機となつたのか、そこいらは判然しませぬけれど、兎に角俠客物が好きで御座いまして、玄關に居る男等に賴んでは、屋敷町を廻る貸本屋の手から、あらゆる俠客傳を借りては讀みましたが、本來が俠氣などが好きな性で御座いましたから、自分で私は女俠客だなど丶云つてよろこんで居りました。然しそれも、もう隨分昔のことで御座いますから、どの本がどうであつたの何のといふ樣なことは覺えても居りませんが、今に頭に覺えて居りますのは、金看板甚五郎、紫紐大五郎、新門辰五郎、清水の次郎吉等、其他め組の喧嘩なども

好きな方で御座いました。十四五才の時には『三國誌』『漢蘇軍談』などいふ軍書にこりましたが、其中でも、『三國誌』の出師表は心から孔明が可愛相で隨分と泣かされたものです。又關羽が圍碁をやつてる時に、何處よりともなく、流れて來た矢が關羽の腕にさゝつたのを關羽はちつとも騷がず、靜かに矢の根をぬきながら、碁を打つ手をやめなかつたといふ處等は、何となく偉く感ぜられ、私も何かして居る時に、矢でも飛んで來て身體の中にさゝつてくれゝばいゝが、そうしたら關羽の眞似をして見樣と心から思つたことが御座いました。この頃は軍書本計りではなく『源平盛衰記』『平家物語』『保元平治物語』等いふ物にも目を通しましたが、其後は主に隨筆物に耽りまして『花月草紙』や『雨月物語』は面白く思つた方でした。殊に『徒然草』には好きな節々が多くかの花は盛りに月は隈なきを云々の處などは世の定評通り、いゝ處だと思ひました。『源氏物語』などは讀みはよみましたが、なにしろ隨分とながいうちに、出て來る人物が皆俠客物好きな私には氣に喰はないもの計りですから、とても愛讀といふ程にはまゐりませんでした。それでも人眞似に須磨明石等は名文としてくりかへし見ました『枕の草紙』は面白いには面白いですが、何となく小面の惡いと云ひ度い樣な文章で、愛讀と迄は行きませぬ、又同時に『名候言行錄』などいふ本もよろこんでよみました。其頃は傳記物は餘り面白く思ひませず、又日記は御手前味噌が多くて、とても氣に喰ひませんでしたが、只『紫式部日記』丈は面白く讀みました。又近松物等も文章丈はいゝと思ふ處が多う御座いますが、善人榮えて惡人滅ぶといふ馬琴風の勸善懲惡をよろこぶ私には、餘り感服しない節が多う御座いますので、愛讀とまで行きませんでした。

歌の方では『新古今』などは何となくすばしつて『枕の草紙』風な處があるからあまり感服せず、それよりも『古今集』の方が面白く思ひました。其他『山家集』『家持集』等はいづれもいゝと思ひました。又德川時代に入つては、景樹の歌風がしたはしく、ことに其門人

木下幸文といふ人の詠み方は景樹のに色を附けた樣な可愛い詠みぶりで、何となく好きでした。

とにかく私は家に居る間は何にくれとなく讀みましたが、明治時代のものには、餘り目を通しませんでしたよく一葉さんなんかは、紅葉さんのがいゝと云つて勸めましたので、たまには讀みも致しましたが、近頃になつては、新らしい自然派の作物なんか、見る日間もなく、又見樣とも思ひません。そこいらの雜誌に載つて居る作物をよむ位なら、隣の軒下にでも立つて、内輪話の立ち聞でもした方が遙に面白いと存じますから……このごろは又若い時嫌ひであつた傳記や、日記ものに多少面白味が出て來ましたが、これも自分が年を取つて行く所爲で御座いませう。

尚深く考へましたなら、隨分と面白く思つて讀んだ本もあつたでせうけれど、そう一々覺えてもをりませんから、只心に浮んだ丈をお話し致しましたから其お積りで居て下さい。





女性の獨身難

大阪高等醫學校教授　田中祐吉

△獨身で失敗した實例

現代の新敎育を受けた女性の中には、イプセンのノラを氣取り、結婚の無意義にして徒らに男子の犧牲となるに過ぎざることを唱へ、自活獨立の必要を主張する者が隨分多いようであります。これが所謂女性の自覺とか云ふものであるかも知れませんが、併し此等の婦人の多數が、青春時代の理想通りに果して一生涯獨身生活で押し通してゆくことが出來るでありましようか、又表面上は公然結婚せずとも、依然處女として純潔を保つてゆくことが出來るでしようか、甚だ疑はしき次第であります。斯く申せば現代の女性の方々は、實に婦人を侮蔑するも甚だしき無禮至極の言と御立腹になるかも知れませぬが、吾々共が世間の例を觀ると男子の輕薄放縱を罵り、女性の獨立の已むを得ざることを立派に公言した人が、中途より別人のように豹變して思ひも寄らぬ男に連れ添ふたり、或は女子の尊尙すべき貞操を汚して、墮落した者も決して尠少ではありません。私は嘗て島崎藤村の小說『老孃』といふのを『太陽』の紙上で讀んだことがありましたが、此小說は飽く迄獨立生活を主張した女性の學校敎師が、青春の時代を過ぎ去つて煩悶懊惱の人となつた揚句の果てに、或年壯の男子と通じて遂に私生兒を産み落とすに至つた墮落の經過を巧みに描寫したものでありました。私はこれを讀んだ當時、不圖心の中に浮んだのは私の家族の知人である或る女敎師であつたのです。此



人は某縣の女子師範學校出身の才媛で、二十歳前後の時分から教鞭を執り、品行も正しく、模範的女教師とまで郷黨の間に評せられた程で、殆ど十年間、立派に獨身で押し通して來ましたが、いかなる天魔の魅入つたものか、同じ學校の男教師、しかも妻子のある人と馴れ合つて遂に其情の種を宿し、之が爲め十三年間も勤めて居つた學校を退かねばならぬやうな悲慘の境遇に陷りました。これと事は違ひますけれども、私共の嘗て懇意にして居りました女醫某氏は、年齒僅かに十九歳で醫術開業試驗に及第した程の、怜悧なる婦人でありまして、周圍よりの誘惑壓迫に抵抗し、專心醫學の研究に從事して一生獨身で暮らすと公言してゐましたが、二十四五歳の頃になつてから、漸次當初の活氣が沮喪して、化粧三昧に浮身をやつすやうになり、突然、或青年醫士と結婚して仕舞ひました。私は此有爲なる女醫が、平素獨身主義を振りまわして居たのにも拘はらず、中途より豹變して婚嫁したのを見、滑稽に感じましたので、戯むれに其名前の一部を詠みこんだ和歌一首を作つて贈つたことがありました

尾花にはなびかぬものと思ひしに
なに亂れけむ露の玉萩

右申しました樣な實例は、世間に澤山あることゝ思ひます。實に女性の獨立純潔ほど當てにならぬものは在りません、現に近頃の新聞紙を讀みましても、女性教育家として江湖に名の知れてある某女史は、遂に平素主張せる獨身主義を實行し切れずして、四十路の阪を越えながら、己よりも年の若い弟のやうな法學士と結婚したといふではありませんか。

現代の女性は兎角言行の一致しない傾向があります嘗て男子を以て輕薄浮華の權化の如くに罵り、惡魔羅刹の如き動物とまで冷嘲したる女性が、青春時代を過ぎてからは遂に男子に白旗をかゝげて貞操を汚し、或は結婚するに至ることは、隨分尠くないやうに存じます、これは抑もいかなる原因事情に因るのでありませうか。

少しく述べてみませう。

△女子の獨立は破格なり

元來女性は其體質に於て、又た其の腦力に於て、決して男子と競爭し得べきものでなく、却て男子の庇護の下に始めて安全滿足の生活をなし得べきものであります。素より、女性の中にも男子と對抗し得らるほどの傑物もありますが、併し此樣な人は百人の女性中一人も見當らぬ程僅少で全然破格的のものと稱せねばなりません。私共より言はしむれば、つまり異型の女性で、一般の女性はドーしても、男子の庇護の下に立たねばならぬ自然の運命を持て生れたものであります。青春の血潮が全身の脈管に流漲してゐる時代では、



客氣に驅られて、ナミニ男子の厄介にならぬ、獨立してやつてみせると決心しても、生存競爭の劇烈なる社會に出でゝ、昔の青春の客氣衰ふるやうになつて參りますと、漸次生活の不安を感ずることゝなり、遂に不知不識の裡に軟化して、自己よりも有力なる男子に依賴するの已むを得ざるに至るのであります。これは女性が終身獨立生活を全ふすること能はざる原因の一に相違ありません、が、併しこの他に一の有力なる原因の存することを忘れてはなりませぬ。それは何であるかと申すに、性欲の關係で御座います、私は醫學者の立場として此點に就き特に詳細に述べてみたいと思ひます。

△女子の性欲は果して微弱なるか

抑も世間の人々は、女性は受動的であるから、從て性欲も男子に比して弱いものゝ如くに想ひ、容易に獨身生活を實行し得らるゝやうに考へてゐる。これは啻に世俗の人のみではなく、醫學者間に於ても、此樣な説を唱へてゐる者が尠くはありません、ヒユーミルブリンゲルの如き人は獨逸に於ける女性の大多數は、性欲の甚だ僅微なること、情交に冷淡なることを説て居ります、又た刑事人類學者として有名なるロンブロクも女子の愛は母たるの繼發的性質に因るものであつて、男子に結合せんと欲するの傾向は、つまり、適合に由て得たる服從の本能より發するものである、決して生殖的衝動より起るものでないと説き、フエーリングは年若き女性に於ては、男子に於けるが如く、性欲の強きものでない、若し妙齡の女性の愛情の中に、生殖的要求の發現して居つたとすれば、それは病的であるとまで論じて居ります。其他、ヘーガル、クラフトエビング、アドレル、リッツマン等の如き學者も、齊しく女子の性欲の男子に比して微弱なることを説て居ります。然しながら、此等の學者の所説は、主として妙齡の處女に於てのみ當て箝まるべきもので、既に青春の時代を過ぎ去つた女性には決して適しないのであります。

▲三十歳前後の女子の性欲

抑も女子の性欲と之に伴ふ生殖的要求は男子よりは遅く發起するもので、エルブの如き醫學者の説では、女子は二十歳の半頃から始めて身體的及び精神的に性欲の満足を要求し之に悩やむやうになると言ひ、ニストレームは女子は、三十歳近くになつて始めて生殖的需要を感ずるやうになると言ひ、ブホーレルは女子の性欲的満足の要求は、三四十歳の間に於て最も強烈なりと説き、ナピエは女子の生活中、特に須要なる時期は、二十八歳より三十歳の間である、それは此の年頃に至つて始めて生殖的満足を要求するやうになるからであると説き、エロウレースは多くの婦人は、三十三歳頃に至つて、生殖的欲望の刺戟强大となると記し、



アウヂップレーは女子は三十歳頃となつて身體精神共に完全の發育をなし、從て性欲必至の要求の起てくるものであると述べ、ダンカンは、三十歳より三十四歳の間に於て生殖的生活の頂點に達することを論じました。斯の如く女性に於て、其性欲及び生殖的興奮が男子よりも遲くして起る事實は、臨床上、二十五歳より三十三歳迄の間に於て神經精神病に罹る傾向の大なることに徵しても證することが出來るのであります

クラフトエビングの説では、未婚婦は二十五歳より三十歳の間に於て、屢々神經病性症狀を發するさうであります。勿論、男子に於ても二十五歳より三十歳位までの間には、精神病に罹ることも少なくありませぬが、ピトレ、レシー等の經驗に依りますと女子の方は遙かに男子よりも遲くれて、精神病にかゝることが多いといふことであります。

▲性欲禁制の危險

以上述べた所を總括してみますると、女子に於て其性欲及び生殖的衝動の強盛になるのは、先づ三十歳前後であります。世間の實例に徵しましても、一旦獨立獨身と覺悟を極めた婦人が或は其身を誤り或は結婚を思ひ立つやうになるのも、二十五六歳以後より三十歳位までの間に多いやうに見受けられます。ナピエル女子の生活中二十八歳より三十歳までの間が注意すべき時期であると申しましたのは、實に肯綮に中てゐるやうに思はれます。斯樣な次第であります故、餘程意志の強く、克己心の堅固なる人で無い以上は、性欲必至の要求に打ち克つこと能はずして遂に貞操を破り一生を誤るに至る恐れがあります。意志の薄弱なる女性が、強ひて其性欲を抑制し、獨身で押し通そうとするが如きは、身體上にも危險の結果を來たすことは、醫學上殆ど爭ふべからざる事實と言つてよろしい。

レーウエンフエルドは身心共に健全なる婦人は、男子よりも性欲の抑制に堪ゆることは出來るが、併し神經性の素質ある婦人に於ては、生殖的要求の不滿足なる爲めに屢々「ヒステリー」神經衰弱の性質を帶ぶる種々

の病的症狀を惹起すことありと說き、ヘーガルも亦た制欲の結果として、皮膚蒼白、體重減失、心臟障礙、不眠及び月經異常等の症狀を來たすことを言ひフロイド及び ガッテルは、女性の苦悶狀態は屢々制欲より起ると稱し、ハドレーは制欲は全身瘦削、貧血神經痛「ヒステリー」、月經不齊及び生殖器關の萎縮等を將來することを述べました。

▲二十五六歳以後の獨身難

是を要するに、社會上の關係は勿論、生理及び病理の方面より觀ても、女性が其一生涯を通じて、眞に純潔獨立の生活を遂げ得ることは甚だ困難であるのみならず更に危險の之に伴ふことは、明白なる事實であります。男子の方では、其性欲を他に漏らす方法手段が具てゐますから、獨身生活をなすに毫も差支へありませんが、貞淑純潔を其生命とする女性に在ては獨身生活は頗る危險性を帶びて居ります故、此點に就て大に熟慮せねばなりません。二十五六歳頃までは前申しました如き生理上の事實に由り、純潔なる獨身生活をなし得らるゝでしようけれども、それより以後は生殖的本能の漸次强烈となつて頭角を擡げ出し肉體と意識との兩方面に、多大の動搖を與ふるやうになりますから、意志の强い人でない限りは、遂に此の自然の本能の勢力に破られて、墮落の深淵に陷ることになります。ことに神經質性の女性に在ては、獨身生活は最も危險の極と申しても差支へはありません。

私は女性自活獨立其者を呪咀するものではありませんが、併し之に伴ふ所の危險と困難とを思ひかへすとどうしても結婚の已むを得ざることを認ると同時に、所謂自覺せりと稱する現代の女性方の反省を求めねばならぬ次第であります。

夜寒語

坂東太郎

△道幸春雨といへる長崎の人の求婚條件に曰く「二十才より四十才までの婦人にして、無限の財産あるもの、精神の快樂を主とし肉體の慾望なく終生同衾せざること、神佛に祈念せざること、結婚式は酒二合半干鯣二尾を以てすること」日本は廣いと言ふがまだ一人も申込をした者がないつて、先生大いに悲觀してゐる。畵かきだ。△八月の初め頃、萬朝に十七歳の少女が芝公園に出沒して美少年を漁るとあつた。戀々の情を訴ふれども知らぬ顔する男を村の鎭守へ引張つて行つて、言ふ通りになつてくれなきや喰殺すと脅して妥協させた女が大和にある。男の親がそれと知つて倅を疵物にされたとて火のやうに怒り出したが、結局どうしたか知らん△桑港郵便局長宛に、二錢切手を封入して、媒酌を頼み越した女あり、御地に住む老紳士にして親切に**正直に妾の夫となり妾に面白き事話し聞かせ**得る人あらばお知らせ下さるまじきや。アメリカのことだから局長先生叮嚀にやもめの年よりを紹介したであらう。日本であつたら回答の限りにあらずと來る△常陸の安寺持方といへば肥後の五個の莊、阿波の祖谷と等しく僻地として知られた久慈山中の部落である二ケ村共八戸つゝで家は合せて十六戸しか無い、一戸四組位の兄弟夫婦が同居して人口は昔からあまり增しもせぬ。結婚の時は三々九度の杯に代ふるに、親椀に盛つた山のやうな蒟蒻を喰べさせる。間違て一きれでも落せば花嫁だれ花聟だれ其場から追ひてくられる△米國には結婚を司る者牧師の外にマジストレートと呼ぶ役人がある。公證人のたぐひであらう、(と思ふ間違つたら切腹する)、ケンタッキーからインヂヤナへ來る界に陣取つて「ケンタッキーより來れる情郎情婦は此處より直に結婚界——夫婦州に入るを得べし」といふ看板を揭げた男がある、(州によつて法律を異にせる米國だから、ケンタッキーで年**齡未滿とか親が不承知とかの故障があつても**インヂヤナ州なら差支の無いのがある。だから駈落をするのだ)、大いに成功して千組ばかり夫婦を作つた。一件四十仙より百弗までの

手數料を取つた。△見合も濟みていよく式を擧ぐるばかりに日の迫つた大事の娘が突然行方不明になつた驚いたなぞところか一家手を盡して八方を探してゐると、一日十餘里ほど隔たれる聟の家より使が來た、娘御には四五日前お獨にて參られ、此方にて何なりと仕事のお手傳を致すべしと申出有之、新夫婦中よく機など織りて暮し居候珍重の儀に奉存候。これも岐阜の事。琵琶の姫立歸り、さし足してね



姿の、後に立ちてつくぐと見れば見るほどよい男、晩までは待たれぬと言つた「雪女五枚羽子板」の前例もあるから、紫痴天は何と言はうとかまはぬ筈だ△婚約の男の土地を去つて遠のいたのを怒つて、法庭に訴へ囹圄の中に囚へしめたアメリカの女、もとく戀しいから起つたのだから早速監獄へ尋ねて行つて獄吏の立合でめでたく式を擧げた。死刑囚の絞臺に送らるる時、結婚した女もあるし、アメリカ

には種々な人間が居る▲大分縣の方を度々書くから怒られるかとも思ふ。罪亡しに一つ男のことを書く。大分縣宇佐郡天津村宮熊に阿呆な男がゐた、村方で度々芝居を行らうとしてはいつもおヂヤンになるので、ヘン宮熊に芝居が立つたら、おらアが頭で地べたへ三尺の穴を掘つて見せるがなと嘲つた。山の芋を手掘にするといふにしてからが覺えがある、燈心で筍を掘るよりも六かしい話だから村中承知せず、めい〳〵借金を質に置て芝居を行て退け、其男にさア掘れと言つたらウン掘るとも、男子の一言金鐵の如しだと、それから二日といふもの頭をさかさに地中にさしこんで錐を揉むように動かしては、掘つては土をずらし、掘つては土をずらし、終に三尺に達した。頭は掃き古した竹箒よりもひどくなつて、毛なんか一本も殘らなかつた。▲蘇格蘭のある村で姉妹の娘が行方不明になつた、村中出て山の中を探しまはつたが見つからず、一同がつかりして歸つた晩、スコツトといふ男の夢に、或る森の岩かげに二人が睡つてたので、單身起き出して探し探し其森へ入つて行つたら、夢に見た巖窟の穴に重なり合つて眠つてゐた。▲夫の亡きがらを木乃伊にして隧道に斂め厚ガラスを掛めた上に大きな石を置き、石を廻轉すればガラス現はれて中をうかがひ得るやうに造りたる夫人米國にあり。戀々慕々の心こひねがはくば三天二地に盡きざれ▲常陸の下妻在よこね村の横瀬藤太といふ準訓導の奥さま、夫が夏季講習會に出ての留守中、多賓院の盆踊に出て歌つて曰く、「下妻在郷にやゐたくはないが可愛いトンダ樣のある故に」郷黨傳へて以て名歌となし、聲を揃へて歌ひ囃した、トンダ先生歸來かくと聞いて威嚴を害ねること甚しいといふので離縁された。さすがに夜雨の生れた所だけある内々でも一つ素破抜く、同じ先生の村におづウと呼ばるる女がある、姓はこれも横瀬だ、親類に不幸があつて友達の一調羅を借出し、風呂敷に包んで斜に背負ひ繪日傘の紅いのをさして鬼奴川の土手を通る頃WCに行きたくなつて繪日傘をかついだなり後向に川へ。「京阪美人流」を行らうとしたら、ずる〳〵と風呂敷が解けて、糸織、斜子、何とかいつた立派な着物は川へ落ちて了つた。「いばらき」記者嘆じて曰く、「モ少しでかつぱに引込まれる所だつたらう、萬龍を生める常陸の國の面よごしになる、姉えやしつかりしねえ」

草を敷きて

夢殿守

それは鐵路を敷く爲であつた——。

廣原に、楢や、櫟や、松や、いろ〳〵の木々がまばらに、春は柔い芽をふいて、新しい、枝をのばし……其緑が一日〳〵深く成つて、それ等の木々に蟬が鳴く樣になり、葉裏の蟲が氣味わるく、然し微妙に美しく成長く成つて夏が來る、やがて風に動くと、烈しく木の葉は黃ばんだ色に落される、秋となり、間もなく散るものは散りつくして、骨ばつた木々に冷い沈んだ淋しい色が漂ふ冬となる。かうして一年を一年と繰りかへして來た、まだ開け切らぬ東京の郊外の一部——其地面——を草が靑く萌えて、丈がのびて、枯れてゆく——そこを通るものは、時折人の緩い足音と、犬のあはたゞしい、おどけた樣な足音位が、何氣なく過ぎて行つたのみであつた。其地面に——

鐵路を敷く爲に新に鶴角を入れて、切り崩された傾斜の斷崖……そこの土、それはいつの世からか莊嚴な愛と自由の、暖い太陽に觸れるともなしに、唯眠つて居つた土が、パツと明るい世に曝されて、かたまらぬ其面の土の小さい塊がホロ〳〵と上から下へ絕えずこぼれた。

一日、二日、三日……やがてそこに名も知らぬ草がまばらに萌えた、或る草は危い斷崖の危い中腹に、冷い雨にも荒い風にも、亦暖い太陽にも、一番打たれ易く觸れ易い明るい、はた恐ろしい處に。或る草は其最も下の、やゝ窪みの雨も風も然迄には當てず、そ—て太陽の光線は其上を薄くかげつてゆく薄い運命に。或る草は崖の上方に雨と風と太陽とを程よく受けて靜かな、日を續けつゝ……。

今、斷崖に立つた自分の姿は、細く長く彼方にのびて風がひや〳〵と細い袷のふきを斜に吹いて、わが裾に物なつかしい、秋の心をかすかながら殘して去つた—あゝ其私よ、私の心に浮ぶ我が友よ……ぽち、ぽちに新らしく切り開かれた醒された世に、いち早く生ひ出でた我よ、我が友の五六人よ——。

あゝ、もつと〳〵深くよく自分を知りたい、これが今自分に一番切ない、一番賴もしい我が願ひである。新らしい家に入つた事が、人はどんなに、私に取つ

て變つた事の樣に見るであらう。然し私の此心は、昨日も今日も同じ廣いはてしのない、不思議な苦しい生命の道をよぎつて居るのみである。

家てふものに入つた私を、特別に觀て、家から受ける、夫から受ける、兒から受ける、痛い罠と苦い涙とを笑ふ人は私を知らない人、私は之等のものを始めから知つて居る。そうしてこれは我が過ぎてゆく生命の道の一鎖であるものを……。

唯口惜いのは曾て知らなかつた、柔い、甘い「あはれみ」てふものに卷かれて、弱い小さい此心が、溺れてはゆく、其愚かさ我が性に根ざした我が深い悲しみである。

同じく家に入つた友、さては我が一年の過去の苦しさを今蹈んで居る同郷の友、それ〴〵性は異つても、曳かれてゆく生命の道は、略同じ樣に續いて居やう……それにしても今は久しく相見ない、「彼の友」よ、彼の友にも、私にふれては過ぎて行つた一日〳〵は同じくふれては過ぎて行つたが、それをどう胸に殘して來たどろうか、ふと此間去る友からの手紙のなかにこんな文句の有つたのが胸に浮んだ。

先達つて日本橋まで買物に行つた歸り、銀座で乘り換へた時に、ひよつこり○○さんが這入つて來ましたのよ。仕事からの歸りらしかつた。からあの人の顏にも白粉のはげたあとが。かすかに見えたのを見たが何となく物わびしい樣な氣がしました。「まだお飽に成りませんか」つて聞いたら「えゝちつとも」つて笑つてました……」

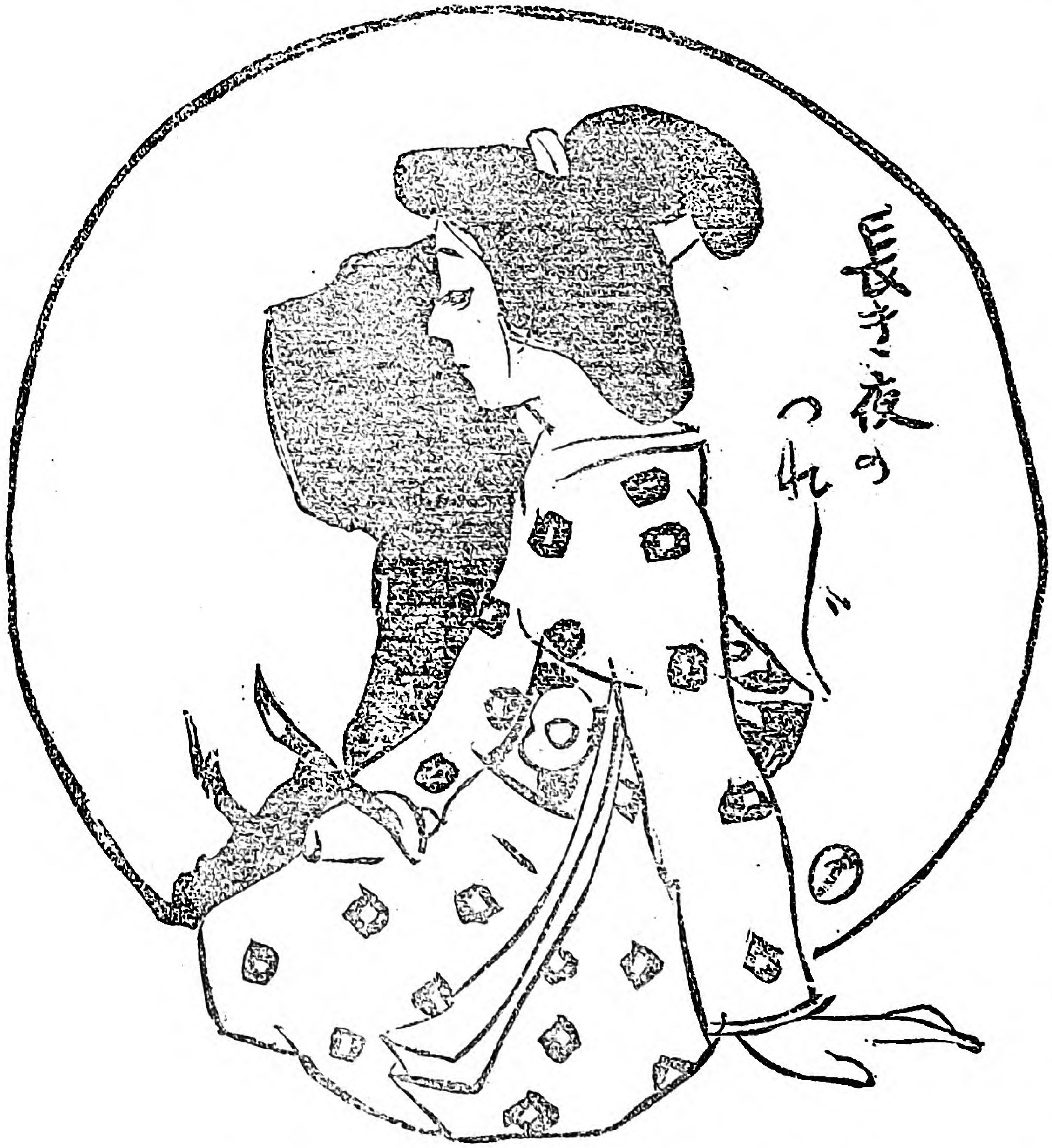
私は讀んでゆくうちに彼の友の其笑顏と、其笑つた心とがパッと心に寫つたのであつた。……そして其人の名が又新らしく胸に生きた――それは曾てゞあつた此手紙を書いた友と、郊外の小さい家に住んで居つた時であつた。彼の友が、はる〴〵と遠くから遊びに來ての歸るさ、散步がてら送りにとて三人連れだつて夕近い野の家を出た。廣い石ころの道が、泥つぽい草の細道と二筋道の分れ目で、小がらな其友は小刻みな足あとを殘して別れてゆく……其肩のあたりから帶のあたり。何とはなく張りつめた。けれど何處か物わびしい後姿を見送つて、何とはなしに薄い運命の人よと語つた。そうして何とはなしに自分等のせめてもの幸福が浮んで來た、然し「彼の友」は「夢さんの樣に烈しい變動やうをしたら、私はどんなに不幸だつたでせう」と去る人に語つたといふ。私は此頃幸福とか不幸とか

か、それは名々の小さい心の自惚で、兒のだまされてゆく飴菓子の類のやうに考へられて來た。

唯、新たに切り開かれた女てふ名の時代の上に、いち早く生えさせられた我と、これらの我が友よ——私は之等の人々が皆戀しくなつかしくなつた。

私だちは幸福とか不幸とか、そんな小さい事を感じて居る時ではなかつた。それよりももつと深く「女」の根ざしを強くして行かねばならなかつた、もつと自分を知る事に勵まなければならなかつた……。

太陽が西に低く成つ



た、どこかで蟲が鳴き出した、冷い風が吹いて行つた延びるだけ延びた路傍の雜草は、花とも實とも分らぬものをつけて、葉がかさ／＼と乾いて、黃ろくなつたのも交つてゐる露が降りると冷たからう、雨に濡れると痛むであらうもう日が落ちる。傾斜の斷崖の草や土ところに、其上に立つた私に、上にも下にも、今暮れゆかうとする秋てふもの丶一日の名殘がかすれた。

（ふと郊外に出し或る日）

別れた人へ

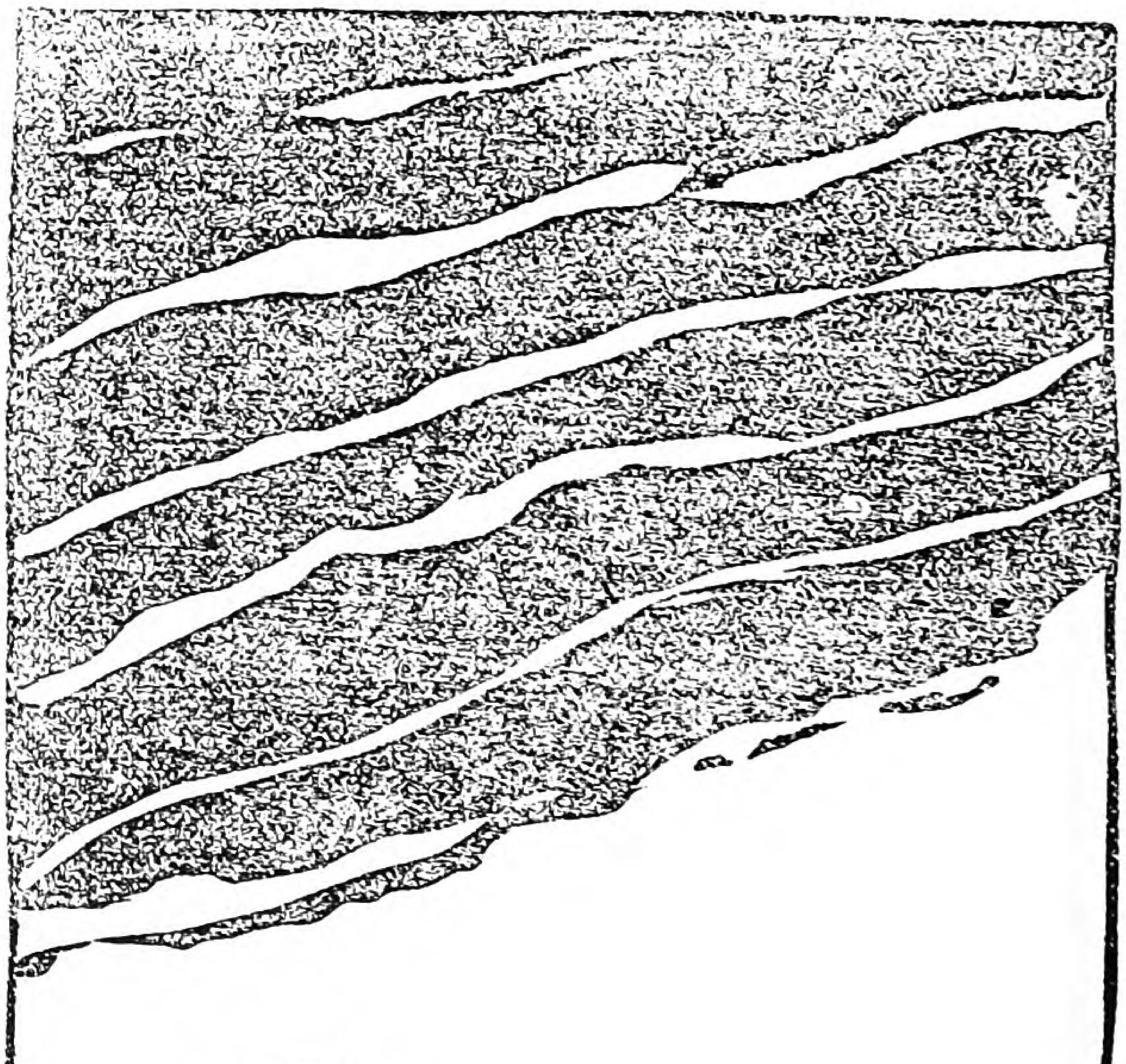
野ばら

あゝ何て書いたらよかろう……私はもう、あなたがこひしいとも、なつかしいとも……本當に何てかいたらいゝでせう……。

まへの晩あなたが、此の下駄も好きだつたが、此頃前の緒が、ゆるんで了た故、はきにくゝて困ると、云ふから、あの下駄屋のは、皆そうよ、私のもと、云ひかけると、そんな誰れの前でも平氣で出來る咄しは、やめて。二人でなければ出來ぬ事を咄しませう……と云て、それから二人には、なつかしい物語りを、皆が歸て來る迄つゞけてゐましたつけが、あの時何故、あした別れると云ふ事の悲しさを、もつと強く思て、泣き合ておかなかつたでせうと私は今思はずにはゐられません。それでも、あなたが熱心に、さま〴〵な思ひを囁いて下さる時、私はふと別れねばならぬ時の直ぐそこに迫てゐる事が、チラ〳〵眼の前へ浮と妙に心が悄然て、滅入て、泪ぐみたい程の離愁におそはれ、何か今の中別れらしい、印象させる樣な事が云て見たいと、そして時々窃と、あなたのお顔を、見つめました「何んな氣がしてゐて?」と私が、あの時きいたら、「何んな氣もしてゐない、何だか只夢の樣……」とあなたが力のない淋しい調子で云たのをよく覺えてゐます「私も夢の樣……」と云ふと、「これからする事も、何もかも、死ぬ迄が夢かもしれない、こうやつて二人で咄してゐるのも夢だし……」「けれどこれからの夢は、泣く夢だわ……あなたのは知らないけれど……」と思ひもせぬ事を云ておいて、あなたが氣を惡くしはせぬかと心配したり……あゝ今から思ふと、三日まへのあの晩の事がもう〳〵取り返しのつかぬ、遠い〳〵昔になつて了た樣で、思へば〳〵淋しさに泣かれもします

朝になつて、あなたが床を、たゝみ乍ら、このふとんも長く着たけれど、もう、着ないのだから一番下へ仕舞ひませうと云た時にも何となく、うら悲しい氣がして泪ぐんでゐたら、あなたが、青い蚊帳をたゝみ乍ら、「今朝の風は、すつかり秋らしくなつたね。これからおい〳〵こう云ふけしきが、つゞいて、物が思はれる事でせう別れてゐたらなほの事……」「淋しいわね秋は」「淋しいよ……」と、けれど其時は、何故か、それ

程烈しく悲しいとも思ひませんでしたわ……そして、案外泣かずに別れる事が出來る樣な氣がして、それが皆に對して、何故と云ふわけもない、誇の樣に思つてゐましたつけ……けれどいよ〱家を離れる時に、あゝやつぱり、あなたは泣いたわね……私も涙がふいてもふいても堪らなく悲しかつたわ……何か云はう〱と思つてあなたの傍へよつても、胸が一杯で口もきけませんでした。あゝ私は何故其前の晩迄も其朝迄も、其時の悲しさを思つて泣いてゐなかつたら……其時二人きりなら、思ひきり別れをおしまふもの……泣かうものを……あゝさうして、私は、手を握らず、顔もみつめず、別れらしい言葉も交はさず、そむいて泣いて只泣いて、あなたは行つて了つた。私は、何う考へても、あなたと、さうして別れて了ふなんて事が眞實だと思つても、何となく、ウソの樣な氣がしてならなかつたけれど、とう〱あなたは私の家の人ではなくなつたはね。あゝ、さうして別れねばなら





ない、あなたとは、すつかり別れて仕舞ひました。

あとで一人でさめ〴〵泣いて、氣が遠くなつた樣ながつかりした樣な、人と物言ふも、書物よむも、いやな樣な、つかれてゐる故少し眠らうと枕を出して橫にはなつても、眼丈けは、ねむくてならぬくせに、少しもねられず、妹に誘れて、夕方お湯へ行き、Ｈ伯母に逢て仕舞ひ、何だか間が惡るかつたわ……人の顔を見てゐる樣で……にこ〳〵笑てはゐましたけれど……。

何を今頃してゐるだらう——皆にとりまかれて、私の事抔忘れてゐるかもしれない。と暗くなつてからいつもの門口へ立て考へてゐると。例の樣にあなたが臺所から。きたない藤表の下駄を、音せぬ樣に、出て來て窃と私の後ろへ立て、何とか囁く樣な氣がしてふと又思ふと、私の今とは全く反對な、華やかな氣がしてゐるのかもしれないとも思ふ……。あまりに淋しい故日記でも繰て見樣と思て、二人のであつた、あの本箱から、去年のも、おとゝしのも、其まへのも、出して九月になると同じ日を何うして暮らしたらうと、繰て見たりしてあの夜は過ごして了ひました。

ですがこんな、淋しい悲しい心が、この先き何處迄つゞくのでせう……私は堪りません……私は本當に、無暗に、あなたがなつかしうござんす——。私はそんな事を云ふのは嫌ひですが、あなたと別れてゐるのは何より淋しく辛うござんす。それ故、こんな事をあなたへと云ふわけでもなく只書いてしまいました。一緒にゐる時あなたはよく、私の事をば、我儘だ〳〵と云はれましたが、本當に私は、誰れに對しても、我儘でした。けれどおわかれしてから、私があなたを何位思つてゐたかゞ、自分でもよくわかりました。あゝ私は何うしたらよからうと思ふ程、淋しく、あなたと一緒の頃がなつかしい……あの頃の生活は、何と今云たとて、とり返しのつかぬ、遠い昔の夢の樣な氣がします



平安朝時代の宮廷婦人

眞山青果

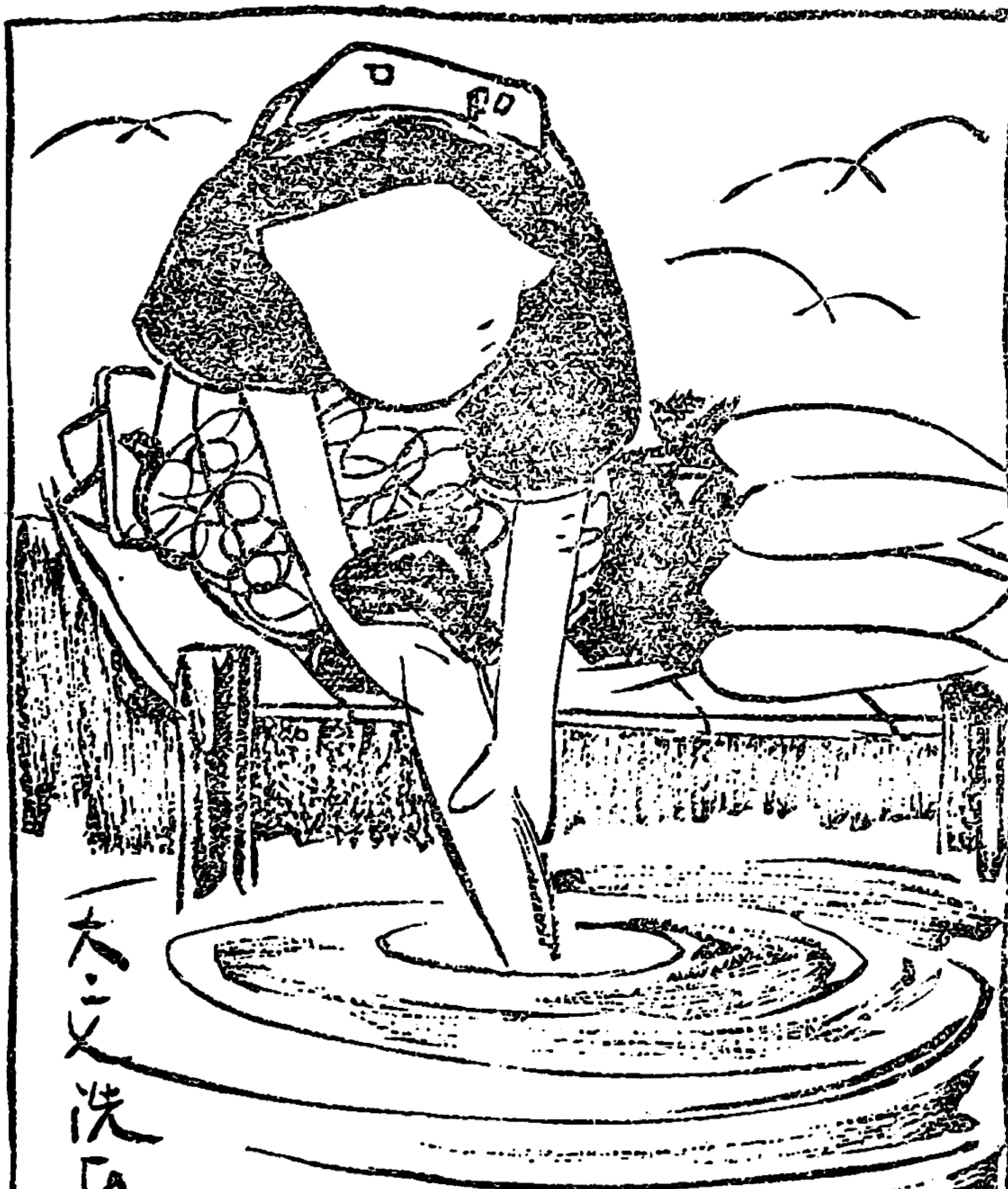
清涼殿の東北を隔つる御障子には、荒海の繪に副へて怖しき手長足長の像を描いてあつた。上の御局の戸を明けると、それが眞直に見えるので、皆常に憎み笑ひして居た。その高欄の下に青磁の大瓶を据え、咲亂れた櫻の花を、五尺ほどの大枝のまゝギッシリ挿し立てたので、花は高欄のもとまではびこり咲こぼれて居た。或る日の晝頃、大納言殿が伺候あつた。シットリした櫻の直衣に、濃い紫の指貫、白を重ねた襟袖から濃紫の綾絹の出衣を見せて居られた。主上も御局の方に御坐あるので、戸口の前なる敷縁に踞つて物など奏上して居た。御簾のうちには女房だち、櫻の唐衣をユッタリ脱き垂れて、藤、山吹など何れも好み〳〵に着飾つた裝束を小半蔀の御簾の間からこぼれ出て居た。晝御坐の方からは御膳用意の足音が高かく響いて來た。そして、おし〳〵と警蹕する藏人の聲も聞える。うら〳〵と煙るやうな春の日の中を、終の御盤を持つた藏人が參つて、用意を奏上すると、主上には中の戸から出御あつて、その方へ渡らせられた。御供に大納言殿立ち、やがて、間もなくその花の下に戻つて來られた。

中宮は几帳を押遣り、兄君に近かく長押の下へとお立ちになつた、そのあてやかに高々しさ、侍候する人々でさへウットリするやうなのに、『月も日も替り行けども久にふる三室の山の』。と聲緩やかに大納言殿の詠み出されたる聲の朗らかさ、全く、千年も斯う拜したいお姿である。

晝御坐の方からは陪膳する女官の、藏人を召す聲が聞えた。間もなく、主上はもとの坐にお戻んあつた。そして、御硯の墨を擦れとあるが、唯ウツトリと御坐の方に眸を吸はれて、自分を忘れて居た。白き色紙を疊み重ねて、『これに卽興の故事を一つ宛書け。』と御仰言であつた。外に居る大納言殿に、『それでも、何を。』と相談すると『早くお書きなさい男が口を出す所ではない。』と云つて、御硯を下して來て突付けながら、『早く〱、餘り考へずに、難波津でも何んでも偶と思ひ付きのまゝに。』と責め立てる、我ながら何に臆したか、思亂れて顔が熱くなるやうであつた。春の歌、花の心、然う云ひながらも上﨟だち銘々の思ひ付きを二ッ三ッ書ならべた後私にもとある。

年經れば齢は老
いぬしかはあれ
と花をし見れば
物思もなし

この歌の下を、『君をし見れば。』と書直して差上げると、『この當意の心掛けがゆかしい。』とお賞めにあづかつた。



その序、中宮のお話に、昔、圓融院の時、矢張り御前にて、『草紙に歌一つゞつ書け。』と並居る殿上人に仰あつた事がある。何れも當惑して、辭退する人達さへあつた。『何も手跡の善惡、歌の時に合ふ合はぬを問はぬ。』と押しての仰に、已むを得ず皆書下した中に、今の關白殿（道隆即ち中宮の父）が未だ三位の中將で居られて、

しほのみついづもの浦のいつも〳〵君をば深かく
思ふはや我が

と云ふ歌の末を『たのむはや我が。』と書いて、甚しき面目を得た事がある。その事を引出して仰せられるのに、汗が流れた。斯う云ふ事は、例令思付いても若かい人達には出來ない事である。例は好く書く人でも、譯もなく畏縮して、書き損じたりした人もあつた

これに似た事に、中宮は時々古今集などを前に置かせられ、歌の上句を讀まれて、『この下句は何う。』と聞かれても、晝夜心に掛けて暗誦して居る人々でさへ急には思出せず、申し出せない事の多いは何う云ふものであらう。宰相の君が僅かに十ばかり知つて居た。それとて知つてるとも云ふ程の事か。況して五ッ六ッなぞなら、却つて存じませぬと云つた方が好い位のものだ。『然うッケ〳〵と、折角の仰事に、無愛措にも出來まいし。』など云つて口惜しがつてるのも可笑しい知る人がないと決つて詠み續けあそばすのを聞いて初めて、『あゝあれなら皆知つてたのだ、何故斯う馬鹿なのだらう。』と云ひ慨いて居る者もある。古今集を度度書寫したりした人は、覺えて居なければならぬことである。

村上帝の御時、宣耀殿の女殿と呼ばれた方に、小一條の左大臣（師尹）の御娘ゆゑ、誰とて知り聞かぬ筈はない。まだ姫君にてお在りの時、父左大臣のかね〴〵の教訓として、『第一には手習をなさい。次にはきんの琴を、他に負けずに彈きたいと思召せ。それからが古今集の歌二十卷、これを暗で詠まれるやうになるのを學問となさい。』と敎へ置かれた事を聞かせられ、或る日、丁度お物忌の日、古今集を懷にかくして女御の

方へお渡りなつた。いつもとは違つて、間に几帳を遮られたる御樣子、女御怪しく思召してお出あると、やがてその古今集を取り擴げ、『何の年、何の月、何のをり何人の詠んだ歌はいかに。』と仰ある。偖ては斯うと可笑しく思はれながらも、萬一ウロ覺え、又忘れたのがあつたりしては大變の事と、女御にしても氣が氣ではない。すると、斯道に堪能の人二三人をお召出しになり、碁石を持出して、數取りの御用意、今推測しても趣味ある面白い事である。御前に伺侯した人々まで羨しいやうな氣がする。やがて主上には押懸けてお問ひになるが、尤も末まではないが、一つとして間違つた所はなかつた。

主上の心では、何うなりして少しの覺え違ひ、間違いを見付けて止さうと、口惜しく思召してる、十卷になつた、『何んにもならなかつた。』とて、そのまゝ歌集の上に夾算して、やがて寢殿へ入られたのもいかにも面白い話である。やがて久しく間を置いて起上られたが、この對決を付けずに終るのも殘念、又明日に伸さばその間に異本を見合せられぬとも限らぬとあつて、餘り十卷も今宵のうちに決定しやうと、燈火を近近と呼び、その夜深くるまで讀合されて。それでも遂に敗北はなされずに濟んだ。

翌朝、主上入御の後、人々此の事を父君大臣に聞かせると、急に思ひ騷ぎて諸寺に報賽の誦經あり、宣耀殿の方を伏し拜んで居られたと云ふ、奇特にも尊敬すべき話など中宮の御物語であつた。

主上も深かく感嘆ありて、『それにしても、好く讀んだものだ、朕ならば三卷や四卷でも讀み終せまい。』と、仰事ある。『全く昔の人は、然もない人まで風雅の心掛けあつた。今時斯う云ふ話は聞かれもしない。』と、お傍の女房初め、主上の女房にて此方へ出入をゆるされた人々まで一緒になつて感伏の聲を合はせたのは、全く心の軟かい事である。

私は日本の女性史を繰返して見て、何時も此の平安朝時代の婦人に憧憬をもつ。こゝに譯出した一節はか

の淸少納言の隨筆のうちの一節である。『家』はと云ふ題の一部である。極めて短かい描寫ながらも、當時の宮廷生活の一斑を窺ひ知る事が出來やうと思ふ。勿論これが同草紙のうちの勝れた描寫と云ふのではない。

總ゆる時代を通じて、日本の女性には一種淡々しい悲哀の半面が貫き見られて居る。特にこの平安朝後期の女性達の夢の如き悲しみよ、渠等は或る時代文明の末期に必ず來る、頽廢の悲しみの中に身を沈められてゐる。渠等は殆んど終日晝寢て、冬の長き夜を歌がたりに明した人達である。渠等の疲れた目は物の生色を見るに耐がたくて、色目の重ね色の中に顯證を避けた人達である。渠等の宗敎は魂の生きた要求でなく、形型の死んだ欲求であつた。渠等は迷信を迷信として、信じもせぬながら、又疑ふやうな事はしなかつた。顏の美醜を男に見せる事よりも、その顏を隱す髮の毛の美醜に心を碎いた人達である。渠等は營養は爲めよりも趣味の爲めに、好んで不消化な東海女王、ホヤ、烏賊、茸類を食つた人達である。善惡の判斷より前にゆかしきゆかしからぬの判斷に心を苦しめた、夫ある身も尙ほ云ひ寄る人に耻を與へまいとした人達である。

嗚呼、滅亡の前の文明の人よ。婦人達よ。私等は其處に何んとも云はれぬ悲哀の美しさを見出す。例へば奈良朝末期の婦人にも、この平安朝の婦人にも、又元祿、又江戸文明末期の婦人にも、美しき人達は美しさの中に滅びて行つた。

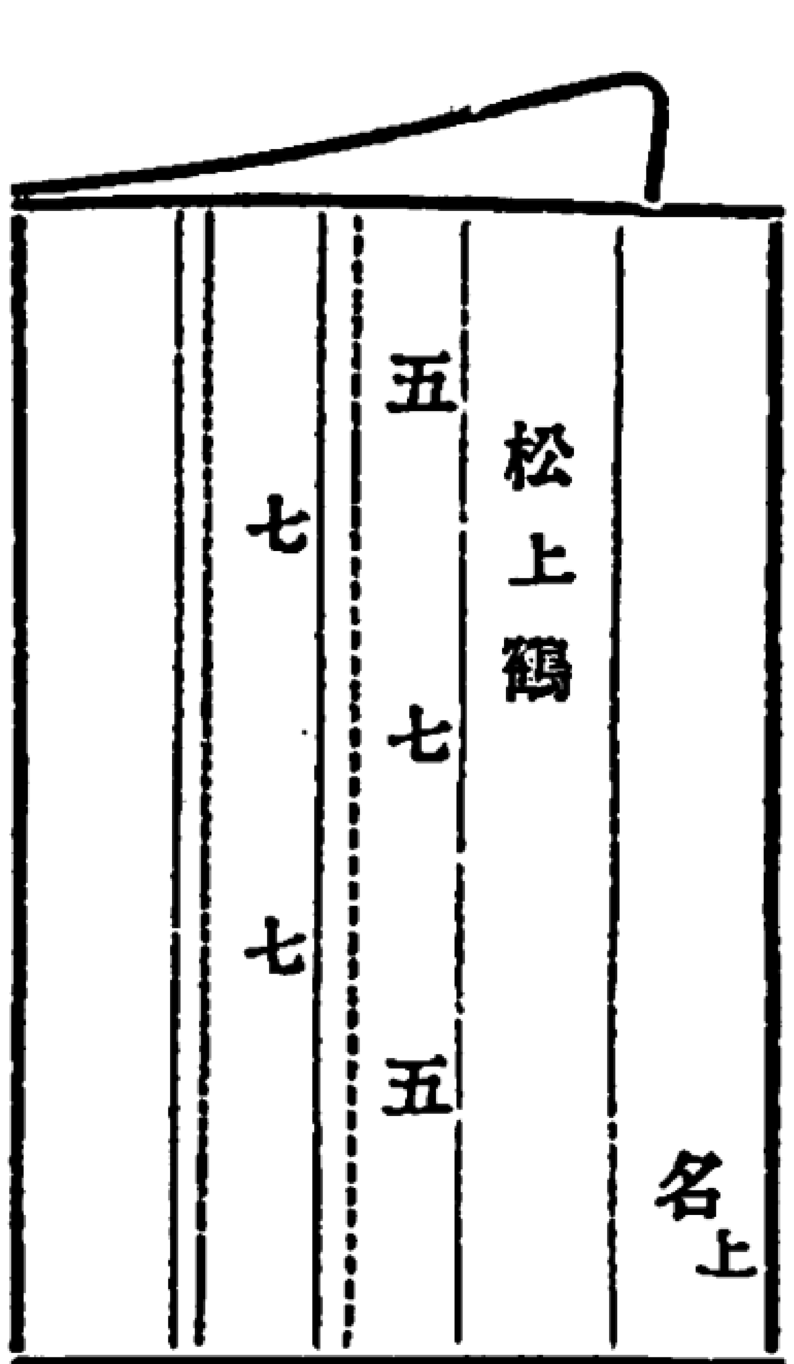
新年勅題は『松上鶴』

明治四十五年新年の勅題は、愈よ松上鶴と仰出されたり、詠進書式等は左の通り。

一、料紙は奉書杉原紙又は美濃紙を用ふ
一、詠進歌は明治四十五年一月十日迄に宮内省御歌所へ差出すべし

詠進書式

竪詠草（五ッ折）



裏面書式

某府縣下某國某市郡某町村住華士族平民
苗字名

官位勳功爵を有する者は苗字の上に記載すべし

大和路の秋

澤村胡夷

坂に沿うて兩側にずうつと宿屋が立ならんでゐた。

初瀬の町は宿屋の町である。白い路の兩脇から白粉の女が黄色な聲を起續けに浴せかけてゐる。お憩みなさい！お荷物は此處におあづかり致します！

こんな騷がしい坂路の家に沿うて行くと、石階の廊下の前にやつて來るのである。左右の園には骨だけ殘つた幾株かの牡丹が秋の日に曝されてゐた。唯石階の廊下が右に折れ、左に曲り、本堂までずんずん高く導きてゐるのが如何にも氣持がよかつた。廊下の中央には大きな金燈籠がぶらさがつてゐた。その朧ろげな燈光が牡丹の大輪に映る頃にはこの廊下の石も白や赤のほとびたやうな光を流すであらうが、僕が拾讀みをして行く足の下には、唯こつこつと寒さうに石が響いてゐるのみであつた。

言ふのを忘れてゐたが、僕は日の高いうちに初瀬から四里ほど更に山を分けて行かねばならぬのだつたから、大急ぎで長谷寺を下つて、榛原まで二里ほどの道を一息にやつて來た、榛原から流に沿うて高井までは山の裾を縫ふて行くのである。高井から山道にとりかゝつて、室生の山深く分入る事となるのであるが、其路の惡い事は論外である。坂路の凹凸が烈しく、堅い石で足のうらから頭の頂邊まで響きわたるやうであつた、細い坂の左右には高い山が壓迫を加へるやうに聳えてゐる。何程進んでも山である。唯その山の中腹にちらほら家の散ばつてゐるのが見えた、けれども聲をかけても鳥渡達きさうにも想はれなかつた。然しその

山道を何處までゞも行くのだと榛原で敎はつて來たのである。
同じ路を一足さきに女が二人上つて行つた。土地の樣子を知つてゐるらしかつたから、確に此道を上つて行けば室生へ行けるだらうかと尋ねた。すると、然だと敎へて呉れた。聞けば二人とも室生の女だと云ふ。赤埴まで一所に參りませうと云つた。こんな坂道にまだ人家があるのかと尋ねると、赤埴と云ふのは村落であると敎へて



呉れた。無論其處此處に一軒二軒と離ればなれになつてゐるのださうな。女は赤埴から炭俵を荷ふて高井まで日のうちに最一遍ひきかへすと云つてゐた。隨分重いだらうと云つたら、若い方の女が、本統につらうおまつせと、情なさうに澁面を作つて云つた。年寄の女は大阪に居たけれども、此方の仕事の方が氣樂だからもう大阪へは出ませぬと云つてゐた。若い女は默つて了つたが、僕は何方へも軍配團扇をあげかねて、兩側の山を望みな

がら二人の後からとぼとぼと上つて行つた。その中に辻堂の處へ出た、年寄の女は此處で一服してから上つて行くが可い二人は此處から引返すのだと云つた。僕は其處で休みながら二人に路を充分教はつた。此處からまだ一里險しい山道が續くのだと云ふ。

二人に別れて礫の多い、狹い山道をずんずん奥へ奥へと進んで行つた。路傍にはぐみの實が房のやうに赤く成つてゐた。柴栗は數知れず狹い路の小石の蔭にころがつてゐた。

僕は何時の間にか、溪川の激しい流のところへやつて來てゐた。兩側には雜樹が思ひの儘繁つてその一方の下を盛んな響を立てゝ水が泡立つてゐたのである。この流を幾度とはなしに飛石傳ひに横ぎらねばならなかつた。岩の上で一二度青苔に足を辷らしたけれども溪へ落ちるには及ばなかつた。山のなかは日が早く暮れると云ふ。こんな山道で日が暮れてはと思ひながら次第に樹立の小暗き路を下つて行つた。人には片破にも會はなかつた。唯水の流のみは激しく響いてゐた。

樹立の暗い路を過ぎて礫路を下つて行くうちに、急に明くなつて、からりと晴渡つたやうな溪の窪地を見下す山の一角へ出て來た。人家が窪地にあちら此方と散ばつてゐたが……正しく是が室生であると知つた。こんな僻地にしては餘に立派な赤門が山の秋の光に吸ひこまれもせずに瞭然現はれてゐたからである。僕は大急ぎで石路を下つたけれども、路は急に寺の前まで僕の體を運ぶことを許さなかつた。近寄るかと思へば直に脇へ反れて行くのであつた。室生の村も赤埴などと同じく山地に作られたのだから、飛びとびに溪間に其屋根を露はしてゐるのである。その離ればなれの家々を道が縫ふてゐるのであるから、中々寺の前には出て來られなかつたのだ。

僕は無事に室生寺へ着いて客間の人となつた。午後の日は山へ落ちかゝつてゐる。山には杉の樹立が恐しい程すくすく起繁つてゐる。その樹立を背負うて幾百年前から古い建物が動かぬその姿を現はしてゐるのである、谷のどん底にある伽藍の冷氣！

裾野日記（上）

佐野天聲

△紫蟹肥ゆる時晩稻香ばしく、黄鷄啄むところ秋風早しといふ誰れやらの詩を憶出す頃となつた。百日紅も散つたる、カンナも末枯れたしベコニヤも色が褪めたし、廢園の風物轉た凄涼、僅かに芙蓉の暮天に奢るあり、以て人意を强うするに足る。

△秋の草花の中、私は萩と芒と金線草とが好きだ。野菊、紫苑、桔梗、敗醬、秋海棠いづれも、私の趣味にあはない。但し、鷄頭だけは、配合さへ好ければ萬更捨てたものでも無い、茅葺の百姓家に桔槹などを添へたら見られる、野味を帶びた花だ。

△此春根分した白萩が三株程花を持つた。どす黑い庭の上を日毎に白く染める。新しく莟の破れた花は青味があるが、散つた花は雪の樣だ。手に取つて比較べて見ると、別に變りは無い。唯其花の身を委ねた葉と土との色に比べて視覺が左樣騙されたのらしい。風につれてはら〱と散るたびに生る花色の變化は、自然の外の自然の現象である。

△家内が慢性腎臟炎に罹つたので、治療のため上京して五十日ばかり留守をした。留守中小作頭の老人が前栽を深切に掃除して呉れた。歸つて見ると家内が女學生時代に友人から分讓て貰つた香菫の一株が無くなつてゐる。老人に聞くと草だと思つて掘捨てたとの事。移轉好の私に隨いて此花も六度程居所を變へた。而して故鄕の庭に根を据ゑたと思へば此通り、お百姓の眼中、香菫も普通の菫も三色菫も無い、玉石倶に焚く、可憐矣。

△東洋流の詩的趣味には大抵不滿足若しくは足らぬがちといふ樣な意味の感じを伴ふ樣だ。所が文明の利器(即ち科學上の産物)は概此感じを否定する。随つて東洋流の詩的趣味を破壞し沒却す。一寸した話が、燒栗爐中宿火無く、讀書窓下殘燈ありといふ詩の言葉を直ちに今の文士諸君(殊に萬年筆を持たれる文士諸君)の日常生活に當箝めて見たまへ、臺所の瓦斯七厘や書齋のあじろ火鉢では爐中宿火の趣無く、電燈や瓦斯燈では窓下殘燈の味無し、之はほんの一例に過ぎぬが這樣例は幾らもあらう。

△遠州の田舍に居る取つて十一の從第が、兄貴の眞似をして發句を詠んだといふから、其れは妙だ聞かせろと言つたらはにかみもせず取澄ました顏で、『がいる鳴き、へいび飛込む水の音』がいるは蛙、へいびば蛇共に遠州地方の方言である。

△私は生れてから洋服を着た事が無い、靴を穿いた事が無い、シャツも十二三歳位まで着なかつた、身體さへ健慷なら今も着たく無いと思ふ。ゆつたりした日本風の襦袢の方が着心地がよい、ズボン下は十四五から廿一二位まで冬の眞盛りだけ穿いたが、其以後は何うしても穿く氣にならぬから今は何樣寒い時でも穿かずにゐる。癖は付け樣、此頃は格別寒いとも思はぬ。電車に乘ると眞夏に鬼とも取組さうな青年が縮のシャツとズボン下を和服の下へ克明に着込んでるのを能く見掛けるが、何ういふ積りか私には判斷がつかぬ。寒い譯は無いのだから汗おさへの積りだらうが、一寸變つた圖で、私の樣な田舍者には何うも珍らしい服裝だ。泉鏡花氏は浴衣掛に襯衣を着たり足袋を穿いたりするのを見る毎に江戸ッ子の面汚しだと悲憤慷慨されるさうだが、私も此眞夏のシャツとズボン下には憤慨する強つて着たい物なら洋服の下に着るがよい、足駄を穿いて洋服を着て雨傘を差す明治ッ子に、這樣注文は愚かも知れぬが。明かに治まる御世も間も無く四十五年になる。不調和な眞似は大概に打切りたい。

△鍛冶橋前の電車停留場傍に、捕鯨會社の販賣店がある。骨で出來た三味線撥や彫細工の花籠などが、油入の

饂棚と鑵詰棚をバックにちんやりならんでゐる。御承知の通り外濠線電車は可なり長い時間をお客さまに強ひる。何やら主義の標號色に似てゐる停留場の赤柱を忽ち欠伸黨、不平黨の擁立する所となつて堂々捕鯨會社の硝子障子に對する。併し、店頭の細工物（巨獸の骨を創り髯を捞つた）はビリケン將軍の、武斷風程に不快を與へぬ。彼れ等は先づ花籠の正札と三味線撥の正札とを比較硏究して、高いものだとか安いものだとかいふ樣な表情を眼に言はせた纖細は小道具の中に卷莨入と根付とが



ある。此れは彼等の乾いた不平心に慰安を與る砂漠の泉地でつまり一種の安全瓣である。ポケットマネーと購買力とのバランスを缺てゐる者を一名素見客と云ふ。彼等も亦此名稱を甘諾すべく出來てる樣だ。忽見る。轟々殷々、紫電をロールに卷いて電車が來た。不平黨も欠伸黨も一齊に起て其をれ迎へた。而して其れに乘て忽然として消え失せた。あとには何やら主義の標號色類似の赤柱と捕鯨會社の細工物とが睨合ふ。人は動く者である集散離合宜に如斯矣。

東京の女と大阪の女

みどり

▲大阪と云ひますと、直ぐ東京と對照して考へられます。大阪の女と、東京の女とは、牡丹と百合と違ふやうに異つて居ります。洗髪に派手な浴衣を素肌に着て黒繻子に白羽二重に墨繪を描いた晝夜帶を引つ掛に結むで、團扇片手に月を見乍ら涼みに出るは東京の女、白粉見苦しく油で光つた髮をこれ見よがしに突き襟して、帶上と云へば高さ五寸、地味な黒ぽい單衣に、色彩の映えない帶、大きい尻にペタペタ垂れの音するも見苦しい。何故大阪の女はもつと輕く快い風をしないかと見る目が痛いほど。浴衣地の流行したのはほんの此の二三年前からだと云ふのを聞いても分ります。一體涼しく、輕く、快い斯うした衣服を江戸子は好みませうが、難波の女は、性に合はないとも云ふのでせうですから、二三年前迄は決して「白地」など着る者がなかつたと云ひます。今も私等が他處へ行きますに浴衣で濟む處を、大阪の婦人は決して浴衣など着て行きません、浴衣を着て行けば笑ふ位で御座います。

▲大阪には高等女學校の少いのが第一に物足らぬ氣がいたします。是れだけの大都會でありながら、少しは世に聽えた高等女學校位ありさうなもので御座います而し、男子の大學でさへ京都に取られてしまつた有樣ですから、女子の敎育が發達しないのも無理はありません。何方も御存じの、大阪は日本第一の商工業地、所謂物質的に發達した處で御座いますから、敎育の普及しないのも最もかと存じます。家庭に於ける娘は奧深く秘められて、普通の敎育が濟めば、琴とか三絃とか云ふ遊藝を習ひ、出るにも入るにも供がついて居ると云ふ有樣、一般に女子に敎育の低いのをみとめます。從つて其の趣味とか、或は總ての行爲が高尙優雅でないのをも知る事が出來ます。又前にも申しました娘に對して供迄つけて出す程の家庭だから、嘸物堅い立派な家庭でせうと思ひますが、名ある商家の內幕などを調べて見ますと、隨分亂脈なものが多いと申す事で御座います。

▲大阪は地價一坪が幾百圓と云ふ程の處で御座いますから從つて家賃が高いので御座います、ですから大きい家に住むのが誰しも苦しいのです。それに東京のや

うに郊外と云ふやうな處もなく、市内にも一寸住む小さい家もないので、官吏や務人など非常に不便を感ずるので御座いますですから、自然と貸間と云ふものがあります。大方の家の二階は皆貸してあるので御座います。それも書生や何かのやうな人達ならですが、一家族が皆二階借りをして居るから驚くではありませんか。主人は晝は他所へ出て、妻や子が二階で自炊をして居るので御座います。一軒の家から同じやうな子供や、婦人が出入するので始めは不思議に思つて居りましたが、それは同居人なんでした。斯うして間借りをしながら婦人は手内職の編物や、裁縫や、又は手縫ひのシャツのやうな物をして居るので御座います。

▲大阪の婦人の惡風習は、立喰をよくする事と物見遊散の場所で處構はず喋つたりする事。男子の小便所へ行く事、帶をしめずに平氣で大道を歩く事、殊に夏の暑い時は片肌脱ぎは申す迄もなく、●●●一つになつて簾のかげで琴や三絃を彈く事などは實に風流も何もあつたものではありません。私時折物の音に不圖家の中を覗く事が御座いますが、このあられもないポンチ繪のやうな有樣を見て餘りの事に腹立たしくなります。音樂を何と心得て居るので御座いませう。言葉なども私等などは聽きなれない故もありませうが、何だか厭な氣が致します。同じ關西でも京都は女を想像しても一種の風趣があるやうに優しいゆかしいところがありますが、少し隔れて居ても大阪の言葉は京都とは違つて居ります。

▲大坂へ出る者は必ず金を儲けるつもりで出るので御座いますから、大阪の人が段々と物質的になり、金子より他に目がなく、人情に遠くなるのも最もかと存じます。殊に美しい愛情の大切であるべき婦人に、此の人情の缺けたのを見ますと、花に匂のないやうに誠に物足りません。何につけても此の厭な風が見えますのが悲しう存じます。電車に乘つても老人や子供をいたわると云ふ事がなく、苦しむ者を見て冷然として居るのを見ますと、實に堪へられないほど情なく存じます。又前にも申しましたやうに趣味が低い爲めに、割に高價な物を着ても、それが東京の女が浴衣がけにも劣つて見えるので御座います。從つて崇高な念に打たれて見送るやうな女はまあ無いと云つても宜しい位で御座います。一つは顔の表情からして、のんびりした上方風と、引締つて氣高いやうな東京風と違ひます、大阪には氣高い顔が少いのです。

新しい作家

白光

文章世界の八月號に、中村春雨が本名の吉藏を名乘つて居ることに就いて書いてあつた、私等には吉藏と云ふ名が耳新しく聞える、古い人が新しい努力に立つ時新しい名乘をするのではなからうかと思つた。

文壇を見渡すと、樣々の色彩を帶びた作家は星の數ほど居る、しかし、時文家、飜譯家、批評家などを除いては、ほとんど古い人は數へるほどしかない、といつてよからうと思ふ。五六年この方、白鳥とか荷風とか勇とか、白秋だの、露風だの牧水だの、三重吉とか草平とか、若手の作家がむく〳〵と立つて、なほ後から限りなく續いてくる。もう、天外や幽芳をいふ人もなければ、露伴や風葉の名を出すのもめづらしくなつてきたといつてよろしい。

今の文壇は、作家の送迎にいそがしい。元より新しく文壇に入るのであるから、限りない精力と努力と抱負とを想像することは出來るけれど、一方古い人でも相當の努力は盡してゐること〻信ずる。しかし去つたものは容易に引きもどすことは出來ない。出來難い、再び華々しく旗あげをすることは覺束ないことである八月の早稻田文學には、卒業したての名もしらない人が見えてゐる。一年もたつと、また違つた作家によつて埋められるのであらう。

私は若い人々を盛んに歡迎する一人ではあるけれども彗星のやうに、一寸出てすぐに隱れることを好まない。是れからの人々はどうか自重して、努力に築き上げた目ざましい作品を出してもらいたい。ゲーテがフアウストを完成した位の意氣と忍耐力が望ましいものである。

文壇の人にいはせると、讀者を改良しなくてはならないといふ。讀者の程度の低いといふことも一理あるけれども、そんなことは末の末である。先づさし當り批評家を改良しなくてはならない。一時の潮流に從つ、て、浮草のやうな批評は斷じて止めて、卓越した見識のもとに確固たる批評をして貰ひたいものである。

讀者の眼のないといふのも、作家の意氣込の足りないのと、批評家の不忠實とから五分は來るといつてよろしい。自分達がつくり出しておいて、讀者がわるいとは一言にはいけない。自分達が養成した讀者のために、反つて退けらるといふことを、思はないのだらら

か。退けられる人はみぢめな者である。併しこれも前者の轍である。中に餘程の修養家があつて、努力をしたところが、やう〳〵若い人の仲間に居られる位が山山である。ところがかういふ人も極めてすくない。餘りに潔よいではないか、もつと執着が強くてもよささうなものと思はれる。私は今の作家の小成功に安んじてゐるのをみて飽きたらなく感じて居る時、たま〳〵目にした文章世界の文字が強く目を刺戟したのであるそして洋行がへりの中村春雨は、必ず強い自信の上に立つて、めざましく活動することだらうと思つた。

私は同氏のために、自重をいのる。

○

四月より九月迄に、私の讀んだ現代の文學書。

晶子の歌集全部。相聞。牧水の歌集全部。(但し路上を除く)。酒ほがひ。

綠葉集。扉。獨歩全集。欺かざるの記。

千代紙。蘇生の日。ロミオとジユリエツト。

背教者。抒情小曲集『思ひ出』。

中には、二度目のも二三冊はあるけれど、とにかく是れだけは讀んでみた。方針も立てず、主義もなく、漫然と讀んだと承知してゐて頂きたい。

一人はなほよしものを思へるが二人あるよりかなしきはなし。

よりも、

海こひし潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家。

の方が私はなつかしい。この歌を口すさむと何ともいへない柔らかな快よい感じが起る。この感じをなほ千代紙と思ひ出に得た。

捉へがたき過ぎし日の歡樂よ。
哀愁よ、
すべてみな、かはたれにうつしゆく
薄靑きシネマのまたゝき、
いそがしき不思議のそのフイルム。
げにげにわかき日のキネオラマよ、
思ひ出はそのかげに伴奏くピアノ、
月と瓦斯との接吻、
瓏銀の水をゆく小舟。
なつかしき陰影をつくらんとて
雛罌粟はふるへ、
かなしき疲れを求めんとて

女は踊る。（思ひ出の陰影より）

私はかうした詩が好ましい、けれど、生ひ立ちは更になつかしいものであつた。夢のやうな千代紙、かつて讀んだ草枕とひとつになつて、私には一つの美しい謎である。綠葉集からはヒントは得なかつたが、水彩畫家と藁草履がよいと思つた。小說だなと思つてみるなら、春よりもこの方が私は好い。扉はつまらない。

獨歩の作品はあまり氣のりがしなかつた。欺かざる記も出版當時は好きだつたけれど、今讀んでみると存外ポカンとしてゐるやうな氣がする。蘇生の日と、背敎者は同じ程に好きだ。高原を靜かに歩いてゐる尼さんの姿や、女神の森のジユフアノの姿がぼうつと目の前に浮んで、私には忘れがたい作品である。

今日は九月十日。今机の上には、モウパッサン集が橫たはつてゐる。

○

K樣

私は今日、これからもさうでせう。牧水が好きになりました。別離の歌が嫌ひだといつて、歌よむ人のやうでもないとあなたにけなされた當時は平氣でした。好き嫌ひは、血の循環によつて違ふものでせう。

今日は妙な日です。センチメンタルといふやうな氣分でせう。封きつたまゝ投げやりにして置いた八月の文章世界を、拾ひ子でもした樣な心で開けてみましたすつかり氣に入つて了つたのです、全體がではないのですよ「旅に出るころHに」といふたつた一つが……作者は中學生らしいのです、何ぞ小さな癖にこんなことを書いて（と自身をくさらすやうですけれど）……冷笑が口に上りかけたが、いけない！二度よみ三度よみ、千遍もくり返しました。どこがよいか知らないけれど、まあ一度讀んでごらんなさい。平安朝時代の公達を聯想する。中學生でも何でもよい、私はかうしてリフトな感情を持つた人が好きなんです。

牧水はきつとこの人のやうでせう。ねいさうではないでせうか。このHといふ女が、牧水の小枝子に似てゐてしかたがない。

私はさうときめる。なに笑つたつて構ひませんよ。放縱だから牧水は嫌ひだつていつたけれど、私はもうそんなことは忘れてゐるんです。

うるほひのある、白秋の詩のやうな、三重吉の小說の樣な、私は牧水の歌がなつかしくなつたのです。反駁書をかきかけて止めにしたといふH樣によろしく。

文部省展覧會第一日の印象

（漫歩の畫家より妹に與ふる消息）

先達ては失敬。あれ程遊んで行けといつたのに姉さんが御馳足しなかつた故か、お袋の傍が戀しいのか僕の戻らないうちに早く歸つて仕舞ひましたね。いけませんね。然しこれは、叱言の手紙ではありません。御約束の文展の消息今日出品者だけに參觀を許されましたから面倒臭いが通知します。そのうち連れて行つて飽きる程講義を聴かせるから、此處には至極簡單にして置きます。

△

日本畫は六百五十餘點の中から八十二枚、西洋畫は七百六十餘點の中から僅々七十三點を採つたのだから善惡は別として相應に力が盡されて居るもののみである、佛蘭西のサロンは頑固な保守黨の巢窟だが、日本の審査員達は開けて居て可なり新らしいものでも採るから畫の種類にも仲々富んで居る。

△

日本畫の中では

池田輝方氏夫人となつた元の榊原蕉園さんが昔風俗した女が鏡に對して居る『髪』と題するものがある。例のふくやかな優しい顏の描方としなやかなる姿勢、精巧なる着物の模様等人を魅するに足りる所のものである。良人輝方氏が拒絶せられたのは、君に取つては遺憾な事であらう。

朝顏を畫材に取つた清方氏の畫は、蕉園さんに比して豐麗を缺いて居るが凄味は加はつて居る。歌女の湯の戻りを描いた北野恒富氏の『日照雨』といふのはて

の種の女の嬌艶な氣持ちを非常によく描き出して居る出品中の傑作だ。今村紫紅氏の『護花鈴』極古い處の手法を新らしく革めて足利時代の風俗を描いて居る。平井楳仙氏の『あかつち山』はあかつち山に生へて居る瘠せた赤松を日本畫の技巧で能ふ限り寫實的に寫してある。評判の尾竹國觀氏の『人眞似』は猿が烏帽子賣の轉寢の眼に烏帽子を持出して冠らうと工風して居る圖、猿の描法などあまり感服しないものだ。竹坡氏のは精緻なれどもくどくどしくない『秋草』が一番よい。池上秀畝氏の『谷間』は場中で色彩の最高き作品である

最も新らしく然も興味深き作品は横山大觀氏の『山路』結城素明氏の『噂』平福百穗氏の『赤茄子と芋』との三點であらう。大觀氏のは人の目慣れぬ不可思議な繪の具を採用し、それを秋の山路の景色に應用し、巧に調和を得て居る、結城氏のと百穗氏のは洋畫趣味より來て居る處のもので、前者は支那人が椅子によつて小鳥の囀を聞耽つて居るのを、圖案的に氣持よく描かれてある。百穗氏のは畑中を赤茄子を提げて少女が行く處を、灑洒たる水彩畫風の筆致で輕妙に描いてある。

△

西洋畫は、日本畫の大作多きに比して小品が大部分を占めて居る。

昨年三等賞を得た青山熊治氏は支那土民の居酒屋の中にて拳を打つて居る『ホワンチウ』と題するものと『金佛』といふのとを出して居る。青黑き色彩で室内の空氣を現し、おとろへて行く國の廢頽的な感じを粗豪な筆致で思ひ切つて描いてある。

佛蘭西から歸朝した新思潮を湛へた畫家等の作品には、藤島武二氏の高雅なる詩味を含める西洋婦人を描いた『幸ある朝』と『チーヴオリ、ウヰラデスタの池』とがある。後者の池は水の動いて居る色や、反射の具合は實に好い。湯淺一郎氏はその學んだ西班牙風の强健な筆技で西洋婦人の『午睡』を描いて居る。日本に於ける最純粹な印象畫家と稱する事が出來る有島壬生馬氏は得意な强い色彩で歐洲のある宿屋の裏庭を目覺むる斗り美しく描いて居る。同じく强い色を用ふ

る山下新太郎氏は日頃の畫風に反して『窓際』といふ澁味を帶びた作品を出して居る。南薫造氏の『瓦燒』は場所の光景を原始的な感じで觀て、裝飾畫風に描いて居る。白瀧幾之助氏は室內に人物の居る至極日本的のものを澁味のある歐風の色彩で描いた『裁縫』と『肖像』とを、出品して居る。

挿畫々家として知られて居る人々の作品には小杉未醒氏の『水郷』といふのがある。漁夫と霞ケ浦邊の風景を背景にしたもの、墨色に近い落付いた色彩と日本畫の筆の面白味を交へた裝飾畫風の描方とで水國の靜けさを憾なく現して居る。橋本邦助氏の『凝視』は裸體の西洋婦人を美しく描いてある。唯洋行前の作風がどの位進歩して戾られたかそれに見えぬのは殘念である。石井栢亭氏の二點『羅馬遺跡』『サンミシエル橋畔』は、栢亭式の輕快な落付きのある手法を見る事が出來ない寧ろ專門家向きの畫だ。渡邊與平氏は『帶』と題し娘が帶をしめて居る處を裝飾畫風に描いて居る。輕い快感を覺へしめる作。同氏の『こども』はスケッチ風のもの同夫人ふみ子さんが『讀書』一點鑑別に通過したのは手柄である。山田實氏は飴色の面白い調子で『淺草の裏』を描いて居る。

三宅克己氏の『白耳義の田舍』『白耳義ブルノヂ町の橋』は洋行前の緻密な畫風を捨て大に近代的の豪放な筆技を現して來た、色も稍變つて來て居る。長原孝太郎氏は草花を全く模樣にして影も無く線でくゝつて描いたものを出して居る、一種の雅致がある作品だ。

青年畫家の中で坂本繁二郎氏の『小濱の一部』。田邊至氏の肖像『日を受けたる人』。長谷川昇氏の『裸體』。中村彝氏の『女』。土岐芳太郎氏の『小むすめ』。小糸源太郎氏の『屋根の都』。三上知治氏の『初秋』。津田青楓氏の『五月のインクライン』等は力の籠つた自信ある作品の樣見受けた。

審査員の出品には黑田清輝氏の『百日紅』が最新らしき彩色法を滯びて居る。和田英作氏の『草花』極小さい小品だが可憐な情緒を湛へて居る。岡田三郎助氏の、『浴場にて』は非常に美しく女の裸體を描いてある。

落葉焚く日

女護島守

現代の若き婦人達は、何故讀書慾がないのであらう文學を熱愛すると云ふ人達が、餘りに書物を讀まないのに驚く。いくら自己の生を充實させたいと云つても糧が無ければ充實のしやうがない、物を理解する力も物を觀察する力も、凡て讀書の經驗から出來てくるので、何んなに感情が鋭敏でも、何んなに理性があつても、此の力が足りなかつたら、直ぐ息は切れてしまふ新しい帶揚を買ふお金で、書物をお買ひなさい、日に一時間宛でも讀書の時間をおつくりなさい。

■故なき服從と、故なき反抗とは、つまらないと云ふことに於て變りはない、前者は舊時代の婦人の無智より、來り後者は新時代の婦人の自覺より來る。

空想は自を欺くものだと云ふ、されど自を欺くは、他を欺くより好し、況して自らを美しく欺くは、第一生活の讃美である。

藝術的世界に生きるものは、空想の世界にも滿足ず實際の世界、現實の世界にのみ滿足を求めんとするものは、藝術的氣分を缺く、墮落とは藝術の世界より、實際の世界に落ちたるものを云ふ。

いくつ底があるか分らぬのは、世間の實相である、もう之が底かと思へば、また其下に底がある、それでもう底がないかと思へば、また其下に底がある、一つの底を見て驚いたものは、二つの底を見て絕倒せねばならぬ、何處まで行けば、とん底であるか、殆んと我我には分らない。

科學の力は將來、人間の生活を何う變化するか知れない、それと同時に、宗教や、道德と云ふものゝ名目も何う變化するか知れない、だから善と不善と云ふやうなことや、幸と不幸と云ふやうなことも、何う考へ方が異つて來るかも知れない。只、美くしいものと、汚いものとは、異るまい、自然の現象に變化のない以上は、美しいものは美しく、汚いものは汚く人間の眼に映るであらう。

餘り氣の早いものは、時代より先へ歩き過ぎて遂に時代の人として殘らぬかも知れぬ、無論それで其人の實力がえらければ好いが、單に氣の早いと云ふだけでは、何事をも成し得ないことがある、時代の推移は驚くべきことだが、推移せざることも驚くに足りる、正しく時代を知ることがえらいのであらう。

藝術家と云ふものは、然う萬能の人でなくとも、たた萬人の心狀を能く觀取すると云ふ一能さへあれば、澤山だと思ふ。題材は自分でない、世間だ、其處に至つて眞に藝術家、作家だと云へる、自分を描いてゐる間はまだ眞の作家ではない、斯う云ふと異論を挿む人もあるか知れないが、其理想がなくては、第一流の作家たることの出來ないのは眞理である。

結婚難、職業難、男子難、生活難、戀愛難、解放難、家族難など數へ來ると、今の婦人ほど難義なものはない。之を解決する爲に幾多の識者先輩は論議を試みるが、矢張婦人問題難に惱まされる、論議の上に解決が出來ても、婦人と云ふものゝ周圍、つまり女の立つ世の中との關係が未だ混沌としてゐるので困るのだ。

團十郎の芝居を初めて見た田舍者が、何だい團十郎團十郎つて、やかましく言つても、己が村でした直實と些とも變りがありやしないと言つたと云ふ話がある物を觀る力のないもの、力の不足なものは不幸だ、女が優勢たものを見るのに、此と同じ事が多い。

つき草

窪田空穗

いとはしき人と並びてあゆみゆく野みちに咲けるつき草の花

ふと路は野にとまがりつ黍の穗の日にひらめきてさはさはと鳴る

黄ばみたる稻田のなかのほそ路を涙ふきつつ歩み來る兒よ

患者らがゆあみしをれる浴室のがらす戸越しの白芙蓉の花

よろよろと窓にすがりて眺めけるなつかしかりし秋の日のいろ

ヨードホルムにほへる室の窓に倚り眺めやりたる町の一角

ゆるされて病院を出しかの朝の車の上に見たる人たち

白粥をすすりてをれば何となきもののあはれに涙まろび出づ

みにくくも病みおとろへし人の居るかの病室に灯のともるらん

出でてゆく春の夕べの路の上琥珀いろなる玉やまろばん

まだ住まぬ町にと小き家さがしうつりゆくなる春のくれ方

しばしとて移れる家の庭に見る雨にぬれたるあぢさゐの花

遠じろく空はくもれりひそやかに山椒の葉のかをり來る晝

まろやかに茶の木のならぶ畑に來て夕べとなれば人待つをんな

となり家のからたち垣のあをあをと繁りて庭にくづれ來るかな

山の手の錢湯出ればむらさきににほひて春の空の暮れゆく

八重ざくら汝れがゆらげば透きて見ゆいと青やかにうるほへる空

朽ちにける木小屋の屋根の上に見しかのゆふぐれの星やうかばん

ふと物のまぎれにおもふあはれにも腹立たずしもなれるわれをば

青やかに暮れゆく空にうちむかひ口ずさみ居ぬ古き歌など

啼きつつも飛びてゆきける鳥のあとうち見やりをる春の暮れ方

わりなくもふるへる手して夜の戸をあくれば春の星のきらめく

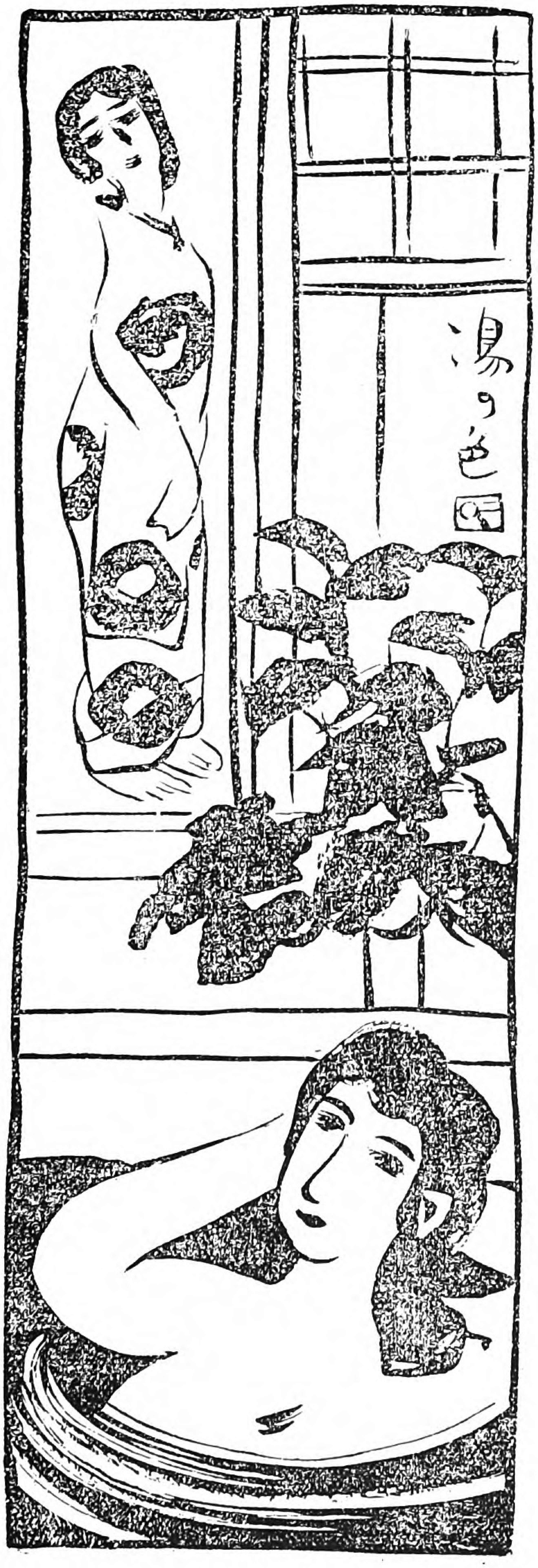
ゆくりなく媚ふとみたる瞳してわれを見にけるかなしき女

見覺えのある一人と今日もまた路に逢ひては聲かけず行く

ちらちらとしろがね色の裏葉見せ柳立ちたり春のたそがれ

やはらかく指をぬけてはひらひらと黄き蝶の杉垣を越ゆ

からかねの倉の窓の戸も青も銹びたる上の春の日の空



今様羽衣

蘇生法師

一聲「露の道行く紫の、袂に落る雁の聲、草も色有る朝旦かな。

ろうえい「嫌ふらくは、錦帳を褰げて長く麝を薫んずることを、惡むらくは、珠簾を捲いて晩く釵を着くることを。

ワキ「いかに、それなる美少女、あまりに品の異なれば人の子にはよもあらじ、雲の通路隔つとも、しばし止りて、名をだに宣り玉へや。

シテ「見れば奇怪なる弱法師、誰れおそれての目せき笠笠して人を問ふやらん。まづ汝何者ぞ

ワキ「言も愚や、これこそは、山毛欅の林の女蘿、千鈞の命髪にせる、月波の山のくわいらいし、罪有りて刖られてし咎人なれば、天高けれどせくぐみて、人な見そねの綾葦笠、かくれて生くる男なり。

シテ「あら怪しうも候はぬ哉。さば何を包まん。もとより牛の皮を着て、野路に、伏たる鬼奴。茨木童子が妻ならず。花の形輝き、桂の眉墨青うして、漢月袖に靜なる夜、杯を舉げて酔を侑めし小野の良實が姫にもあらず。天にしてははやぶさ、地にありては夢殿守、ふぶき野に立つははき木か、冷たき花の白百合か、斷崖に咲くはまなすの、子になる果は知らねども、まれ人にあふにすら袖几帳するゆふほしが、戀の盛の十九も過ぎて、ゆふやみに鳴く草ひばり、月夜花かや草の門に、花と呼ばるる女ぞや。

ワキ「さては、聞き知んぬ、白き月の沈むころ、獨ねの夜半の枕に霰を聞きて、面がはりせし憂人よな。風を捕へ影をつながぬ悲さは、今こそ思ひあたるらめ。

シテ「耻かしや、羅の袖に火熨かくるを忘れて、皺のよれるは被けども、この秋とつて二十二の、顔には皺のよらぬ也。

地「面ばかりは隱すとすれど、亂れごゝろや穗芒の、戀は物ごしにあらはれて、かざす袂の七色の、虹に思ひやうつるらむ。お僧よ喃、わが戀人の在家をば、君は知るらむ、教へてたべ。

ワキ「いやとよ、大行の路よく車を砕き、巫峽の水よく舟を覆す。ましてや、むかし男の一花心、いつまで君を思はむ、見るも夢、さむるも夢、夢の女のあはれさよ。

地「古里は雲九重に隔りぬ、母やいかになげくらむ。

ワキ「さめよ。

シテ「露團々たる葛の葉の、露を涙とおきかへば、父も許さむ、風の音をわが泣く聲と聞かませば、うれしや戀人もかへらむ。さめよとは、さめよとば、御身は尊き大徳の、戀はさてしも忘れけめ、われには毛物の囮に入りて、白き屍となれよとや、味氣無の宿命やな。

地「戀しさ人のひざならで、身はおきどころなきものをと、言ふかと思ひし、とゞろ〳〵、天皷響いて棚引わたる紫の、紫の雲に包まれぬ。戀人よ喃、人呼ぶ聲は、露吹拂ふ朝風の、音にまぎれて、雲の袖、霰か霧か美しき二十女は九つの、野を越え、八つの山越えて塵の身ながら大空の、みどりの色に溶けぞ入る、みどりの色に溶けぞ入る。

山（やま）より山（やま）（つゞき）

平塚白百合

▲七合五勺まで

堪へかねて夫は強力にシャツを出さした。私もついでに着るものは着はくものははいた。

これからは荷が輕くなりますが奥樣がどうだかね、と黑い頰に皺をきざませて強力が笑つた。

私の強力は極老いてゐる。その代り非常に親切な、よく面倒を見てくれる男だつた。

連れの人達も唇が紫色に變つて、やつぱり寒さを訴へ出した。爵者のS樣はマントの袖をかき合せてかたくなつてる。まだドテラを着るものは一人もない。

室を出るとまちかまへたやうに狂風は眞上から吹下して、足をすくつて甲州まで肉彈にして打つてしまひそうだ。

こんな時、罪ある人は自らおち氣づいて、吾れとわが身をあやまるのだときく。

踏みしめる溶岩はウツカリするとその儘ズル〳〵と後じさりする。迂回に迂回する路はやゝもすると右か左かとるべき道を失しさうになる、勞れては着ござのまゝ溶岩の陰にドツカと尻もちもついた。そうして心ゆく下界の山や川や村や里や、また浮雲の變化するさまに見入りながら亂れた呼吸をとゝのへもした。

頂上から山麓迄、沙を絹ぶるひにかけて盛り上げたやうな寶永砂走を二三人が輿にのつて走つてゆく。

それが忽ち山の背を裏面にかくれる。つゞいてまた下りてくる。裏面にかくれる。引つ切りなしに生れた地をしたつてゆく人を頂上から黃雲がまき起つて、包んでしまつた。雲はたえず湧く。そうして散つてゆく七合から七合五勺にかゝつたとき、密雲はまたひろがつた。そうして一時的のものではなく、天地は白光の輝きある夢想的の世界にさまよひ出たやうな幻がひろげられた。もう一間先は凝視しがたい。こうなると、足は重く、すべての神經は足元に密集された。風はます〳〵勢を加へたので、八合の豫定は撤回されて、から〳〵も七合五勺につくと、こゝに宿る事に定めた。午後六時。

強力が出した貸ドテラをはをつて、桃色ちりめんの腰帶できつしり締めると胴のまわりが六尺程もある。室の主は私達がやどると、もう最後であらうと重い庫にでも閉ずやうな扉を、ガラ〳〵と立てゝ灯をつけたチヨンボリと、一つのランプがともつた、木屋は天井を張らぬ、丸木そのまゝの棟木が縦横に交差して、背の高い夫はよくあやまちをした。

板壁は一ぱい紀念の文字でかきつぶされてる。

▲岩室の一夜

にしめたやうなぎし〳〵する赤い疊が、ひや〳〵と素足に觸る心持わるさ、かはたれ時の戸を開くと、煙のやうに霧が吹きこんだ。

私は戸に半身もたせて、空漠な戸外の霧の海に何をかたづね出さうと瞳を投げた。モーツとこもつた霧は、目の前だけもつれ〳〵て動いてゐるそれが大きく、はては宇宙全體にわたつて動いてるのだと思ふけれど、只見ては決して動いてゐるものとは見えない。

また一定の間隔をとつて、闇緑色の大浪が磯邊にくづれるやうに、風は、ある一つのトーンをつくつて吹きつゞけてゐる。
その度に黒木の小屋は、キーッと釘のきしむ音が細く、怒跡のやうな風聲の中に神經をいらだたせる。

風になびいた小屋全體の戰慄は、戸によつた私の肩にもおのゝきを傳はらせて、濃い霧をもみにもんだ。けれど霧は何の苦痛のあともものこさずにやつぱり濃く、張りつめたやうにこめてゐる。

見てゐるうちに霧の海の白光はやゝ薄れ初めた。漠とした光りもある一部許りにちゞめられてしまふと、漠然とした。闇はほびこり初めた。霧の色は蒼白にくれて、只一點の微光すらフッと消えてしまふと、私はがつかりした。日が落ちてしまつたのだ、下界と天界との間の、山の肩に倚つた私は、日が落ちると下界との緣が切れてしまつたやうに淋しかつた。

岩を組んだ戸口には、天水をうける桶が二つ並んである。凝つた霧は折々さゝやかな音をたてゝ溜つた水の表面をうつてゐる。

重い扉をやつと强力に手傳つてもらつてしめると、足ざわりの冷たい疊に爪立てゝ、敷いてくれた床の上に坐つた。

奥まつた隅には昨夜から宿つてゐるといふ兄弟の學生が臥てゐた。寒いので皆床に入つた。

枕元の上り口には二間許りの黒白だんだら染めの幕が戸の隙きから吹き込む風に、皺をきざんでふくらんでゐる、幕に片よせて隅のうすくらがりには蒲團の山が二つと傍にくゝり枕と箱枕を僅か積んである。

私達は二人分づゝ掛けもし、敷きもし、そうして疊のひやつくのを厭つて、床と床との間に飯臺を置いて晩餐をしたゝめた。

糟くさい飯と、玉子の清汁は、室での最上のものである。罐づめをあけて、男達は酒をのんだ。杯もない。茶呑茶碗である。あまつた酒に强力の頰もそまつた。

私の傍にはトタンの洗面器に盛つた火が、紫の焰を吐いてゐる。温度下る事四十二度。

夜がふけてくるにつれて、ランプの光りはあかるく、荒涼とした室の中が目に立つてくる。

草も木も何もないこんな無毛地に、どうしてこんな風が吹くのか、地の上で想像も出來ない程强く、あらゆる破壞力をあつめたやうな山荒れの風の音は只一人目ざめてゐる心細さを襲ふやうだ。

また小屋がゆらく〳〵。目をつむつてゐると時計が九時を打つた。平つたい平凡なだるけた調子だ。

◆畫はがき七十枚

夜中に起きた宿の主が、星が見える、明日は天氣だと云つた。宵の明星が見えるときいて、わざ〳〵出て見たけれど、いくら見透かしても、霧の世界には何ものも見出せなかつたので、私は山の男の眼をうらやむ許であつた、霧はやつぱり開いた戸口から白く流れ込んでくる。

ボーつとぼやけたランプの灯を見ながら明朝の御來光を期していつかうと〳〵とねむつた。

物音に驚いて目ざめると、五時を過ぎてゐた、戸の節穴からは外光が白くさしてゐる。

何の色彩もない板張り小屋の机上に、小さい植木鉢があつた。强力にきくと濱梨の實と答へた。光澤のある紅色の珊瑚のやうな實は、柘植に似た葉の間に、葉をかくす程累々とつゞられてる。須走り口の燒沙にまみれてこれが咲いてゐると强力はいふ。

床の上で露はがきを書き初た。七十枚の中私は二十五枚だけ書く。そうしてその筆で柱にも小さい字を書いた。

八時となつても、風力も霧も變動がない、昨日と同じなので同行の人は七合五勺を頂上にしてかへると云ひ出したが、幸ひに强力は晴れるといふので、俄かに私達は登山の用意した。かへるといふ人も先きに宿についてゐた人も共に登る事とした。同行九人。

私は山の宿のぬけ出たふとんがなつかしかつた。草鞋をはかせてもろふ間しみじみと小屋をみた。

室から出ると風は押しもどすやうに强くあてる。

烈風中の冐險的登山

八合に來た時强力つれた壯年の一人が、雲右衛門が五合五勺で止まつたと語つた。つれた女は强力二人押し二人引きでも尙半病人になつてしまつたといふ。

私は室口で必ず出すカタパンで茶をすゝりながら其話をきいた又霧と風に反抗しながら岩際にやすみ〳〵のぼつた。道に朽ちた草鞋が高くなる程多く落ちてる。

八合五勺の室にやすんでゐると、雲右衛門の弟子達や、朝日新聞の松崎天民氏が行者の扮裝で、菅笠三挺をかつがせ、六根淸淨の掛聲勇ましく小屋に入つて來た。入れ代つて私達は室を出る。

九合の小屋は山荒れにつぶされて、頂上迄にはもう休むべき所もないときく。

音に聞く急峻な胸突坂は小屋を出ると直ぐだ、遙かその上に劍ケ峰はうすれて來た霧の中に見えた。

一夜動かなかつた霧は、霽れないまでも絶えず動いてゐるので、時に下界も見られた。

胸突の風はまだ烈しい此處を先途と吹きつのつてゐる。殆ど這ふやうにして、私は岩の陰に身をひそめ〳〵ながら登つた。

六根淸淨お山は晴天、はしやいだこゑでくるのは天民氏の一行である。フトその聲は絶えた。胸突に掛つたのである。程なく天民氏達は追ぬいて登つて行つた。私は一歩ゆき、二歩に止まり、大岩の陰には足を伸べもした。下を見ると八合五勺の岩室が霧の密度からはづれて現はれてる登つてくる人も二三人見える。上から水兵が三人下りて來た。つゞいて天民氏の一行も山荒れにおびやかされて下りて來た。

命あつての物種だね、

むづかしいものですよ、女なんか、

斯う云つた終りの四五句は冷笑的のこゑだつた。私はこの一行が下の岩室につく迄、岩にすがり〳〵歩いてゆく敗者の後姿を目送した。

夫は下りるかとゝはれる。私は「倒れる迄!」こう手短かに答へた。

此處が一番の難所らしい。頂上では立つてゐた人も、此處にくると這つてゆく。

四五町です、强力も力づけた。

僅かに一歩をはこぶだけでも、やがて大なるしるしは現はれて、私は胸突の八町をのぼり終へた。風のあたらぬ岩蔭には一歩先きに出たK樣S樣とがほゝえんでゐる。

とても駄目だと思ひましてね、

暫らく動かなかつたでしやうあの時はきつと下りると思ひましたね、ととり〴〵に言ふ。

もぎとるやうに風がふくので、夫の聲は聞かれなかつたが、指さす下を見ると、菅笠が一つ白紙でも飛ばしたやうに、グル〳〵輪を描きなが

ち舞ひ落ちてゆく。輕るそうなまゝひぶりである。
九合の小屋は板が朽ちて、天風天雨にさらされたまゝ白く朽ちてる。だるま岩を見上げ、左に鐵梯子の掛つた駒ケ嶽をあふぎ、とう〱内院拜觀所の御鏡と、鳥居が見えた。つゞいて銀明水の木柵が見えた。

二 金剛杖に頂上の赤印

電話線のだる〱山背にはつてゐる山をめぐつて稍平坦な頂上に出た。口字形に山の平地は正面に淺間神社、右は郵便局、左は岩室である。七枚の畫はがきを投函して、電報を父母に打つた。山荒れを衝いてのぼり得たうれしさは晴天に登山したよりも一層のうれしさである。
淺間の御社で朱印を金剛杖に捺した。
午食の膳に濱梨の色よい漬物を味はせた、終つたとき天民氏は强力連れて只一人登って來た、女が登り得た事を下山の人にきいて、口惜しがつたのであろう。

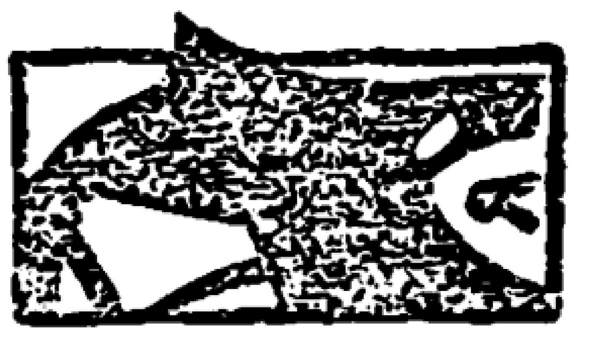
三 お鉢めぐり

無謀なことよと宿の者はとゞめた。私達は自身の命の惜しさは人よりも解してゐる。老いたる强力も危險と見れば歸ると云つた。
恐る〱劍ケ峰に立つたとき、霧も薄らぎ、風もなぎて、足元の切崖から大きな口を開いた噴火口の雪流の白い脈の續いてゐるのが見えた。K樣とS樣は私達の方を金剛杖にすがつたまゝ叫ばれる。夫はお二人の幸をいのつた。霧はまた濃くかぶさつて噴火口の口は閉された。
野中氏の家を見る。室の一隅に當年の雪が消えもせずそのまゝ白く殘つてゐる。

强しらずとか、西安河原とか强力が云つた。雷ケ岩はかなり大きい。釋迦の割石で一困難した。そうして金明水の靈泉によみがへつて二碗はした。
淺い石底の井ながら眞夏も涸れぬ、それがめづらしいと天下に傳へられてゐる。
地獄の釜の横穴に手をさし入れて、地熱のあつさに驚かれた、雪もとけず水も湧く休火山にも、なほ熱はひそんでゐる。
東安河原を過ぎると、下界に見え出したのは半月形の山中湖である。霧は遠のいて駿河灣の碧海と、三保の黒ずんだ松原と、富士川の遠い流れとが霧の斷間に現はれる。
銀明水にもどつたとき、霧は漸く引いて、箱根の山はうす紫に、富士川の流れは銀色のまばゆさに、鮮かに一行の眼に映つた――（つゞく）――

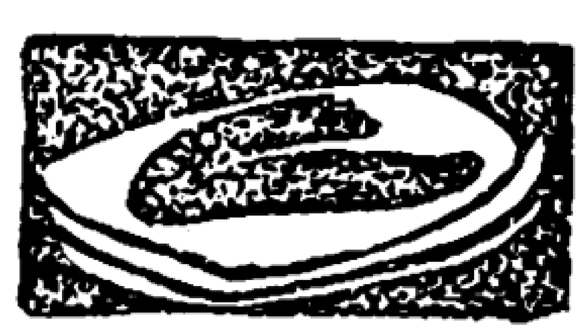
山容

私はある山の頂きにゆつたりと身體をなげて、吾足元につどふ夏の山々を眺めた。
丁度スパルタの青年のあつまりのやうな夏山の姿は、濃い桔梗色の空をいたゞいて、ハセバにのぼる面のごとく晴やかにほゝゑんでゐる。
我心は迷ふ。いづれをわが胸にとりいるべきであらう。
青衣にかためた壯者の姿はヒシ〱と快よくまろぶ日に輝いて、榮えある月桂冠を我頭にとひしめくごときその姿よ。
たくましいこれらの山の姿を眺め去り〱あく事がなかつた。
緑にゆあみせし鮮やかなる山容！
雲が流れる！ゆう〱と、雄大な氷山のやうな夏雲の流れが――。
（白百合）



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉



●●●●答者より。近來直接私の方に宛てゝ御尋ね下さる御方々が大層に殖へて參りまして、一日御手紙と葉書とを頂く數が、平均二通强を計上するやうになりました。一日に高が二通の質疑書別に大した手數とも思ひませんけれど、これは女子文壇の愛讀者たる御方よりだけの御質問で他方面の御方より化粧上のことに關し日に六通平均の書狀を受けて居るのです。それも私の仕事が單に此等の御質疑に對する答辯のみにて了るのでしたら、何も騷ぐには當らない譯ですけれども、私は只今婦人修容會や化粧研究所、並にMパテー會社に於て活動寫眞のフィルムを撮影すべく、それが役者の扮裝に關する化粧顧問として、時には箱根とか、或は須磨、銚子とかに出掛けて、顏のつくり方の世話を燒いて居りますので、殊には私の現在の生活は、化粧が其全部ではありませんので、外に文筆を娛すことの出來ぬ境遇に居る身の上なのでありますから、單に化粧のことのみに關して一日六通平均の御書面に對する返事もなか〱重荷となり、從つて本誌御愛讀の皆樣よりの毎日平均二通の御手紙にも自然御答がおくれ勝ちになります譯で誠に私の生來の情として忍び難い處でございますが、右の境遇を幾重にも御察し下さいまして答者たる責任を緩怠に附して居るとなど御叱りなき樣御願申します。ついては今後直接私方に御尋ね下さいます場合には、一應本誌上で御質問下すつた上で、猶誌上では充分其意を盡すことが出來ぬといふ段になつた所で御願した方が、問答者相互の利益かと存じます。とは云へ、直接御尋ねになつた方には御答をせぬと申すのではありません、本誌の愛讀者たり誌友たる以上、皆樣の私に對する質疑は一の權利であり、これに御答申すは私の義務でありますから、時間のゆるす限り、筆のつゞく限りは決して之れを遷延したり怠慢に付すやうなことは致さぬ覺悟ではありますけれども、本誌以外にも斯かる義務を各方面に負擔して居る身、中には又わざ〱書狀で申上げんでも、誌上で御答申した方が、單に問答者相互の利益なるのみに止らず、第三者たる多數の讀者諸子にも御參考になるやうな問題もありますので、私の其場合の身境の都合により、尙その御質疑の種類によりては、すべて當問答欄に於いて御答致すことに仕たいと思ふのでありますから、今までも又今後とても直接私の方に御尋ね下さいまして、直ぐと返書を御入なさらぬ方は、どうぞ當欄を御覧下さるやう御願致します、

問　三年にして漸次崩壞した人があるとやら申す噂も聞いては居りますが、隆鼻術は實際効果あるものでせうか、一見天成と異らないものでせうか、又東京に於ける斯道の名醫は何方でせうか。序に同じく東京に於ける齒科の名醫を御指示願ひます。(北海道、としえ)

答　隆鼻の施術方法は、パラヒンを鼻梁に注射するのですから、ウマク參いれば天成の形態を呈しますけれど、拙くいきますと鼻曲りの醜狀となります。のみならず施術當時より美形にありましても、噂にも御聞きの通り、年所を經ますと、案外の變態を起すことと往々ある例ですから、斯樣な不自然な危險を伴ふ人工僞飾は思ひ止まりなさつた方がよろしくはないかと存じます。齒科專門の名醫として知らるゝものは枚擧に暇ありません。併し私が直接且つ長年知りあつて居る人の中では日本橋箱崎町天啓病院長塚原老國手を推薦致します。同氏は現に齒科醫の試驗委員です。

問　白色劑として使用する過酸化水素水は手製することが出來るものでせうか。出來ますなら其製法を、若しそれが面倒でしたら何れで賣つて居りますでせうか(嘉穂、春子)

答　過酸化バリームに硫酸を注加して製すのですが、素人には上手に取ることが容易でありませんから、寧ろ御買求めになられた方が安全でせう。日本橋三共合資會社から四プロの過酸化水素水を販賣して居ります。

問　田舍の化粧品店にてコールドクリーム

キセロールクリーム、オードトワレツト、化粧酷などを賣つて居りませうか、賣つて居りませんやうでしたら、右の品々に代ふべき他の化粧品は何がよいでせうか、(群馬、鈴蟲子)

答　さア、田舍に賣つて居ますか如何か、それは解りませんが、御尋ねの二種のクリームに代ふべき同性質の精良品はありません。オードトワレツトや化粧酷の代用としては、フエリツプソンビネーグルがよいでせう。これは醋酸樟腦、安息香各六匁づゝを酒精一百匁に合して製すのです。

問　敎壇或は談話會などに出演しますと、譯もないのに動氣がして聲まで振へますが、何と致したら治するでせうか(靜岡　花子)

答　これは私の答の的を逸しられた御尋ねです。よろしく專門の醫師について治療を請いなさるべきものでせう。

問　肌に黑味を帶びたりしない化粧水の製法と片田舍でも手輕に出來るお化粧の仕方とを御敎へ下さいまし、猶いつぞや先生の御示しになられました化粧法のうちに、コールドクリームを塗つて又其上にキヤロールクリームを塗るといふ仕方を伺つたやうですが、何故同じクリームを一度に二回つけるでせうか(石川の黑面女)

答　葡萄の實を白糖で煮て出た汁、二倍の稀酒精に入れたものか、薔薇油を五十倍の酒精に合せたもの、若くは橙花水に少量の硼酸を加へたものが化粧水として最良の品です。化粧美術に適つたお化粧の仕方に、片田舍だの都會だのといふ區別のある譯はありません。手輕に出來ると否とは化粧の方式によるではなく、それを行ふ方の熟練如何によるので、これ以外に手輕なお化粧の仕方は私の知らぬ處であります。キヤロール、コールドとは同じクリームではありません。甲は旨として化粧下(即ちおしろい下)として使い乙は艶肌料(即ち地膚をならす)として用ひますので、何も同性質のクリームを徒賚に重複して塗布するといふ譯ではありません。

問　今までにも色々な藥をつけて見ましたけれども、直ぐと後から鼻下に毛が生出して來ますので非常に心をいためて居ります。何か良い藥劑の製法をお敎へ下さいませ(金澤若き女)

答　脫毛藥としては一回や二回位で根本的に生えないやうにするものはありません。比較的奏効の確實にして且つ迅速なのはプレンク氏の處方になる拔毛藥です、それは雄黃一匁、硫酸苦土十匁、澱粉六匁を合せ、水でドロ／＼にして木の匙でつけるのですが、藥が乾くか又はヒリ／＼して來ましたら、直ぐと剝してよく御洗ひになり、ワゼリン若くは亞鉛華を其上に御つけなさるのです。でもなければ×光線の應用か電氣拔毛法かによる外ありませんが、これは素人には出來ません。

問　九月號の御答中に、牛肉を白湯で三度云々との仰せがございましたが、それは生で食すのでせうか、又分量は一度に何程を要しますでせうか、此法を用ひましたら、肥つた人も瘦せるでせうけれど、ひもじくて體が弱つて了ふやうなことはないでせうか、常食に戻りましたら又もとの様にデブ／＼と肥り返りはせんでせうか。御面倒ながら御敎へを(土佐、春子)

答　牛肉を白湯で煮るのです。而して其御食りになる分量は、各自の胃袋の工合で、一定量を計することは出來ません。要するにヒモジからぬ程度の適量を示食つてよいので、從つて體の弱る筈もない譯です。常食に戻つたからとて直ぐに後からヌク／＼と太るやうなことはありません、但し長い間の後のことは、何とも申上げかねます。

問　私の地方では顋足の毛は皆脫取つて了ひます、が眉毛を拔くと肉跡が高くなるといつて致しません。これを拔いても高くならない法はありませんでせうか。又ゆる／＼お化粧して居る時間がございませんので、平常からおしろいを化粧水に混和して置いて使つて居りますがそれにはグリスリンが混つて居ります。このクリスリンは、皮膚に黑味を帶びさせると八月の誌上で御敎になられましたから、それを混ぜずに手輕に出來る化粧水の製法を(九州、愛讀女)

答　硫化バリーム二匁五分、酸化亞鉛及び澱粉各一匁二分五厘を水でドロ／＼に泥つて二三分間厚目になすりつけて拔きなされば其樣な患ありません。併し地方の風習とは云へ、何の必要あつて天稟の眉毛をワザ／＼拔き去るのですか。斯様な風習は寧ろ野蠻の遺風として排斥すべきものと存じます。又グリセリンはこれを單用することに於いて皮膚に黑味を帶びさせると申したので、何かに合劑として使はるゝ分には差支ありません。それでも他に化粧水が知りたいとの思召なら、右の(石川の黑面女)さんへの答を御參照願ひます。

問（一）塗身香の原料は藥店にございませうか、（二）コールドクリームは何所で賣つて居りませうか。代價は如何程致しますか。（三）ナマズの良藥を御敎へ下さいまし（田舍娘）

答（一）藥店に賣つて居ります。（二）眞正のものは現今日本ではまだ賣つて居りません。御自製なさるよりは仕方ありません。その調製法は今まで何度となく御答してあります。半ポンドで三圓八十錢を要する筈です

問　生際を濃くする藥と赤鼻を治す法とを御敎へ願ひます（はたち娘）

答　生際の毛を生やしますには、サルチル酸五分、硫黃乳カンタリス丁幾、タンノブロミン各一匁、ペーリユーバルサム三匁、馬油三十匁を煉合して御つけなさい。一時性の赤鼻でしたら偏頭で罨法なさつても大抵治します。藥劑罨法としてはチオノール十匁、レソルチン五匁黃色ワゼリン五十匁を煉合して、これを脫脂綿に塗つて御つけになるをよしと存じます。

問（一）蒼い顏を色よくするには如何致したら宜しいでせうか、（二）眉毛の拔けるのを止めます方法はございませんでせうか、（三）頭髮を黑く致しますには何油をつけましたら宜しうございませうか、（四）ソバカスは如何致したら取れますでせうか、（五）キセロールクリームやオードトワレットの價は何程で、二つとも兩國の紅屋にございますでせうか、御面倒でせうが御敎へを（心配少女）

答（一）コールドクリームでマッサージなさいでもなければ杜松子油を隔日にお顏に擦込みなさるも一法です。（二）チグノール、アントラゾール各二匁、フエトロン三十匁を煉合せて御つけなさい。（三）純粹の椿油をよしと致します（四）これを取去るには中々辛抱を要します。處方數ある中で、奏効稍や的確なのは樟腦五匁、昇水二匁硼砂一匁、卵白十匁、薔薇水一百匁より成る雀斑乳がよいと思ひます。これを塗布しまして顏に炎衝を起しましたら、亞鉛華と滑石と澱粉とを等分に合せた粉劑を其上に撒布なさつて、下から新皮の出來上らぬうちは石鹼等にて洗面などなさらぬやうになさい。但し右藥劑中、昇汞は恐るべき毒藥ですから、使用上多大の御注意を要すこと勿論です。（五）キヤロルクリームは六十錢、オードトワレットは七十五錢の筈で、何れも紅屋にあるだらうと思ひます。

問　九月號に瘦せる法として牛肉を白湯で云々との御示しがございましたが、それは白湯で食しますのでせうか、一度どの位頂けばよいのでせうか、どうぞ其食用法を（北海道 愛讀女）

答　當欄に於て（土佐の春子）さんにお答申した通り御やり下さい

問　脫毛劑として御敎へ下さいましたトルコルスマと申すのは何と何を合したものでございませうか（田町の時子）

答　煆製石灰末二十匁に硫化砒素三匁を合したものです、

▲化粧問答は質問自由です
▲毎月十日締切、翌月の紙上に發表す
▲質問の文章は要領を明かに書く事
▲他の投稿と同封にても差支なし
▲單にハガキにても差支なし

美髮劑に就いて

尙化粧問答欄に於て、癖毛を美直したいとか、毛髮の色澤を美しくしたいとか、皆様方から度度お尋ねを受けて居りますが。それに就いて斯く／＼の藥を斯く／＼して用ゆるやうとお答はして居りましたが、之を御自製なさいますにしても、御依賴になりますにしても手數もかゝり原料も高くつきますから、一時に澤山調製して置いて、本誌の愛讀者に原價でおわけして差上ることにした方が宜しからうと存じ、別項廣告欄記載の如く、美髮劑を製することに致しました、御望みの方々には本社用達部の方へ御申込になれば、差上ることになつて居ります、詳しくは廣告を御らん下さい。

少年少女諸君のお馴染

佐々木邦先生著

滑稽奇談珍本

[illegible]

全一册

▽中判美装 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入 定價金參拾五錢 送料金六錢

◎第一版 九月出版 賣切 ◎第二版 印刷着手……十月下旬發賣

お父さんが讀んでも、お母さんが讀んでも、姉さんが讀んでも、妹さんが讀んでも、誰が讀んでも差支がない許りでなく、大人にも、子供にも面白い書物です。本書が世の中に出ると到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求し、折柄秋の夜長の笑ひぐさにしたり、話の中から教訓を得たり、近頃の好著として持て囃されて居ります。若し他の家へ御贈物をなさるにも、體裁も好く美しい繪も澤山挿入してありますから、こんなに手輕で、上品な贈物はなからうと信じます。幸ひに續々御注文を賜へ

東京 京橋區大鋸町 振替壹七貳九 女子文壇社出版

どこの本屋でも取次販賣致します

二人やんちやん

新聞、雜誌の評判記拔萃

◉『少女世界』これは趣味ある少女小説です。太郎さんと花子さんといふ兄妹が、好きな叔父さんと一しよに、思ひ切つて無邪氣なことをする、その面白いことの數々が、輕い筆でさながらに描き出されてありますので、讀みゆく中に笑はずにはおられません。それからあまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の四篇もまた面白い讀みものといふを憚りません。これを少女諸子にすゝむ。

◉『東京日々新聞』二人やんちやん初め、あまのぢやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む、惡戲小僧にはお馴染多き著者の筆なれば面白いて請合ひ中には子供に解る樣な諷刺や教訓を含むだ話も交つて居る。

◉『少女の友』これは、滑稽小説に有名な佐々木先生が、子供の滑稽な有樣を書かれた少女小說です。集むるところ、二人やんちやんの外、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の四篇をかしいおもしろい本です。

◉『やまと新聞』二人やんちやんあまのぢやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む太郎と花子とのやんちやん愈々出でゝ愈々甚だしく而も一點の邪氣を存せざる流石に子供の神子たるを思はしむる少年少女の讀物として極めて面白きのみならず藥になればとて毒になる氣遣ひ無し。

◉『中學世界』曾て惡戲小僧の日記を譯して大好評を得たるはこの著者なりとす。少年少女の天眞爛熳たる自然性を見ること明敏、これを筆に移してあるたる無邪氣なる精彩あり、斯くの如きは、實に著者の獨壇なるべし。「二人やんちやん」以下數篇皆な面白し。

◉『都新聞』二人やんちやんいたづら小僧で子供衆に御馴染の佐々木邦氏の作である、滑稽の裡に諷刺あり面白味の間に教訓を籠めてあるよい本。

◉『婦人の友』太郎さんと花ちやんとはなか〳〵やんちやんで、十日ばかりお留守居をして居た叔父さんは隨分困りました。此の十日間の出來事を面白く輕妙に書いたもの。

◉『中央新聞』いたづら小僧日記を出してより此著者の名は頓に坊ちやん孃ちやんの間に知られたり、此の書はあの樣なおもしろい得意な文章にて書きし少女小說二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を蒐めたるものにて既に御馴染の坊ちやん孃ちやんもあらんが初秋の讀物としてはこよなきおもしろきものなり

◉『少年雜誌』これは美くしい少女小説であります。目次は二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今とみんなで五つありますがどれも〳〵面白くて溜らない御本です

◉『帝國新聞』二人やんちやんの外あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今、等雜誌「少女」に掲載したもの。斯う纒めてみると一氣に讀むことも出來れば、忙しき人々も亦樂むを得可し。僕は試みに「あまのじやく」を讀みたるが、傳記保存の上よりも、著者に謝すべきもののあるを覺えたり。文は輕快平明。

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効の新藥なり故に微毒及微毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゐかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘰毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することと確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐断絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑（瑞西新輸入藥）

內服 トニチン TONITIN

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は瑞西國ウォルフエンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男……女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視することと勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ。

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

世界唯一 痳病消渇の根治確證新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ 藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢

郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぱうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視することと勿れ

特別製分 金五圓三拾錢
中瓶貳圓廿錢
小瓶壹圓廿錢

以上六藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

若き男女の不注意

顔一面に吹出物

ボツ〳〵のザラ〳〵となる

男女十四五歳より卅歳位まで顔に小さき吹出物がして中に黒點ある之を爪で摘めば白い脂肪の固りが出る。恰も蟲の様である。これを俗にニキビといふ。これは面皰といふ一種の病氣で、男子百人あれば少くも四五十人はこのニキビが出るもの故、世間の人は之を療治し様とも思はず打捨て置くが、これは甚だしき心得ちがひである。もし不潔物が着いて口が塞がると豌豆大に赤く腫れ上つて痛みが劇しくなり、もし又逆惡く局處に化膿黴菌が入つて膿を持つと嫌な臭氣を發して恰も癩病患者の様に汚くなる。長く治さずに捨て置くと慢性病となりて一生なほらず、時に自然と治る事があるが顏色が暗褐色に變つたり、色素斑が出來たりして終にボツ〳〵のザラ〳〵と柚の皮を擦る様になり人には嫌はれ良き結婚談も破れて一生の不幸の基となる。故に成るべく早く全治させる様にするがよい然し世の中にニキビ取りの藥は少くないが、其多くは無効であり時に有効なれば劇藥を加へニキビは治つても顏は反へて汚くなるのもあるから注意せねばならぬ。

然るに維也納醫科大學の教授兼皮膚科醫長ドクトルカポジー先生は苦心研究の結果ニキビに最有効なる合劑を發見し之を皮膚科講本に發表せられた醫學界では之を先生の名を取りてカポジー氏軟膏といつて我國皮膚科專門病院でも盛に賞用しておる。此藥は又ソバカスにも特効ある數多の人を救ひたるのみならず顏につけておても人には知れる程の色も匂もなく且其効能は著しい。殊に顏の色を惡くせぬ許りか幾分か美しくする副作用があつて見惡い痕跡を殘す心配などは決してない故にニキビの藥としては是以上良いのは恐らく世にない筈である。輕症用五拾錢、重症用一圓五拾錢送料各八錢、東京神田錦町三ノ二、高柳藥房へ代金を添へて注文すると送藥する。此藥あつて始めて青少年諸君は天性の美を發輝し得る事であらう。（振替口座は東京八六四貳番）

◎見よ!!! 若き男女の秘書出でたり!!!

第三版

最新美人法

第一 白色法
第二 美髪法
第三 美顔法
第四 治療法
第五 養生法
第六 化粧法
第七 服装法

色白くなるつけ藥飲み藥等實驗有効の方法十餘種を分りやすく詳説す外に藥品等を用ゐぬ簡單の良法數種あり
髮の毛を美しく柔かにツヤをよく長くする十餘種の方法
ト縮れ毛癖毛薄毛赤毛白毛等々治す良法其他種々詳述す
顏を洗ふ最良の方法眼口唇等の注意油顏赤顏青顏等を治する方法シワのよらぬ法歯を白くする方法を詳記せり
やせる法こえる法鼻高くする法聲をよくする法イボあざワキガひぜん田蟲ナマヅ其他秘密病の必治法を記述せり
根本的美人となる平生の養生法食物と美人との關係婦人病と顏色との關係其他睡眠運動の注意等を面白く記せり
化粧品の撰び方最新の化粧法鼻高く見せる法目を大きく又は小さく見せる法唇を薄く又は厚く見せる法其他色々
衣服の色合や縞柄の見分け法衣服裁縫の注意より着物の着方帯のしめ方に至るまで皆一冊中に分りよく記述す

●學理實驗上必ず有効なるを證す●定價送料共金廿七錢振替廿八錢切手三十錢

結婚前後 女玉手箱

●本書は有益にして且甚面白し
●定價送料共金卅四錢振替卅五錢切手卅八錢

●目次●夫又は妻を選ぶ注意●財產と學問●血統の善惡●近親結婚●自由結婚●無理結婚●早婚の弊害●晩婚の弊害●夫婦年齡の差●美人ならぬ妻●如何●妻の學問の利害●夫婦の相性●夫婦將來の和不和を前知する方法●如何なる結婚が最幸福なりや……結婚の習慣●法律と結婚●媒酌●見合の方法●結納の贈答●結婚と衣裳●結婚式の順序●結婚當夜の心得●結婚後の心得●結婚届……●夫婦身體上の差異●結婚後夫の衞生上の注意十二件●結婚後妻の衞生上の注意十五件●月經とは如何●月經時の注意其他頗る面白し……●子のある法●子のない法●子を持つ月のくり方●姙娠せし事を如何にして知るか●姙娠中の心得●姙娠中の惡食物●姙娠中各月の變化●出產した時の子の大きさ●出產の日を前知する法●子を產む時の注意●如何にせば安產するか●生れた子の取扱法●授乳の注意●出產届……●子宮病の話●梅毒の話●淋病の話●女子淋病の話●梅毒淋病の傳染を豫防する方法●夫婦の圓滿を害する種々の病氣の原因及療法……●或る若き女のザンゲ談●出產失敗談●ある女の日記等皆面白し……右の外目次數十項、皆青年男女必讀の好文字委細本書に就いて見よ。

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 學友社書店



創作



小説

水野葉舟選

○姉（天）

横濱市　しづな

お元は姉が嫁ぐ前の晩、其姉と一緒に、ランプと電氣の半々位な、寂しい併しコセ〳〵した通りつけた街を幾度も使ひに歩いた。もう大抵箪笥や鏡臺と一緒に細いものも送てはあつたが、水白粉や、クリーム抔と云ふそんなまだ買い殘した物を揃えるために、停車場の傍の店のあかるい小間物屋迄も行た。お元は、自分より柄の小さい、顔の美しい姉を、いつもと違た心持で時々眺められた。此度此親しい今迄の姉が、人妻になりてお客に來る時の事や又姉が自分の良人に對する樣子は何んなであらうと考へられた。三河屋と云ふ紙屋の店に心安い三ちやんと云ふ、五分刈にした中脊の番頭が向ふを向いて、店の眞中の大きい時計の、ネヂをギー〳〵卷いてゐた。「呼んで見ませうか……」とお元は姉の袖を引いた。「呼んだつてつまらない。」と姉はこう云ひ乍ら、それでも其前を、さう急いでは通らなかつた。

「姉さんが嫁く事を、彼人知てゐるかしら？」とお元は云ひ乍ら紙屋の店を通りこした。「何うだか、知らな

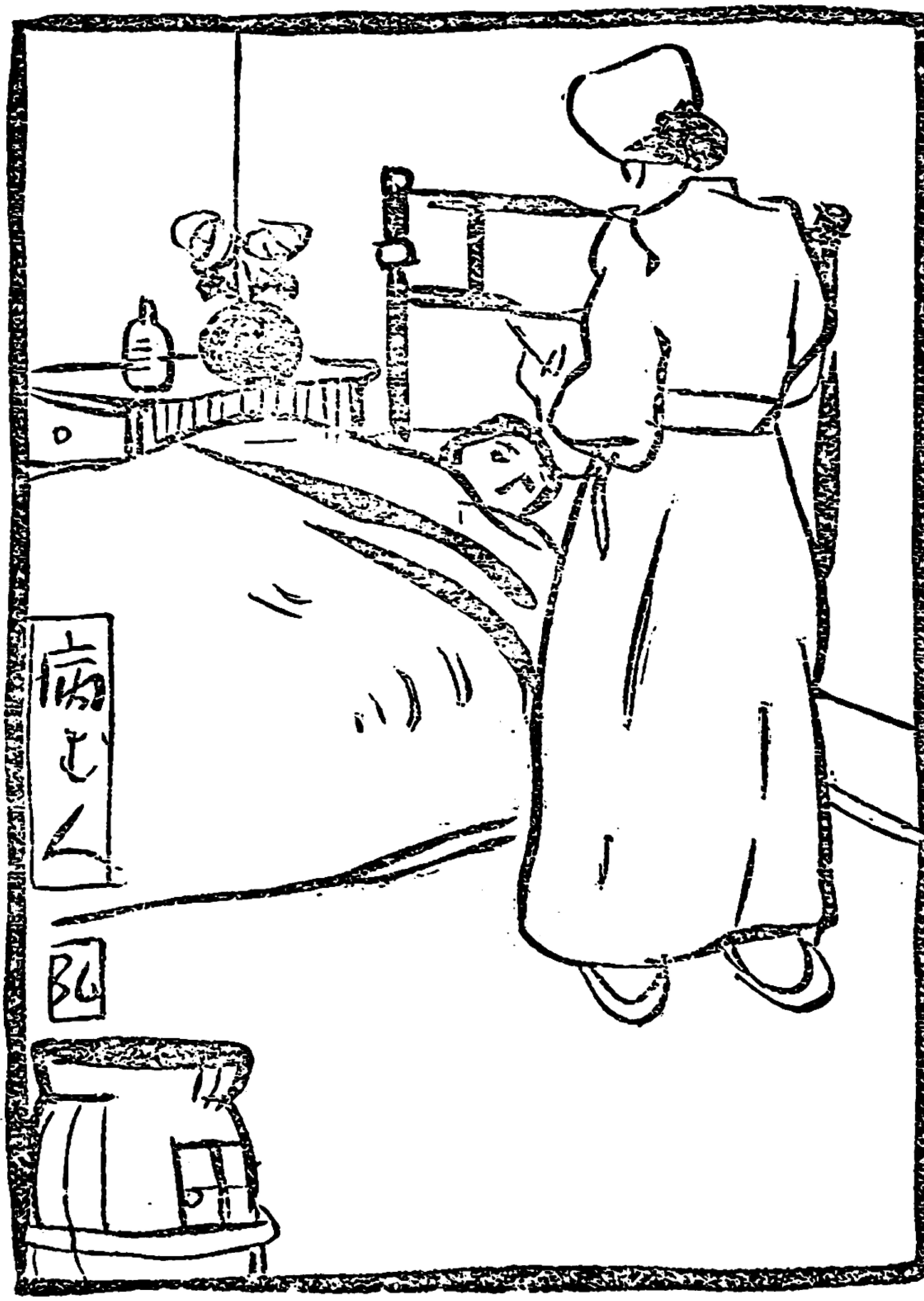
いかもしれない——默つておいで」「あゝ云やしないわ。」とお元は輕くけれど何となく淋しい氣がして答へた。

四ッ角を曲て暗い横町へ入ると、お元は「姉さん……」と呼んだ。「なあに？」と云たが、お元は默て歩いてゐた。お元は何か今の中に姉に對して長い間の我儘を謝したり、悲しい別れを惜しんだりする言葉を云て見たかつた。けれど何となく云ふ事が出來なかつた。其實心の中では泪がでる程の離愁を感じてゐたくせに。

「あしたゞはねえ……いよ／＼あしたゞ……」と暫くしてお元はこう云た。「あゝ今夜きりさ……よく毎晩こうして歩いたつけ……此街もなつかしいわ。だけど本當に今夜でおしまいだ……けどいつかしら、誰れでもおしまいの時が來るんだもの、どつちみち同じ事だわ……」と姉は云た。そして「私が嫁く事を成るだけ誰れにも云はないでおくれ……何故でもないけれど只さ……いゝかい？」と念をおす樣な調子で云た。「あゝ云やしないつては……」とお元は答へた。而して自分の家の前迄來ると姉は、「あゝくたびれて了た。」と云てそてに出てた涼み臺へ、ペッタリ腰をおろした。お元も姉と一緒に腰をかけて「本當によく歩いた……」と云た「あしたの今頃姉さんは、お祝言だわね。」とお元が云ふと姉は白い顔を少しあかめて、「家では佐藤や、末吉さんなんかゞ留守に來るて云ふから、又駄じやれを云て笑てゐるかもしれない……」とこう云ておいて「あゝ／＼……」と大げさな、溜息をついた。お元は姉が小學校時代から男學生や、若い人々に、直き何とか云はれたり、此頃になつても、五月ほど、續いた、勝村と云ふ銀行員との戀も、うす／＼知てゐた。夏になつてから、毎夜の樣に姉と二人で街を散歩してゐると、顔の美しい、髪をハイカラにした、姿のしな／＼した姉の樣子は可成り人眼を引くのが、お元には何となく、うれしかつた。そうして姉には、勿論、好いた人も、好かれた人も澤山あつた筈だのに、知らぬ東京邊りから突然縁談があつて、やつぱり外の娘の樣に、思ひも思はれもせぬ人の處へ、ヒョックリお嫁に行く姉の身の上が淋しい樣な、もう少し何うかしてやりたい樣な氣がしずにゐられなかつた。

翌日になると、姉は、高い島田を傾げて、自分のだつた机に向て、空になつた、抽出しから丸めてあつた紙くずを出て、ひろげそれへ短い鉛筆を、なめては何か書いてゐた。お元はコセ／＼用を仕乍ら何となくそれが氣になつてならなかつた。する中結ひたてのてら

てらした髪をした母親が、「何してゐるのさ、お新ちやんさあ早くお湯へお入りなさいお母さんが洗て上るからさ……」と常より優く聞えた。「そんなに急くには及ばん。もうやつて了ふんぢやないか、少しでも我家の娘に仕ておきたいもの……なあお新」と赤い顔の父親が向ふの間にゐてこう云つた。お元はそれが何となく悲しくきこえたので、眼をうるませ乍ら、ふと姉の方を見ると、今迄書いてゐた紙を眼に當てゝ、泪が頰へ流れてゐた——お元はそれを見たら、今更の樣にうら悲しい氣がして、窃と裏口へ出て、戸に顔を押しつけてすゝりなきしてゐると、秋ももう大分深くなつた樣な風が、お元の濡れた顔を吹いた。お元は何となく、今泣いてゐる氣持ちをいつ迄も覺えてゐ相な、或一種の懷しい感じがした。今それを明瞭に言ひ表はすことは出來ないけれど——。



（天）病む人　青山中村弘子

○クラス會にて（地）

信濃　優梨子

「まア家でも惡い番頭を置いた許りにとんだ目に逢ひましたわ」と桃割れに結つたAさんは優しく口を開きました。

裁縫の机を四角に列べて、其廻りへぐるりと坐つた十三人のクラスメートの眼は、一時にさつとAさんの美しい顔へそゝがれました。――××屋騷動！遂此間土地の新聞に騷がしかつた其事件の女主人公！其人の口から其話が今洩れ樣とするのですもの當然じやありませんか。

一體私達幹事始め誰も今日Aさんが出席なさるとは思ひませんでした。

廻り濟みになつた回章が机の上にあるのを開いて見ては、誰も

「あらAさんが、被入るの？」と意外さうに云つて、誰よりも一番Aさんは期待されました。

兎もすればAさんの噂さに花が咲いて皆は思ひ〳〵にAさんを色々に想像して居ました。けれど其想像は誰のも外れた樣でした。

「什麽も遲くなりまして、皆樣暫く……」と莞爾して入室つて來たAさんは少しも何時もと變つては居ませんでした。頰の色はいつもの樣に艶々して恰好の好い眉のあたりにも曇つた色は見えませんでした。

皆は什麽かしてAさんの心中を讀まうとする樣に、時々其横顔を昵と見詰めたり、まじ〳〵と正面から見入つたりしました。けれど誰も其話を云ひ出す人はありませんでした。わざと皆其麽事は忘れて居る樣な顔をして他愛いない事を云ひ合つては、面白さうにはしやいで居ました。其折ですもの。

「眞實にネまア」と口へ出して云ふ人もあれば、とんだ事でした、といふ樣な顔をして默つてAさんの顔を見て居る人もありました。

「新聞にも出ましたけれど、隨分今考へるとぞつとする樣ですわ」とAさんは落着いた調子で話し始めました。皆はAさんの話が切れさうになるとすぐ誰か問ひを掛けました。そしてAさんの小説の樣な話は長く續きました。

「えゝもう前から仕樣のない男でしたの、兄さんもどうせ望みのないのだから只おだてゝ使へ〳〵つて云つて居ましたのよ、手が無いものですからネ――。店の

品物はごまかす、集金帳は好い加減の事をする、もう幾度も〳〵其麽事は嫌な程解つて居たんですけれど、來年の春は年期が明けるんだからまア政治——番頭の名——も出世前だ〳〵なるべくなら立派に家から出して遣りたいからつてネ、不可ない〳〵つて云つても何しろもう家に九年も居るんですもの、それでまア我慢しく使つて居りましたの。まさか彼麽恐しい心とは思ひませんでしたわ……。え、彼の晩兄さんは宴會があつて歸りますと何時もさうした時の癖で胸元が惡い頭痛がするつて云ふものですから、何時も持藥に飲む××湯といふのを母樣が調合して茶の間の火鉢で煎じる爲に土瓶へ入れて掛けて置いたんですネ、そしてもう十時すぎなもんですから母さんも嫂さんも二階へ上つて床を敷いたりして居りましたの、私は便所へ行つて、出て來ますと政治がついと茶の間から店へ行く姿を見



(地)夕月　府下　井上もと

ましたれど、まさか〳〵其麼恐しい事をしたとなど什麼して思ひませうネ、お勝手へお水飲みにでも行つて來たんだろう位ひに思つて居ましたの、えゝ其時にストリキニーネを土瓶の中へ入れたんですのよ、なぜ其時土瓶が割れてゞも呉れなかつたんでせう……。茶碗へ入れた其煎じ藥を嫂さんが二階に寢て居る兄さんに飲ませますと兄さんは厭な顔をして

「お母樣、馬鹿に今日の藥は苦いですネ」つて云つたさうですけれど

「其麼筈はないよそれはお前の口の加減だろう」と母さんは別に氣にも留めないで居ましたら、一時間許り立つと兄さんは急に苦しみ出んでせう、私達はもう喫驚して大急ぎで醫者へ飛ばせ樣としてもまア其時の政治のぐづ〳〵して居るもどかしさつて無いんですの、それで鳥渡も早くといふので小さい春吉の方をやりましたけれどネ、後になればあれもこれもと思ひ當る事になりますけれど、よもや其麼事とは考へられないじや御ざいませんか。ネ！

醫者が來ました時はもう駄目でした。まア其間の兄さんの苦しんで居るのを見て居る私達の辛さつたら……亡くなりますと體軀中へ紫色の斑點が出來ましたの何でも藥の中毒といふので新聞にもありました樣に始めは母さんに疑がかゝりましたの。あれがもう眞實の親子でなかつたらもつとやかましかつたでせうネ。湯棺を使はせて棺へ入れますと、ひつきりなしに少しづゝ、赤い樣な紫の樣な黒ずんだ氣味の惡い色の汁が出るんじや御ざいませんか、それでまア棺の下へ蓙など敷きましたけれどネ、其蓙が證據になつて其汁のついたところを警察で大學病院へ送つてやりましたら、ストリキニーネの反應だといふ事が解りましたんですけれど……。

兄さんが居なくなると後は女許りでせう、それに嫂さんは實家へ遣つて呉れつて云ふものですから三十五日が濟むとすぐ東京へ遣りましたしネ（嫂さんといふのは元××家の千代香と云つて居たので、Aさんのお母さんは無論親類一同皆が不服だつたのを、兄さんは無理に入なすつたとかで、籍は這入つて居なかつたさうです三年にもなるのに、氣質は其麼人に似合はない優しかつたとAさんが云ひました。）

私と母さんきりになると弱り目につけ込んで、政治はもう好い氣になつて好な事をするんでせう。けれど今出られたらそれこそ困ると思ふものですから我慢の出

來るだけ我慢して居たんですけれど、たまには餘りだと思つて少し母さんが小言でも云ひますとそれは憤つた樣な顏して詫るどころですか一言も物なんか云つたものじや御ざいませんの、そしていつかぷいと出て終つて寢掛け時分歸つて來ましたり翌日なんかぶらりと歸つて來たりするんですの。

日常はそれは苦蟲潰した樣な不承面して居ながら時々私が帳場に坐つて居る時など、ぢろりと此方を見てはニヤリ〳〵と笑ふ其樣さつてありませんでしたの……

「あら嘘ですよ新聞には此×月養子が來るなんて出て居ましたけれど……。それを聞いて政治が自暴自棄になつたんだなんてネ……。兄さんが居なくなつてから母子は店のすぐ次の間へ寢ましたの。或る晩ひよつと夜中に眼を睡すと店との間の障子をびり〳〵とそーつと裂く音がするでせう、店は電氣を消しますから眞暗ですの、私は猫か知ら！とは思ひましたけれど「母さん〳〵」と小さい聲で呼びますと、それきり音がしなくなりました。けれど別に私は氣にも止めないで母さんにも云ひませんでしたら、それから四五日立つた晩に今度は母さんが其音を聞いたんですの、母さんはついと越きて店の障子を明けると、何か動いたものが暗い中にも見えたんですつて、それで急がしく電燈の螺旋を返すと、何も居なくて只政治が寢返りを打つ樣な風をして居たさうです、じや猫でも障子を破るのか知らと母さんもさう思ひながら何の氣なしに政治の枕元を見ると小形なナイフが落ちて居たつて云ふじやありませんか、母さんはハッとしたさうですけれど其まゝ床の中へ這入つて朝まで眠らなかつたさうです。そして翌日母さんはしんみりと云つて聞かせる樣に昨晩の事を聞きましたけれど、またいつもの樣に一言も、それてそウンともスーとも云ひませんでしたの。

それから二三日して私が帳場に居ますと政治は用から歸つて來て、店の先へ坐りましたから、

「政治、お前は私達を什麼か仕樣とするのかえ？」と靜かになじる樣に聞きますと始めは默つて居ましたけれど、

「え、政治！」と幾度も聞いたものですから、

「へ……別に什麼しやうとも思ひやしませんや、只喫驚させて上げ樣と思つて……」と例のぞつとする樣な氣味の惡い笑ひ方をしましたのよ、新聞ではさうして其切り破つた間から魔睡劑の附いた棒を入れて私や母を魔睡させて私を什麼かしやうとする積りだつたろう

と云ふ様に書いてありましたけれど、まアもし〳〵其麽積りでしたら……思つてもぞつとしますわ。まさか其麽事とは思ひもよりませんでしたけれど、何だか、氣味が悪いので、早く〳〵出して終つた方が好い〳〵と云ひながらも一日々々と延びて終ひましてネ、それから何でも二週間許り立つた忘れもしません雨の降る嫌な晩でした。其頃はもう癖の様になつて夜幾度となく眼を醒しますの、其晩も二三度目を醒してまた三時頃ひよつと眼をあくとパチリ〳〵といふ音が店の方でするでせう、それから私は喫驚して床の上へ起き上つて障子の塡硝子から覗いて見ますと、北の陳列棚と帳場の下から火が出て居るじやありませんか。「母さん火事！」と大きな聲で母さんを呼び起す、すぐ私は裏から飛び出して、もう夢中で「小父さん來て下さい火事です〳〵」とお隣りを起しましたの、まア其時政治はもうちやんと逃げる仕度をして居ましたつて、放火と見たお隣の小父さんはすぐ政治をぐつと捉へて終ひなすたの、ええ、もう政治が不可ない事など近所中皆知つて居りますわ。

火はすぐ消えましたさうですの、矢張り鹽酸加里に何か混せて政治が放火しましたのよ、ええ商業柄ですから好な事が出來ますわネ、すぐ報らせましたので警察からは巡査が二人來ましてネ、すぐ政治をつれて行かうとしますと、政治はもうちやんと度胸を据えて、鳥渡着物を着變へて來るからつて、二階へ上ると間もなく下りて來て今度は勝手へ水を飲みに行きましたから母さんが「何を彼方此方して居るんだえ！」と勝手の障子極に立つて居て云ひますと、水を飲んで終つて默つて出て來て、どんと思ひきつて母さんの胸を打つてつき轉ばすでせう、私は喫驚してあれーと大きな聲を出したもんですからすぐ警官が靴のまゝ上つて來てすぐ連れて行きました。母さんはじきに治りましたけれどまア其時の喫驚しましたつて……。

警察へ行つて少し立つと政治は急に苦しみ出したので什麽した〳〵と大騒ぎして聞きましたらストリキニーネを飲んだつて云つたさうです。ええもう是までと思つて彼の時勝手で飲んだんですのよ。

それッといふのですぐ病院へ入れて、毒を吐かせたさうですけれどネ、あとで犯罪が解つてから院長さんが「なぜ彼の時も少し澤山飲まなかつた」つて笑ひながら仰有つたんですつて、

其時色々聞き合せて見ると、兄さんの苦しみ方と政治のとがそつくりなんでせう、はて！と思ふともうはつと思ひ當る事許りなんですネ。それから警察の調べが嚴重になつて、確實な證據が彼方からも此方からも上つて來るんですのに、先達つての一囘目の公判の時は、もうすべてを否認して居るんでせう。私憎らしくて〳〵、もう什麼して呉れゝば好いかと思ひましたわ。公判の時餘程傍聽に行かうと思ひましたけれど却つて不可ないからつて云はれて止しましたけれど、甚麼顔して居るかと思ひましてネ……。えゝ明後日二囘の公判ですの、よく昔の探偵小説になんかにある樣に、私什麼かして隱れた處から大きな證據を見出して、もうぐうの根も出ない樣にして遣りたいと始



（人）病兒と母　ちづる

終思つて居るんですけれど……。兄さんの敵、家の敵ですもの……」

靜かに語り終つたAさんは、凝と瞳を落して俯向きました。

ほつとして始めてAさんから瞳を離した私達は、何だか體軀が堅くなつた樣な氣がしました。皆の前に列べられた番茶は、茶色に冷えきつて居ました。

母校の作法室なんです。床の間には誰やらの楠公櫻井の驛の軸が掛つて居ます。教育勅語と勤儉勅語の額が北の壁に、卒業生合作の歌や畫の額が周圍の壁に三つ四つ掛かつて、南の窓際には、去年私達が紀念に植へた彼の芭蕉が、青々と大きく繁つて居ます。

恐しい暗黑の渦巻の中に漂よひながら、遂に危くも逃れ得た其人から、此一條の物語りを聞くには、あまりに周圍の空氣がかけ離れて居るではありませんか。

私の胸には、何か斯う、云ふに云はれない强い或る物が殘されました。

○お神樂（八）

東京　貞枝

「おかめ、ひよつとこ」龜代はムッとして「何ですつて、覺えておいで」云ひざま持つてゐた箒木で弟を叩き付ける、弟はまた敗けては居ず武者振つく。上を下への騷ぎに「龜！朝つぱら何ですッ」何時も龜代が叱られて了ふ、貰ひ子の僻に……そう思ふと口惜し淚がほろ〳〵落ちる。

「五郞さん、お起なさいよ」と龜代が怖々し乍ら呼んだ、五郞は今朝に限つて機嫌よくムックリ起上つて、窓をあけて外をみた「稻荷大明神」といふ幟を眺めてさも安心した樣子だつた。

「松本さーん」と友達が五六人迎へに來た、其中に容姿の好い女の子も雜つてゐた、龜代は今日許りは心から五郞を可愛いと思つた、そして袴をはかせたり、本を數へてカバンに詰めたりして學校に急がせた。

妾の子……それを裏の駄菓子屋の婆さんが、絲樣に話した相である、其麼筈はないと思ふけれど……でも若しや……矢張弟は弟だもの……龜代は怎麼事を考へ乍ら五郞の單衣を縫つて居たが、揚をするばかりになつたので、着汚した綿入をとつて計つてみたけれど、これでは當にならないと思つて茶の間へ行く。

「かあさま」斯う云ひ乍ら這入るとそこには誰も居なかつた、六疊かもしれないと思つて引返して來ると、

母の弱々しい咳が聞える。龜代はこれをきく度に自分の肉を殺がれる樣に思ふのであつた。

母は恰度電話を離れた處なので「何處へ」と尋ねた、伊勢丹と聞いたゞけでもう微笑が上つた「お前達の浴衣とね、わたしも眼の保養にと思つて少し許り云ひつけてやつたの」「まあうれしい」と龜代は母の脊を押す樣にして茶の間へ行つた。

お午近く牛込の伯母が來た、龜代は手をさし伸べて下駄を直し、洋傘を引寄せてすぐお茶を入れて持つて行く。お辭儀をしたなり坐つてもじ〳〵してゐた「まあ龜ちやんの大きくなつた事、何歳になりましたえ？」

「厭な伯母樣、被居る都度年勘定のお浚なんですもの」俯向て小さな聲で云つた「さ、お相伴に一つ」と母が菓子を取つて呉れたので、庭ばかり見乍ら喰べた、しつこく甘つたるくて、咽喉がチク〳〵くすぐつたく感じたのでグッとお茶を飲んだ。

伯母は急に母の方に向直つて、何か云ひ出し相に見えた、龜代はガンと岩にでも打付つた樣な氣持で、ポチが吠へて居るのを好い機會にふいと起つた。

「私の事ぢやないか知ら」と氣をもみ乍ら廊下を往きつ戻りつしてゐた、下女のお峰が物干場から下りて來た、額顬に梅干をペッタリはりつけて居る、意味ありげな顔色を龜代はそれと察して「あら、然う」と眼で答へて、思出した樣に帶の間からゼムの袋を出してビリヽと引裂く、お峰は掌を擴げたまゝ、また買つたのかと驚いた。

龜代の藥好きと來たら大變なものであつた、母と買物に出たとき、藥屋の前でも通ろうものなら最後、ピタと足を止めて「ねえ、清心丹でも可いことよ、よう！よう！」とせびる「困つた娘だね、好きにも程がある疳の故ぢやないだろうか、あまり喰べると毒になるよ」と塞むい樣な顔をした。

伯母は歸りしなに「泊りに來ないかえ、土曜日だもの可いだろう？」と云へば五郎はだつて「お神樂なんだもの」と首を振つた「成程ネ、前を通つたけれど氣がつかなかつたよオホヽ」母と顔見合せてわらつた「何かお土産をと思つたけれど、あんまり急いだもんですからね、これはホンの少し」と手早く紙に包んだものを下に置いた。

五郎は三味線をバラン〳〵彈いた、龜代は新聞をたゝみ乍ら「眞實の事をおし」と上眼で優しく弟をみて、序にぐるりと見廻した、何時の間にか大勢友達が來て

居る、一番年嵩のが「五郎君、劍舞をし給へ」と慫む樣な口吻で云つた。

「ドヤーン」と濁つた重苦しい大鼓の音がした時、龜代は奈落のドン底に引摺られてゆく樣な、何とも云へない程不快だつた、けれど小供達は大悦び「其麽にうれしくつて」との問に「當然だい」と云ひすてゝ外にとび出して了つた。

眞白に晒された、石の狐のよだれ掛も、今日は新らしい桃色木綿のと取換へてあつた、お燈明が赤々と輝いて、お三方には御供だの野菜がうづ高く盛られてある棟梁を始め仕事師の誰彼が二三人控えて居た、五郎はキマリがわるかつたので、ちよつと拜む眞似をして逃げてきた。

* * * * *

頭の五郎さんといへば、界猥で評判の愛嬌者であつたそれが今「五番」と白く染め拔いた印絆纒をきて、いそ〱と舞臺の提灯をつけ等して手傳つてゐる小さひ姿に、見物人の視線が集まつた、小供連は待ち倦ぐんで「五郎さん、未だかよー」と口々に叫んでゐる。先刻富藏や民次郎に「イヨー、五郎君の萬歲！」などと盃を左右から差出されたので、頬がさくら色にホンノリ染まつて居た。

馬鹿囃子は一しきり油が乘つて、氣が浮き立つ樣。五郎はもう面白くてたまらなかつた、只無茶にはね廻りたかつた、で小首を傾げたまゝ考へた……踊つちまをうかしら！……いつその事！！。恐ろしい面を被つた、鬼みたいなものが、幕の蔭からヒヨコ〱と現はれた……五郎はそれを知らなかつたのである。

◎老

土佐　譽田順子

「何と云ふても今の品物とは、質が違ふげに喃、此品なんども、爺樣がお江戸通ひをしよつた頃、殿樣から頂いた物ぢやが下着にでもならまだ着られるろうど思ふて喃。」隱居は、もう古い茶大名の縞七々子と蛟絣大島紬の羽織と着物とを打ち返しみて幾度もこう云ふた「へえ、道理でお見事なお品でござんすこと！。」お久は感心した樣にこう云ひながら丁寧に風呂敷に包んだ「私は何樣しても今の女の縫ふた物は氣にいらん、筬だの鏝だのちうて着ん前から、すり切つたり燒きつけたりして喃。」「へえ、そうせんとどうしても手際が取れ

ませんで、な。」「何様か知らんが無益な手間のう、女學校出、ちうたら何ぞ優い者の様に聞えるが、玉蟲も手に取れば光落つ、ちう道理かも知らんけんど、字だて縫物だて人前へ出せるが様な物はようせんわよ。」隠居は勝手元にゴト〳〵何か刻んでゐる嫁をジロ〳〵見ながらボッ〳〵した調子で蔭口をきゝ初めた。お久はぷーつと吐いた白い煙に目をそらしながら中らず障らずの返事をしてゐた「お家らあ、よござんす、な、お米の値が減法出て。」「あ、けんど私處は此暮、十六圓したにもう此様値は無いちうて、爺機が無理に賣つて終ふたは。」

二人は暫く世間話しをしてゐた。時計をみると、十一時を撞つて大分廻つた。「へえ、又上りましよ、お邪魔しやして。」お久は上り框を降りて

「まあ一寸待つて、嫁よ、早う飯でも出さんか。」隠居は六敷しい顔をしてこう勝手に聲をかけた。

「いんゑ、また……。」お久はもう下駄をはいてゐた。

「飯でも上げんならんにどうも氣が利かんでのう。」「いんえ、有難うございます」「それぢや忙がしかろが、今日は午の日で好い日柄だで脊縫だけでもして呉れる様にの。」「へえ、ようござんすとも。」お久はこう云つて、外にでた藍色に晴れた高い空にはもう美しい初秋らしい潤が流れてゐる。鳩の胸毛の様な雲が、フッ〳〵夢の様に動いて行つた。それでも正午に近い日は、夏の名殘を何處かに帶びて、白く乾干びた道路を可成強い色彩に染めてゐる。お久は暫時歩いては、



公園にて　茨城　花岡千代子

杖に縋つて腰を伸ばし、伸ばし、して歩いた。
歸つた時はもう十二時を過ぎてゐた。「松次ようッ松ようッ。」お久は皺がれた聲でてう息子を呼んだが、松次は障子を明けたまゝ何處かへ出てゐた。お久は小椽に腰を掛けて帶を解いた、そうして今日請合ふてきた着物を出してみた。隱居は妙に癎性な人で襦袢から帶までよく知らぬ人や若い女に縫はした物は氣持が惡いと云つて大方お久に賴むのだ。お久は夫に別れて二十年と云ふもの此場末の小い家に若い時から覺えのある裁縫をやつてきたのだ。お久は思出した樣に立上つて竈の下を焚きつけた。脊は汗でジメ〱心地が惡い、火は燃えない。

お久はふと、普通ならもう孫の子守でもして呑氣に隱居暮しでもできる、此年でまだ賃仕事なんかして、白痴な息子を飼ふて行かねばならぬ、其自分の慘めさがしみ〲胸に湧いてきた。そーして八年程前、家出をした夫の連子のお竹を、ふと思出した。お竹は大工の親方であつた爺父によく似て、ハキ〱した蓮葉な女であつた、それだけ氣もつくし、裁縫でも髮結でもよくする器用な女であつた。「私處のお繼母樣もね、此頃は大分開けて來たのよ山出のせいか、妙にふすぼつた面白うない人だつたけどね。」お竹は繼母の前でもよく客に此樣事を話しては面白がつてゐた。お久は、くすぐつたい顏をしかめて何かにつけて辛く中りもし、すねた樣な仕打ちもした。然し心の中では五分の隙も無い程よく氣を利かして面白うやつて行くお竹は、怜悧者だと思つてゐた。それはお竹が十九の秋であつた隣の散髮屋の息子と馳落をしたのだ。最初に男の方から人を仲に立てゝ云つてきたが、お久は何樣しても聞き入れなかつた。「彼樣云はでも可かつたに、此樣時、せめて、お竹でも居ら便りになるに。」お久は思出しては泌み〲てう思ふも詫言さへ云ふてきたら快く此家を二人に續がしてやろうに、お久はてう呟いた、が然し、今は朝鮮に立派な散髮屋をやつてゐると聞く、お竹が關係ゝ深くない自分の家に歸つてくる筈も無い！てう思ふと、詫びしい便りない淋しさに胸は暗う包まれた。それでもお久は自分から訪ねてゆかうとは思はなかつた。「人の噂は、的になるもんか何處の世界に道路に金の轉つてるもんか、今に困つて戻つて來るかも知れん、其時にや充分世話してやるが……。」てうも思ふてみた。お久は指を繰つてみた、「もう二十六か七になる。」お竹を懷ふ度にまだ二十に足らぬ若い姿が浮ん

でくるが今はもう可愛いかつたあどけなさも失せて世帯染たコセ〳〵した古女房になつてるだろう」てう思ふと「訪ねて行た處で他人がましい面するかも知れん」便りないお久はてうも思つてみた。

「お母！飯ア！。」松次の頭ばかり大きいコタ〳〵した顔が臺所の口から表はれた。「己、今日田中の若さんと比島の別嬪さん見に行たせ、ちつとも出て來んで、己が木遣歌ふたら出て來るちうて己ら必死でやつたに恥かしちうて何様しても出ん、己ら今晩もみにいくせ。」松次は忙しそうに飯を掻きてみながら得意そうにてう云つた。

お久のくぼんだ瞳には我知らず涙が湧いた。

○暗き運命

牛込　さか江

朝の御飯の時に、何か言て笑たひよう子に、プッと貞子の口から御飯が一粒とび出して、側に坐て居た、次郎の茶碗の中にはいつた。

「あッきたないッ」と次郎は持た茶碗を、投出す様に置た。貞子は未だはいつた事を知らずに、母と二人で「次郎さん何うして、え何が居て」ときいた。

「きたない！貞アちやんの口の中の御飯がはいつた」

「あら御免なさいよ」と貞子は、情け無さ想な顔してあやまつた。

「嫌やだい〳〵。母さん、僕食べ無いよ」と次郎は、十五にも成て居て全で五つ六つの児の様に、意地惡く駄々をてねた。

「貞、お前食べておやりッ」と母親は、尤もだと云た様に貞子の前に茶碗をつきつけた。

「えゝ」と小さく返事した貞子の目は熱い涙が、いつぱいにみなぎつてた。母子は平氣で、御飯を終へて出て行た。其の後姿を、うらむ様に見送ていた貞子は母子の姿が椽側づたひに奥へ見へ無くなつた時に、バッタリ其處へ泣き伏した。

貞子は丁度、七年前、高等科二年の天長節の日に、多勢集まつた、式場で卒倒して以來、年に幾度と無くの發作に、其れからは多勢集まつた處などへは決して行かぬ様に仕たが、頭にズキ〳〵と感ずる様な事を思たり聞いたりすると屹度、おてるのだつた。

此の長い年月、世間の人に癲癇々々と爪彈きされて家では、無悲悲なまゝ母と、腹違ひの弟とに、いぢめられて、いぢけて育た、貞子は二十才を越しているの

に一寸見て十七八とも見える、色の眞白な、むしろ青い紅味のちつとも無い、其れに大きな、ギヨロツとした輝きの無い眼を持た女だ。

貞子は、やつと涙をふいて、亂暴に成たおぜんを、片づけ始じめた。そうして、次郎の食べかけの御飯を見て、亦しても止めでも無く涙が青白いほゝを傳ふのだつた。貞子は次郎の食掛を思ひ切て、猫の茶わんへ明けて、「たま／＼……たま」と奥に氣づかぬ樣に小さい聲で猫をよんだ。

其の立て居る頭の上で螺施の緩んだ時計がだらし無く八時を打て、貞子は彈かれた樣に、そゝくさと登校の用意をして、臺所口から表へ出た。

貞子は家に居ても、三度の食事の世話の外、別に用事とても無いので、父は不具者の可愛想に、せめて、生涯自分一人で口をのりして行くだけの手藝を仕てんだらと三四年前から、家から程近い知り合ひの中なる某手藝學校の裁縫科に入れて有るのであつた。

其の日の第一時間目は修身だつた。貞子はいつもの樣に裁縫科で一番年下な春野と竝で、先生の話しを、熱心に聞いて居た。貞子は、朝の母と弟との仕打を、口惜しい口惜しいと思ひつめた處へかたくるしい修身の話しなど聞いたせいか、妙に頭がズキ／＼して、ともすると、ウツ／＼と夢心地に成るのを強て心を引しめて聞いて居た。

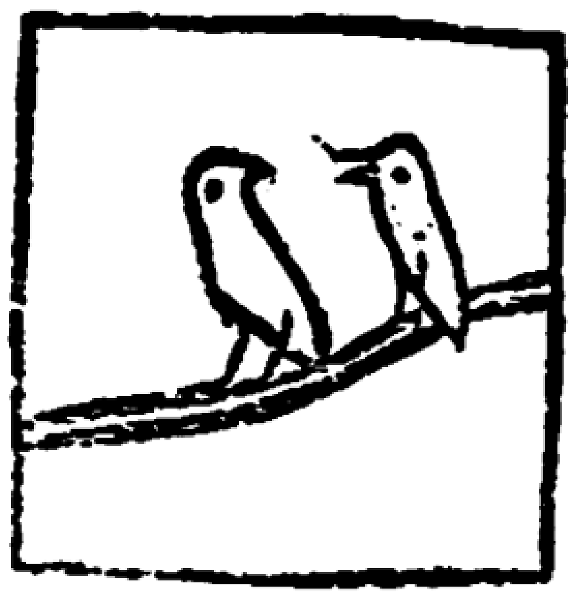
春野は「あツ」とおびえた樣に叫んで、つと席を立た同時に靜で有た、敎室が急にさわがしく成て、生徒は總立ちになつて、「春野さんどうして／＼」と同じ樣にきいた。

「あれえ！辻さんが辻さんが」と春野の聲にみんなは一樣に貞子の方に眼をうつした。

貞子のあたりの者は「あアツ」と春野と同じ樣に叫んだ四方へとび退いた。貞子は、ドンヨリした大きな眼を、一層大きくしてぢつと修身書をみつめた儘、しまりの無い口元からは、ブツ／＼と泡が出て居た。其うしてついに本の上につゝ伏して仕舞た。

「原田さん、おひやを／＼早く……」と先生に注意されて級長の原田は「はい……」とあはてゝ下へ降りて行た。「原田さん鹽水ですよつ」と後から云た先生の聲はきこえたか何うか、やがて原田は水のいつぱいはいつたコツプを先生の前に置た。

先生は、おちついて後にまはつて貞子をぐつと、引おこして、顔へプツと吹き掛けた。（つゞく）



散文

編輯局選

○この心(天)

東京 ふさ子

夢のやうな日が幾日かつゞいた、本もよまず筆もとらずに只ぼんやりと坐つたきり、思ふやうに泣くことさへ出來ぬ、語るべき友もすてゝ去つた、旅まくら磯の香の強い落陽の紅い漁村へと、友はつれなく行つてしまつた。塵萬丈の都の隅に油責めの苦痛になやみ、何ものにか引づられて辛うじて生くる凄まじいものを誰があはれむ顧みやうぞ、家をすて親をはなれ、名も棄てゝ漂泊の生に、入らうとしても決行しがたい弱いこの我を叱するは良心かはた誘惑か、混沌として見果てもないうき世、風にくづるゝ砂山のはかない人わざとは知るけれど。

愛するものともはなれねばならぬ、離合集散、會者定離、定めなき世に何を求む、淡い一夢にすぎぬのではないか、一切を超絶して客觀的の態度に、と思つてもなし得られぬ。表面丈ならどんなにでも欺いてやつてのけられるけれど、この内心の不安の念をどうして我と僞はり終らう、弱き者よと師ものたまうた、かよはき女！ あゝほんとにさうなんだらうか！

徹底して考へられもせぬ、情の子と一と口に云ふけれど、やがてそれは自制力、決斷の乏しいのを意味する、心靈、形象のいづれの上にもおさへ難い慾念に驅られて沒常識な行爲にも出、人を泣かせも煩はせもした。

ま夏の頃圖書館の樓上に一冊の本も借りはせず、頬杖して考へに暮した、そんな日も多かつた。急に刺戟されたやうにはでな御召を裾長にきて白つぽい帶をお太皷に結んで、街をぶらついたことさへあつた。動搖して止まぬ若い心、それを危險とみる人もあらう、いましめられる師もあつた。

があゝ行くところまで行かねば滿足は遂にされぬのだ、こんな時期もすごさねばならぬ、必然的な經路と云ふ、私は何も解つてゐる、甘んじて氣まぐれを起し平凡をはなれた所爲にも出やう、解してくれぬ世の人に何を求むる、馬鹿ななやみ——あゝあまりといへば意生地がない。

一度去つてはいつまた來やう、處女時代の自由な身體！　あゝ何ものゝ權威か我をとらへる！　とは云へとはいへ過去の習慣の、我身を包んで解けぬもの。

白百合をなつかしんだは昔の夢、すいくとしたコスモスの姿、それもいゝが今のこの身に取つては、あまりに單純な花としか見えぬ、あんな花に宿る水つぽい情を何で私に受けられやう。

あゝあさは　　紅を戀ひ
　ある宵は　　薄むらさきをよしとみる

「時」はすべての破壞者と云ふ、破られぬうち若き生命をせめてうらみなく味はしめてよ。

いつ死んでも恥を殘さぬやうにと一切の書きものを燒却した時、若杉はま子の髮束なふ字で書いた第一信を見つけ出した、今のやうになつて來るまでには長いこと困らせられたがよく天地も引くりかへるやうなことを言つては漂泊したい放浪したいどこかで死んで了ひたいと訴へられた。女が放浪の旅に出りやよく行つてホーカイ屋が落ちだと、しまひには呆れてたゞ見てゐた。この頃は言はない。この君も漂泊の世に入りたいなんて言つてゐるが、女に何がし得るもんかやつぱり默つて見てゐやう。（Y）

大分議論に根柢が出來て來た、私は今まで多くの女の人が、砂上の樓閣のやうな自覺說を弄してゐるのを見て、人事ながら危なかしくつて見てゐられなかつた。如何に浮薄な抽象論を振りかざしても偉大なる科學の城壁を破ることは決して許されない。多才君の如き人が、餘所ず廻らず眞面目に研究の地歩を進めて行くことは、大に欣ぶべきことであると思ふ。（H）

〇山百合（地）

たま　山の女

蜘蛛の巣や草の葉にたまつてゐる露が、小供の拭ひ忘れた涙を見るやうなおどけた感じを起させる明るさと冷さとを含んでゐるだけ七月の大地は濡れながら湧いてゐる。

重なり合うた栗の葉のむしむしといきれる門口を出て私は行きまどうたのである。

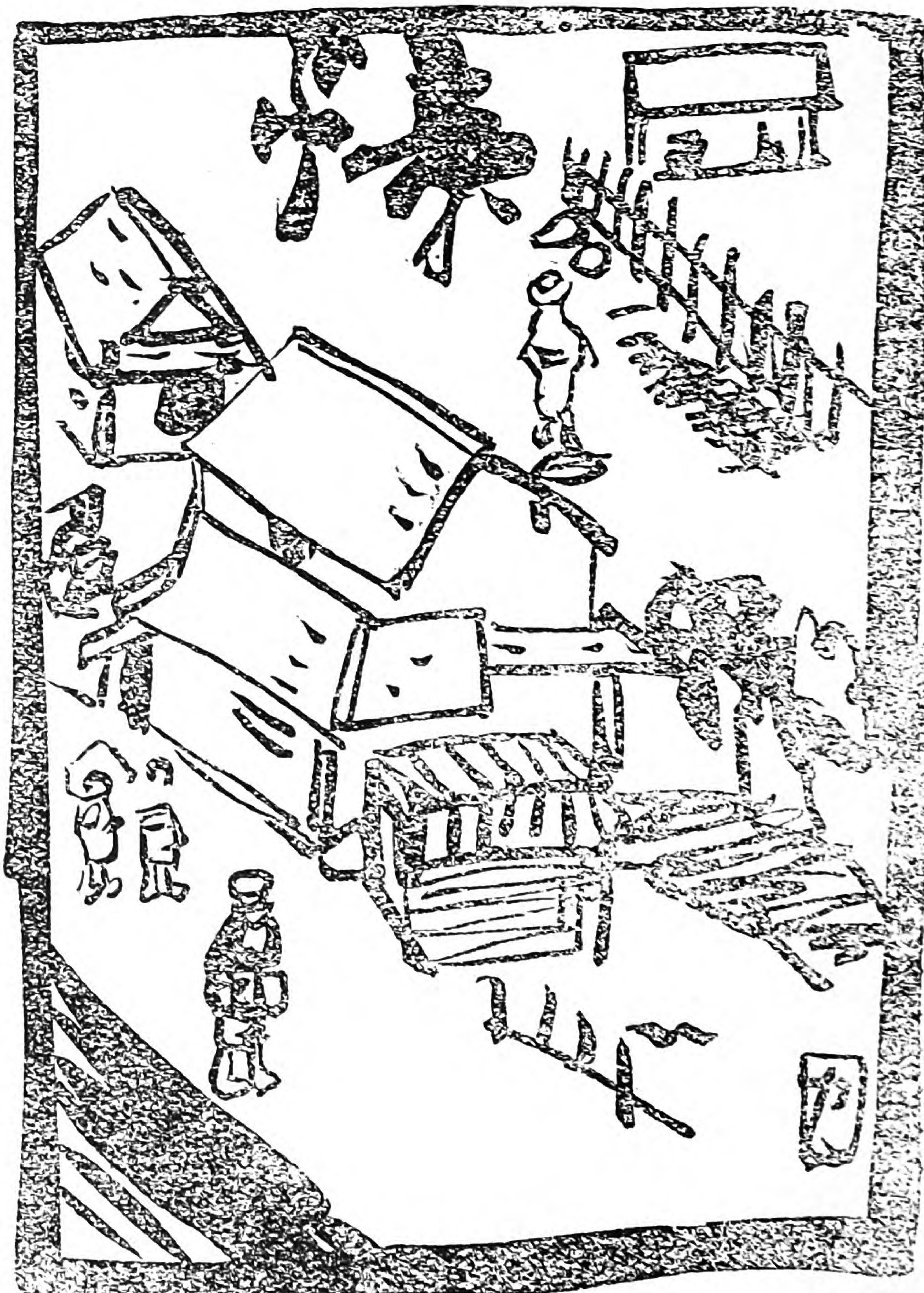
廣い道にまでまでしてゐればこんなお天氣でも用のある人は出歩くし、こんな山の中でも商人などは見のがさないではひつて來るし、田舍の習慣として知らない人にでも言葉をかけられるばかりか、自分が知らないでも先方が知つてゐれば默つてゐると工合が惡いなどあまりばかばかしいと思つて、人が見えると引込んでしまひたくなる。

狹い道は露つぽくつてとても裏の山へなんか行けない。まだ枇杷も殘つてゐると思つたけれど、私はただもう少し外に居たい。

しばらくの間じつと立つてゐると、かすかな水車の音が自然と耳にとまつたから、とこへともなしに隣の

庭から急な坂を下りた。やつぱり狹い道だけれども、兩側の草がきれいに刈つてあるので足の濡れることはない、行き詰りに小さな絲揚げの小屋が建つてゐて、白い絹絲の間を置いてからまる「揚げ枠」の風を切つて廻るのや、肥つた女が二人、下に置いてある小さな枠をとつて絲の口を見つけたり、兩手の指を面白く動かして目に見えないものを接いでゐるのが、窓からさす水車の水へ反射した明るい光線によつてよくわかる。

ふと川の手前の自然の堤になつてゐる坂に、かつきりと土の色をあらはしたくの字なりの道があつたのに氣がついた、どこへ出るか知らと思ふ間もなくのぼりはじめた。



驛のちかく　山口縣　糯畑　かの子

やつとのぼつて見ると、まだうす赤い毛の先がちよつと出たばかりの玉蜀黍の畑であつた。こゝも畑かと思つたが別に失望したのではないただ歩けるだけ行つて見やうと思ひながら疊の縁より細い土の柔な道を進むと大きな屋敷あとらしい草むらに幾十本の山百合が群り咲いてゐるのである。咲き狂うてゐるのである。雪白な焰とでも言ひたいほど強烈な香を霧の如く吹きかけられながら、美しいと呼ぶよりは淋しいと叫びた

い何だか夢のやうな――私の見る淋しい夢の心地がしてきた。

肩を抜く高さの莖が、五つも六つもの花の重みでみんな弓なりに曲つてゐる、淋しい花といはうか、幸な花といはうか、こんなところへ紛れて來た自分はたしかに淋しいのだ。

側には覗くことも出來ない高い崖があつて合歡や楓の若木が、流れてゐる水を蔽ひ、危險を包んでゐる間に擱い葛の葉が蔓でと風にゆれてゐるのを見たらもう秋だといひたくなつた、泣きたくなつた、早く秋になつてこの花が誰にも摘まれぬうち散ればよいと思ひながら一花も取らうともせず、空が暗くなるとともにそこを去つた。白地の袖に寳丹色の花粉をしたたか附けられて。

私はこの人のくさゝれてもうろたへず、褒められてもさわがず、一歩一歩地平線よりぬき出てて來たことを祝着とする、最後の勝利は眞面目なる者に歸す、天幸は病める人に多し。（太郎）

此君、確に文章家たる資格はある、只何處となく引立たぬところがある、これで、さえ〴〵としか處が出て來たらしめたものだ（醉茗）

○母のお産（人）

千住　白妙女

今日で丁度三日目になる、昨日より今日と粥の煮方も産婦の御世話もなれて來た、可愛らしい口でちゆうちゆうと乳房を吸ふ愛らしい、ふつくらとやわらかな頬、紅葉のやうな手、私は抱きしめて頬ずりしずには居られない、今朝は母樣玉子にお汁を少し召上る、乳の出るやうな食物を産婆から注意されて居るので、毎日行ふ、涼しい内にと思つて襁褓洗ひに井戶端に出た中々ほねが折れる、私も此うして育てられたのだと思へば、勿體ない、子を持つて親の恩を知れと言ふ言葉が、やうやく身に染みて、胸に浮ぶ、親の恩はあだやをろかに思はれた物でない、一日增しつくづく有難さがわかる、私を生んで育てゝ下すつた母は、末の弟を生んで、百日程たつて亡くなつた、幼き私は何一つ母の手傳ひも出來ぬ中にして、母は逝かれた、年長けし今思出す心發りは、其れである、今頃まで永らへてお在せばやと思へば、追想の涙は茶色の水の中にぽたぽたと惜げもなくして落ちかゝる、細かりし指はやゝふし高くなり、終日物干に上りて黒く日に燒けし顔は、我れながら鏡に向つて不快を覺ゆる、日增しに荒む我が姿形や顔、悲しさに涙こぼるゝも幾度か、されど此れも眞の母に仕へる如く、今の母に恩返しの萬分の一もと思つては何の日にやけたのや見苦しき姿位愚かな

て、誠心から御世話せねばならぬ、母様が日日私の疲れを慰めて下さる御言葉や、優しく愛して下さる御心持で、私は何も彼も苦を忘れる。生の親にも比して此を背いて澄まない、今日は少し曇り日なので、お襁褓の乾かぬのが心配になる吉崎樣の小母さんがめれんす友禪をお祝ひ下さる、めれんすやちりめんはもう澤山だから他家のどこかで、糸織か銘仙でもよいなんて私言つて、父に叱れた、母の



芝居を見る女　　横須賀　　上原しげ子

實家から産着二枚に時色縮緬のしでき届いた、下着はじみなので氣に入つたお髪が亂れたので靜かに結ひ直して上げた、血の氣の失せた青白い顔にはらはらと後毛が掛る、今に其毛が情けない程拔けるのですよと仰有る、まあ私は初めて伺つて何だかすくのが恐しいやうな、悲しいやうな、そして心細くなつた、ふがや

ふがやあと忙しなく泣く〳〵、おゝよちよちと私は抱き上げてゆする、ぱつたり泣きやんだねーお母あさん此んな心の赤子でさへ知つて居るのですねーつて、私は言ひながら見えそうな目で私の顏をじつと見つめて居る赤ん坊にそつとさゝやいた、罪なき愛子よ、淸き美しき魂よ、お前は母の御ひざに抱かれて限りなく愛されよ。

あなたも末は良い母さんになるでせう(辭君)
此文を讀むと美しい情味の中に融け込んで行くやうな温かさを感じる、うれしい文だ。(白羊)

○蘇生法師に捧ぐる書

東京　ひばり

山田邦子さんが日比谷大神宮で結婚なすつた。法師樣、また的が一つふえましたわね。しかし……

私共は結婚しては惡いのでせうか。女は結婚する爲に生れたのではないでせうか。私共は父と母とにより生れました、二つが一つになつて完全なる人間が出來るのではないでせうか、結婚は果して罪惡でせうか、罪惡ならば私共の生きてるのも罪ではないでせうか。

いつか『欺かざるの記』から拔いた失戀の苦痛を述べた文を見せて下さいましたつけ、あれをよむと今でも湧き立つ血もしづまり、憧がれの心も消えるやうな苦しい苦しい壓迫を受けます。國木田さんは、あゝした痛手を負へるために、女子禽獸論者となつて死に至るまで罵倒の聲を絕たなかつたのでございませう。蘆花さんがよく奧樣を御打擲なさいますのも一つは失戀から來る憂鬱のせいだと申すではありませんか。御許し下さいませ。あなたも女子を信ずることのできぬ事情があつて溫かなお心が冷えたゝめに同情の目で私共を見ずに、裏をうらをと暗黑面にばかり注目なさるのです。いゝえ本當です。ちたび悔い、百たび慨いてもつたなく生れ玉へる御身の不運はとりかへせませぬけれど、御心だけも、どうかして平和に終つて頂きたうムいましたに……仄かに聞くとあなたが咯血したその血を下さいとお願ひした方があつたけれど、やはり茶にしなすつたうへ、太田きし子さんと河野槇子さんが十日ほど御看護にまゐらうとしたのまでにべなく拒絕したと申すではありませんか。

一人を以つて萬人を律する無法さは今申しませぬ。思ひもよらぬ皮肉をあびせられて、まつかになる口惜しさも默しませう。平塚さんと同じに三宅さんと私とを丸髷にして旦那樣と手を引いて御散歩の圖を描いて

下さるような先生だから、どうも苦狀をかつぎ込んでも相手にはなつて下さらない、近く私も出雲の大社へ參ります、見せろと仰しやれば、丸髷にでも片はづしにでもなります、ざんぎりでも、坊主でも……

……ホ……坊主になつちやあなたと間ちがへられますわね。

そりや、考へればばからしう御座います。『賢き妻の眉はつねにひそめり』と教へて下さつた事もありますが「閨房を以て天國なりと思ふ」ような男に行つては全く立瀨がありませぬ、泣いても〳〵泣き切れぬのは女の運命である、女に生れたくつて生れたのでもないのに三界に家なきは今も昔にかはらず、さうはえり嫌ひばかり言つてもをられませんし、たうとう私も穽に落ちました。

一面、先生の惡罵を、去々とは思ひながら、なほ眉を伏せて頭上にはためくいかづちを聞く心地できいてをります、これまで躊躇したのは結婚を恐れ人を恐れたからではない、私は私の行くべき道を行かうと思つたせいである、一度ならず破れた心を守つてなほ最初の人を待たうとしたので御座います。

けれどはかないは女の年ではございませんか。うひうひしう島田に春をかざれど、私も邦子さんと同じ二十二の齢ひを重ねました、急ぐにはあたらぬながら身の衰へを鏡のかげに見るとき戰慄されます。つまりは人にやられる女の身である嫁期を過した慘めなゝりをして居るよりか今ゆるさう



雁の聲　千葉縣　荒木秀子

戀する事が罪でなければ、結婚も罪ではない、と立派に覺悟しました。母は泣いてくれました。

罪惡ではないけれど、結婚はたしかに處女の亡びを意味します。不斷のキスや常住の抱擁や、行くところまで引ずつて行かれてどんなに苦しめらるゝことでせう。

「足の爪ぢや勿體ない手なら切つて頂きます」と言つたり、「この子と私とどつちが可愛いと思ひますの」甘つたれたり、「わたしのも小ぬか三合なのよ」と威張つて見たり……なるほどお目出たいや。（凹坊）

一々御尤。サウ眞面目に喰つてかゝられると、自分のような人間すたり者――結婚し生産しお目出たいことをなし得る君だちと違ふもの――は我不関を極めこむ外は無い。ダークサイドばかり見ると仰やるけれど、KにしろHにしろ、あれが最初の人に嫁いたのなら詩にも歌にもうたへようと思つたばかり。私は不幸にしてあまりに彼等の一面を見ずであつたのだ。我れ、處女を過すること、玉を執るが如く、盈を奉ずるが如し、人妻に對しては冷笑有るのみ。君見ずや咫尺長門阿嬌を閉づ、人生意を失ふ南北無し、樂在相知心、いたむべき者ひとり明妃のみならんや（法師）

NOにもYESにも、それ相當の理屈はあるでせう。そんなにむづかしく言はないもいゝぢやないかと思ふ。異性が相結婚して家庭を作ることは人類としての幸福であると共に本來的には何人の拒否をも許さゞる本務である。法師がやかましく言つたらば混成新婚夫婦旅團を作つて、常陸へ吶喊しておやんなさい、いつでも後援してあげます（ジャンチオンム）

○結納の日

向島　白ふぢ

今日ばかりは、どうしても高髷に上げなければと、頻に母樣が氣をもまれる、はら亂れかゝる毛かき上げて、洗ひざらしの浴衣で、雅邦の山水を背にした花瓶の岩南天の枝を撓め直してゐると、「今日は」、と、勝手元に髮結のおきよさんの聲、まあてんな姿で、ともぢくしてる間に、もう次の間へ入つて煙管くわへて立ひざしてるのが、透帳ごしに見える。それ者のはてだけに何となく艶めかしい其の態度、あの表情に暗い明るい運命の色がしみ込んでゐるのかなどゝ思ひ乍ら、思ひ切つて出てあいさつをする。幾度も々油をかつて癖直しする、束髮にばかりしてゝお結ひにくいでせうときくと、いゝえちつともといふけれど、氣の毒でならない、びんの搔き樣や合せ鏡の仕方が可笑しいつて笑はれる。「向ふへいらしたら直ぐ丸髷になさいよ」なんて、恥しくはないけれど、急におばあさんになつたやうで、いやになつて了ふ。久しぶりで化粧もして濃納戸まがひ縮緬の單に、脊がひくいから、變り色の帶はいけないからと、薄納戸繻子のを〆めて、爪色の美しいのに見惚れながら、神棚に神酒を捧げる。「いつもより大變きれいだ」と、母樣、赤飯たき乍ら、にこにこしてゐられる。あゝ母のこゝろ……私は幸福者であ

る。金でもない、位でもない、あの雄々しい少壯實業家のかの君……

お神酒德利もつて、くゞり拔けて、お稻荷樣の杜へゆく。ちひさい時は、こゝで、よく椎の實を拾つたつけ。さゞん花の花を拗つてまゝ事したるもあつたつけよく、げじ〳〵や蛇をもつていやがらせをした、かの君、○ちやんは、私の大きらひな人であつたのに、……

チロ〳〵と、小溝の草で蟲がなく、スーッと日がかげるかと思ふと、さつと華かにてる、何だか詩にでもなりさうな、私はふと「生命の家」の一節を思出した

緣の草に……て、腕を君が投げやれば、
小指の先のほの透きて、紅らむ花と擬ふかな、
さても微笑むやさまみや、……

一重に合へる胸と胸、これぞ變らぬうつたから、妾は自白す、最良なるひとりの伴侶を我は見出でぬ。新しき希望の光は、われら二人が行方をてらせり。

ガラ〳〵と俥の音、オヤお仲人樣と飛び出ると、ずん〳〵門の前を通りぬけて、竹やぶの角を曲つてしまつた。と入違ひに、ギッ〳〵と〇〇屋の若衆が仕出しのかでをかついでくる。

極めて平和になつた、神に酒を捧げて良緣を祝福する女は幸ひであり(醉客)

私は眞面目に此人の轉歸を祝する。これまでの若き苦悶、病的發作は、こゝに初めて意義あるものとなつた。早く斯う云ふ結果を見たのは、非常に欣ぶべきことである。(白羊)

○俎上の魚

東京　葛の葉

緣りの色深い柳のすらりとたれたその影が東へさしてあはくなりつゝ暮れて行く夕ぐれ、こうでも無かつたが——過ぎ去りし半生は、と死にともないから言はれるまゝに仰有るまに〳〵後で唇をかみしめる色目でもすなほに返詞もし立ち働くのですわ、眞實心からわき出た返詞を何やらにつけて私は無遠慮に半ばやけにから夫にくれて、熱い涙をそびらをむけて何かにまぎらはした。實際私は死んでも〳〵といふ詞を無分別に人にはいつたが、順境に身があつた時のそれはたは言に過ぎない、今斯うなつてそれで死ねないのですもの嫁に行くのはいやだ！と母の懷にかくれて息を殺し殺しゝて居たのに、世間へすまぬ、人がいふといつて母は泣き作らなつかしうてやる瀨ない我子を、私を手荒く袖を腕をふり拂つたのだものどんなにつらかつたらう、惡い事があつても袖でおほうてはかばつてくれた生みの母、私はしたはしい、一旦ふり拂つた手を二度

とは暖かくうけ入れてくれない例令心のみは廣う深う入れても、私の身は出でゝは三界に家なきものになつてしまつた、出て行けと言はれや棲む處なき身の死よりは外にない。命が惜しさに死にともなきがまゝに。私はあさましいと知りながら、かつて覺えないいつはりの笑を詞を多く少なく使用する、人前に心の解剖は出來ぬ、とてゞ出來ない子となつた、涙が出る私のさがはかうではないものを。若みどりにまつかをほてる柘榴の花が色よくて白い山茶花にほふ庭で、碧い空を遠く見てから思つた事がある、あまり清ちやんがお祖母ちやん〱いつてまつはるとき、母はあまく〱出るのを見て、母の袖にまだ私はしがみついてるのにたとへ妹は嫁にやつたとはいへ、私を忘れて孫のみを思ふ母！と、されどいくら可愛ゆくても孫は孫、身からすべつた樣な事はありませぬ、とかういつたのをきいてまあよかつた！と安心しい〱すんだ世はもう過ぎ去つてしまつた、もうかくれ家のない私は世の波にもまれ〱てやがては一人死にゆく運命なのである。はかなくあさましい世だとつく〲思はれる、けれど死ねない、生が保ちたい。西の空雲のあなた、岐阜のさとは私に一番忘られない事毎に思ひは走しる、友がある會心の友がよき友がある、別れ際を思ひ出しては、その時のやるせない心にさかのぼつて涙はこぼすけれど、人は私に向つて矢を射る、矢の先きには何物がひそんで居るやらわからない。雨の日私は上京の途についた、數名の友に送られて、母樣と御一緒い、わねえと友はいつたけれど、物言はぬ山川に別るゝさへつらきを物言ふ而も心あひたる友の誰彼をのこして、心を死出の旅に立つ身の、つきぬ涙は一きりを豊橋まで泣きぬれた夜汽車であつた、人はいびきにね入るものを硝子窓に頭を當てゝ眼を閉ぢるとわけもなく涙が出る私は百里を母と一語も交さなかつた。物をかつても無言で母に渡した。その勢か母は一箇月を都に居たが歸る時には、手をついて私にまで長々御やつかいでしたできげんようと。

私は長いことこの君を知つてゐたが、なぜ嫁に行かないのかとは一度も聞いて見なかつた。妹が行つても自分は行かず、妹が赤ん坊を產んでも動かうとせず。苦しき立場にあつて泰然たりし心事を諒とする所があつたのだ。けれどやつぱり女だつた。

極めて低級の女で無い限り、新婚の泥醉からさめ來れば、淺ましき身の果を思はぬことはあるまい。吉原の娼婦は三千人と稱す、されど如何なる人妻か思ひを「自己の誇り」にかへす咋滲然として泣かざる者があらうか、處女の權威は帝王と雖犯すことを許されない。吁俎上の魚！悲しきは女の運命なるかな。（Ｙ）

私は此君から、こんなしみ〲した調子の述懐を聞かうとは思はなかつた。夜雨氏の喟然として嘆息するのも尤もである（醉茗）

○私の名

梨花

私が生れるとすぐに、祖父は、私にりかといふ名をつけてくれました、赤ン坊の內は何も知りませんでしたが、小學校へ通ふやうになりましたら、男の子が、カーリカリカリつてからかいます、そしては御下げのしつぽを引くのですもの、其頃から私は自分の名が嫌になりました。

高等科へ行くやうになつてもやつぱりからかはれるので私はつらく〳〵嫌で〳〵堪りませんでした、御祖父さんは何故私にこんな嫌な名をつけて下すつたのだらう、どうかしてとり換へる事は出來ないのかしら、私の友達にだつて一人も私見たやうな名はありやあしないに、利加と書いても慾深そうで嫌だし、利賀と書いても、里加と書いても一つも氣に入るのはないのですもの、ほんとに嫌になつてしまふ、といつもこんな愚痴をいつて居りました。

私も段々大きくなつて、清少納言の枕の紙子を讀むやうになりました、すると急に私の名が好きになりました、それは、清少納言が、梨の花を賞めて居たからでした、そして梨花と書く事を覺えました。

それから又

世の中をうしといひてもいづこにか
身をばかくせん山なしの花

といふのも目に入りまして、益々好きになりました。

九月の文壇に、同じ雅號を避けるやうにとの、御注意がありました、前に會津の梨花子さんが入らつしつた、次に私も及ばずながら、御仲間に入れて頂く事になつた、私のは雅號でもなければ、會津の梨花子さんの眞似をしたのでもありません、けれども、後からは入つたのですから、やつぱり私のを換へなければならない。

何とか仰つしやる方は、御自分の御子樣に、朗といふ名をつけやうと思つて、苗字が磯なので、磯朗になる、其れでは食客になるから、緣起が惡るいつて反對されて、外の名を見つけるのに大變苦しまれたそうだけれど、私は私の名を私がつけなければならない、何としたらいゝでせう、記者先生、誠に御面倒恐れ入りますが、名つけ親になつて頂く事は出來ますまいかしら、御願ひで御座います。

此君の文章も癖がない、女性でこれだけ筆が自由に動けば結構な方だ、梨花は現今外に一人もないから宜いでせう(醉茗)

詩

河井醉茗選

○九月の夕日（地）

富山　村山　咲子

青き葉は輝きて、そよ風に戰けり、
塵にまみれつかれたる、息づきと萎
の見ゆる愁みと
見よ、やはらかき夕日の色の黄金に
榮えて輝くを
青葉の葉ずれ囁きは、すべてを悲し
むわが胸の涙さそひぬ……
いと暗き青葉の性よ……
九月の夕日は甘々しく
やがて、美しき輝きとすべてのあこ
がれを投げかけて今日のをはりをう
れしげに告ぐ
わが胸はいたく惱まし
嘆息の聲青葉の下より――
故もなく涙こぼれぬ

歌ひたいと云ふ心持は確に溢れてゐる（評）

○心のこゑ（人）

港の女

術はつきぬ
我が心なぐさめん凡ての術はつきぬ
すかせどもかへり見ず
面背けて暗の惡戲に
つかれてまどふ我が心
抱かんとすれば泣き叫びつゝ
暗にぞ走り行く。心の狂しさ
我が心とらへかねつゝ
みつめたる濁江の灰色の帆――うな
だれたり
あゝ我が心の聲ほのにきこゆれど――
我が心の我が儘よ

鼬なく日

神經を斷る如く
鼬なく日――
方丈の庭に茶の花ぞ散るホロ〳〵と
冷たき眞白の葩は黒き土の上を
微動せる我が心の上とに落ち來る
かゝる日にも我れ生くべきか――死
なまほしと思ひしかどうす暗き庭に
古びたる神經の斷るゝを覺えつゝ
あゝしきりに鼬はなく
心にひゞく悲しさ

あなたの詩は近頃停滯してゐます、散文は進みましたが詩は進みません、凡ての人は皆然う云ふ傾向にはなつてゆきますが、此詩才をこれで終らせるのは惜しいやうです、一つ囚はれた思想を破つて出る勇氣はありませんか（評）

○ひともし頃

越後　齋川　幸子

二階の窓の病人が
見渡す町のひともし頃
しと〳〵と、しと〳〵と雨が降る。
白々と西空のうす明り

道ゆく人の足下のうす明り
囘復期のたそがれの體溫の穩かさ。

ポチ、ポチ、ポチ——
軒より落つる玉水
音のしづけさ。

（よるになれ、よるに
なれ）
子供のうたは軒下の暗
がりから
又病人のこゝろのうつ
ろから——
安らかな眠りの前に
壹の脈膊の疲勞の後に
見渡す町の軒燈の灯ともし頃。

よほどデリケートになつたが、まだ〳〵模倣にしても力が弱い詩はもつと苦んで作らなければなりませぬ（評）

○線　琴子

しめやかに單調な
はつ秋の日の雨の絲
白い雲からたぐられて
濱の眞砂を灰色に
三味の音思ふ夕暮は
蛇の目の傘をなつかしみ
都戀しと泣きもする
絲がくづれて消ゆるのか
砂が吸ふてか一す
ぢを
結びとかずにをき
たしと
夢に黃色い線を見
し
うつゝにとけて流
れ凝り
宵待草が咲いたと
か
ながさ幾丈死の色と
みるたそがれの面白く
たけき心の湧きもすれ
われには愛し雨の線。



紅葉狩　露香

も少し詩を作る勝手が分つて來なければならぬと思ふ(評)

○暗黑の道　　本所　花澄

何を目的と言ふのでも無けれど
暗黑へくらきへと足は唯無意味に走つた。
私の足！何處へ走つて行くのだろう
暗黑くつて、一町先も見えやあしない——其闇の中を、
走つて行く自分の心が、自分でも更に解らない
月も星も、今宵は何故姿を見せぬのだろう？寂しい——心寂しい。
月よ星よ汝は例も
私の行く可き道を輝らして呉れたのに、
暗黑に僅かの光明を求めて
私は歩ひて行くのだつた。
先へさきへと。
嗚呼！現……其光明を、不意に消されて了つたなら、
私は、わたくしは暗闇な者だ。
眞闇な道を辿るのが私の正當運命ならば、始めより
其闇の中に埋もれて、居たかつたものを。

もつと感情が興奮しなければ好い詩は出來ない(評)

○秋の夕　　大阪市　杉山かし

ふるへ泣くやうな尺八の音が、雨上りの濕めつぽい空氣を動搖てきこゆる夕べ。
白きシーツの上に仰臥して、淡す暗らい天上を見つめた。——灯のさす上だけぼんやりと白い……あゝ、我れは孤獨よ………。
冷めたい秋の風が迫り來る、ほの暗らい燈火の影で、「敗殘」と云ふ詩を讀む時、
病む人の如く我が胸は痛かつた。
スーツと冷めたい風が入つて、小さき灯影はかき消された、——尺八の音もぱたと止んだ。闇——の中に悲しい詩の文字が、ハツキリとあはれる—。
我が魂のふるえと共に、ホロ〱と蟲が啼く。
あゝ人の秋の悲哀は音もなくひし〱と我が身に迫り來る。

○劇場を出てより　　大阪　村田弘子

明るき瓦斯の灯ともしたる
劇場をいでゝ、
眞暗な森にとざゝれた
淋しさをしのぎて歸る
野路のつれなさ、
ふと浮ぶ
雪子の明るき表情と
劇場の背景と
瓦斯の青きふるひとは、
疲れた頭にゴツチャにうかぶ、
煙草の煙に似て
記憶の去る心淋しさ、
神經のおののき……
更けた夜の風は
非凡なる腦に荒れてふく。

○今日の光　　伊豆　西島枝折

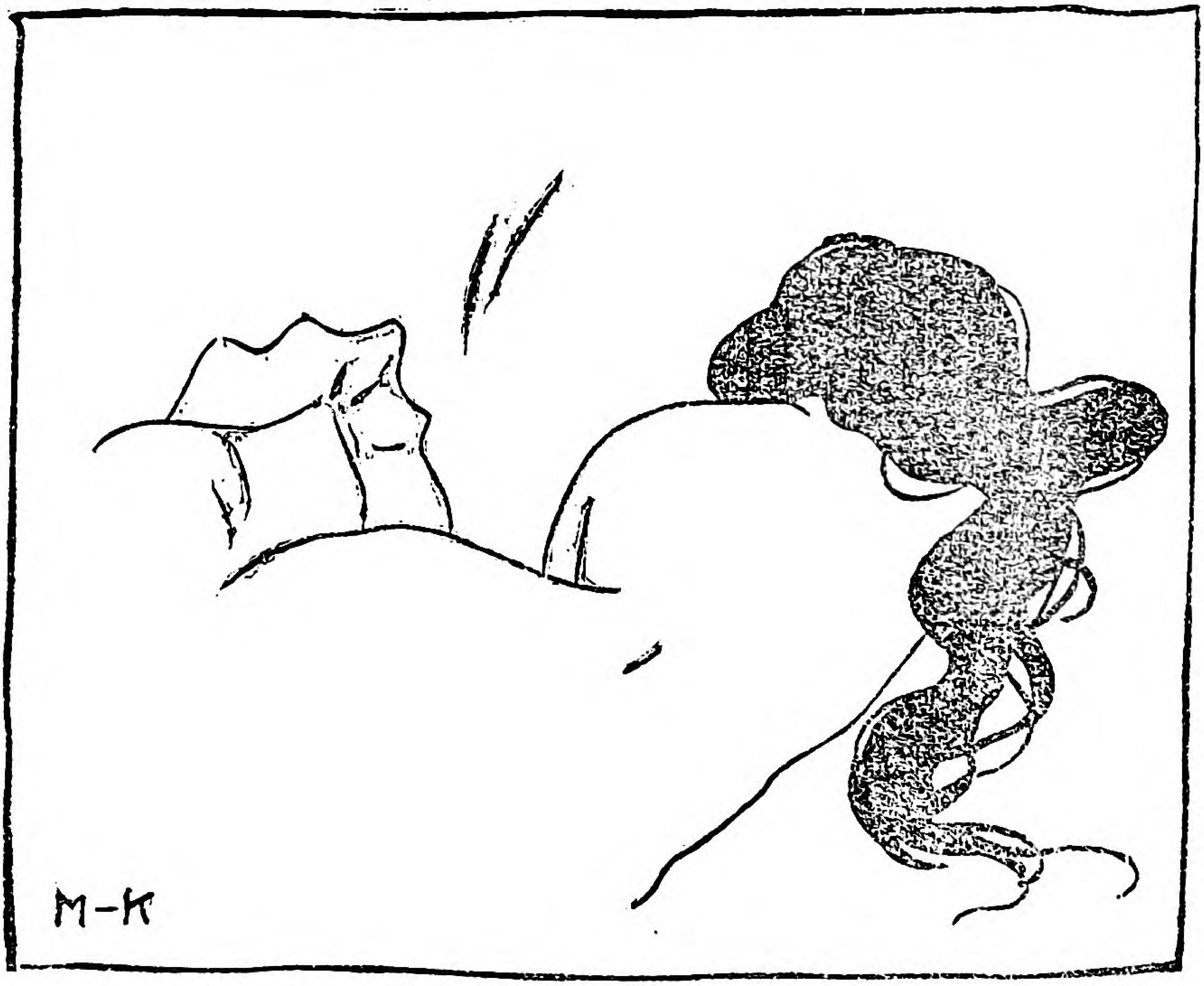
また　今日の日の光りは來る
　暗のかなた——
暗黑の色に、など我衣そまざりし、
ア、疲れ疲れし昨の日
白き悲しみと望のにがきと。
洗ひつくして安けき床に、
黑きを被きて臥せしも、今し前なるに、
靜々と闇をそかして——ほの白く
生るゝ光り

初秋の風はしのびかにうす白き
地上を這ふ今日の一日安かれと
祈れど詮なし、
ものみなの縋り樣なき冷たさ
光り殘して、葬られ逝く
眠れる――幻の如――はた靜止
の國に去りゆくか、闇よ、
かすかなる五官のなげぎ
未明の光り。
ビシ〳〵と鳴る强烈なる活らき
あくせくと忙しき吐息
暫時は、をろか、永遠に、
めぐる車に手をかけて、
止めて見るも大きな力
すべき詮なきか。
夜けあけぬ――
暗ア、、黒きは去りぬ。
けふのひかり。

○夢の野道

水仙

灰色の道ははてしなくつゞいた
淋しい世界……いたましい景色
よ……
鳥よ、可愛いゝ小鳥よ、
お前はなぜ、どうして、
鳴かないの
こんなに淋しいのになぜ唄はな
い、
もつとにぎやかにしたくない、
灰色の雲は幾重にも〳〵
かさなりあつたまゝ
それは西へ西へと流れた。
あゝいつになつたら
あの美しい蒼い空が現はれゐ
ろう、
空の中へ手をつゝこんだら
かきまはしたら……。
夕ばえの空の樣な
きれいな、はでな、
はなやかな色があろうに
道ばたの草と花は
ふみにじられた樣に
重いものをのせられたかの樣に
みんなぐつたりとしぼんだ。
それは聲もたてえないで
泣いてゐるのだ、
可愛そうな草……花……
なぜ雨がふらないのだろう
こんなに曇つてゝ
ひるだか夜だか夕べだか。
少しもわからない野、
灰色の野道ははてしなくつゞい
た。



黒髪　京都　岸田ふみ子

○黒い蝶

栃木　雪枝

百日紅の花ざかり
ぢり〳〵と照るまひるのひかげ
身に受けつゝ暑くもないか、
　黒い蝶二ツもつれつゝ飛ぶ。
紅い花の上に羽をやすめ、

又何處へか飛び去つた、
黑い雲むら〳〵と出て來た、
青いそらは一つも見えずに。
涼しい風が吹いて來て、
大粒の雨ポツ〳〵と落ちて來た、
益々はげしく降り出した時、
黑い二つの蝶もつれつゝ飛んで來た。
あゝ此雨であの翅も
疲れたであらう休め花の上に、
されど樂しげに
上になり下になり又飛び去つた。
雨は止み雲晴れた、
夕日出て美しい桂の花。
露を帶びた其上に
黑い二つの蝶疲れてかとまつてる。

○小鳥よ

信濃　二葉子

七色の虹の輝き
美はしき彼方の空を
紅燃ゆる落日の閃きに
裏がへす羽根一度に輝し
去りゆく小鳥の群よ
秋風に水色の空氣ゆらぐ
淋しい國の別れを告げて
小さき瞳の憧憬は
百花の咲く國南へ
新らしき希望に滿ちた羽ばたきの
强さわか〳〵しさ
日は落ちぬ
灰色に濁れる空を
なほも勇しくかけゆく小鳥
北の空を仰ぎつゝ
お前は待つ少女の
愛らしき瞳もあるものを
さらば小鳥よ

○夢のあと

本郷　見ぬ世の人

淋しい夢の國より出でゝ
ふともみめぐる部屋の中
暗のルームは……
夫の蚊帳の中らには
母と妹のさゝやかな寢息が……
暗をふるうセコンドのきざみと
庭には蟲の聲がしきりに
何時?
暗の中の夢よりさめる淋しい女の聽覺はするどい
かすかながらに隣家の方から
泜の聲がもれると瞬間に
きらめく様にするどく
孤獨ツ心にさけんで
譯もない涙がはらはら……

○こゝろ

廣島　壽美枝

みだれみだれて路にたばしる
哭かな、此の醉ひ心
大かたの花束ねたる
オフイリヤか此の狂ひ心
心はいたらざる女王の島を戀い
手まぐれどとゞきもやらぬ ハレー星をのぞみて
嬉しくもいたましく
あめにつちに痛む若き心。

○秋雨

白菊

しと〳〵と降る秋の雨よ
雨の音の淋しさよ
つきつめた心の
やるせなさが鎭まつて
また新しい涙が
胸の底から湧く――
こほろぎが啼く
雫が落ちる
しのびよる雨のさゝやき
そんなに私を
かなしませて
雨はいつ降りやむのであらう
もう此まゝ
永遠に
世界は雨に降りくづされて
雨雲に蔽はれたまゝ
暗い
鉛色の中に
滅びて了ふのではなからうか
薄暗の底に
葬られて行く
わが世の雨の冷さ、暗さ

文藝雜誌

朱欒

十一月一日發行

第一卷第一號

本號特價一冊四十五錢

普通號二十五錢

三ヶ月七十五錢

ザンボア創刊號

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四番）　東雲堂

前田夕暮氏序
近藤元氏著

正宗得三郎氏畫

歌集



四六判二百頁
歌數六百餘首
定價金六拾錢
郵稅金六錢

現今の歌壇で詩人的天分といふ點からいつたなら著者はそれの尤も豐富なるものであらう。

短歌は洗練されたる藝術の極致であるといふ著者の藝術慾の焔と、また短歌は若い日の矜りであるといふ著者のうら若い命と、そして感情のリファイン技巧のリファインは最近デカダンスが藝術的良心の唯一の捨て場所であるといふ著者の自覺の力とによつて、三十一文字の一字一字に迄微細なる感情が脈搏ち、鋭敏なる官覺が閃いて、ピンとした恰度三味線の調子のやうに高く強く響いてゐる。然も著者の內部生活の類無き新らしさと、底知れぬ深さとは、新らしい象徵によつて、見えざる色彩を胸に反映せしめ、聞えざる音樂に呼吸をはづましめ、淸新なる芳香に恍い睡眠を誘はしめることであらう。

本書は著者が都會を逃れてから一年間の努力の結晶である。收むる所四章「南の海岸より」では著者が幾多放浪の後に始めて生れ故鄕の南國の海にしみじみと注いだ熱い淚の跡を思ひやるべく「夢見る花」では著者がその豐かなる天分を飽く迄矜つたものとして絢爛潤澤なる赤い想像に惱殺せらるべく「夏の呼吸」では近代詩人の窮迫せる呼吸の鼓動を聞くべく「葦の葉の戰ぎ」では江戶藝術の耽美者たる著者が殊に思ひ出多い洲崎に於て心血を注いだ未發表の新作六十四首によつて新らしい浮世繪に醉ふことを得べし。

加ふるに前田氏の我が詩人に對する硏究と、正宗氏の南國的の書とはよくこの詩人のこの歌集にふさはしいものでせう。

最近歌壇の收穫として本書を燈下の机上にすゝむ。

發行所 東京神田錦町一丁目 振替口座東京一九五五 文光堂 大賣捌所 東京堂・北隆館・東海堂・[illegible]文堂・上田屋・至誠堂

地方色別 誌友評論

一記者

（一）京阪地方

◎近松や西鶴の名が大阪の歴史の誇りであつても、明治以後の大阪は餘りに物質的に發達して來た、『なにはがた』や『大阪文藝』のあつた時代、『よしあし草』や『小天地』のあつた時代、それ等の起した波動は全文壇の上には影響があつたとしても、大阪と云ふ都會には何等意味ある運動を殘さなかつた。

◎此頃青年文士の一派が起つて、『都會』と云ふ雑誌や『白揚』と云ふのが發行されてゐる、また俗向一方の『大阪文藝』と云ふのが現れて來た、併し其等の多くは男子の集りであつて、女子の文學熱に殆んど大阪では度外視されてゐる。

◎『女子文壇』あつて以來、大阪の投稿家と云へば極めて少數であつた、二三の注目すべき人が來たかと思へば其等も皆變性であつた、明方の幽靈然と皆消滅して了つた。

◎今、記憶に存してゐる人を想つて見ると、商品陳列所かに出てゐた人で、木村花子と云ふのがあつた、寫眞の出たこともある、理性の勝つた人らしかつた、論文めいたものが一寸書けた。

◎それから木村春江と云ふ人があつた、例の蘇生法師に見出された一人であつたが、横堀邊の材木屋の御寮人樣らしかつた、涙つぽい文字も少しはあつたやうだが大して振はずに終つた。

◎改野竹子の名も一頃頻りに紙上で散見したのであるが、誌友會に手を燒いて以來、同じく路傍の人となつて了つた。

◎富の度が高いだけに京阪地方には愛讀者が多い、隨つて文學を語る若い人は、男にも女にも多い方ではあるが、書く人は少い方だ、しんみりと自己の思想を省みて、筆に表はさうなど云ふ心持を把持し難いのである、だから東京で謂ふ生意氣よりも更に、ほんたうの文學的生意氣が多いのだ。

◎生意氣は反抗となり、反感となる、ろくに文學が分らないのに、當代の名流大家をひやかすやうなことを平然として云ふ、文學に對する敬虔の念がない、從つて作家を尊崇することもない、投稿家でも作家の片わ

れと見られる場合、徒に周圍のひやかしのたねとなり終て、ないしやうで作つて、ないしやうで投稿すると云ふやうなことになる、此等が大阪の誌友に人の出ない一つの原因と成してゐる。

◎却つて大阪土着の人でなく、他所から入つて來た人に大阪の誌友は活氣づけられるかも知れぬ、本誌十月號に『大阪の婦人』の中に『女の見たる女』を描いた八代八重子は東京から近き頃に行つた人である、『娘時代に』『大阪より』を書いたのも同じ人だ。

◎八代は東京に居た頃から主だつた誌友の一人であつた。けれども其作は餘り主觀に偏し、暗黒の方面ばかり見て獨斷的文字が多かつた。それが大阪へ行つてから俄然一變し、描寫も正しく、如何にも新しい旅人が大阪と云ふ大都會を見てゐるやうな心持で、囚はれない觀察がしてあつた、好い傾向になつたと思つた。

◎東京の人が大阪に反感を抱くのもつまらないし、大阪の人が東京に反感を抱くのもつまらない、大阪は大阪、東京は東京だ、大阪に居て大阪を觀てこそ眞の描寫が出來る、東京と云ふ念を離れた批評的眼孔が欲しいのだ、八代の文章は稍其注文に近づいてゐた。

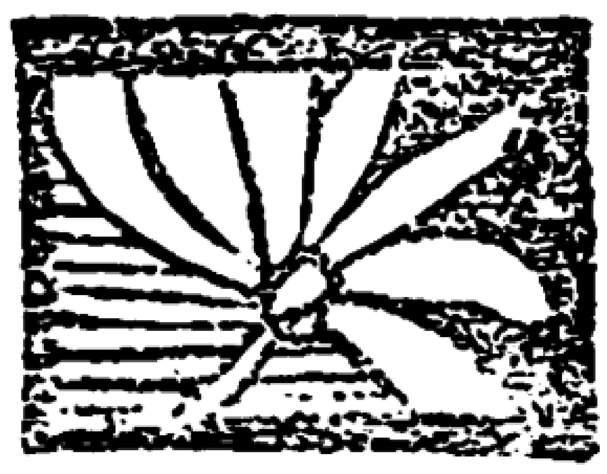
◎永く大阪に留る人か何うか知らぬが、一轉機を幸に婦人の見た大阪の描寫の範圍を博くし、奥行を深くしてもらひたいものだ、兎も角開拓するのには好い場所である。

◎最近、梨花と云ふ名で僻の無い女らしい文章を書く人が現れて來た、此人も大阪だか、或は女子美術の出身ではなからうかと思ふ、東京のことも能く書く。

◎梨花は未だ新しいから、何の方向に進む人か分らない、或はそれほど進む人でないかも知れない、道樂に書いてゐると云ふ態度がある、一生懸命になれない人らしい、それでもわるいと云ふのではない、書く人の少い大阪では自重して宜い譯だ。

◎鳥取に安木春子と云ふお孃さんがあつたが、緣あつて大阪に嫁入り、今は西の方角にゐる、矢張折々文章を送つて來る、『娘時代』に日本海の海岸を描いてゐる春子の文章は主觀を交へないで、自然を描寫するとか日記を詳しく書くとか云ふことが得意でもあり、且又巧みでもある、併し大阪へ來てから元氣が衰へたやうに思はれる。

◎記者の眼に止つてゐる者は必ずしも以上三人に限らぬ、まだ某女、某女、某女などあるが之を公にするほど個性が著しく眼に立たないのである。(つゞく)



菊人形

三人行者

多賀の禰でと

▲「（美しき綺葉書有りたふ、ソクサツ（速早）御禮可致の處わらは事學校の方にカナメ（要）がありまして、どうぞ今後もお送り下さいな）とありましたの、そして（君が目の涙おぼへて泪しな溺れて死なんわれの願ひか、ヲホヲホヲホ）とあるでせう。私びつくりしちやつてね」美しき眉をひそめて土岐夫人は語るのであつた。星ケ岡の留に金ピカ／＼の帯して裾さばき優なる美しの君としてたゝへられた幹事の一人である。

綺葉留は早稲田の學生だと自稱する鵜澤某の書いたので、愚劣なる誘惑の一つであつた。一たい官立にしろ私立にしろ角帽にどれだけのアトラクションが有るのだ。

▲この前淺倉ふく子さんも「氣をよくしてりや活動へ行きませうだらうと罵つた」男があつた。加藤菊子さんを誘いたのは官吏らしかつたが佐分華影さんに安つぽい煩悶を起させたのは中學生あたりらしい。何にしても進んで女に手紙をよこすような男は絶對的陋劣な人間だと斷言してもよい。「智識を交換する」「清い交を望む」口實は皆是れ也。著名なる誌友の一人にあてゝ血判の上姉弟たらんことを求めた男さへある。誘かるゝ者は禍なるかな。

▲おびかるゝ者は禍なるかな。苟も厚顔無恥の男性に近づくの危險を知らば、郵券を入れて來たら取放しにしても差支はない、品物を呉れたら突返せばいゝ。男と知つてから一度でも返事したらもう駄目だ。わざわざ接近を求めるお轉婆は無論論外である。

▲かつて内藤千代子さんの訪問を受けた時低級の讀者から盛んに渇仰されてる人だからと思つて、手紙が來ますかと聞いたら、澤山澤山參ります、けど一人だつて返事なんかやりはしません、切手を入れて來たり、リボンだの、肱突だの隨分來ますけれど皆取りつぱなしにしてます大かた皆怒つてませうよと笑つてゐた。これあるかな。

▲人は初から知るものでは無い。知らねばこそ手紙を貰つては返事しなければ失禮に當る、物を知らぬ人間と思はれようと、さも／＼女の道に外れでもするように氣を揉むのからして改めてかゝらねば駄目だ。本誌の讀者の中にはアドレスを夜雨女史として、永久の交際を求めて來た方さへあつた（かわいさうに誌友くらゐでも多くの友を探してゐる）正直をいへば私は女の人から無限の欺きにあはされてゐる、生れてよりこの方私を苦しめた敵は多くは女である、今は西山に迫れる命をいだいて猶ながらふる日のはかなさを泣かねばならぬのだけれど、一片仲々たる心は、赤子の井に陷らんとするを見つゝ走るに忍びない「少し位怨まれたつて怒られたつて何ともお思ひなさらないでせうけれど、今度といふ今度はがまんが出來ん」と前島優梨子さんをおこらしたことがあつたが、第一人格と第二人格とをゴッタにしてはいけない、或る方から「あなたはえらいわね今に文學士（然り文學士）に推されるはね」と祝福されたが、ABCはエービーシーと讀むのが本當か、アーベーセーが正しいのかさつぱりわからない。酒はのめば二合はいくから品行はさう方正ぢや無い丈夫だつたらツーラインはどうだか、稻の葉つぱ位はくつつけてゐたかも知れず、正直みな樣に敬へて頂かねばならないのである。それは承知しながらふら／＼と惡る口が出て來るのだから全く病氣だが。たまには爲になる事も言ふのだから差引していたゞくより外は無い。

▲尤世間には私より上八手がある。七月十一日死んだようになつて寢てる時も時、香爐の中から立ち昇る煙の中に朦朧と出てる幽靈の綺葉書をくれて記して曰く『御見まひ』と。母は色をかへて寸斷して居つたが、私は莞爾として微笑した。

▲「君は新婚の夢に醉ひわれは血を吐いて土牢の暗にうめく」と書いた葛の葉にやつたら、菊人形の踊りの綺葉書に「長き命をたまはれと多賀の社に祈るべく悲みをほゝゑみにかへて太皷の撥を逆手に持ち笛のね色も

冴々と舞ふ心こそ哀れなれ」先生私もこの中の一人となつて踊りますから……長くは嫌ですよ」とある。私のタガは疾にはねてる、神どころではない。でも火をつけて燒いたら怒つて天上さしてくれるか知らん。一つ祈つて見て下さいと頼んで見た。五六日たつて「近江の國多賀の神」から多賀大社の繪葉書に「マッチ一箱に火をつけて拙者を燒いて其罰を受けたいと申す由、如何せん君を殺せば悲む人の天下に多きを。第一瑠璃子夫人を初めとして、日本國中には申すに及ばず、アメリカ三界まで悲みの波動を傳へてあまたの人を殺さんには、そもヲンナノタタリ幾ばくぞや。君に頼む、やつぱり生きてゐて!」神樣が女難、神樣が女難?を恐れるのはをかしい、が友人あつかひを受けて見ると名譽にかけても生きてゐざなるまい、まア生きてゐやう(馬頭觀世音)

●●●●● 投稿の中より

△「やあやあ、我こそは香川縣木田の郡林村は大字六條木岡つた子と申侍る」と名乘上げた孃さんがある、お白はどう考へてもつまらないから、うどん粉でもかんなすつてマガレットにでも結はうと。鏡花曰く、やあ〱遠からむ者は竹ぼらの音にも聞く、近くばよつてふきぎやるの目にも見よ。近ごろはやたら人生にふれる人が多いので困り切る。

△演習に來て宿泊した中尉殿、一夜をどう明したのか知らないが隊へ歸つてから繪葉書やら何やらよこしてお寮下されたく候戀　居候と書いて來たのでお孃さんが大いに泣いたとある。聯隊幹部を留める位の家だから有福なのであらう、覺きは軍人なる哉。

△發車のベルが鳴つてるといふのに小長い告別の手紙を書いたり、詩集とルビーを贈りてそれにキッスしてくれと言つたり宛名は百合樣とある女が女にさういふ手紙をやるのは變だ白い絹絲で綴ぢた所なんかやさしいけれど。

△「遙かに〱向うの地平線上に淡路島が見える」冗談ぢやない高師の濱からつい一跨の島を、作者は遠視眼なのだらうか。地平線も馬鹿らしい尤醉茗の詩にも「高師の濱の松ケ枝に深き翠や契りけん、いく度こゝに來つれどもかへしかねたる旅衣」叫からは千里もあるやうに歌つてゐるあすこへ行く人は皆さうなのかも知れぬ。序にも一つ醉茗さんのアラを掘らう、旅衣の次に「一葦の浪に棹させば須磨も明石も其處とかよ」とある、一葦は舟の事だ(一衣帶水の一衣とは違ふ)舟の浪とはどういふことですか。飛ばつちり御免。

△大阪の藝者と高野へ上つた女「ちよつとこゝでお斷りしておかなくちやこんな品物と行く位だからお前も待合か何かのあばずれ娘だらうとおつしやると。自稱山の手氣取の八重子大いにしよげて了ふ、實は野崎詣での道中で心安くなつたので何ら深い關係はない。よしあつてもかまはん、つまり戀八丈昔肩衣のお染久松が取持つた緣でせうよ」とのろけたには呆れもされない。大和は五條の帶屋の旦那、御秘藏を連れての御物まうでと見た方がいゝ、「おふか久松」といふのは油屋ではあるまい、それとも先生ゆめにも白しぼりだと言ふか知らん。

△「ほぺらの木」白楊をさしたのかと思ふが、のつぺらぼうのすつぺらぽんなら作者大いに北原白秋に私淑すると見える。

△「大陽が張つて」どこへ張るのか大變なこともあるもんだ。

△「擲哭」鐘を擲いてゴーンと哭かせるといふ義にや。

△「絶息病」飛んだ病氣だそれで生きてるのはどういふものだらう。

△「嫁樣が通る、プーンと匂を」まさか肥しの香ぢやあるまい。尤宮崎あたりのお白粉はプーンと來るのかも知れぬ。わきがであつて見ると鼻が曲るのも無理はありませんがね。

△「エンゼンのような歎子」ブロークンハートの人何ぞ多きや。(S、S、S)

◎山田邦子さんが今井邦子となつた第三日目に、どこにもある通り友達が不意に見に來た。邦子さんは婆やを相手に團子をこねてゐたが、それと見て一串を手にしたまま二階へ逃げ上つて了つたさうだ。二階へ逃げてから一串は簞笥へ藏つたやら或はお二人で召上つたやら、それは不幸にして聞きそこねたが、時間に餘裕を生じただけ今度からは夜雨の試驗に尻込みしない源氏からでも大鐵からでも出して貰うと言つてゐる、いつか螢光旗がわからなくて頭を痛めた人があつたつけこれからはお一人ぢや無し、困ることもあるまい。(XYZ)

記者曰、終の一節は誌友消息の一節で此外珍談は澤山あるが、原稿が載らないから次號にゆづる。



和歌

與謝野晶子選

○（天）　千住　吉田清子

美しき夢よりさめし朝のごと裁ちそてねたるきぬの悲しさ

○（地）　すゝき

たがためにかくはつれなき秋ならん愁なき身もつれて露けし

○（人）　三重　駒越くに子

うちなびく尾花にまじり水色の朝の羽振る川あきつ哉

佳作

○　宮城　齋藤静子

冷やかに秋風吹きぬ黒髪もてろもも露に朽ちんとするらん

○　函館　ふぢ子

いまはしき疑といふとばりもて君とわれとを隔てつるかな

○　北海道　平田美耶子

白百合にくちづけたまふ妬ましさ事みな淋し人妻の今日

○　仙臺市　堀しづか

笛の音はなにか悲しきうつろなる心に泌みて美くしきゆゑ

○　堺市　喜代子

薔薇の花心ゆるせる中のごと羨しくも蝶の來て吸ふ

○　京都　要司村福子

いちじくは戀をしらざる淋しさよをゆびくわへて物を思へる

○　三河國　槌谷ともえ

少女子は肩の縫をば下ろす時來る重荷を知らで笑むかな

○　三重　八重子

さばかりのかなしみも無き我ながら病の如く涙こぼるる

○　伯耆　新田文子

ま白なる桔梗の花に口ふれて冷ききすを思ひ浮べぬ

○　神戸市　川口登茂

星もなき闇の夜のごとわが胸はくらしあさましうき戀

のため

○　渡島　田山清子

めでたかる戀に生きてしうら若き日も終るべくおつる黒髪

○　大分縣　紅の花子

七月の日の美くしさ若竹の青きが中の日の美くしさ

○　石川縣　秋露

すべてをば知りつくしたる心もてこの戀を見るわれの悲しさ

○　加賀　村田絲子

望月は天のみ國の白蓮の花よりはなつ光とも見ぬ

○　渡島　川原華子

われなくて生きかたしてふかの若き男子悲しやいかにすべけむ

○　宮城　馥子

子をつれて牛の靜に歩むなり雨の晴れたる秋の裾山

○　岡山縣　山田千惠子

風の日の畑の茄子もいと悲し傷つきやすくなれる心に

○　三重縣　鈴木ふさ子

思はじと誓ふ心をうらぎりて暗き涙に身をぬらすかな

○　牛込　環の花

初秋の大空を見てわが戀の已み難きをばあらたにぞ知る

○　仙臺市　安井桂子

宮城野の秋の初風わびて住む我にかなしき白萩の花

○　熊本　しらはぎ

放たれし翼はあれど世の人の黒き瞳に我はためらふ

○　島根縣　藤田豐子

心からさびしき秋の里に居てものを思ひぬ旅人のごと

○　佐渡　わくらば子

おもひでや花輪つくりて遊びにし幼き日さへ笑まれぬるかな

○　廣島　兒玉喜美子

白萩の花さく垣に夕月す少し隔てて水の行く音

○　高尾

大空を雲ゆききして舞ふ如く浮きたる人の心なるかな

○　松前　棟原夕月

美しき花をば愛づることのごと君あきはてて今は棄つらん

○　大阪　田野靜子

さびしさと悲しさと湧く秋の日に咲きて匂へる白菊の花

○ 備前 懸谷かず子
冷やかに白き光を花にとめ木立のもとに秋の菊咲く

○ 三重縣 なでし子
われ知りぬ小き胸をなつかしき君がみために苦むること

○ 徳島縣 蔦紅
人思ふ胸につかれを知り初めてまきたる草の花を待つかな

○ 美作 芙蓉
あくどくも我を欲りする男をばにくむあまりに死なむとぞ思ふ

○ 丹後 竹田やゑ子
わざと笑む淋しきことをならひけり知りて言はざる悲しさもまた

○ 埼玉縣 大郷米子
うつくしくやはらかき眼よ赤き眼よ我が心吸ふ小うさぎの眼よ

○ 麹町 琴子
つかれたる心とこゝろ行きずりにものを云ひしがあやまちのもと

○ 渡島 平田露香
さめやらぬ苦しき夢よ我胸に刄刺したる人を呪はん

○ 城南 小島美雪
をとめ子が鏡にうつす袖のごと水にしだるゝ藤の花かな

○ 王子町 大浪せい子
秋姫が妙なる御手にそめ出でし楓の色を我胸と見よ

○ 深川 花野芳香
いさゝかの誇りをもちて冷やかにふるまふ我をほゝ笑める君

○ 岐阜 南秋子
ゆく秋や颱の出でて池ちかく物をあさるもあはれなるかな

○ 芝區 上口たつ子
こほろぎのなく音まぢかに彈く箏の悲しきふしに涙ながるゝ

○ 名古屋市 江口乙女
あかつきの蓮の花咲ける水沼の淸きをめでゝ船の綱とく

○ 和歌山縣 都田操
コスモスの葉蔭の上に靑めるにそよ風ぬれてわたる夕ぐれ

○ 本郷區 細川ばら香
花にまひ月に歌はん我身をも戀のなげきにとり亂すかな

○ 伊豫 高橋政子
こすもすの花さくもとにこほろぎのあはれになきて細き雨降る

○ 土佐 岩崎よし子
まろうどのいませる中に白菊の鉢をすえたる秋の卓かな

○ 京都府 神原すき
風のまゝ空をたゞよふ雲の如いかなる方にはてん我身ぞ

○ 岡山市 立岡房之
夕顔の花の白きとうつろなる己が心といづれさびしき

○ 丹後 吉田勝子
夕づく日ひとり眺めて川ちかく歩めば群れて水鳥の鳴く

○ しづか
戀ふる人その友とゐて遊ぶ時わがさびしさに涙こぼれぬ

○　深川　春川花舟

山のかぜ松の木ずゑを吹く音も秋としなればうらさびしけれ

○　枯巻花

月の夜に浪靜かなる磯邊にてひと夜語りし君を忘れず

○　横須賀　きぬた

火ともさば寄る夏蟲の憂からんと小ぐらき中に物思ひけり

○　岡山縣　野崎よしの

かりそめの別れをだにも恨みけり又逢はん日の無きが如くに

○　下谷　津端かよ子

秋となり悲しき方に我こゝろ傾きぬらん蟲の音に泣く

○　和泉　光寰

夜もすがら人戀ふる身のやるせなく露にぬれつゝ起き明すかな

○　下野　高村タキ子

夜となれば千鳥しばなく川近きわが家も秋の更けにけるかな

○　京都　芳子

むつまじく共に學びし友なれど嫁ぎ給ひて文のと絶えぬ

○　札幌　佐々原清子

月あかしいづこの空に見給ふや秋ともなりぬ君と別れて

○　名古屋　加藤花子

亡き友をしのぶ夕の秋の庭うら悲しくもこほろぎのなく

○　千夜

知らましとほりすることのいと多しさていづれをかさきに學ばん

○　仙臺　橋本しく子

人妻となりて程なく身は病みぬかなしみ盡きぬ世のならひかな

○　山形市　木村とよ子

草に泣く蟲の音まじり秋の雨水のほとりに夕そぼ降る

○　埼玉　大鄕露子

放逸の兄はいたまし五とせを家に歸らで益とせぬごとし

○　岡山市　むらさき

世の常の事と思へどわが友はあやまちとしていたづらに泣く

○　兵庫　石井チヒ

惜むべし再びあらぬけふの日も夢の心地に過ぐしつるかな

○　丹後　雪子

戀知らぬねなか少女のわが髮もうちしめるなり行く秋の風

○　京都　名無し草

行く雲の中にいやますなつかしき君がみ魂は天がけりつゝ

○　豐後　散る花

人戀ひて豐の國なる少女子の物思ふ處に萩の花さく

○　渡島　宗原みつ子

涙して戀を語りぬ若き子はさゞ波のごと胸跳るらん

○　信濃　工藤清子

穂すゝきに秋雨さむき野の道を町より來る文づかひかな

○　秋田　愛子

二十なる此秋のみはのどかにも涙すくなき我とならまし

○　淡路　清木波留子

夕されば早稻田の上を吹く風にこがねの波の立つ心地する

○　伊豆　西島枝折

晴れてさへうきに雲湧き濃く重く霧のかかりし秋の遠山

○　長崎市　萩見る人

妹がみくしけづる夕暮れの南の窓に萩の花散る

○　備中　小見山春子

君の欲りすてふ物のすべてを惜らず與へんものとわれおもへども

○　土佐　はぎ子

大ぞらの星をながめて蛩こよなど云ふ子等に昔しのばる

○　三重縣　名なし草

あたたかき夢みる如し賤が家の朝餉のけむり春風にまよふ

○　久留米　むらさき

戀ひつゝもいまだ云ひ得ぬもどかしさ寢つ起きつする夜さへ朝さへ

○　久留米　兒島勢子

幕のとぢ芝居のはてし一瞬の沈默に似てよりどころなし

○　本郷　佐久間千代子

鐘を打ちにび色ごろも身につけてさすらへとしもつくられしわれ

○　岡山市　富山千登勢

衣ぬふと針すゝめつゝこの衣の破るゝ日をば思ふおろかさ

○　横濱　石黒香代

思ふこと言はんとすれば胸せまりいでゆの如き熱き息湧く

○　美作　水田邦子

蟲のなく夕は高き欄干に身をもたせつゝ人をこそおもへ

○　堺　白つゆ

一筋の切るるいとひし黑髮もはかなきゆゑに棄てんとぞ思ふ

○　山梨縣　鹽谷とみ

穗すゝきの白き波よる野に立ちて苦しき戀を神に禱りぬ

○　本郷　藤音子

妹は秋の朝さへ磯にゆく松の雫にうたおもふらん

○　府下　倉田きん子

涙てふしぐれにぬるゝ我袖のかわくはいつの日にかあるらむ

○　島根縣　加藤シゲ子

かなしげに秋の蟲なく野に出でゝひとり思へるそのかみのこと

○　本所　おすみ

美くしき花よと折りて驚きぬ毒草なりと人のささやく

○　越後　秋月すゞ子

秋の草枯れつるもよしすてられしわれの心はおもむきもなし

○　筑前　岡村藻花子

しらぬひの筑紫の海の有明の濱の遠より月のぼる時

○　朝鮮　昭子

人ゆきしあとに佇み物思ふわが身になびくコスモスの花

○　山城　木の花

くづれんとする古壁に手をふるゝ思ひこそすれおのれの心

○　姬路　磯菜

一時の慰め言と思へどもきかんけふも便り待たるゝ

○　紀伊　夕浪

そのかみの戀のいた手の今さらにいたみおぼゆる秋のきぬれば

○　常陸　田村紫色

火の消えしつめたき火桶ひきよせて灰書などすあはれなる人

○　本郷　中村えい子

雁渡る此の月此の夜いにしへの人の文をば手にするものか

○　岩手　露草

二十二は淋しきものか庭草にこほろぎなけば涙ながるゝ

○　群馬　塚越和歌

ほがらかに空遠すみ秋の夜は月のめでたしおのれにも似て

和歌

○　神奈川　小國の少女

秋の雨秘曲奏づる野の蟲の心知りてかしほ〱と泣く

○　茨城縣　石川白萩

白菊の小さき蕾の見え初めし朝懐かしや薄き霧ふる

○　茨城　四田期花

呪はれて我世を呪ひ人のろふあさましき日の來りしものか

○　大阪府　金田朝香

小雨ふれあゝ小雨ふれ旅人のいとも淋しき夕暮にして

○　大阪府　竹中つね野

秋の雨うしろの竹の中にふりさゝやく如き聲ときかるゝ

○　前橋　みづ枝

うたがひの目と目を上げて見かはせし刹那さびしき國におちにき

○　信濃　三蕣子

美はしきものゝすべてを與ふるもなほあき足らぬ心なるべし

○　岡山市　石井幸子

あはれにも淋しき秋の月出でぬなぎさに立ちて人をおもへば

○　若菜女

夕立の晴間歩めば古さとの川原に咲ける月見草かな

○　山口縣　椰瓦美那子

飲めかしと君はすゝめぬ毒の酒涙ぐみつゝさかづきを上ぐ

○　大阪　浦ちどり

筆とれどとれば書かるゝ君が名にひとり泣くかなひとり笑むかな

○　沼津　紫月

わがたれし髪に香ひのうつりけり白百合の野を月にあゆめば

○　大阪市　清水艷子

おん寺の法の御母にすがれども心の氷とけぬかなしさ

○　大阪市　小泉貞子

栗の實の刺あるもよしわが胸に時をりうかぶさかしらに似て

○　三河　水棹

からかさの蛇の目の色に沖暮れぬ雨に歩みて潮鳴りをきく

○　知多　瀬原銀子

我が戀も秋の朝にたとへんかそゞろさめ行くかなしけれども

○　相模　中村貞子

われもこう世かるかや女郎花撫子添へてもてこし君よ

○　北海道　蒲原照子

身はあはれ病をいだき想ふ事すべて空しくならむとすなり

○　久留米市　夢星子

いかにせん獄のうつろに身はなりてあるかなきかの日をおくるわれ

○　京都府　夢の女

秋の雨しのつく夜をはなれやに青笛をふく少女子なりき

○　神戸市　綠髮子

あかしやの葉蔭に悲しヰオロンのすゝり泣ききく秋の夕ぐれ

○　豐後　吉瓦花子

玉に似るわかきさかりを戀といふたわむれごとに命かけけれ

○　陸前　浮草子

すさまじき名の戀ざめに囚はれの弱き身を泣き生くるわびしさ

○　陸前　小岩りう子

紅椿盛のころの花とかし天地にのべし如き初夏

○　宮城　沼倉冬子

霜に染み霜になゆるはひとりたゞもみぢのみにはあらぬ世としる

○　岡山　加美

忘れじの思をこめし瑠璃の花筆はゆかねど知ろしませ君

○　大阪　杉山かし

看護婦の色なき服と夢のごと醒めたる戀といづれつめたき

○　神戸市　たんぽぽ

秋の花くづるゝ時はわが戀のをはり近づくこゝちこそすれ

○　秋田縣　佐々木園子

こほろぎは夜毎何なく我はわが戀をば知らぬ淋しさに泣く

○　澁谷　小原あい

錦着てふるさとに入るそれよりも思へる人の御胸に入らん

○　東京府　竹村とみ尾

或日より君が心を伏し拜み少女心に涙するかな

○　碓井　北利子

なつかしきわが師の君は七八とせ見ぬまにあはれ髮しろく垂る

○　萩の里　姫小松

なき姉を面影に見る心地して白きダリアのなつかしきかな

○　失名

行きずりに見ゆる悲しさ白壁の土藏も今は人の家にて

○　金澤市　森安子

たわゝなる濡れ髮けづる板敷のつやにかすけく秋の雲湧く

○　白河　鮎瀨錦子

はてしなき春海原を見るごとに悲しと思ふ人こふる胸

○　麹町　藤井八重子

松魚船數多見え來ぬ風呂たてゝたらちねをまつ磯の一つ家

○　下關　木本閑子

何花かつよきかをりにうら若き心をそゝる秋の夕ぐれ

○　三本木　小田たけ

故しらぬ愁のなかにかきくれて晝も闇なる我こゝろかな

○　岡山市　桃のむら女

捨つべきか捨てざるべきかこの戀をまどへば庭に秋風ぞ吹く

○　越後　田巻てい子

人並の晴衣もなくて嫁ぎゆく姉を歎きて母の泣く時

○　大阪　吉田うすい

此頃は歌もうたはず書もかゝず暮れ行く空をひとり眺むる

○　會津　仙子

なつかしき君よ我をもしのびませ月草白き磯のあたりに

○　神田　石田美子

疲れたるわが心にも君がする戀物語なつかしきかな

○　信濃　三村りゑ子

わがひと日泣き疲れたる瞳にもうれしくしみぬ夕月の色

○　甲府　はま子

水藥の黄色に光る瓶を見て心にうたふおもしろき歌

○　岐阜縣　成瀨八千代子

いたづらに涙うかべて秋風に戀しき君をおもふ夕ぐれ

○　美作　池かず子

何となく空を仰ぎて物戀ふる少女となりぬあはれなるわれ

○　須磨　保子

母ませで七日を經たり月を見て泣き沈む身に秋の風ふく

○　京都府　竹村まき

風呂をたく薄き煙に夕月の光にごるもおもしろきかな

○　　靜岡縣　銀　冷　泉
秋の萱野を見よ青の草あひに狂女の如き彼岸花咲く
○　　上　毛　關口ちよ子
戀と言ふに夢にも似たるおもひごとコスモスそよぐ夕にぞする
○　　神奈川縣　し　う　ん　子
はぎつゞる衣のあはれさ自らは破れし身にてくちんとぞおもふ
○　　越　後　瀧　川　幸　子
木犀のかをる朝なり髮梳けば胸若がへる初秋にして
○　　秋田縣　佐々木貞子
人妻になるは物憂し弱き身は秋さく花の草とならまし
○　　京都市　久芳きよ子
目ぶたをば泣きはらしたる少女子の蹈みにじりたる月見草かな
○　　京　橋　片　岡　孝
さやかなる月にこがるゝ我れのごと夜半に啼くなるこほろぎの聲
○　　淡　路　内海千鳥子
木犀のかをりなつかし友をまつわれの袂に月のさしきぬ
○　　澁　谷　横谷ゆき子
丸たなど積みたる陰に少女等のうたふ聲より春は來にけり
○　　栃　木　雪　　　枝
今日よりはわれは人妻花にゝる十九の夏のあはれ人妻
○　　紫　野　露　子
戸をくれば山の朝霧せまり來ぬおほらかに今秋きたるらし
○　　伊　勢　花　聲　子
かの星も戀の心のあるならん淚くみたる面かげと見ゆ
○　　三　重　八　重　子
わが戀ふる優しき君が面ざしは小床にあれど前にひらめく
○　　富　山　村山咲子
淋しさになれしと云へど只獨り旅の夕の雲見るはうし
○　　京　都　靜　　　江
うきわれは春日の宮の巫子よりも大佛殿の佛なつかし
○　　東　京　蔦　の　葉
人妻は襟に袖を一つ結ひなほ長き時いかにすべきぞ
○　　東京市　黒田紫蘭
月青く倉庫のかべにてりわたる秋のはじめのこほろぎの聲
○　　松　前　藤山富美子
こは君のあざけりなるか我が胸にはひまつはりて物思はしむ
○　　姫　路　靜　　　子
白萩の亂るゝ野邊をさまよひてかへれば庭におつる桐の葉
○　　伊　豆　渡邊やす
今日燒かん明日は煙になしてんと文がらの束見るもいつはり
○　　廣島縣　後藤すみ枝
子守唄はたおり蟲の音と變りさびしくも今日のくるゝかな
○　　大　阪　村田弘子
きぬたうつ手をばとゞめてこほろぎのかなしきうたになけるや少女
○　　土　佐　鏡山春水
春くれば珊瑚色てる土佐戀ふと北の國より文のこしかな
○　　群　馬　はゝ　木
秋風にもろくもやれし蝶の羽をひろいてなきぬ二十の秋に
○　　常　陸　田村りき
なほ君を思へることはあやまりかとにもかくにも讀經をぞせん

散文（其二）

編輯局選

○秋の夜

玉兎

つい二三日ばかり前まで、可笑しな調子で鳴いて居たこほろぎが、今不圖聞くと、其銀線がすれ合ふ樣なうら悲しいこゑに、もうちやんと節がついて居たので、急に私の心は何物にか追はれる樣な氣忙しない心細さを感じた。

八疊の眞中へ机を持ち出して、電燈の紐をありつ丈延して、頰杖ついてぢつと、白黃色に熱した電線を眺めて居ると、ざあ〳〵流れる河の音が忘れた樣に私の心をそゝる、何かしなくつちや、そうだ何かしなくつちや、手を胸へ組んで、ぢつと目を閉る、何か眞理を求め樣と心を靜めにかゝると、腦は怪しく亂れて、W形した白黃色の電線が暗黑な瞳の底をきらめき步く、何時ものくせの針でさす樣な片頭痛を覺えたのでつゝと椽へ出た、自分の腦を自分の思ふ通りに使役する事が出來ない、其麼馬鹿な話があるだらうか、

宵月夜がかくれ樣とする薄明りに、墨繪の樣な向の山がおぼろに見える、朝な〳〵雄大な緣のかいなに、依り所ない我思ひをかゝへてくれる樣な、なつかしい山の姿よ、山の色よ、幾日ならずして又お前と別れねばならないのだ、凋落を喜ぶ秋は、お前に黃褐色の囚衣を着せるべく、後に立つて居るではないか、嗚呼衰殘し憔悴した山肌に黃褐色の囚衣を着て、血も油も涸れ切つた大古の遺物の樣な山影を望む時には、私も亦二十と云ふ年を過去に葬り去つて仕舞はねばならないのだ、喜びも、悲しみも、さつぱりと葬り去つて仕舞へるのならいゝけれど、そして私には餘りに重い、餘りに苦しい責をも葬る事が出來たなら!!。

南洋を偲ばせる芭蕉は萬綠を壓倒して獨り巨大なる葉を庭の一角に延して居るが、さら〳〵と川を渡つて吹いて來る風ははらり〳〵と裏を見せて、其れにさへ最早秋のわびしさがひそんで居る。

處女二十、プロゼーイックな花の夢を何時まで見て居る事が出來やうぞ現實に生よ、あゝ何と云ふ重苦しい叫び聲なのであらう、鉛の樣な、其れは自覺の聲であつた、與へられた生命だもの、現實に生きて、あく迄も充實したライフを送るのが吾々のはたすべき使命なのだらうけれど、現實にともなふ苦痛、煩悶思ふた丈でも私は身ぶるいがした、何も知らない者は幸福だ。

一人より無い子――、父母の慈愛が深ければ深い丈其れ丈、期待された望の標的が大きいのではなからうか、大なる標的に對する我責任、あゝ其は我肩には餘りに重い、世に人にたのもしい人間にならずとも、私は自己の性情を沒却せずに生きたいのだ、不孝の子、ゆるして下さい太陽の樣な熱熾の大盃に、全身の血を狂はす樣な酒を吞んで、うつゝに一生を送れたら。

大きな肉體をもつた人間が思ひ惱むのを嘲笑ふ樣に蟲は鳴いて居る、ざあ〳〵と流れる水の音が夜の大氣に滲み入つて、あたりは靜だ、何時の間にやら月はかくれて、名知らぬ星數多凄冷な瞳を輝し始めた、私の心は何時か遠くの國の果へ走せ、私の目はぢいと南の空に眺め入つた、吾知らずぼろ〳〵とこぼれた涙。
天の川は一すじ白い。

一時はこんな事云ふ女を自覺した女だと云つた、併し時は移つた、今はもうタイプにはまつた女だ、自覺でも何でもない、此君の文章は好いが―（醉茗）

こう云ふ事を書かうと豫定して、故意に作爲した文章である。從つて人を動かすことは出來ない。情熱の燃えるやうな若い人が、いつまでも斯んな乾燥した空氣の中に呼吸して滿足してるかと思ふと僕は泣きたくなる。（白羊）

○淋しい日記

名古屋　胡てふ

向ひ合ひの姉様を見ると懸命に模様附きのくけ上げをして被在る、ふくやかな頬、私が見ても美しい方紫と白の源氏雲に赤でポツ〳〵の破れ麻の葉の縫いかけの長襦袢を、ぱつと廣げて膝をくの字にして、ぽつとする庭の桔梗の花が小さくなつて、女郎花がこぼれかけて葉ばかりの萩の咲く時分に一人りきりの姉様が澤田様へお嫁きなさる、もうお名殘りの夏だ、姉様はそんな事何ん共思つて被在らないか知らん、もう足を上げて居るほんのつまさきだけつけて、厭に淋しくなる、私は暑い〳〵身も心もとけ込む様な暑い日が好きだ、涼しくなると蟬の聲まで淋しくなる、姉様は平氣で松葉つなぎの絽縮緬の裾模様を引張り上げて褄下をくけて被在る、何んともないだろうかよ、足を上げて居る夏が、氣がいら〳〵する、無理に泣いて優しい姉様を思ひきり困らして上げたい様な氣がする、ゆうべこほろぎないた事知てらして、イヽエちつとももうなくのか知らん、エヽ二時頃、そんなにおそくまで起きていらして、姉様の事なんか思い出したら目がさえて泣いて居たの姉様はもうよその方にお成りなさるのだもの、胸が一ぱいになつて姉様を見たらやつぱり泣いていらした美しい島田の根を見せて、お夕飯の時つく〴〵見て居らした兄様が、てふも晴子の様な髮に結ふといゝ、と被仰つたので大笑ひして、母様と姉様とお買物にいらしたら兄様が留守番に何かないか、と被仰るので、バナヽと梨ようかん、を出して上げたら、バナヽ三本とようかん一本ぺろりとたいらげて湯呑に一杯お茶を上がれたので吃驚したら、天下の豪傑だ、と言つてまたあられの鑵の中に手をつゝ込むんで被在る、眞實豪傑だ、兄様澤田様はどんな方といふたら、色の白い口の小さい妹脊山の求女の様な男だ、と被仰る、お優しそうな方で、とゆたら、天下の豪傑じやないよ、てふにはせめて己れの片腕になる男を見立てやる、と被仰る、バナヽやようかんを召上つて我儘を被仰る豪傑ならまつぴらです、といふたら、オヤ〳〵矢張り求女の方かやれ〳〵情け無い奴だ、こんな位いならせめて一人り男に生んでほしかつたに、何んて憎まれ口きいて、ゴロリ、何か言うと思つたが、こほろぎが泣き出したのでジーツと考へた、たつた一人りの姉様は今によその方におなりなさるし、姉様より、より以上可愛がつて下さる兄様にも、どこからか姉様が被在つたら私といふ者はどうなるだらう、兄様がいつか、お前は柿のえだ落ちの晴子に、にてくる、と被仰つたがそうかしらん、こんな事しみ〴〵考へて涙を流す様な女ではなかつたが！、茶の間の時計が十一時打つた、まだ母様はおかへりがない、兄様はお疲つたので肌涼しい夜風に寢冷へなど、と思つて翁格子のモス中かたのねぎ捨てを掛けて上げた、寒い様な月がさし込むんで、私の影をしよぼりと寫して居る、涙がホロホロと、落ちた、

私はどうなるんだらうつて、きまり切つてまさア奥様さ(凹坊)

○水のいろ

麻布　百合香

「夕美さま、貴女の痛ましき御心は、想像出來ますが、なほ輝きある君が前途の卅年を、何故に無視なさいます。どうぞ御心をひろくおもち下さいませ。

一日の光陰を無爲に過し能はぬと同じく、或理由をもつて生れた生命を、徒らにすてゝはいけません。罪ですよ。煩悶に深き涙をもつて、一度は捨てんとした身は、今全く反對の心を抱きました。私は人より一日でも一刻でも長く此世に生きて、我が力を試したい。

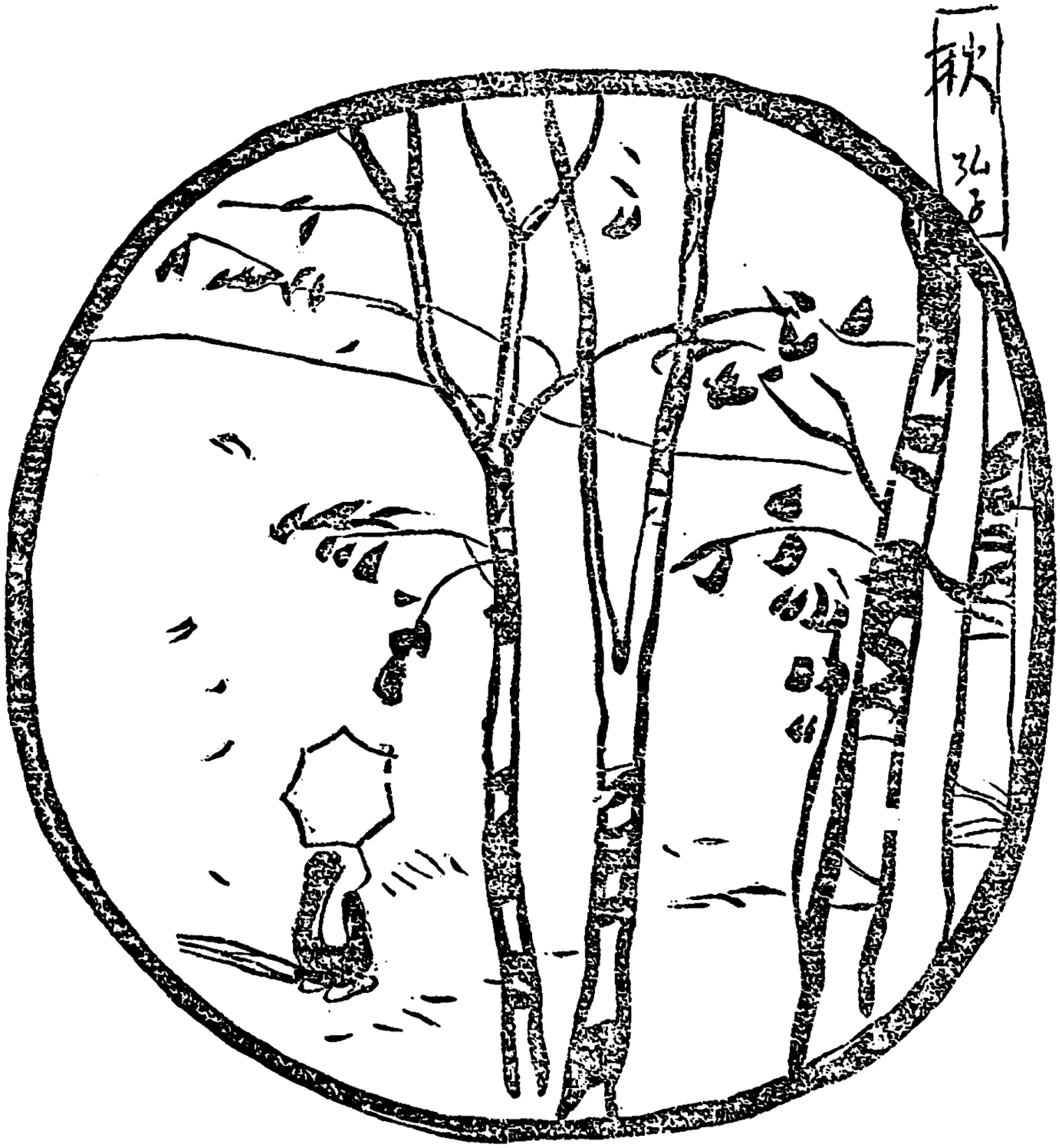
今こそ低き小學敎師ながらいつ迄くづ〳〵してはゐません………」

打顫ふ手に讀み終つた時、わが立つ後から、微かに浮くやうな、ピアノの音が、風に送られ來て、胸は苦しく亂れて、夕雲のあし早く東へ〳〵とゆくをみつめた。

はてしも知られぬ、大空の廣さよ、その中に、みてる空氣にふれて生活しゆく幾多の人の境遇は思ひも及ばぬ哀れさの極、貧に泣き病苦に衰へて痛みつゝなほ人々は世と戰ひ生きん〳〵と努力してゐる、

私は其等の人を氣の毒に思ふと共に其心がむしろ羨ましく不思議にも

思はれる。
　育たん生きんとする力の強き草は石の隙間〳〵をくゞり樣々の苦しみの後まがりなりにも芽を出す。
　痛ましき奴力を見れば可憐の心も浮ぶけれど——なぜ私は生を樂しみ得る心になれないだらう。生の意義を解されず泪をもつて生くる事のあさましく思はれてならぬ、何故に多くの人のやうに廣き心をもち得ぬだらうか?、僅かの障害に逢ふておぢけるいとよわきふるへる心をもつてもなほ運命に服從して滿足し得ぬともすれば我事をも人のうへの如くし第三者の目もて冷視する事ある——冷やかな涙のまさりゆきし我心の冷



秋　　　宵山　　中村弘子

えよ。名も知らぬ道の邊の草さへ太陽の熱にはぐくまれ宵々の惠の露に浴して育ちゆくを思ひ、わが育ちし廿年間の長き年月絶えせぬ母の惠の——退く迄乳房にすがりし子故に——わけて深きを知り不足なき教育うけしを思へば、自棄せられる身ではないけれど、——あゝ何によつて我心は安まるであらうか利己主義の心か?、目も榮ゆる紅地の帶固くしめつゝ、赤黄青の華やかな色彩の、藥鷄頭に手をふれて「どちらが派手?、まあ夕美樣のおじみな事、赤がございませんのね。」と媚ある目をむけて、八重さんがきいた時も「私のやうに心が更けちやだめよ、八重さん貴女廿一になつて廿二になつても、赤の帶しめて、若い〳〵少女心で、お出遊ばせね。」と未だ夢みる人の肩に手をかけて我が濕れる目を伏せた許りだつた。
、、、、、、、、、、、、
　去年迄は赤地の帶も匂

はせし身ながら、紅多きを誇りしは昔である、衰れし我心を思うては、惜しかるべき名殘の紅の、扱帶もずてん我身をもずてんと思うて。

帶にと勸められた、紅多き友禪を斷つて、長襦袢に仕立て、驚く人のお顏に、淋しいゑみを見せたのみであつた。

石に縋つてもと、生を願ふのは、何時であらうか?、苦しき心抱いては、自然に圍れて、獨り住を望ましく思ふのである。

追々に引き締つて來るやうです、あなたは驚くべき遣草家ですから濫費しないやうに努力なさい(醉茗)

○枯れた葉

古那夢

蒼白なはちすの下に、秋海棠の花が薄赤く笑て居る。雨が晴れて、雲の切目からこぼれて來る光線が、下界の濕氣で反射力を失つた樣に、柔かにぼんやりと初秋のすがれたみどりの上に、浮いて居る。

靑いものが次第に衰へる裏から、浮き上るのは薄く流れる藍の色であるその色がだん〳〵に濃くなつて靑を包み、みどりを呑むで、世の中が全く濃い藍色に、覆はれて仕舞つた時、あゝ秋が來たのだな、と人は氣がつく。

はづしてあつた障子も、昨日ははめた。

薄野呂の目の色のやうに、どんよりした、秋の日が窓を切つて斜に、疊の上にほをり出されて居る。

「姉さん白粉草を拔いて仕舞ひませうか」と結び付けた兩方の袂を、肩に脊負つて椽側に腰かけた妹が、聞いた。

「まあもう少し、そのまゝお置き」と問はれた姉は云つた。

自分にしては暖かい言葉を、もらしたものだ。

私の心は、物にたとへたなら、氷の樣なのである。どうしてといふわけも、かうしてと云ふ、原因も自分には分らない内に、いつか冷たい心の女になつて居た。

そうして氣がついた時には、もう泣かふにも涙もなく、人の涙をあなたは泣いて居るんですか、と笑つてながめて居た、

世に捨てられ、人にみはなされた、私は世を捨て、人を投げ、自分をも打棄てゝ、仕舞つたのかしら、

冷えて、冷えて、冷え切つて居ると思つて居た、心のどん底にもなほぬくまりと云ふものが、ほんのりとなりみとめられた樣な氣がして「津代ちやん、獨りで枯れるまで、拔かずにお置きよ、可愛相うだから」とくりかへした。

いつもの私だつたら「あゝ引つこぬいておしまひ」と云つたかも知れない。

妹はそうと、可愛らしい目で私を見上げ椽のふちをはなれて、ベタベタと赤い鼻緒の草履をベタつかせ乍ら、小走りに去つた。

黄ばむだ梢は動くとも見えぬ先に、一葉二葉が執着の念など露程もない高僧の樣に、パラ〳〵と落ちる。

風呂場の煙突の煙に、枯れた栗の枝先に、たゞ一葉の蟲食葉が、かじり付いて居る。

風の吹いて二度三度、上と下、右と左にゆすうら、ゆすうら、と靜かにゆすつて居る。それでも病葉は未練がましくかぶり付いて居る。やうやく風がおさまつて。動きもせねば音もせぬ落ちついた空氣の中をぽたありと、殘された一人ぼちの病葉は地に、落ちた、同時に風がさつと來て、廻りの、枝を辭した古い葉と、一所にかきまはす、カサアリと音がする、丁度鹽せんべいの中に手をつゝ込むで、引きかきまはす樣な音がする。穴の明いたゴムマリをしぼつた時の樣な風がすうと、袴の中に流れ込む、障子をしめて、縫かけの袷の袖を引よせた時、窓の外にパサリともの〻、落ちる音がした。あゝ秋になつたのだ。

口のきとしまつた、目の黒い二十女を聯想す(Y)

○雨の日椽にて

越後　あはゆき

前かけも袖もこんなに、氣持ちの惡るいほど、しつとりとするまで、私はまあこの椽に立つて何を考へて居たらう、……何にも考へてはおな

かつた。さつき梢の青葉を、暗くひるがへし、白くひらめかして、ざあざあ降る雨の中を、かけらせて行つた祖母の車を追ふて行つた私の魂のゆけども行けども祖母のふり返つてもくれないのに失望して、しほしほ我が胸の住家に歸り目覺めた樣に我れにかへつた、その瞬間のさびしさ其れから時の經つた今迄、なほ茫然とこゝに立つて居たのだつた。

ふと、なんの面白味もない只廣い庭の、小草の上に散ばつた柿が、身じろぎもせず、雨に打たれてゐるのが目に入つた、色づくべき時が未だ來ぬに、早くも色づいて地に落ちし其のあせた悲しきくれなゐの色。

――雨がはれた、白くミルクの樣に澱んだ空には、不思議な光りがあつて見つめてゐる、目が痛い、其の白い空が東に盡くるところに、青黑く恰も終焉の人の枕邊にたてまはした、屏風の樣に、國境の連山が、しづかにしづかに我れをとりまいて立つて居る、

殊更私がさびしく考へるのかも知れないけれど、あの連山にかこまれた、この越後平原ほどさびしいものはないと思ふ、渺茫沙漠の如く、みるべき山もなく、影をうつすといふ清い流れもない、霜月のはじめしぐれと共に雪ふり、花さくといふ彌生地の色をみないもの、さびしさを意識しなかつた過去はしらない、今の私にはあまりにさびしい。

あの山を越えたら、そのかなたには龍宮の樣な、天國の樣な明るい美しい野にはみどりもえ水清く花の麗はしく咲いた國が、果てしもなくつゞいて居るだらうと思つたのは幼ない頃であつた、はたちを越えた今、其の空想は破られて終つたけれど、ともすれば山美しときゝし信濃を夢み天高く澄むといふ、むさし野を戀ふ、けれど私は未だどつこもしらない、

いつの日夢に戀ふる其の、野山にまみゆる事が出來るだらう。

情緒の美しいのを取る、描寫はまだ足りないやうだ（ＳＭ）

○初秋日記

京都　要司村森の女

三日めの雨、初秋の野に降りそゝいで病床の私をだん〳〵、暗い淋しい處へ導く如く思はれる、頭痛がして、がん〳〵なるし目がぐらついて本當に堪らない。午前ベルが居ないつて家中がさわいでゐる、野に森に街道に皆出て行つた。私も氣になるからそつと起きて、もしか椽の下にでも寢てやしないかと、ベルよ〳〵ベル〳〵つて幾度も呼びかけたけれど出て來ぬ。山崎街道で死んだ與一兵衛よりも、たかいベルは何處へ行つたんだろう、散歩に連れて歩いたつて誰一人咎めない者はない、可愛い犬だ耳の長い犬だつた、

やはり外へ行つたのかしらと思ひ乍ら、鏡臺の前で髮をといて居つたら、微かに犬の吐息が聞へる、あら、そつと窺どこへ見に行つたらすました顔して、あごつき出して寢はらばつてゐた、皆探しに行つたんだか遊びに行つたんだか。

暮。仕掛てをいた男袴が氣になつてならぬから、そつと、文庫紙出してそつくい作へて、こし板をした逆せるからつて、お取上げ仕樣事なしにね床へ戻つて、爪の掃除をする、とくさの付いた鋏で切つた後を手間かけて一一とこすりそめる、大分臣臥たから被向けになつてると、平日もより物が判然と大きく見える樣だ、少し眼がだるい如だが――まさか眼が大きくなつたわけぢや有るまいし。此上大きくなつちや大變だ、でなくつてもいつも、稼業の子〳〵つて皆して冷笑んだもの。（風の日）

「コノマ、カイタケレドヤウセンセイガゴランニナツタラナントカコリクツヲイダヾクヨウデオソロシイ」と小さな蟲めがねて見るような字で書き添へてある、夜雨は半分棺の中へはいつてますから大丈夫小理窟も大小言もおつしやりませんよ（ＳＳ）

文章は上手になつて來たが、字は相變らずあがらない、やう先生なら叉沒にするだらう、（太郎）

○水害日記

越後　秋月すゞ子

八月七日、

母に八釜敷く早つから暗がりから起された、息も絕えん許りの障子端の空氣の臺洋燈も、細そく輝きて、寢ぼけの私の眼を鋭どく射た、蒸暑いので胸から兩の腕を出して、好い心地に睡つてたらしかつた、枕元の

がすじまの短く成つた單衣に例のメレンスの赤い帶を、くるくる巻にして邪の見富らぬので肩からすぱつと出して、袂と袂とを肩でひねじり結んだ、水さしの水でがうほくくと口中をすゝぐ、柱のなあがい時計は今三時打つた、裾をくるつとまくつて階段を降りた。

第一番目の段が昨日もずぶもやりだつたのが、今朝はぺろりとむき出し、オヤと思ふてそろつとたる木に足踏む、奥の方で母の掻き廻す水の音が聞える「お母樣私もお手傳に來ましてよ、昨夜よりお話仕て居つた如に必ず、今日は引いたゞろうと思つて」「まあお口が甘まいね、先刻よりさんざ人に起させて」「あらさう濟みませんかつたのね、でも今日も一人で眼を覺ましましたのよ」變手古な口をきいたまたそんな寢ぱけ言つてる此水ででも顔を一つお洗い」「あらお母樣てばひどいこんな水であなたお洗い」無用な口をきゝ乍らギヨロくする土間をぺちやくかんこ突いて箒片手に板や敷居や柱をはき始めた、所々煙しとく二十匁ろうの光が水からむき出した板や敷居や少くなく成つた木に影を崩づして輝く、大心配さうに母は「お鈴この長持中へ水が這入つた」ときかせられる「まあさうですねうつかり仕てましたもの」自分も悄りしちやつたどうせいゝものはないんだもの、と思つて見たけれど後仕末に困ると思ふとうんざり仕ちまう、生後始めての此騒ぎこれも〇町に居れば。——……まるつ切り夢の如、此れも人の運命てふもの。

「兄樣兄樣」と數度階下で呼んで見た、けれども一こう馬耳東風、いくら兄樣だつてとむつとも仕たが、晝のお疲れゞ思ふと可愛さうで堪まらない、「まあ薪炭が」と自分は見付けて言ふた、母は、「あ、だからのなれないもんだから、裏が乾いたら私が毎日少しづゝほすから」と被仰る老いたる母の殊勝なる心よ、ジジーと今はの際の片隅の蝋燭の其可憐なる言の葉、云ひも終らぬにぱたつと下に落つると共にぱつと消えちやつた、あゝいじらしき蝋燭の炎よ。

漸くして母は足の水氣を拭いて階上の椽側に七厘に湯わかしに、着手した、兄も起きた私も明るく成つたので、ろうそくを消して足を拭ふて昨日の如くざつと洗面して、せまく成つた座敷に昨日のお握を喰ふお菜は漬けた胡瓜茄子、に豆位なもの、母は味が變らないで、よいと云ふて梅干出して下さる、いつもの魚肉の馳走よりこんな日にはよりど以上おいしく戴ける。

少し自分も手傳は仕たが八釜敷い程、私らの世話燒て兄は出て行つた、

母は水の少く成つたので裏へ出て茄子や南瓜等の葉を手で洗つて呉れてる、十時頃には早う悉皆引いちやつた名殘りにどろを萬物に付着させて去つちやつた、ドロくして手爾るゝも氣持ち惡るし。

二日三夜ももぐつてた割に思の外丈夫なので母の喜びはすばらしきもの、例の二階に二人は寢轉で色々と水に付さてのくどき話の後、とろとろと眠つた、目覺むれば一時、御飯を焚て母は草鞋穿いてまた、裏へ出られた長持出しましようかと言ふて見たけれどもまた、外がうまくかわかないのでよしちやつた。

井戸はどろ水が一杯、お飯も何も出來やしない、兄樣がそれでも氣をきかして〇町の家からたいて貰つて持つて來て呉れた、茄子やほたて貝やしい昔の煮付けに胡瓜もみをも、手桶に竹箴が水を持つて來て呉れたあうれしい、呑まぬ前から早うくしやくに一杯も呑だ如の心持ち、早速コツプを桶に入れて二杯呑だ、母が早速戴きましようと被言るので夕飯には少し早いけれど戴いた、竹やは辭儀して歸つちまつた。

兄はまた出て行つた、馬毗に蚊がさすのでかやを釣つてかやの中で明日の仕事のうち合せをする。

此は一部分でせう、筆の立つ方は斯う云ふ出來事を筆にして後日に殘して置くのは好いことです。（醉茗）

○秋のころ

前橋みづ枝

ゆふべついた母校の雜誌を、見やうと思つて冷い椽側に腰掛けると沓ぬぎの上の庭下駄が、ひいやりと足の裏に、冷くしみる、あゝもう秋だ——こうしてはおられない、と何物かに追はれてゐる樣な、淋しい切なさを滋々と感じた。

パラ〳〵と繰る頁の中に、お京さんの名を見出した、

懐しいお京さん。——嫌だ嫌だつて私に縋つて泣きながら、まゝしい母様を憚つて、友はこないのだ、たつた獨り、涙の顔に鮮やかな笑をつくつて宮城の野の人になつた、

宮城の原は今七草の盛りでせう、咲きみだれた花の日道を、俯向きながら行くしほらしいお京さんの姿を想像するととびつきたい程戀しくつて……逢いたいわねお京さん、

庭の片隅から起る、小さい蟲の音を無意識にきゝながら、ジツと考へてしまつた、

椽先に出してあつた、鉢植のあふひの花を知らぬまに挘つて唇に當てゝ居た、後に少し、紅の花がお淋しく殘つてゐる、曇つた空に、お隣の煙突から出る、うす黑い煙が眞直に、ゆら〳〵と昇つて、次第に淡く白く、おしまひは消えて見へなくなつて行く、

紅いさるすべりの木の下を、奥様が細い聲で子守唄をうたひながら、行つたり來たりしていらつしやる、私も、昔はあゝやつて、母に無邪氣な夢を守られた時もあつたかとおもふと、今二十の自分を省みて、何もかもかなぐり捨てたい程、いやな〳〵心地になつて口惜し涙が止め度なく出てきた、お佛壇の香の匂が濕つぽく漂うて秋らしい氣が何處にも見えてゐる



跫音　芝紅女

挾んであつた詩は愚作だつたが文は上出來だ、いかにも秋の色があらはれてゐる（SSS）

何がいやで〳〵口惜しいのか些とも分らぬ、如何にも叙景は好く出來てゐるけれど——（M）

○嘘

笑子

初秋の眞晝の日光眼まぐるしい窓にいらいらした重い頭をかうなゝめにふりむけて靜夫樣への手紙をかく。嘘！ 嘘の涙、嘘の戀、嘘の言葉「日夜煩悶致し居り候……」ほゝ、嘘ばつかり、嘘をおつしやつて……と思ひながら、私も矢張嘘の手紙を書く。面白い戀、二人共嘘を言つて嘘を書く。――私は文をかきつゞける。「あゝ果敢なき戀にも候かな、私……あゝ私よし君樣の夫てふ御名御とり遊ばし候とも、いかで忘れまへらすことを得候べき、私の人妻てふ名のもとに生くる日の……人の世の義理にて……よしまへり候とも私の戀人は君樣をおきまへらせて……」

とかく自分ながら面白い言葉が出ると思つて冷笑した。「あなたの御手紙は嘘でございませう、あなたは私をとうに御忘れ遊ばしましてせう、私よく存じて居ります、私も貴下といふものゝ影はこの胸にはうつゝてはおりませんのよ」と何故筆は走らないんでせう、ほゝゝゝ斯う笑つて又書きつゞける。

「君樣の御文拜し候ごとに、この小さき胸は跳り狂ひ申候、人なき夜、御うつしゑを胸にしつかといだきまへらせて身をおのゝかせて……」だんだん面白い字が並んで行く。心にもないこう云ふ字がよくも出ると思ふ。

ほゝ、靜夫樣、貴君のやうな御方にいつまで翫弄されて居りますものか、

もう、とうに醒めて居りますわ、冷めて醒めて居るんでございますよ……と思ひながらもなほ、面白い字は、おかしい筆は、走りゆく。

また一面の諷刺（五）

○くづれゆく樓臺

伊豆　白光

其の頃厳めしい校舍の中に、偶像子のやうなシンプルな生活をしてゐたけれども、自由を得たいといふ考はあまり强くはなかつた。淺ましい小心者を、師も友も一齊に理性に富んだ眞面目な女と見てくれた。それがいはう樣なくつらかつたつらかつた。けれども赤裸々に個性を表白することは出來なかつた。……遠く一百里の北に遊ぶ趣味も性格も全く異にした人の一人を戀ふて「未來」に空想の翅を廣げ消息までも斷つて居た當時は、淋しいけれど樂しい時代であつた。――僞つても善良な人となつて居なければならなかつた。

けれど……相見る時は、火のやうな熱情を持つて、ほのほの樣な言葉を交す二人の、一人の私は、ともすると影の人のやうに忘れやうとする倫理の時間に「身をあやまるな、學校を思へ、親を思へ」といはれる時羞恥、慚愧に頭をも上げ得ず、一時間中辯解の言葉を考へては、自らわき立つ心を抑へてゐた。大きい罪惡でも犯したやうに、ひた隱しにかくして、苦しんで通つた二年、

（泣かまほしさにわれひとり、
冷やき玻璃戶に手もあてつ
窓の彼方はあかあかと沈む入日の野ぞ見ゆる。
泣かまほしさにわれひとり。（思ひ出。）

夢みるやうな柔らかき心であつた。

「社會に出ては誰れも心から親切にしては呉れない。何事も自分の理性で所置をしなくてはならぬ」とは校門を辭する時餞けられた言葉である自由の境地に身はおかれて、れんぎよう咲き、椰咲きしづ心ない二十の春も、理性に働く女の胸は冷やゝかである、人との消息は絕えて了つた

夏に入つて故鄕に歸つたといふ報知を得ても自ら進んで會はうとはしなかつた。八月七日、ふと電車の中にめぐり會つて、降りたときは、しらずいひ合したやうに、淋しい徑に入つた。……一年前のやうな華やかな情にみなぎつた心を持つて居ない私は、どんなに冷たく人の瞳に映つたらう。

この冷めようとした心。四つまさり、學ある人が何となしに物足りない。

御ゆるし下さい。

妻としてかしづくには、あまり女の心が老いて居る、ましぐらに火を

ぬすむやうな、そんなく熱烈な戀は、もう私には出來ない。

二人の爲の天地とたゝへたのも、未來はと手をとつたのも……あゝ。現實されようとした今になつて、築き上げた樓臺の、くづれ落ちようとは、誰れもくしらなかつた。

人が惡いのではない。私がわるいのでもない。遂に運命として終るのであらうか。嘆くには餘り心が荒んでゐる。このあやしい力、毀せ、毀せ、私はほゝ笑んでくづれゆく樓臺を眺めよう。

私はこの人に言ひたいことがあるけれど言はぬ。この文は半解である、たゞこれだけ。(Y)

○十八の秋

森　八千代

冷たい秋雨が音も無う、咲き亂れたコスモスにそゝいで居る、あゝ秋雨・淋しい、昔の戀人でも思ひ出しそうな樣だ、憧憬々々て燃ゆる樣な思ひを抱いて上京した私はあらゆる束縛から脫して、自由の天地に入つた讀物にをいて、交際にをいてはなやかな靑春の血のをどりそうな讀物も讀むだ、晴れ渡つた初秋の午後を校外の芝生に夢の樣な理想も語つた。

あらゆる友から羨望されつゝ上京して、一年あゝ一年「友よ健全なれ必ず戀につまづくなかれ、とふ心から送別の辭をのべてくれた友の多くは結婚した、今に母と成る者さへあるとか、淋しい音をして松蟲も鈴蟲もないている、之から段々寒く成るにつれて夜每に細るあはれの音よ。

あれだけ堅い自覺をして上京した私も、やつぱり女、平凡の女、でした「あゝ母樣先生」白萩の亂るゝ窓、カンナ、コスモス、シオン、等の咲きこぼるゝ花園よ。木々の梢色に出づる白濱の峰よ。湖を渡つて來る北艮の山風よ。白濱風よ。必ずわが母。わが師につらくあたりそな、何のなさけようしやも無い、武藏野の秋風は初めて大海に舟出した少女には、なかくにつらふ御座います「母樣ある母樣」のあたゝかい御ひざ元に、十八年間雨にて風にもあたら無かつた私は、つくづく母の愛、師の恩の多く大なるに感じますはるかく故里に向つて のくるしい、むねを抱いて感謝いたします。むねの動氣があまり强い手をあてゝ見るとやはらかい乳の下ぶドキくひゞく、

あゝ十八の秋、わが花やかなるべき十八の秋は餘す所わづか三月、あゝ心淋しい、この心の淋しみ、あのゆげのもーくと立つ中に包まれてみたく急に思つた、石鹼やあかすりをもつてぬかるみの中を。八時過ぎ、少しぬるかげんの中に心までしみよとばかりつかつた。ゆげにつゝまれた鏡にボーツと上氣した肉色の自分をみた時は、さすがにほゝ笑まずには居られ無つた、

やはらかくふくらむだ雨の乳よ。正に行かむとする十八よ。大浪の來襲した樣な皷動の烈しいむねを抱いて白のシーツに橫たはつた絲の樣な雨は音も無うそゝいで居る

美八ならん(SM)

○日光山

常陸　木村那賀子

今の私の心に描いてゐる日光は、それは、泣いてもく、聲ある限り血のある限り叫んでも、答へる者はこだまばかりの深山だ、幽谷だ。

眞赤な朱塗りの御橋は華やかであらう、けれど、下を流れる大谷川の激流を私は知つてゐる。岩にせかれては岩にあたり、あたつてはくだける飛沫、恰ど恐ろしい猛獸の吼へるやうな凄い音を立て流れて行くのではあるまいか。

中禪寺湖の水の色、此所いらの沼湖のやうに蒼いんではない、必と眞黑で渦捲いてゐるんだ。そして其中に住むでる魚は、みんな人間を食へるんだ、人の肉を餌にしてゐるんだ、其湖水の面を生ぐさい風が吹く時恰ど大蛇の脊の鱗のやうな波を作つて動くのではあるまいか、數丈の高さから岩を破つて直下する華厳の瀧、其猛烈な勢ひで落ちる水に何千年となくほられた瀧つぼ、どんなに深いんだろう、そして眞暗闇なんだら

う、湧き立つ樣にもれ上る水、其中へ
身を投げ入れゝば、瞬間に死ねるんだ、魂ばかりぢやあない、此肉も此血も、忽ち消へて了ふことが出來るんだ、華やかな美しい東照宮、眞赤な御橋などはどうでもいゝ、私は、私の心に描いてゐる、魔の住む隱のある、大蛇の潜む淵のある、暗い〳〵日光が戀しいんだ、なつかしいんだ。

お鎭まり遊ばせ、さう激昂したつてつまらないでせう、一たいどうなされたんです。(先生)

○肉のみだれ

豐前　翠

「足取りが惡いがどうしたのか?」と、とう〳〵見つけられて「こんなになるまで放ッとくなんて」と、叱られた、終ひにはどうしても弱い者になるのだが、不養生と云はれてもよい、醫の大事と云ふ事を識らないと冷笑はれても構はない、動ける迄は爲る、四五日前から痛むで居たが、僅か二十日か一月下女が居ないため足を痛めたと云はれ樣? 雇人を除けてから肉身の者ばかりだが、そんな自己の弱いのを表白する樣な事は云へない、それが出來るなら今迄總べてに對する執着も潔く苦痛も受けなかつたらうものを……強く成りたい! 強く思はれたい! そして同情されたくない、自分の空虛を人に知られた瞬間、最う對者より弱くなつたのぢやないが、そして同情されて喜ぶ! 何ンて意氣地のない自尊心のない、私そんな女を見ると「お前も人間ぢやないか」と叫びたくなる、

同情の進化したのが愛情と政はつた、よく似て居るが愛は同等である同情はそこに何等の期待もなく其情は美しいかも知れぬが、隷屬であるだから嫌だ、病的だと笑ふなら笑つて下さい

私は總べての人に對して、寂しい心、悲しい境遇を勉めて强く衒ふて居る、で、知れる人は一皆幸福だわと羨む其言葉を聞くと探ぐられた樣に冷やゝかな乾き切つた笑ひが唇に昇つてくるのです、

涙は女の命だと聞いてるが、私は此心の反抗のため此二年昨一度より外に見た事がない、それは昨年の丁度陰曆八月十五日のお月見の夜でした、雇人も奥の者も堤に遊びに行つた留守(輕い病氣のため)大きな家に唯一人冷たい椽に腰掛けて凝ツト靜思して居ると、何者とも知れず張りきつた破れ相な胸の、自我の扉を開いて與れた、黑い涙青い涙滾々とつきず流るゝ、庭の雜木の葉が時々搖いで月の光が暗に土に滴々と落つる、

何物にも頼らず囚れずに太く强く生き樣としながら、何かに縋らふと手をのばして居る、

足がづき〳〵痛ひ…手の平で强く押へて居た私は、恐い物でも見る樣な不安に馳られて、知つて居ながらいち〳〵指の股を開けて見た、嗚呼何ンと云ふ抵抗力の弱い皮膚だらう! 水のため紅かるべき指股の肉は亂れて白だゞれ!!

弱くなりたくない、皮膚よ肉よ何故此心と釣合ない、

筑紫の果にも斯ういふ女がある、時代なるかな(KK)

○穴

神戸　宮本てと

隣りのお座敷へ燈りがついたらしく塀のすきまから青い光がこつちの庭へ流れる、續いて華やかな笑聲も聞える、何と云ふいゝ調子で物云ふ人だらう、

失禮だけれども一寸ふし穴から……あら、○伯の小間使にいつてゐると云ふ△△の娘さん、今時分遊びに來たりして、どうしたんだらう、家へ歸へてるのかも知れない、秋草模樣の上品な浴衣に紅い帶むすんですました風してゐる!がとにかく後姿は及第だ、おや肩上がない、十七年の若人に肩上さへないとは餘りに淋しい、中腰になつてのぞいてゐるのも中々苦しい、面倒臭いからとう〳〵下駄でドンと塀を蹴つた。ヒョッとこつちむけた顔、やあ……逃げる樣にして來て椽に腰かけるや否や笑つた笑つ

た、今夕立にあつて粉屋へ逃げ込みましたの、そしたら粉桶の中へころむで……と云つた樣な途方チラツと見たのだから餘計ベツタリと見えて、狐の化けたのにそつくりハツハツ……笑止千萬、

あんまりからだを搖すつたので腰あげへ入れてゐた洋紙がはみ出してゐるつとぬき取つて細かく〳〵さいて土の上へ散らした、涼い風が一ひらづゝ白い紙切を何處かへ持つて行く

それを黑い目した瞳と金茶色した猫の目とがにらむでゐる

自分はこの人を大人しいタチのいゝ孃さんだとばかり思つてゐた、どういふわけか寫眞は呉れないがよく高價の繪葉書を下さるので可愛く思つてゐた豈料らんやコチムケイオイ、コラツにはびツくりしちやつた。（凹坊）



秋の歌　仙臺市　安井桂子

○夕べ

大分　紅きはな

氷とまがふ鐵の欄に平行して置いた机より——秋、芙蓉の軟い瓣に輕くふれた寂しい囁き！　紫に野菊のすゝり泣く夕べ、私は机によつてみるともなしに庭を見た。昨夜は鈴蟲の小さき顏をかくした眞菰の葉が、夕月の赤い光をさけて冷い土の上にうづくまつて、根の方が弓なりに高く曲つてゐる。花に埋るゝ春の日に、其の長きをほこつて居た糸柳の枝と祭日などには國旗の空に翻るてふ木の股とに、長々と横へた竹のさをには白い私の寢衣が危う片袖はづれて掛つてある。薄情な風は、露は、これをまでも吹き飛ばし、うるはさんとしてゐる。それは私も家に入れやう、しかし今暫し彼の月の北に走る雲の中にかくるゝまで、露には濡らしたくない風には奪はれたくない。そつと帶の間に手を入れて、夜をはづす時の事を想像して見た。一昨日こそ買つて頂いて、まだはの減らない紅緒の下駄をはいて、秋になつたといつても別に生え更へもせぬし夏其のまゝの草を輕く踏んでのびあがりながらスーツとはづした衣の腕に軟うふるゝ時の心地……、老いぼれた竹の殘された歎息……月は照つても、星は自由にかくれても夜露はおかれても、濡れしまゝに慰藉者もなく、只一人で、長い〳〵夜すがらを立つて居らねばならぬそが境遇も亦涙であるのだらう泣いて〳〵なき明した涙が、竹の雫となつて、朝日に輝く時美しいと纖き掌に受くる女の子に「涙！私の涙です、弄んでは下さいますな……」といふ事も出來ないだらう。子供はそれを笑つて受くる——寶に罪も知らない幼き子よ——私だつて昔はとは思ふけれど、……新紙ひろげてよむ時を風が吹いて來てバサ〳〵結び立ての髮に障つても、小さき悲哀は覺ゆるものを。今の私昔の私！もう一度其の時の心に、其の際其の顏とを鏡にうつして

比べてみたい、

かつては私の妹であて慰めてくれた十四の子と、其の親友とが、笑ひの聲よ、行よ、美しい洋傘に、わざと土をつけては川の流れの深き所にひたして、中側にまで水をもらして騒ぎ遊ぶ……無邪氣……無邪氣……神の子にも似たる戯れ方よ。庭の向ふを川は流れてゐる。私は無理に其の遊び、と秋姫の衣とを大きなく硝子に映して、人のゐない靜かな山中の家の中にて、一々注意して見たいと思ふ。だんくに暗くなる――もう私の眸の色は見えぬだらう、立ちあがつて、更に腰をかゞめてむしり取つた花冠の花瓣を、くるくもんで垣根をめがけて投げて見た。と極めて幽かな恨みごとがかはたれ雲にのつて、私の袂をくゞつて、心の底に響いた樣だつた机の上もやはり寂しい……………

精彩が乏しい（ＳＭ）

○しのぶおもひ

遠山益子

秋の哀れを一しほに想する蟲の音にいつか、きゝほれて小暗き燈火見つめては、無意識に涙がほろくと出る、よそ事のやうに氣にさへかけなかつた、寂びしき旅のおもひを、今は我身に痛切に味ふ身となつた言ふに言へぬ、寂寥と悲哀は身内にくい入るやうである、たとへどれ程遠く何處のはてに浮浪の身にせよ、夫婦共ならば妾は旅の寂しき想いなぞとは心の隙間にだも味ふまいものを。今宵お艦はどこの邊りの波の上にやら、もう地圖をひろげる事は飽いてしまつた、世に無情は多くあるが實にこれにてした無情はどこにあらう、死別それは既に如何ともと詮方はなき事なのであるもの、無情といふもおろかであらう、妾はこう思つては沁みく情なさを感じる、忘れられぬ、花爛熳の陽春四月の初めだつたおもひ屆いて新らしき世界に生れ出で、滿ちくた歡喜に醉つて夢のやうに過ごしたのは實にあの心地こそは、何といつていゝか豫想はとても及ばなかつたそれだのに、あゝ、束の間だつた、不意の嵐は花を散らし夢を破つた亂れて亂れて狂ふ心を強くく引きしめて、勇ましく諦めはして居るのだが、心の底の底より湧いて出づる此おもひ如何に理を解し道を悟つたからとて、おのづから湧く出るものを、どうする事が出來やうか、心を何處へ持つていつてしまつたらばいゝかと思ふ。

せめてまぎらさうと、戸外に出で無頓着に平氣で歩いて見るけれど、そこにもこゝにも目に入る、同じ軍服の人、煙突く、うづまあてのぼる艦どうして平氣で居られやう心はそれに走つてしまふなぜあの艦ばかりが遠くへ出ていつたのであらう、なぜ彼の人ばかりをのせて、出ていつたのであらう、頑是なくこんな想ひがおきてきてもう、顏が上げられなくなるぢつと耐へてかけ戻つては一時に泣き伏す、諦めて固く心を結んで居るのにまた、繰返した。

寂しい孤獨の生活に入つてはや百餘日、日を經るにつれ冷たい地の底へ引き入れられくてゆく心の悲哀の裡にもまだ去らない若い華かなるこの香御別の際の御一言短かいけれど、餘韻は永く引いて、心の緒にふれては波打つて、そのむかしのをとめの心のなつかしみをおぼえ柔かく懷きしめて居る、泣いたり笑つたりして居る、已が懷きしめたる胸の香の若きをかいてはほゑんで、また繰り返さるゝ新婚の深き味はひを妾は待ち待つて居る、

幸福なる人よ君が夢長かれ（凹坊）

こんなヒドイ字がまたとあらうか、鬼角京生れの方はお化粧は上手だが字は下手だ、辭義する者豈わが聲のみならんや、文選は命が縮まるばかりだ、（活版小僧）

○初秋

伏見病葉

花の眞盛りな夾竹桃が、破れた白壁の上から見える向う側に離れた家の軒には、白いタオルが、薄暗に浮き出て、穩やかに吊るされて在るその屋根の上に電柱が水色の明るい空を貫いて、乳色の切れ雲が幾つもく電線にからむで此方の屋根から、彼方の屋根へ這入つてゐる。

見ゆる限り、明と暗とを刻んだ深いうるみを帶んだ灰色の屋根續きた處々黑ずんだ綠樹が各々梢ばかり見せてゐる。

風の無い寂かな午後

何處かで、爭ふらしい荒い人聲が起つたが、間もなく止んで了つた、

　腰掛てゐる窓から疊へ鉢の丹波鬼灯と、自分の半身とを臨らした淡い影が、不意に落ちた、どす黒い、しだらなく流れた雲の破れ目から太陽の、にぶい輪廓が僅に洩れて、銀白色にギラギラしてゐた。

　之等を、眺めたり、耳に挾んだり、茫乎してゐたが、故知らぬ溜息と共に、無意識に立つた拍子に、異様の恐怖の伴ふ一種の寂しさを感じた

　寒いので、目が醒めた窓の硝子を透して、淡い月光が枕元に少し溢れた粉薬を白々と目立たせて斜に這うてゐた、身振ひし乍起る昨日歸つたときも、袷を着た位冷つてかつたが今日も袷の上へ羽織を着る、やがて大降り、午後少し晴る皆下に居ると思つてるのに餘り寂で疊の匂ばかり鋭く感じて心細くなつたから筆を置いて下りた。

「おつ母さん」と呼んで見乍臺所へ來ると、むかごが十粒ばかりころがしてある。

　母は裏の野菜畑に、ふぢ豆を切つてらした、袖が少し觸れても、すぐ、パチ〳〵と、鳳仙花の果實がはじける。

二羽……一羽ぱら〳〵、又、はら〳〵、燕が去る

　非常に癖のある文章だつたので弱つた、若き未亡人でいらすので、添削してこれだけにして上げたのだ(S)

　言ふことは持つてゐるが、筆が廻らぬのである、別に癖の多い文章ではないがよけいなことを書くからいけない（k）

○誌友會の豫想

美作　水田邦子

私は毎日〳〵今日こそ！今こそ云ほう、と思つて、「お母様」といふと「ハア」と私の顔みながら仰有ると私の思つてる事がどうしても口にでなくなる、ついもぢ〳〵して仕舞ふ。ア、こんな事が此間からもう六七回。今朝は是非思ひ切つて、と母様のお傍にきたがどうしても云へない、之位の事をと自分の心を叱つてみても、矢張り駄目云うとすると何だか母様が怖くなつてくる、とう〳〵、何もろく〳〵話さいで自分の居間に這入つて了う。

　そして今言うとした事を繰返してみる、決して、悪い事ではないけど何たか……。お晝ご飯も、ソコ〳〵に戴いてすぐ居間に、何するでも無く一人ポツチリ、

　三時が打つた、早速お茶を拵へて母様のお居間に持つて行く「どうかお茶を」と差出した、「ア、そうか」と持つてゐらした本を傍へ……、何か知ら？とすると女子文壇だ、ア、云ふべき時は今！、と急いで「お母様、十月には岡山で誌友會が開けます……」「そういゝわね、私等も二人連で行きませうか」つて「エ入らすしやいますつて？お母様……二人……私も、私を……」「ホ、、、今のは冗談、私は出きやしない」「では妾を行



院内の女　秋田縣　小島健子

かして下さいますか？」『ア、行つてもよいとも』、エ、眞實ですか？屹度ですか？」、「ア、眞實よ、」と仰つた。ア、嬉しい！今迄樣々と苦勞してと云い得なかつたのに、今日はとう〳〵、早速お許がでて……。

こうなると何も手につきやしない、只もう嬉しくて。夜床に入つてからも、誌友の皆樣の事計り……、

ア、愈々何日だろう？大勢入らずかしら、お若い方のお集まり、まどんなにお美しいだろう？幹事の方々はそも誰々か知ら？閉會の辭は誰樣が……！

會場は何所だろう？、後樂園かしら、どうか其日がお天氣ならいゝが……とまで。

中國には際立つた誌友が少い、此機を以て諸嬢の發奮を希ふ（一記者）

○ヨルダン川

はま　曉　花

空には一片の雲だになく、後山の老松の間の月は低く懸つて居る。私は足の痛みを鳥にさすつてもらひながら、夢の人となつた。

T樣に連れられて湯河原の山を登つて行くのだが、どうしてもをくれ勝になつてゐきに、一間位離れて仕舞ふ。何處からか幽かに水の音が聞へて來た「私の名づけたヨルダン川も最う間近になつた、早く行つても一度洗禮をお受けなさい」と云ふ。山は行くにつれて險しくなつて來た、見上げるグリンスロツプには一ぱいに日沒の太陽が當つてる、遠く向うの山に眞白な輝いてる野を見て一歩毎に後をふり返つてはグローレーな黃昏の景色にチヤームされてると「よく〳〵そう〳〵休んでばかりいらしつたら晩になる」とT樣は二間位先でおつしやる。尖岩は空に高く輝いて雪の樣な廣い野は紅に映える、ピンクの雪は一面に流れ出して、巖に反射する光はおぼろげに谷は黃金の水蒸氣のうちに浮んでる「こんな山に川があるかしら」T樣は樅の木のこんもり繁つた中に入つて早く早くと呼ぶ。

綠樹蓊鬱として居て樹だか岩だかよくすかして見なければわからない其間から水晶の樣に透き通つた命の水は滔々と流れきて、俎板の樣に平たい大石の所で飛躍して、一間ばかりの所を高く歌ひ、強く叫んで、走つてゆく。それがホザナよく〳〵と叫んでゆく樣に聞へる。大石から一段下つた平な一間ばかりのところまでがヨルダン川だとT樣は云ふ、實際繪に見たよりも美くしく神々しい。

私はホツトして出來るつたけ山上の冷たい新しい空氣を吸つたT樣と岩に腰をおろして「日暮れてエスは一人山に登り靜かに祈り玉ふ」の讃美を歌つてゐらしやる、それがバンドマン一座の山手パブリツクホールで演じた A Waitz dreaue の樣で名優ビンセツトの聲のよう。と思ふ間もなくあたりが明るくなつて華かなメロデーが段々と近くに流れて來た。私は髮をほどいてちらし髮になり、ヨルダン川に身を躍らした、すると白い衣姿があらわれた私は手を延したが足に重い物が落ちて起てないアツとすると目が醒めた、見ると鳥やが頻りと白河夜船、重い物と思つたは鳥の頭であつたのだ。

ウマ〳〵と落し話をこしらへましたね、神秘めくヨルダン川から、足におちた下女の頭では帝劇どころかお慰みの茶番に過ぎぬ（凹坊）

タツタ一間のヨルダン川ではなるほど夢でゞもなければ夢中になれまい、（茶目）

○自　然

橫濱　石　黑　香　代

強烈に自然を愛する氣分は只もう大きく思ふ樣育い息を呼吸したかつた夜となく晝となく暇さへあれば私の小さい軀はきつと郊外に運び出されてゐる、土色の一線が限りなく緻いた易い道よりは、によき〳〵と蛇でも頭をもたげさうな叢の中を好んでふみにじりながら、誰にもあまり見せぬ微笑は、自然にばかりとめどもなく溢れた、私の前に開けたネエーチ方は何事も既に美化した畫である、あけはなして茅屋の一間家につく〴〵ろはぬ裸體をなげ出した不安も怖れもない自由な境涯を、相應はしい百日紅のあひまから眺めては、こんなリリカルな色彩を寫す事の出來ないのが口惜しくて、何故畫に進まなかつたらうと悔ゆる事が度々ある。

私の身體は時折森の中にすひこまれるやうにさまよい歩いた、幾百年を經た巨大の立木が影を見せない程の茂みあつた冷たい土の上に佇んだ時

はじめて私は生きて居るのだなと心から獨語する、兩手をひろげて無言の大木をかゝへる樣に、熱い額をふれる時、私の思つてゐる復雜な胸を、何事もあまさないで神靈な森に傳へられる嬉しさを覺へるのだ。
私は或物に涙をこぼして感謝する、神か、それが何だかわからぬ自然によつて泣いたり笑つたりする性情をさづけた無形に向てひざまづくのである。

自然を愛するのは好いが、もつと正直に愛してほしい(ＳＭ)

○友訪ふ朝

常陸　田村紫色

口論最中に、母が「またかね、此の子たちは、犬猫の樣だね寄ればさはれば、けんかだよ、まああきれるね、早くおしよ向ふから入らつしやるのは靜さんのようだから」早速洗面所に入つて、お白粉をつけ初めた時、靜さんの聲が聞いた。靜さんの今日の御樣子は、はでなモスリンの着物に、帶は羽二重クリーム色地に竹笹の大模樣、それを流行風に結んで、手には水色のペールを……いつ見ても美しい方、あんなに生れると一生の徳だと羨ましく思はれた。先日こしらへたのがいゝでせうかと母に尋ねたら、また兄いさまつたら横合から「お顏相應、鏡と相談して仕度したがいゝよ」だつて、餘計なお世話だ。裏庭に咲いて居た、ダリヤ、赤白黄とりまぜて手折つた。「無慈悲だわ」と靜さんがおつしやる。二人裏木戸から出かけた。道に、ほこりが立つてひどい。新道の橋の上に來ると、靜さんは、立ちどまつて「汗がこんなに、おしろいが、はげないこと」ときく「大丈夫よ私のは」懷中からルツキング、グラスを出して見た。靜さんは、ペイパー、パウダーを二枚きつて下すつた。道の眞中でお化粧ふるつてゐるわねいと言つて笑つた。橋を渡つてだん〳〵坂を上つて、蟬時雨ふる松並木をぬけて、キリギリス鳴く原を辿つて行くと、向うに詩的なハウスが見ゆる。鈴さんのハウスは、あれよと、風流な家をさす。あたりの草むらには、晝間でも蟲が鳴いて居る。

この君はよく英語を交ぜる、やり切れない(四)

○夕の渚

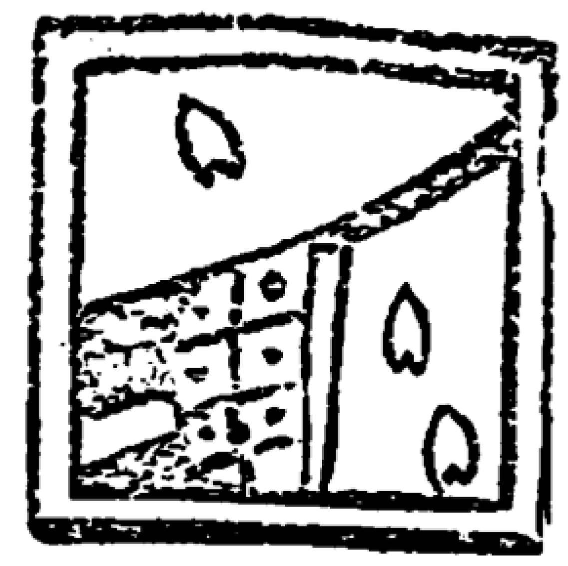
大阪　杉山かし

砂の上に彫んで見る自分の足跡を浪が來ちやあ洗ひ消して歸るのを悲しいと、ま白の小さい足に力一ぱい、深く〳〵と足跡を彫んで見て居る友の若か〳〵しさが羨ましくも思ふ、
あの夕陽の樣に沈み行く姿は、力一ぱい心のとびらを打つて見ても何の反動もない、それで居てまだ深く〳〵、と沈み行く心一層一思ひにドン底まで沈んで仕舞つて呉れりあいゝに。去年此濱であの六甲山の麓の人を慕うて泣いた人も最う今じあ和歌の浦に美くしい人妻にして、靜かな〳〵、浪の音ばかり聞いて居るでせう、あゝ其夢が一度でも六甲の下に通ふ事があらうか、心にも無い結婚を家のためとて強ひられ今は神戸に病むと云ふ人も我が友である。かくして我が心を知れるそして我から去りし友はみんな、美くしいそして弱い〳〵女であるのですもの、あゝ沈む〳〵、血の樣な色の夕日、遂に六甲山の向うに落ちて、オレンヂ色の入道雲も次第〳〵に淡墨色と變り、それも暫し淡墨が次第に濃く黑く〳〵、淡路島も、六甲山も忘れた樣に消えて、靜かな、滿ち潮のさゝやきに、月も無い茅ぬの海は黑い大きい夢に入つた。
ふと心づくと十七歲の類さんは泣いてる、手をとつて歸る磯づたひ月見草の白き笑ひをみた。

生氣あるは月見草だけだ。(四坊)

千代の句

落鮎の日に〳〵水のおそろしき
秋風のいふまゝになる尾花かな
菊咲いて餘の香は草に戻りけり
木蔭から出て日の暮るゝ紅葉かな
田はもとの地におちつくや初時雨
松風の吹いて行きたる時雨かな
影法師の横になりたる炬燵かな



俳句

内藤鳴雪選

○（天）
八州を指呼して寒し冬の山　麹町　牧野銀杏

○（地）
てほろぎや大極殿の晝の雨　山口縣　椰良美那子

○（人）
抱かれて柳に灯す雛妓かな　沼津　紫月

佳作

蕭成によき夜具召させ參らする　山城　木の花
柿八年少女は妻となりにけり　千葉　荒木秀子
暮易き日を告げ顔の藪蚊かな　鳥取　櫻草
行秋を冷き石に告げ申す　横濱　夕萩
靜けさに石投げて見ん秋の水　沼津　村瀬紫子
神の旅落葉の宮に鶏啼く　岡山市　桃の村女
雌鶏雄鶏むつみ合ふ庭の朝寒し　神戸市　雪の女
朝露の素足に泌みぬ今朝の秋　信濃　丸山榮枝子
軒端や瓢ぶらつく宵月夜　大阪　雜賀しづ子

君にさゝぐ花一輪の寒さかな　東京　豐子
夏草は早や枯れにけり後の月　本郷　城本月見草
舟の中俳僧と月見かな　岡山市　立岡房之
葉櫻の隧殿に養ふ病哉　香川縣　佐野シズエ
澁柿の皮むく夜のながさかな　愛媛縣　宇都宮ヒデノ
吹きちらす蚊帳ひやゝかな九月かな　千葉縣　伊藤さく代
涼しさや椽まで來たる浪がしら　岐阜縣　成瀬八千代
秋風の鏡を渡る悲しさよ　備前國　岸本佐代子
日落ちて筑紫の海や秋の風　岡山縣　山田千惠子
名月や山門埋む松の影　仙臺市　武山よし子
明月や僧の緋ごろも色ふかし　美作　葉蘭
ふと水にうつれる月を木下闇　萩の里　姫小松
峽中を下る月夜や蟲のこゑ　三重縣　駒越くに子
山風や岩間の菊のひとゆるぎ　備前　熊谷かず子
只一人夜學の庭の月に歩す　大阪　田野しか子
宮人に蟲鳴く濵の月夜哉　函館　浪の花子
君をして默させし夜や秋の歌　渡島　宗原みつ子
秋の蝶迷て飛びぬ化粧の間　京都　名無し草
鈴蟲や君まつ畦の燈のくらき　群馬縣　長井まつ子
村雨の音に長夜のふけにけり　群馬縣　すゝき
里の秋人は野に居て暮れにけり　島根縣　新井よし子
白菊や靈も靜かな機の音　岡山市　藤田豐子
汲くみて戻る松原秋の聲　山形市　むらさき
牛追うて歸る女や月の原　小樽　木村豐宇
秋の夜の月に客とは女哉　豐後　吉成愛子
酒を呑む妻と對して秋の暮　久留米市　安東曉い石
洪水に火を焚く堤やきり〳〵す　夢星子
山寺やあけがた寒き風の音　相模　中村貞子
降る雨の身に泌む椽の端居哉　愛知　榊原銀子
初秋の風渡るなり手洗鉢　下谷　いつき子
山陰や時雨ふり來てもみぢ散る　宮城　腹子

髪結ひて寒がる妻や冬籠り　須磨　保子
閼伽棚に萩の一枝や比丘尼寺　三重縣　鈴木ふさ子
家問へば萩散る家を敎へけり　長崎市　永井主子
萩散りて戀しき人の夢もなし　下野　高村たき子
山吹やおりたき枝は水の上　岡山縣　野崎よしの
曉風や竹のつゆおる草の上　山田市　岡村弘子
秋の暮案山子となるもあはれなり　三河　翠葉
我が戀の冷たき秋となりにけり　深川　花野芳香
萩の露詩人の袖にこぼれけり　城南　小島美雪
雨晴れて日暮蟬の又高し　府下　高木多香子
月みるや萩と芒の窓二つ　長崎市　萩見る人
なつかしき君を送りて秋の暮　上毛　花野
長き夜や熊とる蝦夷が計りごと　渡島　川原華子
秋晴れや硯の水のかれてより　東京　蔦の葉
カアと引く聲を秋とや旅烏　加賀　村田総子
初秋をいそしむ妻が夜なべ哉　富山　村山映子
落葉して月と親しむ木立哉　橋本茶
蜘蛛の巣もかゞやきてけり秋の月　三重縣　名なし草
行秋や木曾の女の歯を染めて　三重縣　つゆ
魚を釣る翁の笠にとんぼ哉　群馬縣　宮田清子
よき人の拔毛も長き夜なりけり　小石川　宮川よし
夕くれや袖より起る秋の風　熊本　上農千代
出御ある沙汰もほのかに鷄合せ　美作　白菊
秋の暮鎗抱いて恨み有り　品川　彌壽子
秋の月島に笛吹く流人あり　麻布　小倉ため
夕虹や夜釣りの舟の出でつくす　備中　小見山春子
初秋や馬にも積みし女郎花　廣島縣　棉の月
一輪の野菊封じぬ文の中　淡路　内海千鳥子
夕雨や花の下なる旅役者　下谷　横谷ゆき子
時雨るや紅葉のあかき小さき葉に　大阪　小泉貞子
月の前にかしこまり居る案山子かな　信濃　工藤清子

草の門や蟲に訪ふ人我知りぬ　徳島縣　蔦紅
蟲啼きて夜な〳〵思ふ君をこそ　本郷　細川ばら香
茸狩や夕べの夢のあり處　三重　八重子
月見團子犬にも投げて與へけり　伊勢　花勢子
三坂路や迎待つ茶屋の門の萩　山梨縣　鷹谷とみ
天高く刈田は遠し冬の月　東京　佐藤しづ子
白萩や雨多き野にみだれ咲く　美作　水田邦子
雲の月雲を離れて遊びけり　筑前　藻の花子
我が夫の鬚伸びけらし秋の風　横須賀　加藤楓子
避暑の客山めづらしき苺哉　島根　加藤シゲ子
短夜や旅にして聞く鍛冶の槌　姫路　磯菜
文よみて秋風凉し小行燈　神奈川　小國の少女
力山を氣は世を蓋ふ秋の人　本郷　中村えい子
蜻蛉や牧場に多き牛の角　茨城縣　石川白萩
雨の降る秋の朝とて君語る　大阪府　竹中つね野
夕月をともにあびけり里の風呂　栃木　雪枝
築山の橋こす人や夕凉み　加賀　村田総子
なに笑ふ聲ぞ夜長の長局　伊豆　鈴木けい子
朝寒や稻子老いたる畦の道　東京　若菜女
柚釜かけて後生堅固に守る僧　越後　藤原竹子
夢に見し人なつかしや秋の朝　京都　芳子
木犀の咲くや聖の讀書堂　香川縣　星野ワサ子
晩凉やうまの鈴來る里の川　近江　操子
妻戀ふる雄鹿の音にぞ秋深し　まつ風
七まがり出茶屋のありて柿の花　大阪市　清水艶子
雨止みて芙蓉花の窓近し　神戸市　川口琴茂
夕燒や兒を守る唄も秋の人　京都府　竹村まき
物音に耳そばだつる夜長哉　上毛　千代能
佛緣を分つ隣や蓮の飯　越後　藤原泣黒子
大佛の普請の上や雁の聲　大阪　田野靜子
新妻が水汲み寒し初嵐　松前　椋原夕月



初作　編輯局選

○白い箱（地）

上總　粕谷豐

忘れられた白い箱、古い文庫の奥の方にしまはれてあつたので今迄忘れて居た、木目形のリボンでキチンと結へてある、無邪氣だつた十五の夏の紀念です？けれど最うこはくて迚もリボンの結目をといて中をのぞく

事は出來ない、何故つて蛇のぬけがら入つて居るのだもの、山かゞしと云ふと筆に書くさへ身ぶるひする蛇のむくろ、赤い舌を吐いて今にも呑みかゝろうとする樣な氣がしてあゝこはい……如何してこんな物と人は云ふだろう、けれど是は一つの迷信でこれがあると金運があると云ふ祖父の話であつた、ある夕べはなれの池に突き出た岩の蔭で得たのです、私其時は堪らなく嬉しくつて〳〵祖父と母に告げた、祖父も母も喜んで他人には語るものヂャないと云はれた、言はれた儘を守つて二年にもなる今日まで誰にも話さない、祖父も母も亡くなつてしまつた、知るは自分一人のみ、私は一日々々と淋しい暗い穴へ引きずり込まれる樣な境遇金運などは夢にも願はない、只願ふは今一度父さん、母さん、とお膝にすがつて甘へて見度い、一人ポッチぢや淋しいもの？私はこんな不幸な子になつてしまつた、恐ろしい蛇のむくろを喜んだ昔はなつかしいと云ふよりねたましい、最ふ二年の後にはどんなに變るだらう、でも私は最ふ私には此白い箱は用がない、明日にも川へ流して仕まふ。

事實も面白いし、つゞり方も正直だ（評）

○或る朝（人）

鳥取　清香

淸らかな冷かな風が梨の梢に輕くたはむれて居る。朝顏は露ぐんだ花びらを半ば開きかけて居る。あたりは一面に霧に包まれて隣の寺はほんのり薄墨の繪の樣である、蟬も雀もまだ眠つて居るらしい、聲を立てるのは多川の淸き流ればかり……。

之が炎熱萬物を溶かす夏のあしたかとうたがはるゝばかりである。兄と自分と下男と三人に牛二匹引いて十町ばかりも行くと草刈場である、谷をのぞむと一面にもやで吾々は雲の上にのつて居るやうな心地がする、向ふの山から隣の下男が身體こそ見えぬがあたりの寂寞を破つて節おもしろく草刈歌をうたひ出す。草の五六把も刈ると太陽が金矢を放つて前の山から上つてくる。

もやはだん〳〵とうすらいで左の山の神社のあたりで牛がうまさうに草を喰つて居るのがはつきりと見え出す。露ぐんだ草は活々としてまるで五色の玉でもよそほふて居る樣である、此の時自分は全く世間學校課同螢等すべての觀念はすつかり忘れて全く天然に同化した。

田園の景色が活きてゐる（評）

○ある夜

長崎市　中村るい

ゴロゴロと橋の上を車が通るような音を聞きながら、戸じまりをした。玄關わきの書生部屋で徹夫樣菊樣の冗談を、ながくなつて聞いてゐたらいつの間にかとろとろとした。不意にドスンと頭に何か落ちかゝつたような音に、アッと夢心地に思はず傍の徹夫樣のお胸に抱きついた。ふいと頭を上げるとピカピカッと隙間を洩れて光つてゐる。目も何もさめてしまつた。ゴロゴロといふ度に窓の硝子障子がガタガタとふるえる。お二人は抱きついた私の風がおかしいといつてハッハッ笑つて被居る。私も一緒に笑つたが、ぢろり横目をなすつた徹夫樣にきまりわるくつて顏が眞赤になつた。「ひどかつたねえ」「ひどかつたわねえ」やつと胸を撫でゝゐたら俄然窓の前の電柱の上で青凄い光りがおこつたと思ふとそれ

がパチーッといふ音と共にパーッと散亂した。「あ」といふひまがあらばこそパチパチパチ身體が粉になつたかと思ふような强烈な響き、ワアと菊樣と私は重なり合つてつゝ伏した。「ヤ電燈が消えた」徹夫樣の聲がするどく走つた。ソーッと眼を開くと四邊は眞暗靑い光りが折々さしこんで來る。たれが眼をつむつてゐても頭のしんまでしみこむ。「こわいねえ」二人は又つゝふしたザアザアといふ雨の音。「あ、ついた、ついた」と徹夫樣が仰有つた。じーつと頭をもたげると細い赤絲のようなのが、見てゐるうちにずーつと明るくなつた。

雷さんより猶危ういものが隱されてあるやうに思ふ。(評)

○みどりさん

横須賀　きぬた

日ざしがもうすつかり秋になつて來たころの夕方、村井弦齋氏化粧談と大きく書きたてゝある新聞を食ひ入るやうにして見て居たみどりは、讀み終つてほつとしたやうに庭に目をやつた、木の葉がはら〳〵と絕間なく落ち散る、みどりは此ごろ妙に身のまわりのことに氣を用ふやうになつた、半ゑりなどもこれまでのやうに母親の見立てでは承知しない、道を步いて居ても、きれいだと思ふ人に出逢ふと、其人の頭の先から足の先ゝでも、力のある眼でよく觀察する、新聞紙の化粧談はのがさない、このやうに氣を配つて居るのを知らぬ近所の人等は「みどりさんは近ごろ急に美しくなつた」と云つた、母親はそれをきくたび嬉しさがこみ上げて來てつひよけいな娘じまんまでする、みどりは嬉しかつた、みどりは九月生れの十七で脊の高い方。

小學校を出てから高等女學校へ入つた友もある、けれど學問よりは遊藝の方に贊成する、母親は卒業するとすぐに三味、茶、生花、をどり、でせめたてた、下町風のすきであつたみどりは、別にいやな風もなくたゞふら〳〵といろんなけいこをして居た、それが急にヴヰオリンを好み、前がみの高いローマに結つて、白ゑりをきつと合せて黑じゆすのゑりのかゝつた着物なんか手にもとらなくなつた、三味をさらふやうな樣子もない、あたりの人や母親は少しへんだと思つた、みどりの風がこう變つて來る一ケ月程前に、一丁ばかりはなれた所に、私立靑年寄宿舍と札の出た家が出來上つた、秋はだん〳〵とたけて行く。

寸珍小說(評)

○こほろぎ

久留米市　夢星子

こうろぎがしきりに鳴いて居ます。何となく淋しい聲であります。机によりかゝつて斯う聽いて居ると、幼い時分の心もちになるのであります。やはり此頃でせう、いつも獨りで讀書などして居ると、庭の手水鉢の下あたりでしきりにこうろぎが鳴いて居るのでありました。お母さんは傍に居て下さつても灯がつくと、きつとお疲でこくり〳〵やり初めますの私は淋しくなつてお母さん〳〵と云つて起すのでした。

此夜はそれを一人で聞いて居ます。息をついたでせうか、こうろぎは亦鳴き出しました。九月十日

囚はれてゐないすつきりした佳作(評)

○眞晝

ますみ

何處かの、ねむさうな鷄の聲が眞晝の靜けさを破つた。ぬすむやうに祖母樣のお顏をのぞいて見たがよく眠つて居なさる、小說を御手の上にのせたまゝ安らかさが其情け深い御顏にあふれて居る、靜かな息の音がたまらなくなつかしいやうな氣がした。小さい人形の二寸五分の大振袖を縫つて居たが、何だか眼が疲れたので其まゝうつちやいといて椽側に出た、ざくろの枝につるした水からくりが、絕間なく紅白の玉をクル〳〵まわして居て、其餘勢ではねとばされたしぶきが、日の光をうけて玉蟲のやうにキラ〳〵光りながら微かな〳〵音をたてゝ池にそゝいで居る、

其波紋の間をくゞつて、眞紅の金魚が澄みきつた水を泳いで居る、池の傍に咲いた野菊にもしぶきがかゝると見えてかすかにおのゝいて居る、池の後の縞蛋がゆら〳〵とさわいで居てさも凉しさうなので、急にハンモックとハーモニカを持つて出た。杉と檜の太い枝にハンモックをつるして心地よく身をのせた、込みあつた木の葉の間からチラ〳〵見える空のきれいな事、今日こそほんとの空色だと思つた。思ひきつて力一ぱい吹くハーモニカの、其さえた音が澄みきつた空に反響しさうに思はれた。

平凡なことを正しく描いてある(評)

○孤獨

羽後　小島健子

雄鷄が餘り雌鷄を苦しめるから肉屋に賣つてやつた、殘つたのは雌鷄一羽、其の後よい雄鷄が見つからんから買はんで居つた。

家の者は「解れだ」「いつそ食つてしまへ」と云ひますがどうしても私にはそれがわかりません。

最も雄鷄が行つてから二三日は悲しい樣な聲で鳴いた、また徒然そうにも見えた、けれども今は左程感じない、その上餌は獨りで充分求めることは得るだろうに。

とさかが紫色になつて鮮血がダラ〳〵と流れて白い美くしい羽毛が血に染まる位、苦るしめられても雄を欲するのでせうか？

もちつと長ければ好い(評)

○秋の夕

朝鮮　箕浦きよ子

お湯から上りて薄化粧をして居る所へお隣の時子さんに妹が參りまして姉ちや前の山に登つて風に吹かれて參りませう。と二人が云ふので私はメリンスの着物の上に羽織をかけて、そろ〳〵そばの山へと參りました湯あがりの暖い頬を凉風に吹かれながら、よい氣もちに中頃迄で夢中で登てそこのベンチにこしを、おろして一番に我家の方を見下しました

あれ時子さん姉ちやの御内や時子さんのお内の電氣燈や瓦斯がまる下に見えるでせう、あらほんとうにネ、姉ちやあの向ふの高えつきでゝいるのはどこ、あれはネ、時子さんや、政子さんが、いつも日曜日に行ツてカアドをもらつて參ります基督教會ですよ、あらそうまあ、あのように高い事といつて今さらの樣に驚いて居ります、まあ時子さん、此の山淋しいのネ、今日は誰一人居りはしないね、あたりはしんしんとして老松は高く高くつき出でいる下に私共は居るのです、あたりの大木はみな綠色になりて居ります、木木の間から凉しい風はをりをりさつと吹きゝたるのです、私共はふと氣がつき袂からハモニカを取り出して一しよッに空にさえずる鳥の聲と吹き始めました、此のしんしんとしている淋しい山で、一ときに三人にて高く高く低く低く吹いたもので、なをさら淋しい樣に感じました、今吹いたハモニカは、山の奥の奥の方へとしみてみましたのでせう、山はわつとなる樣にきこえましたので、氣みがわるくなつたので、もう歸りませうや暖かであつた頬はいつのまにか冷たくなつて、ひんやりとして居ります、おあもう寒くなつたといつて笑ふとそれはそうよ上にセンプーキがあるのですものネ、時子さんと妹が笑ふので上を見ると、丁度私の頭の上に丸い丸い御月樣はつよい光をなげいて、いつも笑つていらしやいます、三人はこれを見て又も歌ひ始めました、おとさんおかさん早く出てごらんよ、と聲あらんかぎり出して歌ひ〳〵おりました、山水は一シヅク二シヅクと小川にポタリポタリと落ちて流れ行く、をりしもさつと吹きくる山風に、一葉二葉と枯葉は水晶の樣な小川の水の上にのりました、あゝ此の枯葉もいづこえか散歩に行きたいのでせうか。





誌友くらぶ

交際

○　三重縣北牟婁郡尾鷲町　中村楠枝

▲新しく●●●　みな様私も先月から此貴重なる本誌の愛讀者となりましたで末ながく御交際下さいませレター御めぐみの程々切に御願ひします

○　橫濱市英町三の二二　茂と子

▲御禮●●　保戸谷のエム子樣早速Gペンで土瓶敷の作り方御親切に御敎へ下されましたことに有難う存じました御住所不明故本誌上を拜借いたし御禮申上ます

○　島根縣能義郡大塚村　藤田豐子

▲淋しい田舍●●●●●　に住む者ですが誌友の諸姉樣よ親しい御交際をして頂戴な美くしいお寫眞や繪葉書送って下さった方にはきつと返禮しますわ

○　札幌　佐野幽香里

▲北より●●●　皆樣私もどうぞお仲間へいれて下さいましな。もう冬でございますのよ、一雨ごとに木の葉が色づいて廣くもあらぬ庭は掃いても掃きゝれません。これから五ケ月間の雪中生活―考へてもいやでございますわ。お身お大切に。

○　岡山縣小田郡美川村上高末　三宅澄子

▲涼しゆうなりました●●●●●●●●　記者樣及び皆々樣おかはりはありませんか、私等同志數名相集りまして廻覽雜誌發行致しております、諸姉樣よ永久にお交りを願ひます。

○　京都　要司村森の女

△京都●●　の幻影樣、よねじ樣、三千子樣、殘夢樣、M.S樣、其他無名の方樣御熱心なる御寄書、一々拜見致しました、今更皆樣の文學に對する狀望に忍び、參らせて感心致して居ます、○○新聞及○○雜誌にての、××を御らんになって、○○早速私方へ御手紙頂だき、私はそれ等のお返事を此欄を借りて申上る事に致しました、是迄私は住所を書いたといふのは女子文壇より他にないからであり升「あれら讀んで直覺的に貴女と思ひました、否え如何考へてもあなたです……」一樣なるお言葉もうく恥かしくって穴でもあれば入り度うムいます。自分の今迄を思ひ出しても全く個性の現れてない、人樣の拜借ものゝ樣な、――誠に、幼稚な腦と、にぶい努力で有った事は明らかであります、それに此種の書面を拜しまして堪えられない程恥かしいのでムいます、右の方樣が女子文壇の讀者であると云ふ事を知ると共に早速紙上を借りまして、千萬語に代えて玆に御挨拶申上候。

○　松山市豐坂町一の二五　中野しげ子

▲お願ひ●●●　みな樣淋しい秋が來ましたがお變りもなくつて私も今年の五月頃から本誌を愛讀

している所よ何も知らぬ、不束者ですが哀れな者と思召して以後は宜しく御交際を願ますの永久にネレターー繪葉書下さいよきつとお返し致します

○府下中澁谷二六佐藤方

露草

▲病後●● 皆樣私は澁谷町に住む少女ですが去る六月から病氣のため床に就て居りますが毎日淋しくて仕方がありません私には優しい母もなく又親しい友達もありません只々女子文壇を無二の友として淋しく暮して居ります何卒哀れと思召して御交り下さい誌友の皆樣何卒御才筆おふるひ遊ばして下さい諸姉樣方の健康を祈居ります

○遠州濱名郡豐西村常光

松嶋靜子

▲淋しく●●● 妾は今年たつた一人の愛らしい妹に逝かれて毎日〳〵淋しく涙のかはく時とてもなくなさけない世を送つて居る者でございますどうぞ情ある諸孃姉上樣方よこの哀れなる妾をふびんと思召して何卒御交際を願ひます、此の淋しい秋をせめての慰みにお讀み古しの雜誌又は御本を御惠み下さるならば誠に嬉しうございます御禮には繪葉書を御送り致します。

○高知縣土佐郡江白町

津野千枝子

▲お手紙●●● 誌友の諸姉樣方におねがひ致します私は土佐の田舍にわびしく暮らしている愁の子ですがどうぞあはれと思召して御手紙頂戴な御返事はきつと差上ますその繪葉書の交換も

○茨城縣眞壁郡上妻村大字江六十六番地

山中はな子

▲湖畔より●●●● 御なつかしき誌友の御姉上樣方私は本年六月より光榮ある本社の愛讀者となりました、御姉上樣方よ以後はどうか御見捨なく水魚の交を願ひます、繪畫會の交換結構ですワ、御待ち申して居ります。

○東京府中澁谷赤十字病院寄宿舍

坂口喜久子

▲誌友の姉さま●●●●●● どうぞ可愛がつて頂戴な面白いお返事差し上げてよ、お寫眞下すつた方には必らず私の見にくい姿もお目にかけますわ、但し男子はおことはり

○岡山縣後月郡高屋下町

山下富美子

▲孤兒●● 妾も十月より本誌愛讀者となりましたから永久に御見捨なく繪はがき、文通の交換をたのみます妾は父なき母なき寄る邊なき孤兒でありますから何卒憐れんで下さい。

○茨城縣新治郡林村大字根小屋

島田きく子

▲皆樣大分寒くなりましたね、●●●●●●●●●● お變りはありませんか。美くしい繪葉書下さいまして誠にありがたふ御座いました、御禮申します以後お親しく末長き交を願ひますエハガキ交換や文通にて……ね、きつと返禮は致しますけれど、男子の方はおことはり申します。

○茨城縣眞壁郡上妻村大字四十三

平田喜子

▲誌友の皆々樣●●●●●● いとなつかしき誌友の皆樣不束な妾も貴い本誌の愛讀者となりましたから何卒妹と召して御交りを願へますよ。

○大阪市北區上福島北三丁目一七九ノ五日高内

佐野幸子

▲懷しき岡山地方の諸姉樣●●●●●●●●●● 今月誌友會をお開き遊はすとのことほんとに行きたいわ。私の故鄕は備中の山奥ですが四年計り岡山の學校に居ましたのよ。此春から大阪に參つてゐますが親しい友達もなくほんとに〳〵淋しく日を送つてゐます。懷しき誌友の諸姉樣この秋の夜長文讀む暇をかりて玉章繪葉書を御惠み末長く交際して頂戴な屹度御返事差上ます。

○

肥前登和子

▲私は西の海岸●●●●●● に住んで居る者です去年の六月頃から愛讀者となりまして二十幾人と云ふ交友が出來ました然しそれは皆一時的でした私は世の若い女が斯んなに迄浮薄な心であつたかと誌上と實際とがあひませんのを悲しみましたかれし情なき人はもはや執着致しませぬ眞に情ある姉妹よ……縋らんに父なく母なき伯母を賴みに其日を送る女に同情ある姉樣がありましたらどうぞ永久にお交りを願ひます。

○肥前長崎市玉江町

吉川あい子

▲笛● 諸姉樣の御内に手風琴御持で私の琴調子笛と交換して下さる方は御座いませんかもし御座いますなら御一報下さいまし笛はまだ新物

で御座います。

○　淺草區馬道八丁目五佐藤美佐雄方

佐藤鼤子

▲籬の芙蓉の白さから、八ッ手の葉の黄色みから、秋の匂ひが舞ひ出でゝ、ひとりあゆむ園は淋しうございます。秋を送る蟲の哀調と、潤める噴水のとぼゝり、のハモニーに秋の淋さは肌にふるへて冷たうございます。都にのみ秋を味つてゐる私は、山の秋や林の秋が知りたうございます。誌上の諸兄姉樣なつかしいお便りを下さいまし、お近い方はお遊びにいらしつて下さい。

○　大阪東區住吉町八六松本方

加賀堺弼生

▲私は先月から本誌を愛讀致して居る者で御座居ますが以後御交際下さいませ又御姉樣方何とぞ御玉章の御交際さいませ畝ける事なら御寫眞も御送り下さいませ御禮は屹度致します。

○　大阪北區西野田對込町七二六

東谷善枝

▲大阪よりおなつかしの誌友の皆さま妾は二三年前からの愛讀者で御座いますが投書致しますのは只今始めて不束な者ですが永久にお交り下さい又玉章や書籍の交換も切に願ひます。

○　日本橋區檜物町二六荒井方

秋元茂登子

▲始めて誌上の姉ヒ樣秋も先月から本誌の愛讀者此後永久に變らぬ御交際を願ひますそして御玉章の交換も切に御願ひ申します。

○　大分縣速見郡上村四〇二番

花芳子

▲私初めて誌友くらぶに顔出の出來る樣になりました私只一人片山里に淋しい空想をゑがいて居りましたが今日こそ二十世紀の空氣を吸ふ樣になつたのです學校を退校後はこんな片田舍で暮してゐる不束な者ですけれど少し文學に趣味を持つてゐますのお情ある御姉樣方哀れと思召してお見捨てなくレターや繪葉書のお交りをねがいます。

○　神奈川縣久良岐郡六浦莊村三分

長谷川千代子

▲都の御方樣私は片田舍にすむ淺學な者ですが御玉章の御つきあい頂き度う御座います必ず御返事は差し上ます

○　近江水口町

鈴蘭

▲おことわり前號に誌友會のことを申し上げておきましたが、來月は陸軍機動演習が行はれるため當町は宿營地として初旬頃から忙がしくなり從て近方のお方も御同樣の事でございませうから折角開會しても御來會下さる方が無い樣ではつまりませんから殘念作ら此度は見合せることに致します、皆樣どうぞ惡しからず御思召のほどを願ひます。

○　長野縣更科郡信里

柳澤ふほる子

▲バイオリン私バイオリンが二挺あります皆さま中で琴と代へて頂くかおゆづりしてよろしいおたづねします。

○　芝區愛宕町二丁目十四番地

中村方　鈴木春子

▲初めて投書しました私し何分諸姉樣よろしき樣におさしず願ひます又何卒御交際下さいませ私しのかいた繪端書を差上げます私しは母と二人ぎりで淋しく暮らして居る者ですから。

○　東京市京橋區南紺屋町十六新井方

あらき子

▲塵の裡より露の白玉は萩が葉末よりほろりくとしたゝる地の有樣が丁度妾の今の境遇ですは、西も東も知るものはなくたゞ女子文壇を友として暮すはかなき身同情ある郾の諸姉樣妹として永久御交際下さいね時々は都の消息を

○　長野縣北安曇郡平村野口四八一

工藤清子

▲永久に前號で御願申ました處多くの方から澤山に御玉章繪葉書なんか惠送下さいまして誠に有難く厚く御禮申上ます次に皆樣永久的に御玉章下さいませ一時的と男子の方は絕對的におことわり申ます。

○　京都府新舞鶴町大門通り市場

村田儀太郎氏方

菅孝子

▲都合に依りまして此度前記の處に轉居致しますたから左樣御承知の上何卒不相變御引立のほど呉れぐも御願い申上ます。

○　岡山縣小田郡矢掛町

中西矢須子

▲手紙狂だと申しますの、机蟲本蟲など、

餘り有難くない尊稱をも添うして居ますの、兩親に言はすれば困つた子仕様のない子で御座います。其困つた子は矢張り仕様のない子で今度本の讀者と成りましたの、それはく\お轉婆でお喋りで手におへないので……豐想なお胸に湧いてらす晩秋のお便り、おきかせ下さい。

繪葉書

○ 奈良縣吉野郡上龍門村大熊
奥熊　せい子拜

▲二度御願ひ　秋深く紅葉色づく頃と成りました姉上様にお御變りわござ いませんか私わ片田舍に住むしづの女ですのだがレターや繪葉書の交換を第一の樂みと日を送りて居ますのよ何うぞ皆様永しへに御交り下さい。

○ 神戸市三ノ宮町一ノ三四一ノ三
石原方　増田はる子

▲銅像繪ハガキ　妾しね丁度全國の銅像ゑはがきを集めようと思ひますの、就ては皆さまの御手もとに銅像繪葉書が有りますれば送つて頂たいな御返しには神戸名所ので致しますは。

○ 名古屋西區本丁日星野方
山田楓花子

▲肉筆　誌友の皆々様先月は澤山な繪はがき御交換下さいまして誠に有難たう誌上にて御禮申上げます今度は皆々様の肉筆の繪畫を交換願ふと思ひます何卒繪に趣味ある方は御交換下さいませ

○ 伊勢國桑名町宮通
河村デパートメントストアー内
夢子

▲伊勢の國より　誌友の皆々様各地神社佛閣の御印影が書を御交換願ひます返禮はきつといたしますよ

○ 高知縣土佐郡本川村高藪
山中春子

▲妾い今年十七歳　になるうら若い小女です うちには兩親・今年十四歳になる弟が一人あります、どをか以後お見捨なく御交際ください、私は繪葉書を好みます美しい、趣味ある繪葉書に自作の和歌や俳句を認めてお惠み下さい、妾も拙き筆にて屹度お返し致します。

○ 伊勢國鈴鹿郡白川村大字白木一色
若林綾子

▲繪端書　御交際願つてよ、可成名所繪端書が望みよ屹度お返しするわ。

○ 京都四條高倉
市原春園

▲私は本月　より初めて本誌の愛讀者一人と成りました以後宜敷御交際を願ひます私は風景繪はが風俗等の繪葉書の御交換を願ひます必ず此方よりも御送りします。

○ 栃木縣今市町
手塚久子

▲私は黑髮山　のふもとに淋しく友戀して日を過して居ります者で御座います何卒く\永久う御文りを願ひます日光の山水の繪葉書等も御望みの方に御送り致します

○ 備後深安郡神邊
藤原清子

▲繪葉書交換　私は草深き片田舍で心淋しく暮して居ります願はくば繪葉書交換して淋しき心樂しまし給はれ。

○ 日高國市父局内鈴木長造方
白百合

▲誌友の姉上様　お變りはありませんか野山は紅葉もておほはれ裏の木立に秋風の訪るゝ頃あゝその頃妾はコホロギの哀音と共に懐しい戀しい故山を捨て友を捨て此草深い寂しい北海の野に渡つたのですよ。繪葉書玉章お送り下さい妾も東宮殿下行啓紀念葉書にてお返し致します尙は御寫眞の御交換をして頂戴なおねがひ致します。

個人消息

○ 肥後葦北郡佐敷字計石
遠山幸

▲諸姉さま、以前神田の音樂學校にいらしつて女優養成所にも暫くおいでになつた山下花子様の現住御存知の方はお知らせ下さいませ。

○ 大阪市
杉山千代子

▲大阪の小泉貞子様私をおぼゑて居て下さつて或る年神戸に御一緒に參りまして布引の瀧での事も走馬燈のやうに胸をめぐつて居ります何れ何卒御ひまの節はレター頂たいね御返事はかならず御住所おしらせ下さいませ。

○ 下野日光山麓にて
高村瀧子

▲お懐かしき都の小林様　お情こもる御玉章と共に美くしい面白い夢二様の繪葉書澤山と下さいまして誠に有り難う存じました御禮致したい

のですが御住所をお明し下さらないので困つて居りますゞ何卒お差支へ無くばお明し下さいませ。

○　上毛新田木崎町赤堺
　　　　關口ちよの

▲上毛荒井よし子さま、私は文壇の愛讀者で殊に同縣内の方なつかしくてよけれど貴女の御住所わからなくつて御手紙差上げたいけれどたが次號で御知らせ下さい待て居升。

○　神戸
　　　　百合香

▲八月九月中にお送り下さいました御方のうちに御所書きを失てしましたのでお返禮が出來ない方が御座いますがまことに申兼ねますけれど御住所御報下さいませ八九の二箇月遠國へ參つて居りましたのでとんだ失禮致しました何卒御許し下さいませ。

○　千葉縣佐原町本宿三三六四
　　　　松崎きよ

▲三ケ島葭子さま、平塚白百合さま、齋藤靜子さま、はじめみなさまお懷しう候。以後、みなさんの御交際をおたのみ申上候。

書籍交換

○　播州赤穗郡坂越港汲見
　　柴田昇二樣方　西　愛也

▲英文クリーの迷宮不用英語研究四卷五號と、英文反魂鳥不用英語研究二卷一號と獨歩集第二不用短篇六種ゴーリキ集(博文館)と交換して下さいませんか
それから三宅花様のモウパッサン短篇傑作集を御持の方はありませんかどなたか

○　東京府西多摩郡小宮村
　　　　三ケ島よし子

御願ひでございますが女子文壇の十月號を四五日拜借させて下さいませんかそれから、土佐の磐田順子樣私、癡物に等しい人間ですが御はがきなりとどうぞ。

○　宮城伊具郡丸森町
　　　　齋藤すみれ子

△持てる書物。晶子和歌集花、舞姫、美文作法、文章新辭典、女子美文、編物教科書、ナイチンゲール嬢女學講義録全部、新體詩歌自在、詠歌辭典、琴典妙文集、黄菊白菊、小說幻影、黄金林、俳句作法、女子の教養、萬朝週間影裁新派和歌集
△讀みたき書物、相聞東京市明細地圖、萬葉和歌集、ツルゲネフ散文集、女子文壇九月號、武藏野、膝栗毛日本小辭典、右御交換被下方は葉書にて御一報願上ます。

○　神田區元岩井町四〇
　　　　大堀白菫

△所有の分。文章講義録合本三冊。小野催眠學通俗哲學講話、和洋料理精通、實用新式速記法、應用心理學、豆腐料理、徒然草文段抄、心理學綱要、病者の食餌東洋又は西洋の歷史辭典「婦人世界」總皮新舊聖書、和歌の作り方。
他にも種々ありますから御望の方は御紹介を願ひます
△欲しい物、霜月帖、假名秋萩帖、病人の慰藉、人間學、家庭醫學、生理と病理、易通詳解、處世交際法、星野先生書法講義(書翰文字之部及草書研究法、秘惡辭林具行草大字典、衛生十二ケ月、雜誌心の友其他お心のある方はどうか御問合せを

○　新潟縣佐渡郡新町
　　　　本郷京子

▲皆樣の中に晶子先生の「みだれ髪」坪内樣のロミオトジエリエット御不用の御方ございましたらしばらく御貸し下さいまし、又箏曲の通信教授致します處御存じの御方は御知らせ下さいまし御願申ます、御禮にはつまらぬ物でございますが佐渡名勝繪はがきさし上げます又昨年八月から本年一月までの女學世界本年二月からの本誌七月の創作スバル文章世界などでよろしければ左樣御しらせ下さい。

○　茨城縣新治郡中渡村、高崎良之助方
　　　　同　あさ子

今、私の手許に、二十世紀婦人の文、婦女訓百首衛生男女の寶典、最新美人法、作文良材美文新活法、女用文章、美文の資料、新撰裁縫教科書、俳諧發句自在、立身要訣勤學捷徑、文章の作り方、其の他小說、古雜誌等澤山御座います、右の内見たいと思ふ書がありましたら一報下さい必らず上げますから尙は當地の名物、霞が浦の水産物種々を送りますから書籍でも産物でも望みの者は遠慮なく御一報下さいな必らずうそは申しませんし何卒諸姉樣此の孤兒を哀はれと思召したら一時も早く慰めて頂戴な。

○　群馬縣多野郡鬼石町古生町九二
　　　　新井つま子

▲私のもとに太田三郎氏のスケッチ初歩、與謝野晶子女史の黑髪村井弦齋氏の近江聖人等ありますがみなさんの夢二氏のサヨナラ秋の巻冬の巻其他一冊の一葉全集幽芳の己が罪荷風の荷風集と交換を乞ふ。

雜報

晩秋

△伊太利と土耳其と、戰端を開いて間もなく、清國に革命軍が起つた、揚子江沿岸、武昌、漢口など云ふ市街は革命軍に占領され、人心恟々、清國の風雲は甚だ急だ。

△此頃號外の聲を聞かぬ日はない。

△晩秋初冬の頃は、讀書に可く、散歩に可し。

△三越で萬引をした女がある、曰く、夢のやうに欲くなつたから取つたのだと、あゝ誘惑に克ち得ざる女のあはれさよ。

△今年の文部省展覽會の洋畫には 裸體畫が多い婦人は 大抵裸體畫を見ないふりして通りすぎる男子は念を入れてみている。

△文藝協會のイブセン劇は評判が好い、何れ帝國劇場で公演するさうだ。

△團子坂の造り菊は 殆んど滅亡せんとして僅に一軒だけ盛んにやつてゐる。

與謝野寛氏の洋行

豫て噂のあつた與謝野寛氏の洋行は、いよいよ本月八日橫濱出發と極つた、向ふ一ケ年の豫定で主として佛蘭西に遊び、伊太利、獨逸、英國露國等にも立寄ることになつてゐる、旅程の恙なからんことを祈る爲め、前月中旬天佑社同人の送別會を東京に開いた。

マテルリンク氏の授賞

白耳義の文學者マテルリンク氏は、今年のノーベル賞金八萬圓を受けた、氏は有名なる思想家で、論文、創作等の著述は少からずある、殊に近頃は劇の作者として有名である、其作は世界各國の言葉に譯されてゐるが、其劇『モンナ、ヷンナ』は嘗て我國にも演ぜられた、『青い鳥』は近頃飜譯が出來たばかりである、併し劇よりも論文の方が面白いと云ふ人がある、氏は現に豐かな田園生活をしてゐる、今年四十八歲。

大下氏の逝去

水彩畫家大下藤次郎氏は 前月十日、病氣の爲に逝去した、氏は水彩畫家として其名は全國に知られてゐる、氏は水彩畫の普及に就いては最も熱心であつた、同人と協力して研究所を設置し、自ら主として雜誌『みづゑ』を經營するなど、水彩畫普及の爲には多大の力を割いてゐる、其傍ら氏は全國を漫遊して、未だ世に知れぬ自然を得意の水彩畫に描出した數も決して少くない、惜しいかな天此の人に年を藉さず、僅に四十二歲を以て逝去した。『みづゑ』は近々終刊號を出して同人追悼の意を明かにすると云ふ。

新刊

○櫻さく國　白風の巻

附錄の竹久夢二君の作が一番心を惹く、何の木か知らぬが、女が手を合して祈つてゐる處で、着想も面白いし、其木版の色彩と、日本紙の手ざはりがひどく好い感じを與へる、これ一枚だけで櫻さく國の購讀者は充分に滿足すること、思ふ、併し櫻さく國の冊子も、わかわかしい情緒の溢れた繪と、感興の乘つた詩と散文に充たされてゐる、此冊子を見てゐると、現代生活には此んな興味の多い 世界もあると云ふことを見出すであらう（定價金四十錢、麴町洛陽堂出版）

○父の罪　尾島菊子著

嘗て『大阪朝日新聞』の文藝募集に應じ、二等に當選した作である、女史の筆はすなほに伸びやかであるから、女性の讀物にはふさはしい、男性の作は何うしても刺戟が強く、強烈な印象を與へるから、普通の女性には其心持を混亂動搖せしめる恐がある、女史の作にはそんな恐は少しもない、藝術の立脚地から云へば、それだけ魅力は弱いに相違ないが、弱きものは女性なり、女性にして此れだけの長篇を成すと云ふことだけでも既に一つの努力を示してゐる、菊版三四〇頁、函入の瀟洒たる美本、定價金九十五錢、神田仲町辰文館發兌）

○寫生畫の硏究　大下藤次郎著

此書は此間亡くなつたばかりの大下氏の著であるそ、氏は水彩畫を人に敎へることに熱心であつたゞけ、斯う云ふ書物の著書には最も適當である、水彩畫を描く心得は巨細に親切に說き示してある、初學の者でも之を一讀すれば、水彩畫を描くのに大いに便利を得るであらう、素人の女などが慰みに繪を描くやうになりたいと云ふやうな人にも此書は好い手引であらう　（定價金八

十錢、京橋區南傳馬町目黑書店出版）

○醉後の花　高濱　長江著

著者長江氏は詩人として、かなり長い月日を創作に努めてゐる、詩壇落漠の嘆ある時、氏の如き忠實なる作詩家の存在してゐるのは嘉みすべき現象である。本書には『煉獄へ』以後の作、詩と散文詩數十篇が收めてある、氏の作には皆新しい香があつて、窗い囚はれた技巧はない、全體の上から其短所を云へば熱と感興に乏しいことであらうと思ふが、新しい藝術を愛する氏は必ず之に滿足はしてゐまい、將來何等かの新表現があらうと思ふ（定價金六十五錢、日本橋區馬喰町今古堂出版）

○新彩數種　岡本　一平作

新進青年畫家岡本一平氏が、自家の製作を知人に示す爲め、カタログ代りにこしらへた氣の利いた小冊子だ、因に云ふ、氏は今回「トンネル橫町」を文部省展覽會に出品した、氏の手腕は追々認められるに至るだらうと信ずる（非賣品）

○初等文學講義錄　第一編

論文、小說、書簡文、和歌、俳句、新體詩其他文學の各科に涉りて、初學者の爲に其大要を講義するもので五ケ月卒業の簡易な文學講義錄である（會費一月金二十五錢、神田區西小川町大日本文學會發行）

▲『婦人文藝』は二號から村田天籟主筆の下に新に植松美佐男氏入社して紙面を擴張するさうだ

▲神田中猿樂町十五番地に今回女學校入學準備會と云ふものが出來た、入學は何時でも隨意

◎新年號特別原稿募集

增刊の例に據り婦人の手に成る感想文、告白文を募集す、（締切十一月十五日）一等賞金十圓、二等金五圓

▲二十四字詰百行乃至二百行總振假名つき三等以下掲載したるものには凡て報酬す

例號の散文を新年號に限り、自然を描寫したる文章（人事以外の天然を主材とせるもの）人事を描寫したる文章（日常の出來事と、特異の出來事とを問はず、人事を主材とせるもの）評論文（文學界、婦人界は勿論、博く社會一般の現狀を評論したる文章）の三種に區分す、一等賞金五圓（二十四字詰五十行以、內三種を通じて一等一人二等「賞金三圓」三等「賞金一圓」數名入選）

▲小說、詩、和歌、俳句、初作、圖畫等は例號の通り

▲表紙畫募集！（新年號に用ゆる本誌の表紙畫を募る應募者は男女を問はず、四五度の色刷にして文字の配置にも注意されたし、賞金五圓以下二圓以上）

編輯通信

新年號

もう新年號の豫告をする時となりました、空虚な吹聽は止めて、出來る丈け好い雜誌、美しい雜誌、價値のある雜誌を皆様に見て戴きたいと言ふことにお約束して置きませう。紙數は例號の二倍、即ち三百頁以上に致しますから、從つて好い材料も澤山入ります。投稿も充分選擇して佳作で埋めたいと思ひますから、此際大いに奮發してお作り下さい、なほ新年號に限り特別の原稿も募集して居りますから別項御覽の上、速に御寄手を希望いたします。

編輯に就いて

記者は及ぶだけ皆様の利益を計りたいと思ひながら、其力の足りないを愧ぢて居ります、幸ひ年度變りの時ですから、若し本誌の編輯に就いて、皆様に御意見があるなら、此際忌憚なく記者に言つて戴きたい。好き意見はどし〱採用し、其通り實行いたしますから、何卒お聞かせ下さい、懇望いたして置きます。

▲岡山誌友會　前號に發表した岡山誌友會は十月には會場の都合がわるかつた爲め、十一月五日正午より岡山公園竹の間で開會する豫定ださうで、其旨幹事の方から通知がありました。

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛、未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▽女子文壇定價早見表

每月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵稅	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹ヶ年分）	一圓五十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢

定期及增刊號とも	定價前金	郵稅	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓三十二錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと　用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增しのこと（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▽廣告掲載料

壹等	一頁參拾圓	半頁廿四字三十二行
貳等	一頁貳拾五圓	半頁十二圓
參等	一頁貳拾參圓	一行四拾錢（一行五號字二十四字詰）

申込期限　發行前月十五日

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年十月二十五日印刷納本
明治四十四年十一月一日七年第拾四號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話京橋六〇七番　振替貯金口座壹七六九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、大阪盛文館外

◉婦人の煩悶は此一言にて解決す

皆さん、若し「人生の最大幸福は何か」と問はれたらば、何と御答へになりますか、「富」と答へる方もあり又「位である」「權勢である」と御答へになる方もありませう、なるほどこれを贏ち得たる人は幸福者に相違ありませぬ、併し是がすぐ樣人生の最大幸福と云へませうか、さらば最大幸福とは何かと考へて見るに、どうしても「健康」で御座います、それが證據皆さん、病魔の爲めに苦悶し而かも生命に危險の憂ひでもあつて御覽なさい、一切の慾望を擲つて專念健康を渴望する樣になります、健康の價値は如斯大なるものでありますから、御婦人中には健康の勝れぬ爲めに憂ひ悲み、遣瀨なく煩悶に沈んで居らつしやる方が少なくありませぬが、之は誠に御尤もの次第で御座います、併し、中には一擧手一投足の勞を吝み、自分の盡くすべき方法を盡くさずに、たゞ悶えて居る人がありますが、斯ういふ人は云はゞ自繩自縛と申すものでせう、又中には何とかして病苦より逃れんとして努力しても、良治療法を見出す事が出來ず空しく暗黑の中に彷徨する婦人もありますが、此等の人は丁度暗夜深山に踏み迷ひ、如何にかして人家に辿り付かんと藻掻き右に行き左に奔り、遂に達すべき道に逢着し得ないと一般、若し此時彼方に一點の光明を認めたならば、その人は如何にうれしいでせう、此と同樣に中將湯は、病の爲めに暗黑の中に苦悶して居る婦人を、健康に達する道に導く處の唯一の光明で御座います、故に自分の盡くすべき手段を盡くさずに煩悶する婦人は早く中將湯を御上りなさい、皆さんの身體は强壯となり、總ての煩悶は雲消霧散するので御座います、さて中將湯の功能は

◎子宮病子宮內膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹惣足の引つり痛人◎婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦にし夜眠ず人◎月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何んとなく身體惡き人◎逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え◎息切れ動悸强く手足痺れ水腫◎十七八になりて月經なく血色とり又月經の前後に下腹痛む人◎白帶赤滯下多く顏色蒼白き人◎冷症にて難產流產の癖ある人◎產後何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く◎此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人◎定價は四日分卅五錢◎一週間分六十錢◎二週間分一圓十錢◎三週間一圓六十錢◎五週間二圓五十錢です本舖は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂で取次店は全國到る處にあります◎本舖には加減藥あり病狀委しく御申越あれ

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅壹錢五厘